

**東三河津波歴史調査
研究業務報告書
(参考資料)**

平成24年2月

東三河地域防災研究協議会

目 次

	頁
参考資料1 津波による各地域の被害状況と影響	
1-1 津波による各地域の被害状況……………	1- 1
1-2 津波による影響（移転・史跡・言い伝え等）……………	1- 31
参考資料2 各市における津波被害年表	
2-1 豊橋市における津波被害年表……………	2- 1
(1) 三河湾沿岸……………	2- 1
(2) 太平洋岸……………	2- 5
2-2 豊川市における津波被害年表……………	2- 11
2-3 蒲郡市における津波被害年表……………	2- 12
2-4 田原市における津波被害年表……………	2- 14
(1) 三河湾沿岸……………	2- 14
(2) 太平洋岸……………	2- 18
参考資料3 関係者へのヒアリング調査結果	
3-1 豊橋市……………	3- 1
3-2 豊川市……………	3- 6
3-3 蒲郡市……………	3- 11
3-4 田原市……………	3- 15
参考資料4 参考文献一覧……………	4- 1

参考資料 1
津波による各地域の
被害状況と影響

参考資料1-1 津波による各地域の被害状況

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書
<1096年12月17日(嘉禄3年)の地震、津波>							
1096.12.17	嘉禄3(永長1).11.24	東三河全体	太平洋岸	愛知県での津波	波高3-7m	波高3-7m。愛知県での被害地域 瀧美表浜。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)
1096.12.17	嘉禄3(永長1).11.24	東三河全体	その他	瀧美	波高5-7m	被害があったと推定	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)
1096.12.17	嘉禄3(永長1).11.24	東三河全体	その他	東海道沿岸	津波	愛知県内の被害不詳。	愛知県災害誌
1096.12.17	嘉禄3(永長1).11.24	田原市	三河湾	瀧美半島表浜	明応、慶長、宝永、安政の四大津波では7.1mに同じくらいの影響と見なされる。波高は概ね3m位で、所により4mにもなったものと思われる。	明応、慶長、宝永、安政の四大津波では7.1mに同じくらいの影響と見なされる。波高は概ね3m位で、所により4mにもなったものと思われる。新田など亡所となった記録が多い。永長津波(1096年)の場合の史料はみあたらないが、慶長や宝永津波の場合と同じような影響があったものと考えられる。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)
1096.12.17	嘉禄3(永長1).11.24	田原市	太平洋岸	瀧美半島表浜	明応津波はやはり高い6-8mの波高と思われるが、慶長津波の波高は1096年の永長津波と同様にやや低かったように思われる。	慶長の津波においても船の破損、魚網、魚具類の流失などの被害があり、1096年の永長津波の場合も同様である。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)
<1498年7月23日(明応7年6月25日)の地震、津波>							
1498.7.23	明応7.6.25	東三河全体	その他	東海地方	十五mの大津波		中日新聞(2011.11.21)
1498.7.23	明応7.6.25	豊橋市	三河湾	草間	大津波	大津波によって海辺の多くの人がが住まいを破壊された。この時に古書や古器物、その他の物品が流失してしまつたことから、これより以前のこととは判らなくなつた	校区的あゆみ 磯辺 草間区地誌略
<1498年9月20日(明応7年8月25日)の明応地震、津波>							
1498.9.20	明応7.8.25	東三河全体	三河湾	瀧美表浜	津波3-4m	津波3-4m	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)
1498.9.20	明応7.8.25	東三河全体	三河湾	瀧美表浜	津波の高さ3-4m	津波の高さ3-4m	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)
1498.9.20	明応7.8.25	東三河全体	太平洋岸	高豊(表浜一帯)	津波	大地震津波襲来	校区的あゆみ 高豊
1498.9.20	明応7.8.25	東三河全体	太平洋岸	瀧美表浜	津波5-8m	津波5-8m	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)
1498.9.20	明応7.8.25	東三河全体	太平洋岸	瀧美表浜	津波の高さ5-8m	津波の高さ5-8m	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)
1498.9.20	明応7.8.25	東三河全体	太平洋岸	表浜	大海潮(大津波)	大地震、地震同時大海潮(大津波)来諸国湊浦々津々人家倒死者多数。	老津村史 細谷村記録常光寺 年代記
1498.9.20	明応7.8.25	東三河全体	太平洋岸	瀧美	波高6-8m	瀧美親切で地震被害があった。波高6-8m。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)
1498.9.20	明応7.8.25	東三河全体	その他	瀧美	大津波	地割れし、同時に大津波がきて人家倒壊、死者がでた	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)
1498.9.20	明応7.8.25	東三河全体	その他	瀧美表浜、三河湾沿岸	波高4-8m	波高4-8m	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)
1498.9.20	明応7.8.25	東三河全体	その他	三河	高津波	浜辺では高津波のために滅亡したところがある	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1498.9.20	明応7.8.25	東三河全体	その他	三河の浜辺	高津波	高津波のため滅亡した所がある	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	大日本地震史料
1498.9.20	明応7.8.25	東三河全体	その他	瀝美	大津波	大津波がきて人衆倒壊、死者がでた。	山内茂雄氏作成資料	愛知県災害誌等を もとに山内氏が独 自に作成
1498.9.20	明応7.8.25	東三河全体	その他	紀伊半島から属総半 島におよび三重県・ 静岡県(伊勢・志摩・ 遠江)沿岸	大津波	震源地 東海通沖 規模M 8.6、津波に動かれた区域は、紀伊半島から属総半島におよび三重県・静岡県(伊勢・志摩・遠江)沿岸では大津波により大被害をこうむった。愛知県下の被害は不明。	愛知県災害誌	
1498.9.20	明応7.8.25	東三河全体	その他	三河	津波	三河に津波があったとある。	愛知県災害誌	武家年代記
1498.9.20	明応7.8.25	蒲郡市	三河湾	塩津	高さ4mと推定	白山神社社される	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1498.9.20	明応7.8.25	豊橋市	三河湾	高師(豊橋市)	高さ約3m程度	高師浜に高波がきた。高さ約3m程度と思われる。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1498.9.20	明応7.8.25	豊橋市	三河湾	豊橋(高師)	高波	高師浜に高波がきている	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1498.9.20	明応7.8.25	豊橋市	三河湾	豊橋	津波の高さ3-4m	高師浜に高波がきている	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1498.9.20	明応7.8.25	豊橋市	三河湾	吉田(豊橋)	3-4m	3-4m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1498.9.20	明応7.8.25	田原市	三河湾	瀝美半島薬兵	明応・慶長、室永、安政の四大津波ではたい たい同じくらいの影響。波高は概ね3m位 で、所により4m。	堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなどの被害があり、浸水も著しく、田畑等に被害を与え 荒廃地となった所も多かった。新田など亡所となった記録が多い。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1498.9.20	明応7.8.25	田原市	三河湾	田原	津波の高さは約3-4mと推定	三遠大地震で暴風雨、大津波あり(田原町史)。津波の高さは約3-4mと推定される。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1498.9.20	明応7.8.25	田原市	三河湾	田原	津波の高さ3-4m		飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1498.9.20	明応7.8.25	田原市	太平洋岸	瀝美半島薬兵	明応津波はやはり高い6-8mの波高と思わ れる	明応・室永、安政の各津波では漁船の流失・破壊、漁網の流失、家屋の破壊、死者・溺死者を出すなどかなりの被害 がみられている。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1498.9.20	明応7.8.25	田原市	太平洋岸	堀切	津波の高さは約6-8mと推定	大地震で地割れし、同時に大津波来る。人衆倒壊、死者があつた(常光寺年代記)。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1498.9.20	明応7.8.25	田原市	太平洋岸	田原	大津波	瀝美半島の愛知県田原市堀切町は「大地震で地割れし、同時に大津波来る」(常光寺年代記)と記されている。	中日新聞(2011.4.7)	
1498.9.20	明応7.8.25	田原市	太平洋岸	堀切	津波の高さ6-8m		飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1498.9.20	明応7.8.25	東三河以外	その他	豊川(とよがわ)	大海潮	大海潮満ち来り諸國凌浦々津人家倒死 伊勢、遠江、三河、駿河、甲斐、相模、伊豆の諸國にわたり、伊勢大湊千戸流失、溺死五千、伊勢志摩で約一万 人流失したという。	田原町史 中巻	(辰刻大地震豊川 古川之瀬巻ル今 古川乎(三河国開 書)
1539	天文8	豊橋市	三河湾	瓜郷町(満光寺)	大津波	大津波により葦宇が流失して、その後の記録はわからない	豊橋市史 第一巻	
1539	天文8	豊橋市	三河湾	大村	大津波	大津波があり、大村の歴史が流されたと言っても過言ではなからうか。	校区のあゆみ 大村	
1539	天文8	豊橋市	三河湾	大村	大津波	大津波発生	校区のあゆみ 大村	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1540	天文9	豊橋市	三河湾	津田	高潮(洪水)	暴風雨による高潮(洪水)による被害甚大 進徳神社 神明社 満光寺が流失 山王権現社勸進(下五井)	ふるさと津田	
1540	天文9	豊橋市	三河湾	豊川河口	高潮	天文9年(1540)「大津波」による被害が校区内の神社や寺院の記録に記されている。 一略— 愛知県史書誌を調べると、この天文9年には地震の記録はない。だから、津波が押し寄せ大被害をもたらせた の記録は、暴風雨による高潮による被害の間連いである。 当時、「津波」「高波」の用語が区別して用いられていなかったの「津波」と記したものと思われる。 ◆天文9年(1540) 4月9日 大雨による洪水 8月11日 暴風による高潮による洪水 ※豊川河口部に大きな被害が発生	ふるごと津田	
1540	天文9	豊橋市	三河湾	前芝	大津波(高潮)	大津波(高潮)で前芝・元橋敷大被害。奈切川流路変更	校区のあゆみ 前芝	
1540	天文9.8	豊橋市	三河湾	馬見塚	大潮	大潮が襲い馬見塚渡辺次郎忠安、選難の途中溺死し、神明像縁起書等流失してしまう	吉田方歴史年表	
1540	天文9.9	豊橋市	三河湾	吉田	洪水	三河国瀧美郡吉田方村下郷、野田村牛頭文王御宮の記録書洪水により流失	吉田方歴史年表	
<1586年1月18日(天文13年11月29日)の天正地震、津波>								
1586.1.18	天正 13.11.29	東三河全体	太平洋岸	瀧美表浜	津波	津波が瀧美表浜に波及したものと考えられる	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1586.1.18	天正 13.11.29	東三河全体	太平洋岸	高豊(表浜一帯)	津波	大地震津波襲来	校区のあゆみ 高豊	
1586.1.18	天正 13.11.29	東三河全体	その他	三河	津波	津波が起こり、家屋の流失、人畜の死傷もおびただしく	天正大地震誌	高豊史
1586.1.18	天正 13.11.29	東三河全体	その他	三河	海嘯	海嘯が起こり屋舎の流失人畜の死傷も夥しく	天正大地震誌	田原町史 中巻
1586.1.18	天正 13.11.29	東三河全体	その他	三河	海嘯	三河に亘り震動と共に海嘯が起こり屋舎の流失人畜の死傷も夥しく	田原町史 中巻	
1586.1.18	天正 13.11.29	東三河全体	その他	三河	津波	津波が起こり、家屋の流失、人畜の死傷もおびただしく	高豊史	
1586.1.18	天正 13.11.29	田原市	三河湾	田原	海嘯が起こり	總内から東海道にかけての地震で、山城、菟津、近江、美濃、伊勢、三河に亘り震動と共に海嘯が起こり、屋舎の流失 人畜の死傷も夥しく、余震は15年(1887)9月頃まで日夜続くという。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	田原町史
1586.1.18	天正 13.11.29	田原市	太平洋岸	堀切	津波	『常光寺年代記』には、津波の記録がない 被害のあるような津波はなかったため、記述されなかった	天正大地震誌	常光寺年代記
1586	天正 13.11.29・ 30	田原市	太平洋岸	堀切	津波	常光寺のある瀧美半島の太平洋に面した堀切付近では津波の被害がなかった 津波が発生したとしても、それは堀切付近に被害を与えるほどの津波ではなかったと考えられるが至ってはなかつたか。	天正大地震誌	常光寺年代記
<1605年2月3日(慶長9年12月16日)の慶長地震、津波>								
1604	慶長9.2.16	東三河全体	太平洋岸	表浜	津波	夜五つ時分地震、津波にて片浜の船皆打破らる	赤羽根町史	
1605	慶長9.11	田原市	太平洋岸	赤羽根	津波	津波	「赤羽根地域史に残る災害と異変の記録」より	
1605	慶長9.11.16	東三河全体	太平洋岸	表浜	津波	夜五つ時分地震、津波にて片浜の舟皆打破れ	赤羽根町史	常光寺年代記
1605	慶長9.11.16	東三河全体	太平洋岸	表浜	津波	地震、津波にて片浜の舟皆打ち破れ	研究輯録 三連の民俗と歴史	赤羽根町史(天変 地震等の記録の 部)

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1605	慶長9.11.16	東三河全体	太平洋岸	養浜		片浜の船皆打破也アミナカスナリ	田原町史 中巻	常光寺年代記
1605.2.3	慶長9.12.16	東三河全体	太平洋岸	瀧美半島堀切、片浜(表浜)	推定波高5-6m	片浜の船皆打破れ、漁網も流失した	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	常光寺年代記
1605.2.3	慶長9.12.16	東三河全体	その他	瀧美半島	津波	津波の挙動等から考えて遠州灘にその震源の可能性を考えた次第である。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1605.2.3	慶長9.12.16	東三河全体	その他	東三河全体	津波	犬伏岬から九州まで津波に昇舞われ、各種古文書によると、現在の徳島県海部郡浜田町一帯で三千八百人以上が死んだという。土佐甲浦、室戸岬付近などでもそれぞれ四百人近い水死者が出た。	恐怖のM8 東南海、三河大地震の真相	
1605.2.3	慶長9.12.16	東三河全体	その他	東海	津波	津波の襲来があった。	山内茂雄氏作成資料	愛知県災害誌等を もとに山内氏が独自に作成
1605.2.3	慶長9.12.16	東三河全体	その他	東は本伏岬から西は九州におよび各地	津波	津波は東は本伏岬から西は九州におよび各地で甚大な被害を挙げた。(死者約5000人)しかし、西は、三河に關する記録はないので、愛知県下の被害はあつても詳細はたつたと推定される。(郷土資料には、ほとんど慶長10年と誤記されている。)	愛知県災害誌	
1605.2.3	慶長9.12.16	豊橋市	三河湾	吉田	津波の高さ3m	津波の高さ3m	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1605.2.3	慶長9.12.16	豊橋市	太平洋岸	豊橋、片浜(表浜)	推定波高3m	豊橋においては常光寺年代記と同じ慶長9年11月16日津波で片浜の船が打ち破られたとある	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	豊橋市史
1605.2.3	慶長9.12.16	豊橋市	太平洋岸	片浜(表浜)	波高3m	慶長9年11月16日津波にて片浜の船打破る(豊橋市史)。この記事は堀切の常光寺年代記と同じものである。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	豊橋市史
1605.2.3	慶長9.12.16	田原市	三河湾	瀧美半島表浜	明応・慶長、室永、安政の四大津波では波高は概ね3m以下で、所により4m	堀切が破壊されたり、養濱が流失または破壊、死者も出るなどの被害があり、津木も著しく、田原等に被害を与え荒廃地となつた所も多かった。新田など亡所となつた記録が多い。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1605.2.3	慶長9.12.16	田原市	三河湾	田原	津波の高さ2-3m	震度6、津波の高さ2-3m	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1605.2.3	慶長9.12.16	田原市	三河湾	田原	波高2-3m	この地震の震度は6と推定される。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1605.2.3	慶長9.12.16	田原市	三河湾	田原	津波の高さ2-3m	津波の高さ2-3m	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1605.2.3	慶長9.12.16	田原市	三河湾	吉田	津波の高さ3	震度5、津波の高さ3	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1605.2.3	慶長9.12.16	田原市	太平洋岸	堀切	波高5-6m	堀切津波で魚網、船打破らる	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1605.2.3	慶長9.12.16	田原市	太平洋岸	瀧美半島表浜	明応津波はやはり高い6-8mの波高と思われるが、慶長津波の波高は1098年の永長津波と同様にやや低かつたように思われる。	慶長の津波においても船の破壊、魚網、魚具類の流失などの被害があり、1098年の永長津波の場合も同様であらう	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1605.2.3	慶長9.12.16	田原市	太平洋岸	堀切	津波の高さ5-6m	震度5-6、津波の高さ5-6m	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1605.2.3	慶長9.12.16	田原市	太平洋岸	堀切、片浜	津波	片浜の船皆打破也	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1605.2.3	慶長9.12.16	田原市	太平洋岸	堀切	津波の高さ5-6m	津波の高さ5-6m	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1605.2.3	慶長9.12.16	田原市	太平洋岸	堀切、片浜	波高5-6m	片浜の船皆打破れ、魚網を流失した。人知らず明日みで驚くあり、この地震の震度は5、波高5-6m。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	常光寺年代記
1605	慶長10.10.16	東三河全体	その他	三河	海嘯	海嘯を伴い、遠州橋本附近では民家八十余戸流出海に没し、上総小多喜では七箇村が流失し、人馬数百死し、九州、四国、伊勢の津々浦々古瀬の災害甚し	田原町史 中巻	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
<1677年11月4日(延宝5年10月9日)の地震、津波>								
1677.11.4	延宝5.10.9	東三河全体	その他	尾張・瀧美	波高2m	波高2m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
<1703年12月31日(元禄10年11月23日)の地震、津波>								
1703	元禄 16.11.22	東三河全体	太平洋岸	養兵	海水漲溢	海水漲溢、人多ク死シ、船網、漁具等流失ス	老津村史	細谷村記録常光寺 年代記
1703	元禄 16.11.22	東三河全体	太平洋岸	養兵	海水漲溢	夜八つ時地震、經月不止、海水漲溢人多ク死シ、船網漁具等流失ス	愛知県瀧美郡史	細谷村記録常光寺 年代記等
1703	元禄 16.11.22	豊橋市	太平洋岸	高豊	津波	津波起こリ、七ヶ村の漁師漁具類一切流失。この時、高塚村若宮様陸地に遷宮。	高豊史	
1703.12.31	元禄 16.11.23	東三河全体	太平洋岸	養兵	津波	津波にて漁舟多く流れる	研究輯録 三遠の民俗と歴史	赤羽根町史(天変 地異等の記録の 部)
1703.12.31	元禄 16.11.23	東三河全体	太平洋岸	養兵	津波	この津波にて漁舟多く流さる	赤羽根町史	常光寺年代記
1703.12.31	元禄 16.11.23	東三河全体	太平洋岸	瀧美半島	津波	津波による死者が多く、船、網、漁具等が流失した。	瀧美郡災害年表	
1703.12.31	元禄 16.11.23	東三河全体	その他	瀧美	波高2m余り	海水溺溢し船網漁具等流失。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1703.12.31	元禄 16.11.23	東三河全体	その他	瀧美	波高2m	波高2m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1703.12.31	元禄 16.11.23	東三河全体	その他	瀧美半島	津波	津波により、瀧美半島では死者が多く、船、網、漁具等が流失した。	愛知県災害誌	
1703.12.31	元禄 16.11.23	田原市	太平洋岸	赤羽根	津波	この津波にて漁舟多く流さる	赤羽根町史	
1703.12.31	元禄 16.11.23	田原市	太平洋岸	瀧美半島表浜	津波	元禄地震(1703年)の津波においても船網漁具等を流失している。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1703.12.31	元禄 16.11.23	田原市	その他	瀧美	津波	關東・東海地方に大地震があり、津波が房総半島・鎌倉・小田原の海岸に押し寄せ、さらに瀧美半島においても船・網・漁具が流出し、多くの死者が出た。	豊橋市史 第二巻	愛知県災害誌
<1707年10月28日(宝永4年10月4日)の宝永地震、津波>								
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	三河湾	田原	津波	三河湾・知多湾・瀧美湾にも津波が浸入し、田原や一色・寺津・平坂にも大被害を及ぼした。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	三河湾	瀧美の太平洋沿岸	津波	瀧美の太平洋沿岸に津波の被害が大きく、また三河湾・瀧美湾にも津波が浸入し、大被害を及ぼした。	山内茂雄氏作成資料	愛知県災害誌等を もとに山内氏が独 自に作成
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	養兵	津波	当浜津波暴り、十三里間の船船底く流損し一村にて一人死流死す	研究輯録 三遠の民俗と歴史	赤羽根町史(天変 地異等の記録の 部)
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	瀧美、遠州灘沿岸		遠州灘沿岸では5-6町四方の海中に島ができしたが、これは潮が引いたので現われたものかもしれない。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	瀧美表浜	波高6-7m	波高6-7m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	瀧美表浜	波の高さ6-7m	波の高さ6-7m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	遠州灘沿岸	潮が引いた	5-7町四方の海中に鳥がいてきた	飯田政事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	表浜	津波	当浜津波挙り、十三里間の漁船尽く流損し、一村にて一兩人死流死す	赤羽根町史	常光寺年代記
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	高豊(表浜一帯)	津波	大地震津波襲来	校区のあゆみ 高豊	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	瀧美の太平洋岸	津波	瀧美の太平洋沿岸に津波の被害が大きき。	飯田政事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	二川(表浜一帯)	大津波	大地震 大津波 山々崩壊 人馬多く死ぬ	校区のあゆみ 二川	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	細谷(表浜一帯)	津波	津波あり村々の網、舟、漁具残らず流失	校区のあゆみ 細谷	細谷校区史
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	表浜	津浪	津浪おこり家屋大破、漁舟流失、この日三〇回余の余震あり。	田原町史 中巻	常光寺年代記
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	表浜	津波	津波挙り十三里間、漁船尽く流損し一村二一、兩人死流死す。当村西二里民屋三十余浪二ノ破損し人二人流死。	田原町史 中巻	常光寺年代記
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	駿河から四国の太平洋側	津波	被害や津波の被害が及ぶかった。	豊知県災害誌	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	三河湾・瀧美湾	津波	三河湾・瀧美湾にも津波が侵入し、大被害を及ぼした。	山内茂雄氏作成資料	豊知県災害誌等をもとに山内氏が独自に作成
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	その他	瀧美郡	大津波	瀧美郡では大津波が襲い多くの人が亡くなった	校区のあゆみ 磯辺	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	その他	三河湾沿岸、瀧美表浜	波高3-7m	波高3-7m	飯田政事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	その他	瀧美半島	瀧美半島では南方で大きいに鳴動し、14時頃大津波	瀧美半島では大津波があり、村々の漁具は流失し、山ぐずれ、谷は埋まり多くの人が死亡した。この夜は余震が30~40回もあり、多くの田畑に海水が入るようになった。瀧美郡二川では半分が破壊された。	瀧美郡災害年表	
1707.10.28	宝永4.10.4	蒲郡市	三河湾	大塚		大塚村の被害は少なかつたことになる。	蒲郡市史 本文編2 近世編	
1707.10.28	宝永4.10.4	蒲郡市	三河湾	鹿島		本畑高八四石七斗五合の内、引き高は二〇石一斗二升二合四勺であり、その中の五石九斗六升四勺が「僅か荒れ引山」となっている。約六石の風流津地は、おそらく宝永四年(一七〇七)の大地震によるもの	蒲郡市史 本文編2 近世編	
1707.10.28	宝永4.10.4	蒲郡市	三河湾	竹谷村	汐入り	竹谷村の塩田は —中略— 宝永4年(1707)の大地震によって被害を受け「松平左門様御代より汐入段々津地引二能成候」のように18世紀初期には減少している。	塩津村誌	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊川市	三河湾	下佐脇、浜野、大草		この承引きが地震による潰れ浜なら、近隣の梅敷村や下佐脇村の塩田が全滅し、浜野村・大草村などが大損害を受けた	蒲郡市史 本文編2 近世編	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊川市	三河湾	下佐脇		かつては塩浜も存在していたが、宝永の地震のために消滅し、おたこの畔には水田二六〇石、畑三〇石が被害にあっている。	御津町史 本文編	村室出版
1707.10.28	宝永4.10.4	豊川市	三河湾	宝飯郡大草		大草左門代官所管下通防破損8.5km、被害大	飯田政事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	馬見塚	津浪、大津浪、大暴風雨等	先を引き上げたとその年から取巻が激減している。これは宝永四年の大地震と津浪、正徳元年の大津浪、翌二年の大暴風雨等をはじめとしてこの間天災地変があつたため	豊橋市史 第二巻	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	梅敷		この承引きが地震による潰れ浜なら、近隣の梅敷村や下佐脇村の塩田が全滅し、浜野村・大草村などが大損害を受けた	蒲郡市史 本文編2 近世編	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	前芝		宝永4年の富士山噴火による大地震の時塩浜を失った。これのち山内新田となった。	校区のあゆみ 前芝	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	草間	津波	津波が海岸に打ちよせ堤防を破壊し品井浦、広幡などに流れ込み、砂浜になってしまった。	校区のあゆみ 磯辺	草間区地誌略
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	土倉新田		土倉新田堤防破壊し大被害	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	高須・土倉新田	海水浸入	堤防決壊、海水侵入	吉田方歴史年表	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	高須土倉	海水の浸入	この新田はたびたび災害を繰り返し、延宝八年(一六八〇)には大雨・津波によって堤防が瓦解し、大きな被害を被ったが、五人の元締の力によって復旧することができた。その後、宝永二年(一七〇五)の本圃田(宝永四年一〇月四日)の大地震による堤防の欠壊、海水の浸入、続いて正徳元年(一七〇七)八月二日大津波に襲われ、死者三人、堤防の欠壊が所、その間数は五一六間(九三ハメートル)に及んだ。	豊橋市史 第二巻	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	豊橋	津波約3m	津波が海岸新田へ浸入したが、それほど大きな被害はなかった	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	豊橋	波の高さ3m	波の高さ3m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	吉田	波高は約3m	津波が海岸新田へ浸入したが、それほど大きな被害はなかった	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	高須土倉	汐乗込み	汐り潰れ、汐乗込み田畑作毛普無に成る	郷土史料第三輯 吉田方の沿革 上巻	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	高須土倉	潮水が流れ込んで	高須土倉地区の堤防が決壊、潮水が流れ込んで田畑の作物普無となり	校区のあゆみ 吉田方	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	高須・土倉新田		高須・土倉新田の堤防が決壊して大被害があった。	愛知県災害誌	参河国閉書 三州吉田記・宝永地震記
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	高須新田、土倉新田	津波や暴風雨	延宝八年(1680)、宝永二年(1705)、同四年、正徳五年(1711)とたびたび、津波や暴風雨による堤防決壊の被害を受け、新田はほとんど海に沈んでしまい、新田百姓は歴々の周囲に自力で堤を築き、牟呂・日色野方面の畑を借りて耕作し、新田を守りとおしたという。	牟呂史	高須新田・土倉新田開拓記録
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	三河湾	高松島新田	津波や高潮	高須・土倉新田等と同様に津波や高潮で何度も大きな被害を受けている。	牟呂史	「郡史資料牟呂吉田村」
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	赤沢	津波の高さは数m以上	河川に津波が浸入し、川筋の村落が被害	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	赤沢	波の高さ6-7m	波の高さ6-7m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	赤沢	津波の高さが数m以上	河川に津波が浸入し川筋の村落が被害を受けた	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	伊古部	大津浪	大津浪によって漁船と漁具のすべてが海へ流された。余震が続き数度津浪が押し寄せ、四日以降十一日まで一日のうち四～五度地震があり、十一月末まで揺れがあった	伊古部郷土誌	高塚村庄屋(衛門)の記録
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	伊古部	津波、大津浪	伊古部の漁業は大きな被害を受けた。船、網、運具などの多くが流失した。網の復活をほかるすべもなく、二～三ヶ月の間、個人の個人が小網を作り細々と漁を続けた	伊古部郷土誌	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	表兵	津波、大津浪	十月四日星丸少過より大地震、近代見聞の地震なり。午未の方大いに嘯動す。申八ツ時大津浪あり、村々の網船其の他の漁具や漁船等、山は崩れ、谷は埋まりて人馬多く死す。赤沢、東伊古部、西伊古部三ヶ所五七町四方の海中に島出来、此日夜に入り三四十度地震で、人々安き心なく、野に臥し山に住むこと二ヶ月	伊古部郷土誌	常光寺年代記
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	城下	波の高さ6-7m	波の高さ6-7m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	高塚	津浪	津浪がおし寄せ舟と網のすべてを流した。暴走余震が続き、三度津浪が押し寄せ、浜は皆海になった。	高塚史	高塚村庄屋の田中八衛門文書

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	高豊	津波	津波おこり家屋大破、漁船流失	高豊史	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	表浜	大津浪	十月四日晝九つ過ぎより大地震、近代貞園の地震なり、午未の方丈に嘯動す。申八つ時大津浪あり、村々の網船、其の他の漁具不残流失し、山は崩れ、谷は埋りて人馬多く死す。 赤澤東伊古部西伊古部三四所五町四方の海中に島出来、此の日夜に入り三四十度地震ひ、人々安心な ^く 野に取し山に住むこと二ヶ月。	愛知県歴史部史 年代記等	細谷村記録常光寺 年代記等
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	表浜	大津浪	【豊美半島では南方で大いに嘯動し、一四時ごろ大津浪あり、村々の漁具は流失し、山はくずれ、谷は埋まり、多くの人馬が死した。	高豊史	「参河国閉書」 「三州吉田記」
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	赤坂、伊古部		赤沢、伊古部の海中浜中に島山ができた。	校区のあゆみ、細谷	細谷校区史
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	細谷	高さ6mもの大津波	高さ6mもの大津波が表浜一帯を襲い、海食崖下の集落は大半が流出してしまつた。	渥美町郷土資料館 研究紀要第2号 (加藤克己)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	赤沢村	大津波	太平洋に注ぐ開折谷の小河川に、宝永地震の大津波が侵入した。川筋の標高数m付近にあった村落が被害を受けた。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	高塚村	8ツ時時分(午後2時頃)に、柿鳴りがして大地震、少し経ってから、津波が押し寄せ	津波が押し寄せ、船と網のすべてを流した。3度津波が押し寄せ、浜は皆海になった。地震により、高塚村の家は24軒(40%)が軒ひ、あとすべての家が傾いた。戸どうの窓棧(窓頭神社)は古池、松木ともに海へ崩れ落ちてしまつた。その時に左五兵衛という者は、浜屋敷にいて土砂の下敷きとなつてしまつた。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	高塚村庄屋 田中 八兵衛文書
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	細谷村	細谷村：10月4日、昼9ツ過ぎより大地震、申8ツ時、大津波	細谷村：大津波あり、村々網、船、その他漁具残らず流失、山は崩れ、谷は埋まりて、人馬多く死す。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	宝永4年の細谷村 の記録
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	細谷村	大津波	細谷村：宝永地震の大津波やその後の高潮によって、海食崖下にあった細谷一帯の田畑が流出していることが記されている。「去年の地震なおやまず、高潮にて、田、畑多く破壊す。」	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	宝永5年の細谷村 の記録
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	赤沢、伊古部、西伊古部など34か所		被災地は赤沢、伊古部、西伊古部など34ヶ村に及んだ。また、5町(約500m)四方の島が海中にできたとし、この島の夜は余震が30〜40回もあり、余震は翌春まで続いた。(藤代氏、高さ6〜7mの大津波が引く際に、幅500〜600mほどの海底が出現し、島のようになつたものと考へたい。)	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	参河国閉書、三州 吉田記
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	三河湾	渥美臺浜	波の高さ3-5m	波の高さ3-5m	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	三河湾	福江、田原	5m近く	宝永津波では福江や田原で波高やや大きかつたようで、5m近くにも達したと思われる。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	三河湾	渥美半島臺浜	明応、慶長、宝永、安政の四大津波ではだいたい同じくらいの影響。波高は概ね3m位で、所により4m。	堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなどの被害があり、浸水も著しく、田畑等に被害を与え、荒廢地となつた所も多かつた。新田など七所となつた記録が多い。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	三河湾	野田	汐さす	海辺へつたみより、浜筋の者は残らず山へ逃げた。田原御城下、藤田の二ツ池堤まで汐さす。漆田正業寺地内、清谷の橋まで汐さす。	野田史 金五郎文書「藤代 寛書」	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	三河湾	野田	津波	十月四日晝九つ過ぎより大地震、近代貞園の地震なり、午未の方丈に嘯動す。申八つ時大津浪あり、村々の網船其の他の漁具不残流失し、山は崩れ、谷は埋まりて人馬多く死す。別て破損跡しきは野田七郷なり、	伊古部郷土誌 常光寺年代記	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	三河湾	汐川	津波	汐川筋の堤防も飯百間にわたつて破壊した。海新田等の堤も津波によってさらわれてしまつた	西円寺史 御祐筆日記	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	三河湾	田原	津波の高さは4m余と推定される。地震後潮位は15-18cm上がり、高潮が時々発生した。	田原城の内外に大被害を受け、城内の家屋倒壊は小屋にも1400軒に及んだ。田地の遺草もまた大きく特に津波によって海新田の堤防が決壊し、被害が大きかつた。また汐川の堤も壊れ田畑も荒廢した。このように地震と津波の被害が汐川を中心に大きかつた。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	三河湾	田原	津波の高さは4m余と推定される。地震後潮位5-6寸(15-18cm)上がり高潮時々起り、補強した。	田地の損耗もまた大きく特に津波によって海新田の堤防が決壊し、津波被害が大きかつた。汐川の堤もまた田畑の多くが壊れた。田原城下藤田の二ツ池堤まで汐差し来た。西方は野谷の橋まで汐さす。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	三河湾	田原	波の高さ4-5m	波の高さ4-5m	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	三河湾	三河湾	津波	三河湾にも津波発生	田原市ホームページ(田原市の沿革～ 我がまちの歩み)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	三河湾	野田	大津浪	十月四日晝九つ過ぎより大地震、近代貞園の地震なり、午未の方丈に嘯動す。申八つ時大津浪あり、村々の網船、其の他の漁具不残流失し、山は崩れ、谷は埋りて人馬多く死す。別て破損跡しきは、野田七郷なり、	愛知県歴史部史 年代記等	細谷村記録常光寺 年代記等

西暦	旧暦	市町村	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	野田	大津浪	『瀧美半島では南方で大いに鳴動し、一四時ごろ大津浪があり、村々の漁具は流失し、山はくずれ、谷は埋まり、多くの人馬が死亡した。被害の大きかったのは野田村の七郎だったが、	高歴史	「参河国聞書」、 「三州吉田記」
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	福江	波の高さ4-5m	波の高さ4-5m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	瀧美半島	南方で大いに鳴動し、14時ごろ大津波があった。	瀧美半島では、南方で大いに鳴動し、14時ごろ大津波があった。村々の漁具は流出し、山は崩れ、谷は埋まり、多くの人馬が死亡した。特に被害が大きかったのは野田七郎であった。田原藩領内の居宅、小屋の倒壊、破損家屋は1400軒余に及んだが、この内580軒を野田村が占めていた。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	参河国聞書、三州 吉田記
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	田原御城下	汐が上がった。	田原御城下、藤田の二ツ池まで汐が上がった。漆田正栄寺地内、清谷の橋までも汐が上がった。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城 信幸)	野田 鶴岡金五郎 文書」
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	野田七郎	大津波	瀧美半島では南方で大いに鳴動し(午後2時)ごろ大津波があり、村々の漁具は流失し、山は崩れ、谷は埋まり、多くの人馬が死亡した。特に被害が大きかったのは野田七郎であった。田原藩領内の居宅、小屋の倒壊、破損家屋は1400軒余に及んだが、この中の580軒を野田村が占めていた。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	赤羽根	大津波、高汐	鶴岡大津波、当所も大地震部大津波、高汐にて浜道具流れ	研究輯録 三邊の民俗と歴史	鈴木三十郎文書 (毛地の間診草書 事書留)、及び任 歴文書
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	赤羽根	津波	津波		
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	赤羽根	津波	当浜津波より漁舟尽く流失、一村一、二人当て流死す	「赤羽根地域史に残る災害と異変の記 録」より	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	赤羽根	津波	津波	赤羽根町史	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	瀧美半島葦浜	宝永津波はたいい同じ高さの6-8mであり、場所により10mlにも達している。	明応、宝永、安政の各津波では漁船の流失、破壊、漁網の流失、家屋の破壊、死者を出すなどかなりの被害がみられている。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	池尻	津高6-7m	池尻川に津波襲来し被害が大きかった	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	池尻	波の高さ6-7m	波の高さ6-7m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	池尻	津高6-7m	池尻川に津波襲来被害が大きかった	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	高松	つなみ 常より五丈程高く	高松など常より五丈程高くつなみより、ほうべ低い所は聴えてしまう。 義浜のあみ、舟残らず流れる。	野田史	金五郎文書「蔵代 寛書」
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	高松	平常の波より五丈程高く	ほうべ低き所少しず打越	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	高松	つなみ 平常の浪打ちより五丈程高く	海辺へ、つなみより、浜筋の者ハ不残山へ逃げ申候 高松なぞハ平常の浪打ちより五丈程高くつなみより申候。ほうべ低き所少しず打越申候	西門寺史	金五郎文書
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	瀧美葦浜・高松町	波高6-7m	瀧美葦浜で6-7m、高松町でも大津波発生	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	堀切		死者2流死、破損30、浜辺52km、間漁船悉く流失	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	堀切	津高6-7m	民家30余破損し、13里(52km)間漁船悉く流れた。溺死者1村で1-2人	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	堀切	津高6-7m	13里(52km)間漁船悉く流れ、死者1村にて1-2人流死した	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	堀切	波の高さ6-7m	波の高さ6-7m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	瀧美郡内の内にては、赤浜村、田原御城内、野田村、赤羽根村は池尻の川筋	浜辺へ津波上がり	赤浜村、田原御城内、野田村、赤羽根村は池尻の川筋の村大破に及び申し候。…浜辺へ津波上がり、浜筋の者は、残らず山へ逃げ申し候。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城 信幸)	野田村 鶴岡金五 郎「蔵代寛書」

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	瀧美半島	南方で大いに鳴動し、14時ごろ大津波	村々の漁具は流出し、山は崩れ、谷は埋まり、多くの人命が死した。特に被害が大きかったのは野田7郷であった。田原藩領内の屋敷、小屋の倒壊、破損家屋は1400軒余に及んだが、この内580軒を野田村が占めている。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	参河国附書、三州吉田記
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	赤羽根村から池原村以外の赤羽根地区	高さ6～7mの大津波	高さ10m以上の海食崖の上立地していた集落は、宝永地震で発生した高さ6～7mの大津波の直撃の被害を免れた。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	池原村(池原川の河口部)	池原川の河口部にも高さ6～7mの津波	池原川や横運川を遡上した。このため、標高の低い赤羽根池原の川筋の村が大津波する。など、河口部にあった民家が津波によって大きな被害を受けたのである。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	表浜一帯	津波	宝永地震(1707)では、瀧美半島一帯は標高6以上の激崖に見舞われ、津波が表浜一帯を襲った。	田原市博物館 研究紀要第4号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	表浜沿岸	高さ6～7mの大津波	漁船や漁網などがこごとく流失し、地引き網を主体とした半農半漁の表浜の村々は、大打撃を受けた。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	高松	平常の波打より5丈(約15m)ほど高く津波上がり	ほうべの低き所、少し打ち打ち越え申し候由、恐ろしき事也。表浜筋は、網舟難らず流し申し候。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	野田村「福筒金五郎」歳代覚書
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	高松	常よりも5丈程の高さの津波が上がり	ほうべの低い所を越えてしまった。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	野田「福筒金五郎」文書
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	堀切村	津波	堀切村では、民家が30軒余りが津波で破損し、2人が溺死した。この日は夜になるまで30～40回の余震が続いたため、郷内全ての村人が城山に逃れ、2日3晩山中で過ごした。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	常光寺年代記
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	堀切村	巨大な津波	家屋や田畑も呑み込まれ、集落跡も残さないなどの被害があった。村人は城山に必死に逃げたという。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	堀切村	宝永地震の巨大な津波	表浜の海食崖も、伊良湖付近になると次第に高度を下げ、小塩津村以西は砂浜の下に消失する。海食崖が消失した堀切村に標高4.5m-5mの砂浜の微高地に集落が密集している。堀切村では大津波の被害をたひたび受け、宝永地震の巨大な津波では、家屋や田畑も呑み込まれ、集落跡も残さないほどの被害があった。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	大連村～小塩津村	大津波	江戸時代には海食崖の上の台地に集落が立地していた。このため、宝永地震は、大津波による集落の被害はななく、浜辺に置いてあった網や船などの漁具の流出が主な被害として記録された。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	瀧美半島先端の堀切村	高さ6～7mの大津波(表浜沿岸)	津波の直撃を受け集落全体が大きな被害にあった。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	高松村から小塩津村に至るまでの集落	高さ6～7mの大津波(表浜沿岸)	池原村を除けば、海道の崩落や漁具の流出はあったものの、津波による家屋への被害は記録されていない。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	赤羽根村から池原村	高さ6～7mの大津波	赤羽根村から池原村の間は、海食崖が切れている。太平洋に流れ出す池原川では、河口から遡上してきた大津波により、河口付近の低地にあった池原村の一部の民家が流出した。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	池原村と堀切村を除けば、六連村から伊良湖村までの田原市の集落	津波	新橋・台所集落から瀧美村以西は、池原村と堀切村を除けば、六連村から伊良湖村までの田原市の集落で、海道の崩落や漁具の流出以外は、津波による家屋被害の記述はほとんど見当たらない。…城下以西の海食崖は帯水層をもたない砂礫の互層からなり、浜辺では生活用水や農業用水が容易に侵入し、寺院内に湧き出た。このため、背後の海食崖上の台地に集落を重ねてきた。そのため、漁具の流出はあったものの、津波による家屋への被害は免れたのである。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	堀切	津波	十月四日午時大地震、前代未聞ノ地震ナリ。当浜(堀切)津波拳ガ、十三里ノ間船船尻ク流損シ、一村二テ一高ノ人死流死ス。当村西ニテ民屋三十余泊ニ破損シ、人二人流死ス。此日ノ夜ニ至テ三十四ノ地産故、郷内ノ若コトク城山工別連キ、二日三夜野ニ取ル、尤、当村二隣ラズ、浦郷民屋数ク破損シ、皆野ニ取ル、山ニ住ス。近郷別ノ破損影ハ野田村七郷ナリ。本形ノ家ノ破損シ、寺院内ノ破損ナリ。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	常光寺年代記
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	その他	瀧美郡	つなみ	瀧美郡の内二ノ八赤沢村、田原御城内、野田村、赤羽根池原の川筋の村大破ニ及申候海辺へつなみより船防の者ハ不レ残山へに申候	田原町史 中巻	野田「福筒金五郎」文書
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	その他	瀧美	時刻、昼れつ通より(12時以降)、津波襲来14時	時刻、昼れつ通より(12時以降)、津波襲来14時	飯田政事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	瀧美郡史
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	その他	田原	時刻、午の中刻(12時)、津波襲来14時	時刻、午の中刻(12時)、津波襲来14時	飯田政事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	田原町史
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	その他	田原	時刻、午の中刻(12時)、津波襲来14時	宝永5年春去年の地震尚止まらず所々高汐満て田畑多く破損す	飯田政事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	瀧美郡史
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	その他	田原領		船320隻流失	飯田政事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	その他	特に被害が大きかったのは野田七郷だったが、被災地は赤沢、伊古部、西伊古部など34ヶ村に及んだ。	大津波	津波の高さは2丈余り(約6メートル)	愛知県災害誌	参河国附書 三州吉田記、宝永地震記
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河以外	太平洋岸	舞阪、新居	津波の高さは2丈余り(約6メートル)	津波の高さは2丈余り(約6メートル)で、舞阪で45軒、新居の本町で3軒流失した	校区的あゆみ 細谷	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河以外	太平洋岸	浜名湖西岸の新居関所や白須賀宿	高さ6~7mの大津波(表浜沿岸)	浜名湖西岸の新居関所や白須賀宿は、關所や宿場が壊滅的な打撃を受けた。	田原市博物館 研究紀要第3号(蘇城信幸)	
1708	宝永5	東三河全体	太平洋岸	表浜	高汐満て	春去年の地震止まず、所々高汐満て田畑多く破壊す	研究輯録 三遠の民俗と歴史	瀧巻郡史(天変地異の部)
1708	宝永5	東三河全体	太平洋岸	表浜	高汐満て	春去年の地震尚止まず、所々高汐満て田畑多く破壊す。	愛知県瀧巻郡史	細谷村記録常光寺年代記等
<1708年2月13日(宝永5年1月22日)の地震、津波>								
1708.2.13	宝永5.1.22	東三河全体	太平洋岸	瀧巻表浜	波高2-3m	波高2-3m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1708.2.13	宝永5.1.22	東三河全体	太平洋岸	表浜	高汐	宝永五年(一七〇八)春、去年ノ地震止マズ、所所高汐満テ、田畑多ク破壊ス。七月二日大風雨洪水田畑多ク破壊ス	老津村史	細谷村記録常光寺年代記
1708.2.13	宝永5.1.22	東三河全体	その他	瀧美	津高2-3m	田畑の被害多かった	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1708.2.13	宝永5.1.22	東三河全体	その他	瀧美	津波	津波の被害	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1708	宝永5	田原市	太平洋岸	瀧美半島表浜		1708年の津波においても瀧美においても田畑の浸水被害があった。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	
<1850-54年の地震、津波>								
1850	嘉永3.8.25-9.6	東三河全体	太平洋岸	二川(表浜一帯)	津波	津波	校区的あゆみ 二川	
1854	安政元.1.4	東三河全体	太平洋岸	表浜	津波	津波あり、山崩れ家倒れ	研究輯録 三遠の民俗と歴史	瀧巻郡史(天変地異の部)
1854	安政元.1.4	東三河全体	太平洋岸	表浜	津浪	朝五ツ半頃ヨリ大地震、次イテ津浪アリ山崩レ、家倒ル、セケ月計地震ヲ、本村ニ於ケル倒家四〇戸、在家ノ者野山畑中ニカリヤ茨紙ハリテ生ム	老津村史	細谷村記録常光寺年代記
1854	安政元.1.4	東三河全体	太平洋岸	表浜	津浪	津浪あり、山崩れ家倒る	浦区郷土史	細谷村常光寺年代記
1854	安政元.1.4	東三河全体	太平洋岸	表浜	津浪	朝五ツ半頃ヨリ大地震、次イテ津浪あり、山崩レ家倒ル、セケ月計地震ニ、在家ノ者野山畑中ニカリヤ茨紙ハリテ生ム。	愛知県瀧巻郡史	細谷村記録常光寺年代記等
1854	安政元.1.4	田原市	太平洋岸	赤羽根	津波	津波	「赤羽根地域史」に残る災害と異変の記録」より	
<1854年12月23日・24日(嘉永7年11月4日・5日)安政地震の地震、津波>								
1854.12.23	嘉永7.11.4	東三河全体	三河湾	瀧巻表浜	津波の高さ3-4m	津波の高さ3-4m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	東三河全体	三河湾	瀧巻表浜、三河湾岸	波高2-10m	波高2-10m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1854.12.23	嘉永7.11.4	東三河全体	三河湾	瀧美浜通り	波高8-10m	波高8-10mで被害あり	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	東三河全体	三河湾	三河湾沿岸	津波	三河湾沿岸にも津波の被害。	蒲都市史 本文編2 近代編	愛知県災害誌
1854.12.23	嘉永7.11.4	東三河全体	太平洋岸	瀧美表浜	津波の高さ6-10m	津波の高さ6-10m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	東三河全体	太平洋岸	瀧美湾沿岸		瀧美湾沿岸沈下した	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	東三河全体	太平洋岸	表浜(池尻)	波うつ	四ツ時大地しん、四ツ時半つ波うつ、人所々にて志す。池尻ニテ耆家の内に魚者、おほきに三斗つきのうすあが る。	田原町史 中巻	珍更年代記
1854.12.23	嘉永7.11.4	東三河全体	太平洋岸	二川(表浜一帯)	津波	大地震 津波7ヶ月騒く	校区のおかみ 二川	
1854.12.23	嘉永7.11.4	東三河全体	その他	三河湾・遠州灘の沿岸	津波	三河湾・遠州灘の沿岸に津波が襲来し被害があった	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	東三河全体	その他	愛知県においては瀧美半島表浜のみならず三河湾に面した表浜	大津波。津波は4日の巳刻大地震の半刻程過ぎてきた	愛知県においては瀧美半島表浜のみならず三河湾に面した表浜、伊勢湾臨海の熱田 や多半島の沿岸にも大津波がきている。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	東三河全体	その他	伊勢湾、三河湾沿岸	津波	伊勢湾、三河湾沿岸、瀧美半島の沿岸でも津波の被害を受けた。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (蒲田治)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	東三河全体	その他	三河湾・遠州灘の沿岸	津波	三河湾・遠州灘の沿岸に津波が襲来。震央 東海道。瀧美湾沿岸沈下した。	山内茂雄氏作成資料 もと山内氏が独自に作成	愛知県災害誌等を もと山内氏が独自に作成
1854.12.23	嘉永7.11.4	東三河全体	その他	三河湾沿岸・瀧美半島の遠州灘沿岸	津波	伊勢湾、三河湾沿岸、瀧美半島の遠州灘沿岸でも津波の被害を受けた。	蒲都市誌	御蔵神社日誌
1854.12.23	嘉永7.11.4	東三河全体	その他	三河湾沿岸・瀧美半島の遠州灘沿岸でも津波の被害を受けた。	津波	伊勢湾、三河湾沿岸、瀧美半島の遠州灘沿岸でも津波の被害を受けた。	愛知県災害誌	
1854.12.23	嘉永7.11.4	蒲都市	三河湾	形原村(御蔵神社)	津波	津波ニテ家ヲ引キ出サラルル所モアリ、当地ハママダサハハリシヤン	瑞津村誌	御蔵神社日誌
1854.12.23	嘉永7.11.4	蒲都市	三河湾	蒲都市内		・嘉永7年11月4日に大津波な地震が発生した。三河地方(蒲都市内)においては、人的な被害は少なかつたよ うであるが、一部家屋や田畑に被害を及ぼした。 約150年前の災害であり、長い年月が経過しているため、語り継がれてきた伝承などは残っていない。しかし、 江戸時代に形原(現在の蒲都市形原町)に陣屋を置いていた旗本の巨勢(こせ)氏によって、地震のことが記録さ れており、「形原役所記録」、三河地方におけるこの地震の様相をつかぎ、知る事ができる。	総務省消防庁ホームページ(防災課 全国災害伝承情報(平成17年3月))	形原役所記録
1854.12.23	嘉永7.11.4	蒲都市	三河湾	蒲都市	津波	此度震動ハ大ヘン事ニテワキワキハ家々クスレ又津波ニテ家ヲ引キ出サラル所モアリ。	蒲都市誌(1974.1発行)	御蔵神社日誌
1854.12.23	嘉永7.11.4	蒲都市	三河湾	西浦	津波の高さ2m	津波の高さ2m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	蒲都市	三河湾	西浦	津波	津波の被害を受けた	蒲都市誌(1974.1発行)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	蒲都市	三河湾	西浦村	津波	西浦村では津波の被害をうけ、住民は屋外に小屋をたてて寝たことが記録されている。	蒲都市誌	御蔵神社日誌
1854.12.23	嘉永7.11.4	蒲都市	三河湾	蒲都市内	津波	津波ニ而流シ其数家屋と不知不分	王念記	
1854.12.23	嘉永7.11.4	蒲都市	三河湾	形原・西浦	海辺に津波がきた	4日の地震では、建物の破損はあっても開れるほどのことばなかつたようだが、海辺には津波がきた。赤澤もたび たび起こり、形原、西浦の人々は心配で寝の中にもいられず野宿をした。	新収日本地震史料 続補選別巻(東京 大学地震研究所)	形原役所記録
1854.12.23	嘉永7.11.4	蒲都市	三河湾	形原役所	津波	大きな津波の被害といったものばなく	蒲都市史 本文編2 近代編	「形原役所記録」

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1854.12.23	嘉永7.11.4	蒲都市	三河湾	御蔵神社日記(形原)	津波	・此度津波ハ八丈ヘン事ニテ、ワキワキハ家々ケツシ、又津波ニテ家ヲ引出サル所モ有、当地ハマダマダサハリ少シ	形原震災記録	形原町「御蔵神社」日記
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊川市	三河湾	赤坂	津波の状況では高さは5mくらい	津波で7分通り流され、死人怪我人も多かった。赤坂は陸地であるので、津波が上ったとすれば、音羽川に沿って入ったものと考えられる。しかし音羽川上流約10kmの位置に現在あり、レベルもやや高いので、このような津波の波高は困難	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊川市	三河湾	赤坂	津波の高さ(5m)	津波の高さ(5m)	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊川市	三河湾	御馬村		大地震井清家怪我人等	御津町史 本文編	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊川市	三河湾	御油	津波の高さは4-5m	津波で過半流れ、また死人怪我人も多かった。音羽川上流約8kmの位置にあり、このような大波が押し上がったとは考えにくい	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	大日本地震史料
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊川市	三河湾	御油	津波の高さ(4-5m)	津波の高さ(4-5m)	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊川市	三河湾	御馬村	津波	大地震津波、清家怪我人等在、御油采御検査日ニテ御米野井ノ処、激波ノ為ニ五百餘計海面へ引出サル	御津町史 史料編 下巻	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	瀬美半島臺浜	波高も4mくらい	明応津波と安政津波において豊橋の被害が大きかったので波高も4mくらい	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	老津	波高3-4m	倒壊家屋40戸、山崩れのほか津波がきた。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	常光寺年代記
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	老津	波高は3-4m	倒壊家屋40戸、山崩れがあったほか津波がきた。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	常光寺年代記
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	老津	津波の高さ3-4m	津波の高さ3-4m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	草間	津波	津波によって草間村の海岸は決壊してしまっ。	校区のあゆみ、磯辺	草間区地誌略
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	高洲新田	波高3m余	堤防破壊して大被害があった。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	豊橋	津波の高さ3-4m	津波の高さ3-4m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	高洲新田	波高3m余	堤防破壊1丈被害。波高3m余。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	吉田	波高3-4mと推定	海辺では津波が入り込んで田畑90.1ha余に海水、砂入等の被害。流失家屋4軒、難破船、生死不明3名、怪我人1名	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	吉田	高潮	死者一四人、高洲による溺死者一人、行方不明者三人など悲惨な結果をもたらした。	とよはしの歴史	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	吉田(豊橋)	波の高さ3-4mと推定	城内住居向橋、家中侍屋敷、足軽家、社寺、町在藩家破壊流失した。大川通り、小川通りとも堤防は津波に崩壊し、平地は電氣荒地となった。海辺では津波が入り込んで田畑90.1ha余に海水、砂入等の被害を与えた。流失家屋4軒、難破船、生死不明3名、怪我人1名あった(豊橋市史)。波の高さ3-4mと推定される。吉田城(津波)の被害は、津波が侵入したところもあつた。新田各所では堤防が決壊して海水が湧き上がり、谷そらぐ津波化現象(だう)作物が全滅したところもあつた。新田各所では堤防が決壊して海水が湧き入り、谷そらぐ津波化現象(だう)作物が全滅したところもあつた。	とよはしの歴史	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	高須新田、吉川村川田	汐来る	朝五ツ半極大地震、吉田方四十七軒倒壊、外の家は半こぼり、吉田城半こぼり、吉田城半こぼり、高須新田、吉川村川田まで汐来る。吉川堤百二十間、中地堤は二十間ものならず	校区のあゆみ、吉田方	吉川村大森赤平太記
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	吉田方、吉田城	早汐来り、汐入り、汐来る	地震にて早汐来り、吉田方四十七軒倒壊、外の家は半こぼり、吉田城半こぼり、吉田城半こぼり、高須新田、吉川村川田まで汐来る。吉川堤百二十間、中地堤は二十間ものならず	郷土史料第三輯 吉田方の沿革 上巻	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	吉田方	汐浮く様になり	田畑の損害は東田面に甚く、西田面重し。地の底研けたものと見え、汐浮く様になり作毛立ぬ場所出来たり。吉田新田の外の新田凡百町歩程のもの堤溜りの箇所出来汐入る。高須新田には死人なし	郷土史料第三輯 吉田方の沿革 上巻	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	太平洋岸	赤沢	津波の高さ6-7m	津波の高さ6-7m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	太平洋岸	伊古部	波高は地形から6-7mと推定	瀧巻浜で、道具船3隻中1隻大破2隻流失。地引網4状、登網38、大袋4口、中袋2口、下袋2口その他船道具喪失し流失。居宅も高波で大破	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	太平洋岸	伊古部	津波の高さは地形から6-7mと推定	瀧巻浜において道具船3隻のうち1隻大破し、2隻流失した。地引網4状、登網38、大袋4口、中袋2口、下袋2口その他船道具喪失し流失した。居宅も高波で大破した。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	太平洋岸	伊古部	津波の高さ6-7m	津波の高さ6-7m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	太平洋岸	城下(豊南)	波高は地形から6-7mと推定	浜漁道具の残らず流失	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	太平洋岸	城下(豊橋)	波高は地形から6-7mと推定	浜の往来道筋では津波で浜漁道具喪失。波高は地形から6-7mと推定。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	太平洋岸	二川	津波の高さ6-7m	津波の高さ6-7m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	太平洋岸	二川	波高は地形から6-7mと推定	地震で5分通り潰れ、地震後津波で過半潰れ、死者多数	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	大日本地震史料
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	太平洋岸	二川	波の高さは地形から6-7m	地震で5分通り潰れた。地震後津波が来て過半潰れ、死者多数	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	大日本地震史料
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	太平洋岸	細江村	浜へ参り見申候所、東方より津浪	夫より直津浜へ参り見申候所、東方より津浪にて網船諸々にて流し、新居にては二十人斗死す。	瀧巻町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	細江村記録
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	その他	吉田	海嘯	大地震があつたのみならず、海嘯が起つたため、瀬海の被害は特に甚しいものがあつた。吉田の如きも、當時その被害は、頗る多かつた	國史上より翻たる豊橋地方	藩から幕府への届書
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	その他	吉田	高汐	一 畑高二十八百二十石餘 一 畑高二十八百六十六石餘 一 村敷四十四ヶ所 一 合五十六百八十七石餘 一 地震草、並高汐荒 一 早取田畑九、十町一反歩餘 五ヶ所高汐並砂入荒 一 中略一 一 流失家 四軒 一 中略一 一 溺死人 男十一人 一 難破船生死不知 男三人 一 中略一 一 難破船生死不知 四十八艘 一 難破流失並破船 九十二艘 一 難破流失並破船 九十二艘 一 破船、破損家、土蔵、物置	國史上より翻たる豊橋地方	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	その他	吉田領内(豊橋)	津波	先遣而申上候、伊豆守在所三河國吉田、並に遠江之内部分、去月四日大地震、津浪等にて、城内住居向、櫓、家中侍屋敷、足輕寮、寺社、町在、漬、半漬、破損、流失、其外田畑荒地、汐入、暴破損所等有之、往還並松倒木、溺死人、死人、溺死者、左之通 一 難破船生死不知 一 難破流失並破船 一 難破流失並破船 一 破船、破損家、土蔵、物置	國史上より翻たる豊橋地方	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	榎妻郡外浜通り	津波の高さ4m余	津波の高さ4m余あつた	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	榎妻半島裏浜	明応、慶長、宝永、安政の四大津波ではたいたい同じくらいの影響。波高は概ね3m位で、所により4m。	堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなどの被害があり、浸水も著しく、田畑等に被害を与え荒廃地となった所も多かった。新田など亡所となった記録が多い。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	宇津江	波高3-4m	津波で制札場破損し、東御本田2反6畝23歩浸水、浜田分2反7畝分、新田分3反6畝5歩浸水、地引網引構波冠	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	宇津江	波高3-4m	制札場破損し、東御本田2反6畝23歩浸水、浜田分2反7畝分、新田分3反6畝5歩浸水、地引網引構破冠	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	宇津江	津波の高さ3-4m	津波の高さ3-4m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波による被害内容	原書	原書2
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	江比間	津波 波高3-4m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	江比間	津波により浸水があった	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	江比間	高津浪 十一月四日大地震高津浪。 江比間旅館 川向、山崎堤等破壊二百八十四間。全壊三戸、半壊五戸。山より大石十三落下	泉村々史 (江比間村編月四 日大地震破壊書上 巻)(村松村回状附留 帳)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	江比間港	津浪 朝四ツ大地震二相成り大津浪来襲。地震、津波大被害二万軒を打逆レシ云々トアリ	泉村々史 江比間郡史	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	田原	津波の高さ3-4mと推定 高汐打入り。橋・堤等に損所あり。海岸が欠込み村々の漁船船道具等多数流失	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	青窓紀聞
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	田原	津波の高さは3-4m 高汐打入り。橋・堤等に損所あり。海岸が欠込み村々の漁船船道具多分に流失した	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	青窓紀聞
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	田原	津波の高さ3-4m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	波瀬	津波の高さ3-4m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	船倉	高汐 船倉江高汐来り	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	安政元年 御玄閣 遺帳
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	向山新田(田原)	高潮 向山新田も、この時襲来した高潮によって水門より切れ込み堤防決壊、常陸が砕け、美田も亦地同様になつてしまつた。	瀧美町民俗探訪	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	田原	地震の後半刻計過ぎツナミ三本打申候 海新田は、つなみにて堤切れ、翌年迄も海に破申候 すべて屋敷所は一尺五寸、或は二尺位の広さ割れ申候 浜辺は高き波地は割れ申候。村木川辺割れ申候 浜方はツナミ、地震の後半刻計過ぎツナミ三本打申候 此の新手網四帖・網船・諸道具共流失申候。片流不残の事に御座候、浜辺は、五間・八間・十間、二十間、或は 百間欠け申候	収新日本地震史料 第五巻五ノ一 庄屋日記 田原町 庄屋 彦坂弥八郎	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	馬伏村	大地震に付、妻り川堤大波大われ修置に候 大地震に付、妻り川堤大波大われ修置に候	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	諸向書留覽寫
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	江比間村	高汐満、追々浪 大地震後より高汐満、追々浪久御宮松木不残立枯に相成候	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	八王子様造立、弁 財子様造立、山ノ 神様造立、天王様 歴代留入御帳
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	田原	高潮が上がり、 大地震五ツ半時高汐	瀧美町の民族探訪	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	畑村	大地震五ツ半時高汐 大地震五ツ半時高汐、新田堤水門より切込常堰くだけ新田不残水入、明六ツ時余程に破申候	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	畑村文書
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	畑村	十一月四日、巳刻大地震並津浪 大地震並津浪 郡中大破大潰れ也、当村古新田新開切込み右に付別記あり。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	潮音寺
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	向山新田	大津波 大津波のために囲い堤が決壊し、総反別56町4反歩余の向山新田は、開築以前の元の姿の入江同然になってしまつたので、翌5日村役人5人の案内で畑村陣屋役人北村八郎治、原利平の両名が出發し、船を出して修め た。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	向山新田(島村)	大垣新田漂領(島村)、大地震の直後、高 潮(津波)が上がり	瀧美町の民族探訪	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	領内の伊川津村地 先の千拓地伊井新 田	津波 領内の伊川津村地先の千拓地伊井新田も囲い堤が津波によって破壊され、その修復のための普請が、安政二 年(1855)の七月までかかった。	瀧美町の民族探訪	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	古田	大津波打寄 大津波打寄、古田にて網船武殿、浜道具はん流失	収新日本地震史料 第五巻 別巻五ノ 一	五月雨新し

西暦	旧暦	市町村	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	瀧美半島葦浜	太平洋岸	安政津波はたいはいと同じ高さの6-8mであり、場所により10mにも達している。	明応、享永、安政の各津波では漁船の流失、破壊、漁網の破滅、死者・溺死者を出すなどかなりの被害がみられている。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	池尻	太平洋岸		家の内に魚あり、おぼへんに2斗づきのうす上がる。昔人野宿す。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	池尻	太平洋岸	6-10m		飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	村松	太平洋岸	高津浪	十一月四日大地震高津浪。村松被害 全壊5戸、大川橋大破、上様より米六俵を賜わる	(江比間村霜月四日大地震破損書上帳)(村松村回状附留帳)
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	遠州灘沿岸(太平洋岸)	太平洋岸	大津波	江戸時代も終わりに近づいた嘉永七年(1854)11月4日に起こった「東海道大地震」によって、遠州灘沿岸を襲った大津波は、瀧美半島沿岸にも大被害をもたらした。	瀧美町の民俗探訪
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	奥郡堀切	太平洋岸	津波	奥郡堀切凡百二十軒川流津波ニテ尤も八十八人横シ	老津村史
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	小塩津	太平洋岸	地形から波高6-8m	浜道具残らず流失、船7隻中3隻大破、4隻流失。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	小塩津	太平洋岸	瀧美浜で波高6-8m	浜道具残らず流失し、船7隻のうち3隻大破4隻流失した。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	小塩津	太平洋岸	津波の高さ6-8m	津波の高さ6-8m	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	赤羽根海岸	太平洋岸	瀧美浜で6-10m	津崩れ、津波による船、網の被害が甚大	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	西堀切村	太平洋岸	8-10m	大被害(死者8人、負傷者60人、流失家数113、流失棟数275)	田原市ホームページ(田原市の沿革～我がまちの歩み)
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	堀切	太平洋岸	波高6-7m	日出家多く流る	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	西堀切	太平洋岸	津波	安政元年の地震・津波被害(西堀切村)：総家数33、流失家数113、流失棟数215棟、半壊家数90、破損家数30、死者8、怪死90、田畑(田畑一田に土砂入、鶏卵もわからず)、その他被害(牛馬七匹死、地引道具・網・船共に皆流失、汐除堤・土居敷欠損、雑穀、藁粉などみな流失)	西堀切村から中山陣屋の志満津式石衛門・大田甚三郎・志満・津藤四郎宛に提出した文章
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	東堀切	太平洋岸	津波	安政元年の地震・津波被害(東堀切村)：総家数68、流失家数4(流失同様13)、流失棟数約40棟、田畑(田畑石砂入)、その他被害(地引網・船普流失、汐除堤、土居敷残らず欠損)	瀧美町史 歴史編 上巻
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	堀切(常光寺)	太平洋岸	大津浪	大地震一時間二大津浪存家者平常江小屋之住也高寺※(より)米満施又又米三合宛施	瀧美町史 歴史編 上巻
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	堀切、日出	太平洋岸	津波	津波の被害を受けた。西堀切村に死者8名、負傷者60名であった。津波来襲時には堀切村の者は城山(常光寺山)へ、日出村の者は西青山へ逃げ、家屋や船船や漁道具の流失により、不自由な暮らしをしたという。	瀧美半島―郷土理解のための32章―改訂版
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	日出、東堀切、小塩津	太平洋岸	津波	堀切村の者が常光寺山にのがれ、津波をさけたが、九十三家の母家の流失、その他を加えると全部で二百八十七棟の流失という被害 死者八人とあり、網船や漁道具など流失した 「事後皆々々食回棹しなくしをした 日出村の者は西青山へ、東堀切村、小塩津村の人たちは御林山にのがれた	瀧美町史 歴史編 上巻
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	若見村八幡宮、池尻	太平洋岸	大津浪、高浪	大津浪にて引脚入当池尻をふり、池尻下りひくみの家いへか上送余汐上り 内八田畑共二部一殿、池尻下りひくみの家いへか上送余汐上り 弁天社高浪にて流失	『前代未聞事』 神祇最上御神前家寶書記

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	池原村	500mくらい海水が引いてから津波が来て	池原川の支流の糠連川を溯り、付近の下り筋落(池原村)では床上浸水して被害を与え、前古畑まで浸水した。柳神社(高さ10m)が高波で流出した。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	表浜	三度津波が押し寄せ、ほうべの七分目程まで潮が上がった	表浜には三度津波が押し寄せ、ほうべの七分目程まで潮が上がったといふことである。…城外では、漁船の流矢十九艘、同破損三十二艘、漁流矢五十三帖、同破損八十四帖、浜辺の欠船七千八百八拾四艘等、等が報告されている。	瀧美町の民族探訪	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	表浜一帯	津波	安政地震(1854)では、瀧美半島一帯は震度6以上の激震に見舞われ、津波が表浜一帯を襲った。	田原町博物館 研究紀要第4号(藤城信幸)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	小堀津村大磯、和地村	大地震にて所々家屋打駈大地さけ、山は崩れ如何はせんと思ふ折節、四時半時共思ふ時節、不審存大津波打寄	小堀津村大磯、和地村よしほと号す磯等も白砂に相成、其沖は何程汐引く哉目印無之故相不分	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	田中家文書
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	西堀切村	津波	迅速な情報伝達等のおかげで津波により家屋の約半数(113軒)が流されながらも犠牲者がわずか8名にとどまった	静岡県建設部ホームページ(遠州灘海岸保全基本計画(平成15)静岡県、愛知県)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	西堀切村	地震も相済程無大津波	・地震も相済程無大津波に皆々村中常山に次登り ・当時所々流失之如、本町九拾参家、物敷町百人拾七流失致候如承正申由也、人死去候物九人、牛馬七ツ並近方浪道員、網除・袋・籠、樽等流出に附行衛知れず、其後皆々乞食同様に不便な暮し、津波之日より三日の間常光寺より牛馬にて皆食を飯下候、牛馬たすかり候。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	高瀬家文書
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	西堀切村	古来稀成大地震高津波	古来稀成大地震高津波にて当村分郷清水飯取部様御知行所は惣家数貳百三拾軒之内、流家百拾三軒とて棟数貳百七拾五棟余流失外家数九拾軒半潰、家形半り其場所相残外家数三拾軒地震にて破損仕、死亡八人、怪我人六拾人、死失牛馬七疋、其外魚漁地引道具、網船共一式皆流失、海刃切御遺、土居敷欠崩、竹木共不潰流失、田地一圓に土砂押入埋地等にて地境一圓相分不申。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	助郷免除願書
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	西堀切村	大地震一時間に大津波	大地震一時間に大津波、在家者平常立小慮立仕也、当寺より米湯蒸入、又米三合死施	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	常光寺年代記
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	西堀切村	津波	被害の大きかった西堀切村では、11月4日に堀切中村の伊八の嫁(伊平の妻、新助の妻、同村西の専兵治母、八之右衛門の父、母、妻の8人が溺死。翌5日に、忠右衛門の妻が死亡している。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	西堀切村	古来稀なる大地震・高津波	西堀切村は、明治十一年合併するまで、西堀切村と東堀切村に分かれていました。この文書は、東海道坂坂宿の助郷(人と馬を宿場へ出し、人や荷物を運ぶ役目をする)を幕府連中奉行から命令されました。この後村の村役人が、その役目から免除してほしいと、赤坂代官所(幕府直轄の代官所)へ願い出た書付です。この後に書かれている内容は、どうして助郷を免除してほしいかの理由を書いたものです。理由は安政の大地震・大津波で大被害を被り、乞食のような暮らしていることなどが書かれています。	瀧美町郷土資料館 下巻	安政二年乙卯(1855)乍恐書付を以奉願上候(助郷免除除願)
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	日出村	大地震津波上り	日出村では重左衛門が死亡した。「同日(4日)四ツ時ヨリ大地震津波上り、大堀川ニテ死ス」	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	備命時の過去帳
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	東堀切村	同村(西堀切村)之儀同様危難に逢候	家数六拾八軒之内流失之家数四軒、流向は家数拾参軒、棟数四拾棟大破損いたし、其外破損多、魚漁地引網船皆式流失、海刃切御遺、土居敷欠崩候に付難端之始末。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	助郷免除願書
1854.12.23・24	嘉永7.11.4・5	田原市	太平洋岸	東堀切村	大津波	魚漁、地引道具、網一式流失	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	助郷免除除願
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	領内、和地村及び表浜一帯	大津波	十一月四日は大磯にて、所々家屋打駈大騒動致す所に不審存大津波打寄家屋其他海辺は田原迄も押し流し、脚にかかる天災前代未聞。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	田中家文書
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	高松村沖	大地震にて所々家屋打駈大地さけ、山は崩れ如何はせんと思ふ折節、四時半時共思ふ時節、不審存大津波打寄	高松村沖に類の嶋と号す磯有之趣、此時迄は叫しのよう(に)承居候也、此嶋三つ迄相見へ候由、此嶋迄は凡二里程も沖之上し	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	田中家文書
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	片浜防村	大地震にて所々家屋打駈大地さけ、山は崩れ如何はせんと思ふ折節、四時半時共思ふ時節、不審存大津波打寄	片浜防村にも高ほううば打付、真浪引取候節は昔より見たり人もなまき沖の磯々皆々あらわれ、目の届くだけは汐一水も無之	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	田中家文書

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	船切村(旗本清水氏領)	此津浪	船切村(旗本清水氏領)にては家屋九拾貳軒相流れ申候よし、右の内五拾軒程は船々命助かりて、已家屋諸道具共流失候由。此時、死人八人と承る。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	田中家文書
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	日田村	前代未聞の大津波	日田村では、大瀬川で流麻重左衛門が溺れ、小久保治助や高藤三次郎等の家も、村の奥に移転したという。この前代未聞の大津波の被害を受けてから、船切村や日田村では、村の南側の浜辺に面して築かれた津波除けの堤防の補強に努めるようになった。	瀧美町の民族探訪	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	和地村にては川原にて	大地震にて所々家屋打駈大地さけ、山は崩れ如何はせんと思ふ折節、四つ半時共思ふ時節、不審存大津波打寄へ	和地村にては川原にて三軒流砕致し、和地村にては小船磯船五拾艘程流失。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	田中家文書
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	神戸村	大津波打寄	海面大いに轟き、一見すれば、南大崎より大山の如き大ツナミ、東の方より同ツナミ、其の前凡そ海面二十丁位潮干となり、然る所東西より斜に大ツナミ寄まり、又六、七合迄海となる、是をツナミと云ふ、此の時に当り人氏恐怖し、食物を荷い、土地高き所へ逃行	一新	神戸村庄屋日記(新木佐平太)
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	和地(川原)	大津波打寄	大津波打寄、和地村にては川原にて三軒流砕致し、和地村にては小船磯船五拾艘程流失。	一新	五月雨雨し
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	東三河全体	太平洋岸	瀧美	大津波	表浜(遠州灘沿岸)は大津波におそわれたが、倒壊家屋、山くずれがあり	高豊史	愛知県災害誌
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	東三河全体	太平洋岸	高豊(表浜一帯)	津波	大地震津波襲来	校区のあゆみ 高豊	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	東三河全体	太平洋岸	表浜	大津波	堤防等の4mもゆり落ちた所があり、表浜(遠州灘沿岸)は大津波におそわれたが、倒壊家屋、山くずれがあり、糸巻は7か月ばかりつづいた。	愛知県災害誌	愛知県災害誌
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	東三河全体	その他	三河地方	津波	三河湾、遠州灘の沿岸に津波が襲来し、被害をうけた。	高豊史	愛知県災害誌
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	東三河全体	その他	瀧美半島	津波	津波による被害が出た。	瀧美郡災害年表	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	東三河全体	その他	三河湾、遠州灘の沿岸	津波	三河湾、遠州灘の沿岸に津波が襲来し被害をうけた。	愛知県災害誌	御城書
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	蒲郡市	三河湾	拾石(塩津)	津波	津波で拾石村本郷の陣屋は跡形もなく流され	塩津村誌	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	蒲郡市	三河湾	竹谷(塩津)	津波	竹谷村地先の太田新田も堤防が決壊し、犬飼港の連続き堤防が流されたと伝えられている。	塩津村誌	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	蒲郡市	三河湾	拾石村(拾石陣屋(逸見陣屋))	大水害、津波	拾石陣屋(逸見陣屋)享保35年5月村五百石の旗本逸見家は、二百参石と持高の多い拾石村の本郷に陣屋を構えていた。陣屋は大小の延石を並べ石垣は花崗岩で雨丈であったというが、享保8年の大水害で崩壊し延石や花崗岩を壊して流されてしまった。以後修復されなかった。安政元年の東海大地震の津波で跡形もなく残っていた石も流されてしまったという。陣屋一角にあった稲荷神社は、その後陣屋跡に再建されている。	塩津村誌	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	蒲郡市	三河湾	西蒲村	津波の音とも山風の音ともつかない音	西蒲村の住民は小高く安全な場所に小屋を建てて暮らすことを記している。	蒲郡市史 本文編2 近代編	形原町「御蔵神社日記」、「形原役所記録」
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	豊川市	三河湾	赤坂	津波高さ5m	津波で分通り流され、死人煙我人も多かった。赤坂は陸地であるので、津波が上がったとすれば、音羽川に沿って入ったものと考えられる。しかし音羽川上流約10kmの位置に現在あり、レベルもやや高いので、このような津波の波高は困難であろう。	飯田政事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	豊川市	三河湾	赤坂・御油		被害は軽かった	愛知県災害誌	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	豊川市	三河湾	御油	津波の高さは4~5m	津波で過半流れ、また死人煙我人も多かった(以上大日本地震史料)。音羽川上流約8kmの位置にあり、このような大波が強いとは考えにくい。	飯田政事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	大日本地震史料
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	豊橋市	三河湾	吉田	海水と砂はいる	津波被害 九〇一ha(五か所、海水と砂はいる) 津船(今切)流失、破損 四八隻 漁船流失破損 九二隻	高豊史	(尾三遠地震小史による)(山本忠佐日記)
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	豊橋市	三河湾	吉田方	汐入る	津波の損害は新田面に狭く、西田面重し、地の底砕けたものと見え、汐浮く様になり作毛立ぬ場所出来たり。音竹新田の外新田八目町歩程のもの堤防の崩壊り。高須新田には死人なし	郷土史料第三輯 吉田方の沿革 上巻	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	豊橋市	三河湾	老津	津波	御蔵家屋四〇戸、山くずれ、津波があった	高豊史	常光寺年代記

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	豊橋市	三河湾	老津	津波	御嶽家屋40戸、山くずれ、津波があった。	愛知県災害誌	常光寺年代記
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	豊橋市	三河湾	老津	波高は3~4mと思われる。	御嶽家屋40戸、山崩れがあったほか津波が来た。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	常光寺年代記
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	豊橋市	三河湾	城下		侍屋敷、町家、へいの半壊破損が多く藩校時習館も半壊、豊川の大桥は破損したが、通行には支障がなかった。	愛知県災害誌	山本忠佐日記、大屋裕義日記、御城書
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	豊橋市	三河湾	富士見新田(牟呂)		富士見新田は、大風と高潮により堤防が決壊し、一時荒廃していたが、弘化四年(1847)に修築に成功した。しかし、嘉永7年(1854)の大地震で再び破損し、その後幾度かの修築計画が出たが成功せず、明治にいたった。	牟呂史	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	豊橋市	太平洋岸	伊古部	津浪・高浪	津浪によって漁船と漁具が流失した。夜に入り村方波手通り高浪にて欠込み居宅損じた。	伊古部郷土誌	下永長傳屋日記
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	豊橋市	太平洋岸	高塚	高潮	この安政元年の本州震の余震は翌年一杯迄続き、そのたひごとに高潮が起り、そのため漁船や網を流すという被害。高塚村ではこの地震により村が極度に疲弊し、庄屋の小野田吉次郎は代官に助船免除を嘆願している。	高聖史	愛知県災害誌
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	豊橋市	太平洋岸	伊古部	高浪	下永長傳屋日記(伊古部村大字大羽山(西伊古部海軍のことか)は、凡そ八〇メートル海中へ押し出され、一つの島となってしまった。そして船、網ともに高浪にて壊れず引かれてしまった)	高聖史	西七根御厨神社絵馬/下永長傳屋日記
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	豊橋市	太平洋岸	伊古部	津波の高さは地形から6~7mと推定される。	津波が来た。津波の被害は津波で浜通道具の品が壊れず流失した。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	大日本地震史料
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	豊橋市	太平洋岸	城下(豊南)	波高は地形から6~7mと推定される。	城下(豊南):浜の往来道筋では津波で浜通道具の品が壊れず流失した。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	豊橋市	太平洋岸	二川町の海岸地帯	波の高さは地形から6~7mと推定される。	二川:地震後津波が来て過半壊れ死人数が多かった(大日本地震史料)。津波は二川町の海岸地帯にきたと思われ。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	豊橋市	その他	吉田藩		吉田藩の被害:死者25人(うち水死11人)、行方不明3人(難破船)、田畑被害90.1ha(5か所)、海水と砂はいる)、堤防破損55,000m、溜池破損52か所、榎門等破損10か所、榎破損7か所、橋破損48隻、漁船流失破損92隻	愛知県災害誌 (尾三遠地震小史による)山本忠佐日記 乍恐以書付奉願上候	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	三河湾	伊井新田	高津波	嘉永七年大地震、高津波にて圍堤崩れ	東村々史	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	三河湾	福江、保葉	床上3尺、約1mまで津波	福江では、床上3尺、約1mまで津波が来ており、保葉のあたりまで潮水が入ってきている	国際自動車コンプレックス研究会 NEWSLETTER vol.38	瀧美郡泉福寺史料
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	三河湾	伊井新田	高津波	高津波のために囲い堰は壊れず次げ崩れ、亡所同様になってしまった	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	三河湾	伊川津地帯の伊井新田、中山新田	高津波	高津波により堰が破られ、汐入りとなってしたが、中山新田についての災害記録は見当たらない。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	三河湾	泉(江比間)		江比間では堤等の破損約500m、家屋全壊6戸、半壊6戸、山から大石3こ落下。	愛知県災害誌	江比間村霜月4日 大地震破損書上帳
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	三河湾	泉(村松)	波高3~4m	村松では家屋全壊5戸、堤防大破。	愛知県災害誌	江比間村霜月4日 大地震破損書上帳
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	三河湾	裏浜	津波	裏浜(瀧美湾沿岸)にも津波があった。	愛知県災害誌	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	三河湾	裏浜		裏浜も小々田田二打入、乍去死入ハナン。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	西園寺過去帳
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	三河湾	江比間		川向の堤防約100間余が割れ、山崎から大湯まで89間大割れた。津波により浸水があった。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	三河湾	田原	津波の高さは3~4mになったと思われる。	田原城中の住居壊れず大破、または倒壊落ち、所々の門扉石垣土蔵等折れ、家中屋敷敷在町(とも)一同大破、漬家が壊れた。つえ、高汐打入り、橋・堤等に損あり、海舟が欠込み村々の漁業船道具等多分に流失した(青窓記附)。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	青窓記聞
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	三河湾	田原(城、城下の町および領内)	大きな震・浪書	田原、城下の町および領内で、大きな震・浪書がでた。毎家毎も多かつたが、火事がなかつたので浪書は割合と少なかつた。破損した所があつた。道路はところどころ地割れを生じて泥を吹きだした。	愛知県災害誌	三宅家日記、阿知和内家日記

西暦	日暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	三河湾	畑村	地震津波	地震津波による清浄戸宅1軒、唐宅2軒、灰部屋1ヶ所、土蔵半潰2ヶ所、寺半潰1ヶ所、寺願1ヶ所、店半潰1軒、長屋潰2ヶ所、長屋半潰2ヶ所。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	三河湾	畑村		畑村の川岸通りの家は水に浸かり、水道橋、稲藪橋も破損した。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	三河湾	向山新田	内海へも来襲した大津波	常陸は駆け、面水門の間の堤防が見え25間切れ、新開田の堤も30間程欠損した。その外の堤も5~8尺ゆり込み、通通りには7~8寸の割れ目ができ、新田一面土所同様になってしまった。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	赤羽根中村		赤羽根中村 1. 船 三隻 大破 1. 船 貳艇 流し 1. 同 壹艇 損し 1. 大目綱拾八枚 流失 1. 同 三拾二枚 流失 1. 同 九拾八枚 大破 1. 脇綱半帖 流失 1. 同 五拾四帖 大破 1. 袋 壹ツ 流失 1. 同 九ツ 大破	「表浜ハケケ村漁船流失損入出し調帳」 (岡田与次右衛門)	愛知大学藤田名誉教授作成資料
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	赤羽根西村		赤羽根西村 1. 大目綱七拾貳枚 流失 1. 脇綱五帖 大破 1. 同 貳帖 大破 1. 船 三艇 流失 1. 袋 壹ツ 流失	「表浜ハケケ村漁船流失損入出し調帳」 (岡田与次右衛門)	愛知大学藤田名誉教授作成資料
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	赤羽根東村		赤羽根東村 1. 船 八隻 大破 1. 同 壹艇 流失 1. 同 壹艇 損し 1. 脇綱三帖 流失 1. 同拾帖 大破 1. 大目綱七拾四枚 流失 1. 袋 壹ツ 流失 1. 同十 大破	「表浜ハケケ村漁船流失損入出し調帳」 (岡田与次右衛門)	愛知大学藤田名誉教授作成資料
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	瀧美	津波	表浜(瀧美湾沿岸)にも津波があった	高歴史	愛知県史書誌
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	大草村		大草村 1. 船 壹隻 流失 1. 袋 五ツ半 流失 1. 酒桶二拾七 流失 1. 脇綱三帖 流失 1. 碇 壹頭 流失 1. 櫓 三挺 流失	「表浜ハケケ村漁船流失損入出し調帳」 (岡田与次右衛門)	愛知大学藤田名誉教授作成資料
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	川尻、堀切	津波	表浜の川尻、堀切付近では、ほとんどの家屋が流失	国際自動車コンプレックス研究会 NEWSLETTER vol.38	瀧美郡泉福寺史料
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	久美原村		久美原村 1. 袋 四ツ半 流失 1. 網 壹帖半 流失 1. 脇綱十四 流失 1. 櫓 九挺 流失 1. わだ三拾花 流失 1. ろくろ三十 流失 1. 網 六拾壹 流失	「表浜ハケケ村漁船流失損入出し調帳」 (岡田与次右衛門)	愛知大学藤田名誉教授作成資料
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	越戸村		越戸村 1. 船 壹隻 流失 1. 揚網舟 壹隻 流失 1. 瀬取舟 一隻 流失 1. 網六帖 流失 1. ろくろ網四拾枚 流失 1. 袋三ツ 流失 1. 櫓九挺 流失 1. 碇壹頭 流失 1. 揚網三帖分續道具共流失	「表浜ハケケ村漁船流失損入出し調帳」 (岡田与次右衛門)	愛知大学藤田名誉教授作成資料

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	高松村		高松村 1. 船八隻 流失 1. 船三拾五挺 流失 1. 船網拾貳挺 流失 1. 酒網百六拾壹枚 流失 1. 袋拾壹 流失 1. 小操船道具不入 流失	「表浜八ヶヶ村漁船流失損入出し調帳」 (岡田与次右衛門)	愛知大学藤田名譽 教授作成資料
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	田原	浪害	城、城下の町および領内で、大きな震・浪害がでた	高豊史	三宅家日記・阿知 和内田家日記
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	若見村		若見村 1. 舟拾壹隻 大損シ 1. 小操船二隻 大損シ 1. 船拾壹挺 流失 1. 同 八挺 打 1. 大目綱九枚 流失 1. 同七拾貳枚 切之 1. 袋三ツ 切之 1. 同四ツ 切之 1. 小目綱拾貳枚 共切之	「表浜八ヶヶ村漁船流失損入出し調帳」 (岡田与次右衛門)	愛知大学藤田名譽 教授作成資料
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	和地村		和地村 1. 船三艘 流失 1. 同九艘 大損シ 1. 船拾拾挺 流失 1. 袋六ツ 流失 1. 同七ツ 大損シ 1. 網壹帖分 流失 1. 同拾壹帖分 大損 1. 踏運具 拾貳帖分 流失 1. 船六挺 損シ メ 右者土田村一色※(笠)網拾拾貳帖分流失損し候	「表浜八ヶヶ村漁船流失損入出し調帳」 (岡田与次右衛門)	愛知大学藤田名譽 教授作成資料
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	同村池尻	霜月四日、四ツ時大地震しん、同日五ツ時半時 波うつ。	入所々にてしす。池尻にては家の内に着る。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	瀧美家文書
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	土田村より一色迄		網敷12帖分が流失しその内訳は、船3艘流失し、9艘大損し、袋流失6ツ、大損じ7ツ、網1帖分大損し、1帖分大損し、踏運具12帖分損し	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	表浜八ヶヶ村漁船流 失損入出し帳
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	西堀切村		嘉永7年より浜欠け引寄敷米1石6斗6升6合7勺と明記	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	中山村陣屋借役 (清水氏知行所)太 田勘三郎が西堀切 村へ与えた安政2 年の「印藏御物成 小物普濟目録」
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	西堀切村	津波襲来	西堀切村は最も大きな被害を受けた。総家数223の内、流出家数113、流出家数275、半壊家数90、破損家数30、死者8人、けが人60、被災者数15人にも及んだ。津波襲来の際、堀切村のほとんどの村人が城山に逃げ、山の中に小屋掛けをして不便な仮住まいをいられた。夕除堤や土居敷が残らず欠崩し、田畑も一円に土砂が流入し、境界もわからなくなった。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城 信幸)	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	西堀切村		総家数233、流失家数113、流失家数275、半壊家数90、破損家数30、死者8、怪我60、田畑(田畑一円)に土砂入 壊家もわからず)、その他の被害(牛馬七疋死、地引運具・網・船共に皆流失、夕除堤、土居敷欠崩、雑穀・家財 などみな流失)	安政の大地震・高津波による堀切村の 被害	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	西堀切村	大地震と大津波	西堀切村は遭難状態になってしまった。安政元年、西堀切村の総家数は二百三十三軒であったが、津波で流れ た家百十三軒(棟数二七五)、地震津波での半壊が九十軒、家の形に残っているが大被害を受けた家が三十軒 であった。	瀧美町のむかし探訪	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	日出村	地震津波	地震津波の節は、日出村にては西嶺山に寄り	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	高瀬家文書
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	東堀切村		総家数68、流失家数44、流失同様13)、流失家数約40棟、田畑(田畑石砂入、その他の被害(地引網・船皆流 失、夕除堤、土居敷残らず欠崩)	安政の大地震・高津波による堀切村の 被害	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	東堀切村、小塩津村	大地震と大津波	東堀切村は、家数は、西の約四分の一の六十八軒であった。そのうち流失四疋、流れた家六疋、半壊七疋、その ほか十三軒が大被害をこぼらした。津波の襲来の際、東堀切村や小塩津村の人々は御嶽山へ、避難したとい う。	瀧美町のむかし探訪	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1854.12.23・24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	堀切村	津波	津波による被害の最大であった西堀切村では、家数233戸のうち全壊94戸、半壊19戸、浸水19戸の132戸が被災し、東堀切村でも家数8戸のうち、流失民宅4戸、流失同様の家13戸で、棟数凡そ40棟が大破壊と届け出ている。堀切村にも浜辺に近い畑地を「元應殿」と呼ぶ家があるが、いずれもこの時の被災の激しかったことを物語っている。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	
1854.12.23・24	嘉永7.11.4. 5	田原市	太平洋岸	表兵		表兵八幡清平二編船等不残流、森二堀切村ナドハ甚々多死多数アリ。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	西園寺過去帳
1854.12.23・24	嘉永7.11.4. 5	田原市	その他	田原藩		漁船の流失19艘、破損32艘、破損流失53帖、同破損84帖	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	田原藩の届け
1854.12.23・24	嘉永7.11.4. 5	東三河以外	太平洋岸	尾総半島から四国南部まで	大津波	大津波も発生して海岸部は尾総半島から四国南部にわたって被害があった。	校区のあゆみ 磯辺	
1854.12.24	嘉永7.11.5	東三河全体	三河湾	三河湾沿岸	津波	三河湾沿岸にも津波の被害。	蒲州市史 本文編2 近代編	愛知県災害誌
1854.12.24	嘉永7.11.5	東三河全体	その他	三河湾・遠州灘沿岸	津波	三河湾・遠州灘沿岸に打ち寄せた津波による被害もあり、災害復旧のため、拳母、田原、吉田、刈谷その他の諸領主は、千両から数千両を幕府から借用している。	蒲州市史 本文編2 近代編	愛知県災害誌
1854.12.24	嘉永7.11.5	蒲州市	三河湾	形原・西浦	波は面白い懸やかになり	形原村は津波に備えて立ち退く用意はしたものの、波は面白い懸やかになり、けが人もなかった。西浦村は、橋田沖にある松島を波が打ち越し、5人の家と海水が入った。	新収日本地震史料 続補遺別巻(東京 大学地震研究所)	形原役所記録
1854.12.24	嘉永7.11.5	田原市	太平洋岸	赤羽根	津波	津波	「赤羽根地域史に残る災害と異変の記録」より	
1854.12.24	嘉永7.11.5	田原市	太平洋岸	赤羽根	津波は当所に至りては軽し	七ツ時過ぎ又々地震ゆりども格別大まきには無之少々あり候七ツ時雷の如く鳴物聞へ申の方より方三鳴渡り何れ入にて鳴り候様に聞へ候。此時大破家へ大津波打上げ人数多く死す中略＝今日の津波は当所に至りては軽し	研究輯録 三遠の民俗と歴史	鈴木三十郎文書 (天地の間診事変 事書留)、及び任 屋文書
1854.12.24	嘉永7.11.5	田原市	太平洋岸	堀切	大浪	地震の翌日(5日)の夕方、強い余震のうち、西の方より雷鳴の如き重音が轟いた。その翌日(6日)の日記に「昨夕と重ノ如キ声ノ紀州沖ニ大浪三ツ起リ、三ツハ伊勢路へ指ス、一ツハ伊勢路へ指ス、一ツハ田原より五里程有之堀切ト申ス如シ打寄ノ候田原飛脚之者田原ニテ承リ候」と記するよう三波の巨大津波が各地を襲撃する猛烈な地震であった。	逐城解説 諸語・吉田城と地田照政 ～ついでに田原！吉田城本丸天守(代 用)致三重種の概観全貌とその展開～	「西村次右衛門日記 豊橋市史々々料 叢書 二・三
1854.12.24	嘉永7.11.5	東三河以外	太平洋岸	舞阪、新居	津波の高さは2丈余り(約6メートル)	津波の高さは2丈余り(約6メートル)で、舞阪で45軒、新居の本町で3軒流失した	校区のあゆみ、細谷	

<1855年(安政2年)の地震、津波>

1855	安政2	蒲州市	三河湾	大塚	高潮	高潮による被害を受け、籠の破損五七七、杭木の流失二二八本の積害	蒲州市史 本文編2 近世編	
1855	安政2	田原市	三河湾	伊井新田	高汐	安政二年二十一日が、安政六年に十七日に同じ安政二年高汐にて固堤が切れたという天災の影響も	泉村々史	西年家教人別増減 差引帳 伊井新田家教人別 増減差引帳
1855	安政2	田原市	三河湾	浦波瀬	高汐	粟浜通り高汐ニテ網も皆流、粟浜通り上郷を破損多、浦波瀬へ無レ之候	田原町史 中巻	柴田佐兵衛(波瀬 庄屋)の『波瀬村庄 屋覚書』
1855	安政2.2.1	田原市	太平洋岸	赤羽根	海辺汐八増し	七ツ時前迄(より)七ツ時半時迄三度地しん 海辺汐八増し候	赤羽根の古文書 近世史料編	天地の間診事変事 書留万物用心記
1855	安政2.3	田原市	太平洋岸	赤羽根	海辺汐八増し	間々二地じんあり 海汐八増し候	赤羽根の古文書 近世史料編	天地の間診事変事 書留万物用心記
1855	安政2.6.16	田原市	太平洋岸	赤羽根	海汐まし	ハツ時頃二地しん少々ゆり候 度々海汐まし候	赤羽根の古文書 近世史料編	天地の間診事変事 書留万物用心記

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
< 1855年11月7日(安政2年9月28日)の地震、津波 >								
1855.11.7	安政2.9.28	東三河全体	太平洋岸	渥美	津波	軽微な被害	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1855.11.7	安政2.9.28	東三河全体	太平洋岸	渥美表浜	波高1		飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1855.11.7	安政2.9.28	田原市	三河湾	田原(浦・波瀬)	津波	M?。津波。田原様屋敷、下屋敷、中屋敷が所大破、怪我人なし。町方大破損、清家も所々にあり。布蔵壊れ、表浜通り高潮にて縮流れる。裏浜上細まで破損多し。浦・波瀬は破壊なし。野住古屋敷10日許りした。安政東海地震の余震か。	明応地震・天正地震・宝永地震・安政地震の震害と震度分布	
1855.11.7	安政2.9.28	田原市	太平洋岸	赤羽根	津波	津波	「赤羽根地域史」に残る災害と異変の記録より	
1855.11.7	安政2.9.28	田原市	太平洋岸	赤羽根	津波	先々此度は大地しんでもゆり候間みしかく候故か津波もナク繁蔵ノ破損去年よりは大に少し、乍併下浜辺津波の気味あり、余程甚夕爆り津波もナク繁蔵ノ破損去年よりは大に少し	研究輯録 三選の民俗と歴史	繪本三十郎文書(天地の間珍事委事書留)、及び任屋文書
1855.11.7	安政2.9.28	田原市	太平洋岸	谷ノ口	ガケ下へ八尺位も打付ケ汐登り	ガケ下へ八尺位も打付ケ候、汐登り候様子綱文ケは輪流し候え共、遠く流れ行不致	研究輯録 三選の民俗と歴史	繪本三十郎文書(天地の間珍事委事書留)、及び任屋文書
1855.11.7	安政2.9.28	田原市	太平洋岸	大草、高松神井浜	津波	大草村にて流し候網、高松神井浜流流れ候位の事、流失は無之旨に承り候	研究輯録 三選の民俗と歴史	繪本三十郎文書(天地の間珍事委事書留)、及び任屋文書
1855.11.7	安政2.9.28	田原市	太平洋岸	渥美半島表浜	津波	1855年の安政2年の津波でも魚網の流失などの被害がみられているので波高は3mくらいあつたと思われ。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1855.11.7	安政2.9.28	田原市	太平洋岸	大草	津波、高汐	津波は無之候え共、大草村より下りは高汐にて浜道具多く流れ候	研究輯録 三選の民俗と歴史	宮田三郎兵衛文書(年代諸事附留)
1891.10.28	明治24.10.28	蒲郡市	三河湾	三谷		十月二十八日大地震(蒲郡) (蒲郡誌) ・津波被害のため納税還付内訳 ※金額と名前の記載で、被害状況は不明(海嘯汐入免相下長簿 旧三谷町行政文書)	蒲郡町誌、海嘯汐入免相下長簿 旧三谷町行政文書	
< 1944年12月7日(昭和19年12月7日)の東南海地震、津波 >								
1944.12.7	昭和19.12.7	東三河全体	三河湾	伊勢湾	津浪	津浪ニヨル災害ハ熊野灘沿岸二眼ヲし、遠州灘沿岸、伊勢湾内、駿河湾内等ニモ到達シタケレドモ災害ラ生ズルニハ至ラナカッタ	伊古郡郷土誌	昭和五十年(一九四七)愛知県防災会議が復刻した文書
1944.12.7	昭和19.12.7	東三河全体	三河湾	三河湾内	1m位の津波	被害はなかつた。	愛知県災害誌	
1944.12.7	昭和19.12.7	東三河全体	三河湾	三河湾内	1m位の津波	被害はなかつた。	渥美郡災害年表	
1944.12.7	昭和19.12.7	東三河全体	太平洋岸	渥美表浜	波の高さ1-1.5m		飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1944.12.7	昭和19.12.7	東三河全体	太平洋岸	遠州灘	津浪	津浪ニヨル災害ハ熊野灘沿岸二眼ヲし、遠州灘沿岸、伊勢湾内、駿河湾内等ニモ到達シタケレドモ災害ラ生ズルニハ至ラナカッタ	伊古郡郷土誌	昭和五十年(一九四七)愛知県防災会議が復刻した文書
1944.12.7	昭和19.12.7	東三河全体	太平洋岸	高豊(太平洋沿岸)	波浪	太平洋沿岸予ハ地震直後海水ハ引イテ行年約三分位ノ後、カエシテキタ。然シ波浪ハ強クナカッタ。	伊古郡郷土誌	愛知県渥美半島災害状況調査
1944.12.7	昭和19.12.7	東三河全体	その他	伊豆半島から紀伊半島まで	津波	1944(昭和19)年12月7日の東南海地震によって発生した津波は、伊豆半島から紀伊半島までを襲った。		
1944.12.7	昭和19.12.7	蒲郡市	三河湾	形原	波の高さ0.5m、津波の走時(分)40-50		飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1944.12.7	昭和19.12.7	蒲都市	三河湾	西浦	小津波、地震後40-50分で最大全振幅38cmくらい	引潮で始まった	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1944.12.7	昭和19.12.7	蒲都市	三河湾	西浦	波の高さ0.5m(※検潮欄による)、津波の走時(分)80	ほとんど被害はなかった。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1944.12.7	昭和19.12.7	蒲都市	三河湾	三谷町から蒲郡町にかけて		至飯郡・通海の地割れやとうろうの倒れた程度で、被害は比較的軽微	愛知県災害誌	
1944.12.7	昭和19.12.7	豊川市	三河湾	宝飯郡		津波は発生しなかった。	愛知県災害誌	
1944.12.7	昭和19.12.7	豊橋市	三河湾	磯辺	津波		校区のあゆみ 磯辺	
1944.12.7	昭和19.12.7	豊橋市	三河湾	豊川川口の前芝村		家屋全壊6戸、半壊40戸があった	愛知県災害誌	
1944.12.7	昭和19.12.7	豊橋市	三河湾	豊橋市・二川町・老津村		家屋被害は少なかつたようである。(工場倒壊あり)	愛知県災害誌	
1944.12.7	昭和19.12.7	豊橋市	太平洋岸	高豊	ツナミ	海岸二テハ引潮ハーノ瀬笠露出シタルモ、ツナミモ来ラズ被害ナシ	校区のあゆみ 高豊	
1944.12.7	昭和19.12.7	豊橋市	太平洋岸	高豊	ツナミ	海岸二テハ引潮ハーノ瀬笠露出シタルモ、ツナミモ来ラズ被害ナシ。	高豊史	高豊村の被害報告書
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市	三河湾	渥美半島臺浜	1m足らずの波高	昭和19年の東南海津波では1m足らずの波高であり、被害はなかった。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市	三河湾	田原	波の高さ0.5m		飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市	三河湾	田原		田地や埋立地では泥水を噴出し、汐川や堀川の岸では堤防が所々沈下した。また吉胡地内の凸出の低湿田地約90.9×0.25kmは海水面に沈下した。海水が海岸低地に浸入した。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市	三河湾	福江	地震後30分位にして引潮に始まる津波を観測、波高約50cm	なお、潮が今まで定着ぐらしかかくなかったのに、地震後数分までくるようになったところがある。江比間付近の岩礁は大潮の高潮時でも波が来なかったのに、潮位が上昇し海水に浸る	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市	三河湾	福江	波の高さ0.5m(※検潮欄による)、津波の走時(分)30		飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市	太平洋岸	赤羽根	波の高さ1.5m		飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市	太平洋岸	赤羽根	潮の高さは数十cmから1m程度	地震後正確でないが10分位して、潮が一町ほど引き、その後15分位で水位が上昇し2度潮り返された。潮の高さは数十cmから1m程度のところがあったという。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市	太平洋岸	渥美半島表浜	昭和の東南海津波の波高は宝永や安政津波の約4分の1くらい(※宝永・安政両津波はたいたい同じ高さの6-8m)	昭和の東南海津波の波高は宝永や安政津波の約4分の1くらいとなり、低く被害も生じていない。	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市	太平洋岸	伊良湖	地震後潮が引き、少して上昇してきた。高さは1.5m内外	地震後潮が引き、少して上昇してきた	飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市	太平洋岸	伊良湖	波の高さ1.5m、津波の走時(分)15		飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市	太平洋岸	赤羽根地区		赤羽根地区では、家屋が全壊などの被害は、西栗桑の壺瀬古と市場瀬古に集中した。津波による被害はなかったが、地震により名所砂煙を上げて海崖が崩落した。	田原市博物館 研究紀要第4号(藤城信幸)	
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市	太平洋岸	表浜一帯	津波	昭和東南海地震(1944)では、渥美半島一帯は震度6以上の激震に見舞われ、津波が表浜一帯を襲った。	田原市博物館 研究紀要第4号(藤城信幸)	
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市	太平洋岸	惣切		東南海地震では、過去に何度も津波の被害にあっている惣切村の人達は、乳母車やリヤカーに布団などを積み、東地区の人は惣切国民学校方面に、西地区の人は惣切国民学校方面に、西地区の人は惣切の北に広がるタノ田では、液状化現象が見られたという。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
<1945年1月13日(昭和20年1月13日)の三河地震、津波>								
1945.1.13	昭和20.1.13	東三河全体	三河湾	瀧美半島臺浜	波高が1mくらい最大	昭和20年の三河地震の場合には波高が1mくらい最大でほとんど津波被害はなかった。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	東三河全体	三河湾	西浦	最大全振幅は50cm		飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	東三河全体	三河湾	西浦	津波は押し波で、最大振幅(cm)25(第4波)、津波周期(分)10-20、平均(分)15、地震後海水引く。8時40分まで続く。		飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	東三河全体	三河湾	三河湾	津波	津波が発生	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	東三河全体	三河湾	瀧美湾周辺		地震とともに西浦は1m隆起し、千間は47cm沈下した。	瀧美郡災害年表	
1945.1.13	昭和20.1.13	東三河全体	三河湾	吉田町以西の幡豆郡下	津波は押し波で、最大全振幅は約60cm程度	地震とともに西浦は1m隆起し、千間(一色町、矢作古川口右岸)は47cm沈下(吉田町以西の幡豆郡下では一帯に20cm~80cm沈下)。この程度の津波であったから被害はほとんどなかった。	愛知県災害誌	
1945.1.13	昭和20.1.13	東三河全体	三河湾	宝飯郡塩津村	津波は押し波で、最大全振幅は約60cm程度	宝飯郡塩津村では、塩田の周囲の高さ1.5mの堤防の一部が東南海地震の際に1m沈下しており、この地震で、そこが幅10mほど決裂して海水が浸入した。	愛知県災害誌	
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲郡市	三河湾	形原		形原でも水の裏化がみられたところとみられないところがあった	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲郡市	三河湾	形原港		形原の南側と西側では一帯に隆起しており、「形原震災記録」によると旧形原港では一・五mの隆起で海が陸地になり、船は陸の上に着すわり、陸になった港では子どもたちがボールを投げて遊ぶようになったと記録されている。	蒲郡市史 本文編4 現代編	形原震災記録
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲郡市	三河湾	蒲郡町	1mほどの津波	岸壁の上まで水が来た。この津波によれば殆ど被害がなかった。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲郡市	三河湾	蒲郡町	1mほどの津波	岸壁では1mほどの津波が襲来し、岸壁の上まで水が来たという。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲郡市	三河湾	塩津村	津波の高さは60cm	塩田の周囲の高さ1.5mの堤防の一部が東南海地震で1m沈下したが、そこさらに三河湾で幅10mほど決裂したため海水が浸入した	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲郡市	三河湾	塩津村	津波の高さは約60cm程度		飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲郡市	三河湾	西浦		約1m海面が下がる	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲郡市	三河湾	西浦	最大全振幅50cm		飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲郡市	三河湾	形原漁港		形原漁港では1.5mの隆起によって護岸堤防に割れ目を生じている。	蒲郡市誌	陸奥時報14号、昭和20年1月13日 三河地震について 井上手風
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲郡市	三河湾	蒲郡市形原地区		蒲郡市形原地区では土曜が隆起して地面のくいちがいがあちこちで生じた。三河湾沿岸では波うちが激しくなっており、津波の高さが1m以上上がったところもあった。形原温泉が副産物として誕生したのは有名な話。	中日新聞	中日新聞 昭和45年1月13日
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲郡市	三河湾	形原、西浦		三河湾の隆起量については、形原町荒木、金平付近で新層の西側が1.5m、形原漁港付近1.2mであり、西浦町知柄の海岸に据えてある俵測標から明確に認められることできる大きさは1.3mであるとしている。	蒲郡市誌	地震研究要報24号 (東大) 茶澤新層 津屋弘彦
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲郡市	三河湾	音羽川の南有形原港		音羽川の南有形原港は1.5mの隆起で港が陸になり、船は陸の上に据わっており、陸になった港では子ども達がボールを投げて遊ぶようになった。	形原震災記録	
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲郡市	三河湾	形原漁港		港のあたりはいろいろな変化ではなくて、まわり一帯の土地が折れもせず曲りもせず全体が高くなったのだと思ふ。・・・とにかく港が一へんに水が引いてしまったように、岸につないでいた船はみんな船底が土の上に乗り上げて、まるで陸へ上がった河童のように動かすこともできなくなりました。・・・十三号台風でも、昭和三十四年の伊勢湾台風でも、風の被害は別として、高潮の被害は全く港付近にはなかった。	わすれしの記	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲都市	三河湾	蒲都市府相の海岸 辺		土地の隆起を海岸線に沿ってみると形原町音羽川右岸から南にかけて大体1.5m、西浦町東から南及び西へまわって1m、嶋豆郡須崎、真幡豆で0.7mで隆起は終わり、西幡豆では変化がなく矢作石川のあたり千間では0.7mの沈下になっている形原町音羽の東から江川下市辻新田方面0.7mの沈下を見る。それは蒲都市府相の海岸辺に及んでいる。	形原震災記録	
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲都市	三河湾	宝飯郡塩津村		塩田の周囲の高さ1.5mの堤防の一部が東南海地震の際に1m沈下しており、この地震で、そこが幅10mほど決壊して海水が浸入した。	愛知県災害誌	
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲都市	三河湾	蒲都市	津波の被害や津波のあったと言ふ記録がない。	人や建物に被害をおよぼすような津波は起きていないようです。	三河地震Q&A	
1945.1.13	昭和20.1.13	豊橋市	三河湾	大崎	最大全振幅は52cm		飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	豊橋市	三河湾	大崎	津波走時(分)34、最大振幅(cm)26(第1波)、津波周期(分)10-30、平均(分)20、初動相波。11時まで続く。		飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	豊橋市	三河湾	豊橋	津波	津波がみられた	飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	豊橋市	三河湾	豊橋	最大全振幅は33cm		飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	豊橋市	三河湾	豊橋	最大全振幅は33cm		飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1945.1.13	昭和20.1.13	豊橋市	三河湾	船町(豊橋)	津波走時(分)42、最大振幅(cm)17(第5波)、津波周期(分)15-28、平均(分)20、初動相波。8時40分まで続く。		飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
<1946年12月21日(昭和21年12月21日)の地震、津波>								
1946.12.21	昭和21.12.21	東三河全体	三河湾	渥美湾	津波は小さく	被害はなかった。	渥美郡災害年表	
1946.12.21	昭和21.12.21	東三河全体	三河湾	伊勢湾・渥美湾	津波は小さく	被害は全くなかった。	愛知県災害誌	
1946.12.21	昭和21.12.21	蒲都市	三河湾	形原漁港	二メートルを超す潮位	形原漁港でも二メートルを超す潮位を観測	伊古部郷土誌	
1946.12.21	昭和21.12.21	蒲都市	三河湾	形原	地震後約80分の8時40分ごろ押し波ではじまり、最大振幅15cmその周期15分		愛知県災害誌	
1946.12.21	昭和21.12.21	豊橋市	三河湾	前芝	05時45分ごろ第1波が押し波ではじまっている	大地震が襲い、各地区に人的、物的に多大な被害をもたらした。当地区は比較的に軽微な被害であった	校区のあゆみ 前芝	
1946.12.21	昭和21.12.21	豊橋市	三河湾	前芝	約一メートル五十七センチの潮位		愛知県災害誌	
1946.12.21	昭和21.12.21	田原市	三河湾	福江港	約一メートル五十七センチの潮位	福江港では、二十一日の午後四時ごろ、約一メートル五十七センチの潮位を観測	伊古部郷土誌	
1946.12.21	昭和21.12.21	田原市	三河湾	福江	地震後約75分の05時35分ごろ押し波ではじまり最大全振幅15cmその周期25分		愛知県災害誌	
1944.12.7、 1945.1.13、 1946.12.21	昭和19.12.7、昭和20.1.13、昭和21.12.21	東三河全体				愛知県下の海岸防波は、昭和十九年(1944)十二月十七日の東南海地震、二十一年一月十三日の三河地震、二十一年十二月二十一日の南海地震によって、三十cm~六十cmの沈下や隆起等が生じていた。	牟呂史	
<1960年5月23日・24日(昭和35年5月23日・24日)の予り地震、津波>								
1960.5.23	昭和35.5.23	東三河全体	その他	渥美	津波1m内外		飯田及事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1960.5.23	昭和35.5.23	蒲都市	三河湾	形原	波高1.12m		飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1960.5.23	昭和35.5.23	豊橋市	三河湾	前芝	津波2.1m		飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1960.5.23	昭和35.5.23	豊橋市	三河湾	豊橋	波高1.04m		飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1960.5.23	昭和35.5.23	田原市	三河湾	瀬美半島東浜		1960年のチリ津波では、衣浦や矢作川下流域で9mくらいになった所もあり、若干浸水した所もあつたが、日本近海の近地津波のような激しさはなく、それほど被害はなかつた。		
1960.5.23・24	昭和35.5.23・24	東三河全体	三河湾	三河湾	津波	三河湾にも数日後、数回にわたり津波が押し寄せている	御津町史 本文編	
1960.5.23・24	昭和35.5.23・24	東三河全体	太平洋岸	瀬美半島	二から五メートル	千九百六十年五月三十日南米チリの地震によりまして、瀬美半島にやはり押し寄せたらしいのですが、その時二から五メートル来たではないかと書かれています。	ふるさと細谷	豊橋市歴史・豊橋市史、三河国分書、三河
1960.5.24	昭和35.5.24	東三河全体	三河湾	瀬美湾	津波の波高は低く。	津波は伊勢湾・瀬美湾にも侵入してきたが、波高は低く、そのうえ最高波が到達した時刻が干潮時にあつたために潮位はあまり上がらず、瀬美湾沿岸の一部に若干の家屋浸水をきた程度の被害です。	瀬美郡災害年表	
1960.5.24	昭和35.5.24	東三河全体	三河湾	瀬美湾沿岸	津波の波高はいちじるしく低く	津波は伊勢湾・瀬美湾にも侵入してきたが、波高はいちじるしく低くなり、そのうえ最高波が到達した時刻が干潮時であつたために、潮位はあまりあがりませんが、瀬美湾沿岸の一部に若干の家屋浸水をきた程度の被害です。	愛知県災害誌	
1960.5.24	昭和35.5.24	蒲都市	三河湾	蒲郡	潮位が約一メートル	蒲郡など潮位が約一メートル	中部日本新聞(1960.5.24)(夕刊)	
1960.5.24	昭和35.5.24	蒲都市	三河湾	形原	津波来襲回数7回、津波の周期75~100分、津波の振幅23~86cm		愛知県災害誌	
1960.5.24	昭和35.5.24	豊橋市	三河湾	前芝	津波来襲回数7回、津波の周期45~90分、津波の振幅20~76cm		愛知県災害誌	
1960.5.24	昭和35.5.24	田原市	三河湾	小中山	津波来襲回数11回、津波の周期30~85分、津波の振幅25~95cm		愛知県災害誌	
1960.5.24	昭和35.5.24	田原市	三河湾	福江	津波来襲回数7回、津波の周期35~75分、津波の振幅20~90cm		愛知県災害誌	
1960.5.24	昭和35.5.24	田原市	太平洋岸	瀬美半島東浜	潮位二メートル高い	瀬美半島東浜 24日朝、瀬美半島東浜沿岸でも津波の影響で激しい潮の満ち引きが起こり、漁民たちをあわてさせた。瀬美町伊良湖沖漁業組合連合会事務所の図によると、潮の干満の差は三倍の幅をもち、潮位も二メートルほど高まり、それが約30分ごとに満ち引きし、5時間目までいっそうに大きくなった。このため、いままでも海水に隠れていたイノの岩がすつかり背を現わし逃げ遅れた黒ダイやワガ、アイナメ、エビ、などのイノ魚やワカメがどつさり網ですくえ、思わぬ拾いものに沿岸漁民は大喜び、しかし、一方では高潮に浜の揚げ舟を波にさらわれあわてて全船の船を丘にあげるなど大騒ぎだった。	中部日本新聞(1960.5.25)	
1960.5.24	昭和35.5.24	田原市	太平洋岸(太平洋岸)	瀬美半島先端(太平洋岸)	潮位はいつよりも二メートルほど高く	瀬美半島 先端の太平洋岸は、二十四日午前六時ごろから約三十分ごとに潮の満ちひきがつづいた。地五伊良湖漁協組調べの潮位はいつよりも二メートルほど高く、満ちひきの差も三倍ほど大きく潮が穏まておている。	中部日本新聞(1960.5.24)(夕刊)	
1960.5.24	昭和35.5.24	田原市	太平洋岸	伊良湖	津波の到達時刻、第1波(4時12分)、第2波(5時00分)、最高波高、第3波(6時10分)、第4波(7時25分)、第5波(8時00分)		飯田及事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1960.5.24	昭和35.5.24	田原市	太平洋岸	伊良湖港	潮位が五十センチ	伊良湖港では五十センチほど高かつた。	中部日本新聞(1960.5.24)(夕刊)	
<2010年2月28日(平成22年2月28日)のチリ地震、津波>								
2010.2.28	平成22.2.28	東三河全体	その他		津波	チリを震源とする地震が発生し、本県沿岸においても2月28日に愛知県外海津波警報及び伊勢湾・三河湾津波警報が発せられ、8市町村で避難勧告が出されました。しかし、その避難率は0.2%程度と低額であり、遠地津波に対する住民避難行動をいかにして促すべきかという課題が残りました。	災害の記録(平成22年愛知県)	
2010.2.28	平成22.2.28	蒲都市	三河湾	蒲郡		蒲郡でも竹島水族館、生命の海科学館、市民会館、市博物館が臨時休館した。	東愛知新聞(2010.3.1)	
2010.2.28	平成22.2.28	蒲都市	三河湾	蒲郡		避難勧告は、蒲都市2723世帯。しかし、避難したのは、蒲都市で12世帯15人とどまっています。	東日新聞(2010.3.1)	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書
2010.2.28	平成22.2.28	蒲郡市	三河湾	蒲郡市		愛知県蒲郡市の竹島水産館などが午後後に相次いで休館。三河湾や鳥羽湾などの観光フェリーも欠航した。	中日新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	蒲郡市	三河湾	三谷・形原	午後4時の潮位が約10センチ上昇	【蒲郡市】緊急警報が津波警報に切り替わるため、午前9時42分に市役所内に市災害対策本部を設けた。午前11時40分、市内20小中学校体育館に避難所を開設。海河津町の2723世帯、8198人に対し避難指示を出したが、実際に避難したのは12世帯、19人にすぎなかった。市施設のうち情報ネットワークセンターや市民会館、博物館などが閉鎖され、形原町の漁港水産館や三谷町の海岸通りが通行止めとなった。市消防本部調査で、三谷町と形原町の海岸で午後4時の潮位が約10センチ上昇したほかは、とくに異常はなかった。	東日新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	豊川市	三河湾	御津海岸		【豊川市】午前9時45分に災害対策本部を設け、同11時30分に伊奈町・平井町・御津町で防災無線を使って津波到達見込み時刻などを伝えて注意を呼びかけた。午後1時から市と消防本部、消防団が海岸海岸と豊川放水路河口部で車両巡視と広報活動。両地区合わせて19か所の防備隊を詰め、GPMをかけた。臨海理め立て地の立地企業には、休業中の6社に注意を促した。	東日新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	豊橋市	三河湾	豊橋(三河湾)		【豊橋市】同市では、三河湾で1メートルの津波が予想されるし、同日午後1時30分に「津波警報」を三河湾沿岸と河口部に発令した。同市内の三河湾沿岸部の老津から前芝一帯の防潮堤に設置されている陸門(りくごう)、立切(たちきり)などの扉48所を閉じた。	東日新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	豊橋市	三河湾	三河湾豊橋地区	三河湾豊橋地区で10センチ(同4時51分)、第2波は三河湾岸では確認されなかった。		東愛知新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	豊橋市	太平洋岸	伊古部海岸(豊浜)		今回の「騒動」で、豊橋伊古部海岸ではサーファー対策が浮き彫りになった。午前11時すぎ、数人がサーフィンを楽しんでいた。そこに津波襲来に関する「緊急情報」が流れたものの、ほとんど聞き取れず、サーファーらに情報は伝わらなかった。	東愛知新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	豊橋市	太平洋岸	豊橋(太平洋岸)		【豊橋市】同日は、東浜の海岸には多くのサーファーらが、サーフィンをしていて、津波警報発令と同時に同市消防団、消防本部などの車両延べ47台と人員294人が巡回して避難を呼びかけた。	東日新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	田原市	三河湾	田原		田原市では昨年10月の台風18号を教訓に「三河湾津波」が、夕川を津波が遡り上する心配があるとして、市総合体育館や市文化会館は午後2時から休館に入った。	東愛知新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	田原市	三河湾	田原(三河湾)		三河湾にも最大1メートルの津波が予想されるとあって、伊勢湾フェリー、名鉄フェリーが午前11時45分から欠航した。	東日新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	田原市	三河湾	田原市	東海地方では津波の高さは豊知県田原市の70cmが最高	人的被害は出なかった。三河湾や鳥羽湾などの観光フェリーも欠航した。	中日新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	田原市	太平洋岸	赤羽根	同日14分に30センチの第1波が到達、最大は同4時37分に70センチを観測。潮位は50センチ以上下げ、…その後はじわじわと潮位が上昇しただけ	【田原市】10時に災害対策本部を設け、続いて11時45分に赤羽根、堀切、伊良湖の6校区と夕川沿岸地域に避難勧告を発令した。津波到達の午後2時30分ごろの赤羽根漁港では、名古屋地方気象台の発表によるものと、同3時14分に30センチの第1波が到達、最大は同4時37分に70センチを観測された。津波警報が発令されたのを受け同漁港では朝から対応に追われた。約17隻の漁船がロープなどで船はれ、沖合に避難したのはいくつか、漁業組合側は「前日が明七(しげ)で漁業できなくなったためこのよう措置をとった」と話した。午後5時ごろ、満潮が近づく同漁港には、多くの関係者が潮位の上下を見守った。津波が近づく、潮位は50センチ以上下げ、関係者を不安がらせた。だが、その後はじわじわと潮位が上昇しただけで混乱はなかった。	東日新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	田原市	太平洋岸	赤羽根	観測された津波は赤羽根で70センチ	チリで発生した地震の影響で、東海地方の太平洋岸にも二十八日午後津波が到達した。名古屋地方気象台によると、観測された津波は、豊知県田原市赤羽根で70センチ。	中日新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	田原市	太平洋岸	赤羽根(太平洋岸)	午後3時40分に40センチ、同4時37分には最大波70センチを観測	豊光市で起きたマグニチュード8.6の大地震から24時間後の28日午後3時過ぎから東三河の暮浜でも津波を観測。田原市赤羽根では、午後3時40分に40センチ、同4時37分には最大波70センチを観測。漁業関係者や海岸付近に長に緊縮が走った。	東日新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	田原市	太平洋岸	赤羽根漁港	満潮に向かっているのに潮位が急激に下がった	豊知県田原市の赤羽根漁港では、七十代の男性が「満潮に向かっているのに潮位が急激に下がった。漁者三十年以上いて初めてと驚いた。」	中日新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	田原市	太平洋岸	田原市赤羽根	第1波は太平洋に面した田原市赤羽根で40センチ(午後3時40分)、第2波は田原市赤羽根で70センチ(午後4時37分)を記録		東愛知新聞(2010.3.1)
2010.2.28	平成22.2.28	田原市	その他	田原(全域)		避難勧告は、田原市1万921世帯。しかし、避難したのは田原市で3世帯3人にとどまった。	東日新聞(2010.3.1)
<2011年3月11日(平成23年3月31日)の東北地方太平洋沖地震、津波>							
2011.3.11	平成23.3.11	東三河全体	三河湾	三河湾	三河湾では同6時17分に40センチを観測された		東日新聞(2011.3.12)
2011.3.11	平成23.3.11	東三河全体	その他	その他		11日午後6時現在、東三河では死者、けが人は出ていない。田原市と蒲郡市は津波警報発生直後にそれぞれ市長を本部裏とする災害対策本部を、豊橋市では消防長を本部裏とする災害情報連絡室を配置した。	東愛知新聞(2011.3.12)

西暦	旧暦	市町村	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
2011.3.11	平成23.3.11	蒲郡市	蒲郡市内	三河湾	蒲郡市は津波情報に要された直後、災害対策本部を設置。午後3時50分には市内の防潮壁を閉鎖、閉塞入れず公民館など海岸部7カ所の公営施設を避難所に指定し、防災無線で避難勧告を放送した。対象世帯は2723戸、対象人数は8198人。午後6時半現在、6世帯13人が避難した。みや児童館の避難者は、緊張した表情でTVに釘付け。「きょうの地震、蒲郡でもすごい規模だった。東海地震が起きたらと思うと、不安でならない」と身を震わせた。	東愛知新聞(2011.3.12)	
2011.3.11	平成23.3.11	蒲郡市	蒲郡市内	太平洋岸	蒲郡市では、同4時、大塚公民館、塩津公民館、西浦公民館など7カ所の避難所を開設。同4時5分、市内海岸付近の2723世帯8198人に避難勧告を行った。同4時半現在、6人が避難した。	東愛知新聞(2011.3.12)	
2011.3.11	平成23.3.11	蒲郡市	蒲郡市内	その他	蒲郡市では、2723世帯に避難勧告を出した。	東日新聞(2011.3.12)	
2011.3.11	平成23.3.11	豊橋市	三河湾	三河湾豊橋地区	三河湾豊橋地区では同5時42分に高さ40センチの津波を観測した。	東愛知新聞(2011.3.12)	
2011.3.11	平成23.3.11	豊橋市	養浜	太平洋岸	豊橋市八軒通の豊橋警察署。午後2時46分の発生直後、すぐにTVのスイッチが入られ、地震情報を確認。豊橋市の海岸部に津波注意報(その後、警報に変更)が出されたのを確認すると、土本副署長は即座に「養浜にハトカーを出せ」と指示。ハトカーはすぐに海岸部へ向かった。	東愛知新聞(2011.3.12)	
2011.3.11	平成23.3.11	豊橋市	豊橋	その他	豊橋市では同3時32分、災害情報連絡室を開設。海岸近くの人々に対し、避難勧告を発令した。津波に備えて市立鞆車4台と消防団の5つの方面隊が太平洋側と三河湾を広報と巡視に回った。午後5時には災害対策会議を開き、施設の被害情報の共有、今後の連絡体制などを確認。	東日新聞(2011.3.12)	
2011.3.11	平成23.3.11	田原市	赤羽根漁港	太平洋岸	東北地方太平洋沖地震が発生し、東三河地方でも田原市で最大1.6メートルの津波に襲われ、田原市の赤羽根漁港で漁船2隻が転覆する被害が出た。一本釣り漁船(約33トン)、小型刺網漁船(約0.5トン)が転覆。一本釣りの漁船は押し寄せた津波が岸壁にぶつかり、引く漁によって崩壊させられた。小型漁船は機橋下部の溝に引っかかっていたことから波が引いた瞬間に転覆したとみられる。	東愛知新聞(2011.3.19)	
2011.3.11	平成23.3.11	田原市	赤羽根漁港	太平洋岸	愛知県田原市では午後6時33分に1.6メートル	読売新聞(2011.3.12)	名古屋気象台
2011.3.11	平成23.3.11	田原市	豊江、神戸、伊良湖	太平洋岸	田原市は、避難勧告こそ出さなかったが、午後3時45分から順次、市内の市民館全20カ所を避難所に指定した。同4時半現在、泉、福江、神戸、伊良湖の4カ所の市民館に約10人が自主避難した。	東愛知新聞(2011.3.12)	
2011.3.11	平成23.3.11	田原市	赤羽根漁港	太平洋岸	津波の第一波は午後5時前に東三河沖岸に到達し、田原市では午後4時04分、太平洋に面した赤羽根漁港で高さ1.1メートルの津波を観測した。同5時32分、同漁港でさらに大きな高さ1.6メートルの津波を観測した。	東愛知新聞(2011.3.12)	
2011.3.11	平成23.3.11	田原市	田原市内	太平洋岸	田原市は避難勧告は出さなかったものの、市民の心情を考えた市内のすべての市民館20カ所を自主避難所として開設した。うち4カ所の市民館に計14人が避難した。午後6時すぎまで避難を続けた人もいた。	東愛知新聞(2011.3.12)	
2011.3.11	平成23.3.11	田原市	赤羽根漁港	太平洋岸	津波の威力は予想以上に高く、午後4時半すぎ第一波で水位が1メートルほど上昇すると、今度は急激に引き出し、同5時過ぎには水位は2メートル半も下がりが、漁港一帯の海底が露呈するほど。	東愛知新聞(2011.3.12)	
2011.3.11	平成23.3.11	田原市	赤羽根漁港	太平洋岸	津波の第二波が湾内へ、水位はあつた間、関係者は停泊中のシラス漁船は大きく傾いた。続いて、津波の第三波が湾内へ、水位はあつた間、関係者は停泊中のシラス漁船は大きく傾いた。タラップだが、機橋側が2メートルほど落ち込んだ。愛知外海漁協の吉武正康組合長は「これほどの水位変化は初めて。蒲郡の12日午前8時過ぎまでは気が抜けない」と警戒感を強調していた。	東愛知新聞(2011.3.12)	
2011.3.11	平成23.3.11	田原市	赤羽根漁港	太平洋岸	津波が田原市で高さをふるった。被害にあったのは同赤羽根町の赤羽根漁港。11日夜から12日未明にかけて漁船2隻が津波で転覆させられた。関係者は12日、1日ばかりで2隻を引き揚げた。作業が始まったのは午前8時、2隻目の作業が終わったのは午後4時。ときに機橋と軌いながらも全員が力を合わせた。「津波の力は引いた速い、もう一度とこんな津波に來て欲しい。岸壁には傾いた、傾きも並んだ。2隻は結局、機橋に。長年、生活を支えてくれた船。船主たちは神妙な顔で別れを告げた。	東愛知新聞(2011.3.13)	
2011.3.11	平成23.3.11	田原市	赤羽根漁港	太平洋岸	1.6メートルの津波を観測した愛知県田原市の赤羽根漁港では漁船2隻が転覆、12日は愛知外海漁協組合員が引き揚げ作業を進められた。	東愛知新聞(2011.3.13)	
2011.3.11	平成23.3.11	田原市	赤羽根漁港	太平洋岸	最初の転覆は11日午後8時ごろ、一本釣り漁船(約9トン)が押し寄せた津波が岸壁にぶつかり、激しい勢いで引く漁船によって機橋させられた。第2の転覆は12日午後8時、漁港を見回り、甚だ関係者が見つけた。被害にあったのは小型刺網漁船(約0.5トン)。転覆の原因はわかっていないが、船首が機橋下部の溝に引っかかっていたことから、津波が激しい勢いで引いた瞬間、海内の水位が機橋の下がった結果とみられる。	東愛知新聞(2011.3.13)	
2011.3.11	平成23.3.11	田原市	赤羽根漁港	太平洋岸	同船とも海水に浸かっていたせいで電気系統がためになった。関係者は「昨年2月のチリ地震では70センチの津波に襲われたものの、被害はなかった。今回は1メートル以上の津波が9回(1.6メートルと1.2メートル)も襲った。あらためて津波の怖ろしさを知った」と口をそろえた。同漁港を管理する愛知外海漁協の吉武正康組合長は「決して港湾施設や緊要法に不備があつて起きた転覆事故ではない。津波は本当に怖ろしい」とちひるを噛みしめた。	東愛知新聞(2011.3.13)	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書
2011.3.11	平成23.3.11	田原市	太平洋岸	赤羽根漁港	赤羽根漁港では午後5時32分に1.6メートルが観測された		東日新聞(2011.3.12)
2011.3.11	平成23.3.11	田原市	その他	神戸・伊良湖・福江・泉・清田		田原市は、各校区市民館2カ所にて避難所を開設。神戸、伊良湖、福江、泉、清田の5校区で計14人が自主避難した。	東日新聞(2011.3.12)
不明	不明	豊橋市	三河湾	神吉新田	津波・台風・高潮	地震・津波・台風・高潮などによるたび重なる崖防決壊・海水浸入に悩まされながらその都度記録しを繰り返した。	豊橋市史 第二巻

参考資料1-2 津波による影響(移転・史跡・言い伝え等)

①津波による神社の流出・移転								
827.8.8	天長4.7.13	田原市	太平洋岸	小塩津(日吉神社)	大地震が起こって越津の海岸は大陥没	荒波の寄せ来る春海濱には入江もなく、遊戯する船がないと書かれていますが、その昔小塩津が磯崎と呼ばれていた頃には、磯岩が沖合にはるが満潮時に潮を入江となり、波も静かに風兒もよく、伊勢へ渡る舟にとつて津はれる港だったそうです。戸敷も三日、よい津街であつたと書かれます。大正二年神皇正統記のこの地方を伊勢幸の御りこの海岸の眺が大愛お氣に召したとも伝えられ、その時の御言葉により日吉神社が勧進された村の名も越津と改めたと伝えられています。	瀧美町の伝説	小塩津日吉神社の由緒より
1492以前	明応元以前	豊川市	三河湾	伊奈(小坂井)	津波	往志、前寺村に東漸寺といふ寺があつたが、(隆寺と)より本願の延命地蔵尊一休が小坂に祀られていた。ところが伊奈城主本多正時が堂宇を建て、庵堂から東遷してこの伊奈の地に来た字國慶東漸師を開山とし、山を萬年寺を東漸と名づけた。	東漸寺看板	
1492以前	明応元以前	豊川市	内陸	東漸寺(小坂井町)	津波	東漸寺 知多郡蒲川に乾坤院享福和尚は、伊奈城主本多正時に入迎されて、城中に一庵の法語を説いた。それより先、前寺村に東漸寺があつたが、隆地小堂に本尊のみが祀られていた。ところが津波のために伊奈の地に漂着したので、村人が祀っていた地蔵尊を本尊として、本多宗次が堂宇を建てて本多宗次代の子孫の寺として伊奈を寄付し享福師を開基として、万年山東漸寺としたのが、明応元年(1492)の事であった。	小坂井町誌	
1498.9.20	明応7.8.25	蒲郡市	三河湾	塩津	高さ4mと推定	白山神社流される	飯田政事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1498.9.20	明応7.8.25	豊橋市	三河湾	牟呂吉田村	津波	素瀧嶋神社は流失したので、現在の地(豊橋駅の西南2km)に移転	飯田政事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1498.9.20	明応7.8.25	豊橋市	三河湾	牟呂吉田村	豊川の川瀬変わり		飯田政事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1498.9.20	明応7.8.25	豊橋市	三河湾	牟呂吉田	津波の高さ3-4mと推定		飯田政事 1985 東海地方地震・津波 災害誌(飯田政事教授論文選集)	
1449	明応8	蒲郡市	三河湾	竹谷・今御堂(白山神社)	津波	津波で社殿は流滅 北方の山の現所に遷し祀った	塩津村誌	
1539	天文8	豊橋市	内陸	大村	大津波	大村天神の創立 下脚意大の津波、天文八年八月の大津波の際、隣接の瓜野町満光寺も流失、其の時本尊如来像が流されて八名郡賀茂照山に漂着したと云う伝説がある。現代から見ればたゞの伝説とは思えないが、災害は数百年の間には一度は絶対に絶する大惨事を伴ないやってくるものだと痛感される。	大村八所神社と松原用水	
1539	天文8	豊橋市	三河湾	瓜郷	大津波	満光寺の記録によると、天明六年九月、三遠記録書可南斎への届書に 瑞雲寺、自徳寺、松吹軒、善良軒、高信軒、法願寺の六ヶ寺を併せて とあるが、他に文獻がなく、これ等六ヶ寺の創立、所在地共不明で、恐らく大永五年満光寺創立当時の塔頭で、 天文八年の大津浪に流出して、その後再興に至らず、只名称だけ残っていたものと思われる。	豊橋寺院誌	
1539	天文8	豊橋市	三河湾	瓜郷町字高道(満光寺) 八名郡加茂郷照山	大津波	大津波に堂宇一切流失し 残骸は東北一里余を隔てた八名郡加茂郷の照山に漂着	豊橋寺院誌	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1539	天文8	豊橋市	三河湾	下五井(日吉神社)	大津波	大津波により社殿が流されたため、同一〇年(一五四一)に再興されたと伝えられる。	豊橋市史 第一巻	
1539	天文8	豊橋市	三河湾	豊橋(満光寺)	大津波	満光寺は天文年間(大津波)で堂宇が流されたため、記録が残っていないもの、副司は某鐘からも大永年間(1520年代)に遡るものと思われる。	東愛知新聞	豊橋市史第一巻(昭和48年)
1539	天文8	豊橋市	三河湾	横須賀町字横須賀(歡臺寺)	洪水	天文八年の洪水後流産していたのを豊橋和尚が復興	豊橋寺院誌	
1539	天文8	豊橋市	内陸	大村	津波	大村天神の移転 天文八年の津波に、大村天神の社殿が流されてから十年の歳月が流れ、天文廿一年に再興された。	大村八所神社と松原用水	
1540	天文9	豊橋市	三河湾	吉田方(菰口町)	大津波	菰口神明社の経緯 ・創設: 天文元年(1532年)4月16日 頼國時代、永文9年(1540年)大津波で石巻町辺りまで流される。以後107年間神社の棟札なく推移し寛永より20年ごとの御霊宮の記録がある。寛永17年(1640年)御霊殿一手(一棟)建設 野戸村 江戸前期。	豊橋市民からの情報提供	
1539-40	天文8-9	豊橋市	三河湾	豊橋市横須賀町、瓜郷町、大村町	大海嘯	馬車登道神社の参道入り口に石版を埋め込んだ同神社の由緒簿が建てられて、そこにはこう記されていた。「(前略)天文九年大津波があった。神主藤田二郎甲安運轉の途程死(以下略)。天文九年は1540年、大海嘯(かいよいよ)とは大きな海嘯のこと。『嘯』は吹えるの意味。当時津波をそう呼んでいた。教えてくれた男性によると、地元ではこのときの大津波で神社建物の一部は上流に運ばれ、約10キロ先の「貫茂の照山」まで流されたという。 ここで疑問が湧く。愛大名豊後守の藤田佳久さんに聞いた話では、横須賀町の進徳社も同じ頃の年代に津波被害にあって建物の一部が「貫茂の照山」まで流された。なぜ、約10キロ離れた神社の建物は「貫茂の照山」が、ずらりと面白く見つけた。同市瓜郷町の満光寺に関する資料だ。同寺の由緒によると、天文八年(1539)にこの地方を襲った大津波が堂宇すべてを押し流し、その残骸は「貫茂の照山」に漂着したと伝えられている。 ・そのほか、同市大村町の八所神社の由来書によると、同神社も天文八年の大津波で建物が流失している。 ・整理すると、天文八年および九年に大津波があり、4つの神社の建物をすべてを流出させ、うち3つは「貫茂の照山」まで流れ着いた。当時、この地方を大規模地震が襲ったという記録はなく、神社の由緒にも地震をうかがわせる記述はない。ここで疑問が湧く。果たして大地震以外で、これほどの津波が生じるだろうか。何より、同じ場所に流れ着いたというのは怪しい。 同社とも天文9年(1540)の大洪水によって書類などが流失し、勧請の経緯などが不明	東日新聞(2011.11.2)	
1540	天文9	豊橋市	三河湾	津田(中の森神明社、礼の辻神明社)	大洪水	津田(中の森神明社、礼の辻神明社)	ふるさと津田	
1540	天文9	豊橋市	三河湾	前芝	大津波(大轟風雨)、高潮、洪水	大津波(大轟風雨)が襲い遠隣の村も大被害を被った。高潮、洪水のために前芝神明社や津田校区の進徳神社の社殿が流失した	校区のあゆみ 前芝	
1540	天文9	豊橋市	三河湾	川崎町(中の森神明社)	大洪水	天文9年(1540)の大洪水により書類が流失したために勧請の年月日などが不詳	ふるさと津田	
1540	天文9	豊橋市	三河湾	神明社(前芝)	海嘯	神明社創立 仁和元年(八八五)と言われる。天文九年(一五四〇)海嘯のために社殿流失して記録をなくしたので、はっきりしたことは分らない。現在棟札は、万治二年(一六五九)五月二十二日のものが最も古い。	前芝村誌	
1540	天文9	豊橋市	三河湾	津田	海嘯(津波)	この地方に伝わる天文9年の海嘯(遠来の海岸や三角状の河口などで満潮時に逆流する海水が、狭い河口の狭帯によって崖状の激流となる現象・津波を伴ったという大地震、あそこでもどこも被害があった。と書いて伝えないから文献上で一向見当たらない。まず進徳神明社(豊橋市・豊川河口)では、このとき御神体が流れて豊茂の照山に着いたのを迎え入れて村地をあらため、今の地へお祭りしたという。それら同じように照山へ流れ着いたのは下五井町の日吉神社、横須賀町進徳(すさのお)神社、川崎町中ノ森の神明社、馬克孫町の神明社。等では瓜郷町の満光寺本尊だったという。	東愛知新聞(2003.12.4)	
1540	天文9	豊橋市	三河湾	津田(日吉神社)	大洪水	天文9年(1540)大洪水で潰滅した村を再興するに先立って山王権弱を勧請したのでが始まりとされている。	ふるさと津田	
1540	天文9	豊橋市	三河湾	横須賀(進徳神社)	洪水	天文9年(1540)の洪水により社殿が流失し、記録が軍失	ふるさと津田	
1540	天文9	豊橋市	太平洋岸	瓜郷(満光寺)、八名郡、吉祥寺山	大洪水	8月11日の暴風雨による高潮は、豊川河口に大きな被害をもたらした。瓜郷の満光寺の堂宇が、八名郡の吉祥山麓にまで流されたとの記録が残されている。	ふるさと津田	
1540	天文年間	豊川市	内陸	平井八幡社(小坂井町)	大洪水	平井八幡社には、最初は社供神がお祀りであったが、天文年間の初期(1532頃)の大洪水によって社殿を流失してしまった(貫茂の照山の麓に流れ着いたと伝えられている)。しかし、社供神の御神体は重く、流失をまぬがれたので、天文21年(1552)の新築に当たって寛足大明神の分身を勧請し、社供神と併せ祀ったのが、この棟札に記されたのだろう。	小坂井町誌	
1543	天文12	豊橋市	三河湾	下五井日吉神社	大津波	下五井日吉神社 山口伝記によれば、1543年ごろ5人の尾張浪人が下五井を再開発しお高も建てたとしています。大津波のため古い記録はないのでよく分かりませんが、残っている棟札によれば、1641年に再建したと書いてあります。	『津田』	山口伝記

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1544	天文13	豊橋市	三河湾	津田進藤神社(津田)	大津波	津田進藤神社 大津波で資料が流され、いつ建てられたのかはっきりしないけれども、1544年に戸田孫四郎(徳光の父宗光)によって再建されました。	『津田』	
1592-1596	文禄年間	豊橋市	太平洋岸	東細谷(八柱神社)	海嘯	今の海岸に顕著されていた所文禄時代数度の海嘯によって海岸の民家の移転と共に神社をも現在の地に運営し奉る。	校区のあゆみ 細谷	
1615	元和元	豊橋市	太平洋岸	城下町字休場(大円寺)	高潮	当寺の所在地は前述の如く初めは現在地南の方十数町の地点(今は海中)にあったが、後幾度か海嘯に遭い、特に延宝八年、天和元年の高潮に沿岸が穴穿ちたため、元禄十年北方八町の味川谷と称する地に寺域の交換を企画し、同十六年許可移転して伽藍の再興をした。然るに高潮の被害は年々止まず、その後十六三年、明和三年(一七六六)に至って再び北方に移転して堂宇の再建をした。これが現在の境内地、建物で往時の黒田城址、家康田原政の旧址等は別に海中に沈んでいるが、現在地を城下と呼び休場と称しているのは旧称をそのまま新地に移したものである。	豊橋寺院誌	
1622	元和8	豊橋市	三河湾	梅敷町字屋敷(観音寺)	大海嘯	元和八年(一六二二)大海嘯の時も尊像は境内の松の樹に懸って流矢を免れ、更に慶永十三年(一六三六)八月再度大海嘯の際も尊像と嘉慶三年迄の露口は難を免れ、水櫃の弟子水存(任保四年十一月十五日)は翌年当寺を再興した	豊橋寺院誌	
1623	元和9	豊橋市	三河湾	前芝(了源寺/観音寺)	大津波(高潮)	大津波(高潮)あり。梅敷に聖観音像漂着、此れを了源寺にまつり、観音寺と改称	校区のあゆみ 前芝	
1636	寛永13	豊川市	三河湾	御馬字西一六(浄願寺)	津波	元来この寺は御馬城址の西南、旧字須賀にあり津波に襲われ、翌年現在地に移転再建	みと歴史散歩	
1680	延宝8	豊橋市	三河湾	高須新田、花田町字西北(浄慈院)	高潮	寛文七年(一六六七)本尊押合地蔵尊を負って西田の馬屋塚(現在馬屋塚町)に来て地蔵堂を建て、ついでに高須新田(寛文五年干拓新田)に移ったが、延宝八年に高潮の厄に遭ったので、更に天和年間(一六七一一一六八二)羽田村のお杉林(現在地)に移った。	豊橋寺院誌	
1680	延宝8	豊橋市	三河湾	高須町(船蔵寺)	大海嘯	当寺は寛文八年(一六六八)八月廿四日吉田藩主小笠原家の家老雨森仁石工門清監が、亡妻子追善のため、当時新しく干拓された高須新田に一神刹を建て、清光寺に寄進したもので、寺名船蔵寺は当時の清光寺六世船蔵純統和尚の名から採ったと伝えられ、その際の寄進状は、今も清光寺にある。船蔵和尚はこの寺に移って寺格をも法地とし、宗風宣揚に努めようとしたが、間もなく延宝八年(一六八〇)大海嘯のなんに遭った一中路	豊橋寺院誌	
1680	延宝8	豊橋市	太平洋岸	城下町(大円寺)	津波	その後文獻がいろいろ恐らく当時すでに廃寺となったものと思われる。	豊橋寺院誌	
1689以前	元禄2以前	豊橋市	三河湾	津田	津波	沿岸崩壊が進み、元禄16年(1703)、北方へ移転したが、沿岸崩壊が続いたので、さらに明和3年(1766)、再び北方(現在地)へ移転した	瀬美町郷土資料館 研究紀要第2号(加藤克己)	下五井村薬師如来縁記
1697	元禄10	豊橋市	太平洋岸	高豊(大円寺)	津浪、風雨、高潮	元禄2年(1699)清光寺住僧が記した「下五井村薬師如来縁記」には次のように記されている。風来幸山の崩相、和峯仙人が、杉の巨木から9本の薬師如来仏を彫った。1体は風来幸に安置、1体は善淵国の巖釜山に納め、1体は備豆郡大浜の火燈下山に納めた。後年、大地震の津波により大浜の火燈下山が崩壊流失した。薬師如来が三河湾を漂流して下五井村へ流れ着いた。下五井の人々は、薬師如来を祀った。薬師如来の遺骸はめらたかて人々の崇拝が篤かった。この薬師如来を、元禄2年、小馬場の医王寺住僧が村人から譲り受けて、医王寺境内の一隅に別堂を建てて安置したのが薬師堂である。	高豊史	
1701	元禄14	豊橋市	太平洋岸	細谷(八柱神社)	津浪	津波の為郡落民移転と共に今の地に運営	校区のあゆみ 細谷	
1704	宝永元	豊橋市	太平洋岸	寺沢村西の谷(秘松庵)	海嘯	津波・風雨の浸食作用が、寺域を破壊して行き、元禄一〇年(一六九七)に当時の寺域より来たに八〇メートル程度退した道神(味川)の地に寺を移すことを願い、同16年に許可移転して伽藍を再興した。しかしながら高潮の被害は止むことなく、その後六三年経過した明和三年(一七六六)に至って再び北方に移転して堂宇を再建した。これが現在の境内地である。	高豊史	
1704	宝永元、10-3.3	田原市	三河湾	瀬美町大字福江字宮脇(雷神社)	津波	宝永元年(一七〇四年)十月より同三年三月まで八間(十四・四メートル)も陸地が後退してしまい領主に申出て秋葉神社を勧請	氏子神社 雷神社	秋葉大権現記
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	細谷	大津波	宝永4(1707)年10月、巨大地震が発生。当時は大津波に襲われた。現在の海岸線より200メートル沖合いに散在していた村は移転、新たに遷州との境界とした道路脇の丘に松を植え、お堂を建てた	校区のあゆみ 細谷	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小松原(小松原進雄社)	大津波	もと海辺の梅沢平に奉祀してあったが、宝永四年(一七〇七)の大津波によって現在地に移転したという。	豊橋市史 第一巻	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小島町(大心寺)	大津波	初め当寺は現在地の南東の海岸にあって、宝永4年の大津波(1707)により衰退した。	校区のあゆみ 小島	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小島(小島神社)	津波	西小島の海岸にあったが、宝永年間の地震のため北方に移された。	校区のあゆみ 小沢	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小島町字池ノ谷(大心寺)	大海嘯	明暦二年(一六五六)住持玄鈞首座の時敵字を建親したが、宝永四年(一七〇七)大海嘯の際に遭って奪還したのを、住持光能祖継首座(寛延三年五月十三日寂)が現在の地に移転し、同六年八月庫裡一棟を新築した。	豊橋寺院誌	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小松原(東観音寺)	大津波	大津波のため、寺は部塚もとも壊滅し、ようやく正徳5年(1715)になって再建、現在地に移転	校区のあゆみ 小沢	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小松原町字屏風(真観音寺)	海嘯	明治三年八月の「本寺末寺明細帳」によると 一中略— 廿ヶヶ寺が近末で 一中略— 七ヶヶ寺が遠末となっており、塔頭四ヶ院と孫末二ヶヶ寺を合計して卅四ヶヶ寺の末寺郡となっている 塔頭四ヶ院中の三ヶヶ院は別に宝永四年の海嘯に倒壊して、僅かに形跡のみを存していたが、明治四年庚申七 なつて……	豊橋寺院誌	本寺末寺明細帳
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小松原町字屏風(東観音寺)	大海嘯	建物は元現在地の南方十八町の海岸地にあったが、宝永四年の大海嘯に遭って、七年後正徳三年(一七一三)現在地に移転したもので、このときまで元屋敷には四十棟の伽藍があったと伝えている。	豊橋寺院誌	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	城下(八柱神社)		城下村の八柱神社は赤沼村より分村の当時に前派の通り、祭神として善長大明神と天満大明神であった。ところが宝永六年(一七〇六)以降には祭神が八王子と改められている。その理由は宝永四年(一七〇四)の地震により、それまで徳川一田に居を構えていた村人は四、五町後方の「みなぞか谷」一帯に居を移すと共にそれまで城下村の三嶋が別々に祀っていた貴船大明神・天照皇太神・砂宮神を一処にあつめ、八王子大明神と改名したのである。	高聖史	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	東細谷(真月寺) 細谷(福泉寺、幸福寺、海月院、宝聚庵、普門庵、医王寺、)	津波	建物が有り、真月寺は享保2年(1717年)に今の所になつてきた 細谷には福泉寺、幸福寺、海月院、宝聚庵、普門庵、医王寺などがある。	校区のあゆみ 細谷	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	高塚(免頭神社)	津波	地鳴り、大相しん大分にゆれ、山くずれ、海へなき引し候ふ……戸どうの堂様、古地松木共に海へゆり出し申し候と「戸どうの宮様」が宝永四年の大地震によって海へゆり出してしまふ被害にあつた	高聖史	名主田中八兵衛の「御免定書付」
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	寺沢(東漸寺)	大津波	大津波の後、現在地に移された	校区のあゆみ 小沢	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	寺沢町字寺瀬戸(東漸寺)	大海嘯	創立当初の所在地は南方海辺であったが、宝永四年(一七〇七)の大海嘯の後今の地に移した。	豊橋寺院誌	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	豊橋(大心寺)	大海嘯	明暦2年(1656)住持玄鈞首座の時敵字を建親したが、宝永4年(1707)大海嘯の際に遭って奪還したのを、住持光能祖継首座(寛延3年5月13日寂)が現在の地に移転し、同6年8月庫裡一棟を新築した。	豊橋寺院誌	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	豊橋(東観音寺)	大津波	宝永4年(1707)には大津波をうけて現在の南方一八町の旧地より現在地に移転。	東観音寺歴史資料目録	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	豊橋(東観音寺)	津波	もとは、現在地の南方の海岸地にあつたが、宝永4年(1707)の地震と津波により破壊し、7年後の正徳5年(1715)に現在地に移転した。	愛知県文化財調査報告書第六六集-田原街道-伊勢街道-	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	豊橋(東観音寺)	大海嘯	建物は元現在地の南方十八町の海岸地にあつたが、宝永4年の大海嘯に遭って、7年後正徳5年(1713)現在地に移転したもので、この時までに元屋敷には40棟の伽藍があったと伝えている。	豊橋寺院誌	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	豊橋(東漸寺)	大海嘯	創立当初の所在地は現在地の南方海辺であったが、宝永4年(1707)の大海嘯の後今の地に移した。	豊橋寺院誌	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	豊橋(細谷)	海嘯(津波)	真月寺の創立は享和4年(1818)でして、宝永4年(1711)海嘯(津波)によって上に上つてきたのが享保2年(1717年)(検査)細谷では福泉寺、幸福寺、海月院宝聚庵、それから普門庵、医王寺が細谷にあつた訳ですがその津波によってほとんどとんとんに上つてしまつた。	ふるさと細谷	豊橋寺院誌
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	豊橋(真月寺)	大海嘯	創立後330年を経て宝永4年(1707)大海嘯の際に遭い、享保2年(1717)紹洋惠隆和尚の代、現在地に移転再興した	豊橋寺院誌	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小松原(東観音寺)	津波	宝永4年(1707)の地震と津波により破壊し、7年後の正徳5年(1715)に現在地に移転	瀬美町郷土資料館 研究紀要第2号(加藤克己)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	西赤沢(吉祥院)	海嘯	現在地の南方海岸地にあつたが、延享八年(一六八〇)と元和元年(一六八八)の地震のために、少くも北方に移り、後更に宝永四年(一七〇七)の地震により、寺山がくずれ、危険な状態にさらされたために現在地に移転した。	高聖史	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	西赤沢町字郷ノ内(吉祥院)	海嘯	延享八年、元和元年の地震のためにや北方に移り(貞享、元和の頃か)、後更に北方現在の地に移転した。創立当時の寺跡は今海の中に沈し、最初の移転地は海岸欠落のため今は痕跡もなく、また第一回の移転直後当寺は火災全壊して百記録等一切を失つた。	豊橋寺院誌	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	西七根	宝永の大津波	津波による被害内容 御厨神社 西七根町 西七根の起り 西七根町の起源は何時の時代からであろうか、又、御厨神社の創立年代は何時頃か、詳しいことは何れの古書に記載しても判断し得ない。現在の豊橋市高師町字本郷に鎮座する高足神社の古文書による西七根村へ遷じ二年(一七〇二)に分村しと記されている。しかし、梅屋勘所載の三河圖之御厨御園には、建久三年(一九三三)にすでに河内の地名が出ていて、故に、高師郷より分村以前より先住民が定着して、神宮領として毎年御厨としての務を来たしていたことになる。 西尾市岩瀬文庫に再三足を運び古文書をあさって得る中、はからずも三河古地図に、宝暦年代の地図の中に七根村の中で家の内と書かれた所が有った。是正しく河内である。種々村の記録を調査した結果も同じく、昔の先住民は、現在の高地でなく海岸近くで生活を営み、少々の農業や漁業をして生活していたと思われる。古書より言い伝えられてきた事は、昭和二十五、六年迄来た地取網にて二ツ山から(岩瀬)と書かれる所があった。これまで書は陸續きとして先住民が居たと書かれていた。此の所が夏の河内内である。而し、長い年月の間太平洋の荒波や強い巻風、又、度々の地震津波のために陸地は次第に浸蝕されていき、宝永の大津波を最後に海中に没し、去つたのである。故に河内の住居は安全な北方草地に居るを移すを余儀無く去れ、海岸に浜屋敷を構えた。最も長くは続かず更に北方より山麓敷へ移り住まはようになつた。兵衛村も河内の地があつた時代は其そこに建立されていたと思われるが、住家が壊れる時には氏神も移り、度々遷宮されていたのであろう。元禄八年の棟札に、此の下に、在りしをここに移す」とある。順に山の上に居る構えられた神子を知ることができ、御厨神社が現在の赤坂の地に鎮座せしは何時の時代であるかは、確たる記録がないので知る由もないが、何れ元禄以後には間違いない。現在の海岸に通じる旧道に宮坂と名の付く道が残っている。恐らくこの道の下にお宮が有り、別落が山麓敷に移る時此の道を使って、山上に遷座されたので今も宮坂の名を残すに至つたのである。赤山麓敷時代の名残を止める豊橋敷地は所々に有る。	御厨神社 豊橋寺院誌、豊橋市中、三河国分書、三河	原書2
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	西七根(竜泉寺)	波浪、海嘯	創立の年代は不明で、初め海辺にあったが波浪のため文庫れたので、この地の代官戸田三郎兵衛から元屋敷向様の換地を受けて再興した。	豊橋寺院誌	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小松原(東観音寺)	津波	前記浜次は宝永四年の海嘯に依つたものと思われる。	東観音寺展	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小松原(東観音寺)	津浪	津浪によってさらわれ、宝永四年(一七〇七)この地に移転	愛知の古寺	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小松原(東観音寺)	大海嘯	大海嘯のために、寺は部落もとも潰滅し、ようやく正徳末年(一七一一)頃に至つて、現在地への移転が完了した	豊橋市史 第二巻	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	東郷谷町西島(眞月寺)	大海嘯	初め旧細谷十ヶ谷の地にあつたが、創立語三百三十年を経て宝永四年(一七〇七)大海嘯の難に遭い、享保二年初(一七一一)稲俣豊隆和尙の代、現在地に移転再興した	豊橋寺院誌	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	細谷(幸福寺 地原 弁財天)	津浪	宝永4年(1707)の大地震なびに津波のため部落が壊滅した頃上細谷村から地原へ分村してきた人々と共に幸福寺も移つて来た	校区のあゆみ 細谷	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	細谷海岸	海嘯(津波)	宝永の地震が起きたのは千七百七年(振書)私のお寺が永和四年千七百七十八年に建てられたんですが、その当時十ヶ谷村(とうがやむら)というのがあります。ある文書には南方約十町の海辺の所とある。その中に細谷、下細谷があつたといわれています。 私の寺、夏月寺の創立は承和四年(一三七八)にして、宝永四年(一七〇七)海嘯(津波)によって上につがてきたのが享保二年千七百十七年(振書)そのようが原書がありまして、この細谷では幸福寺、幸福寺、海月院、宝聚、そのから普門庵、医王寺が細谷にあつた訳ですがその津波によってほとんど上につがてしまつた。	ふるさと細谷	豊橋寺院誌、豊橋市中、三河国分書、三河
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	東観音寺	地震、津波	地震、津波の被害を受けて、住民が背後地に移転する際、積壊した東観音寺も現在の場所に移転したのではないが、海岸住居を捨てたことと、安政元年(1854年)の地震では、1片浜十三里みなる重なる「状況に陥りながら、も、人の被害は大きくなつた。	東愛知新聞(2011.4.16)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	伊古郡村		江戸時代の伊古郡集落の中心は、本郷、本郷、根付谷一帯にあり、海倉屋の名を東西に通つていた伊勢街道に近いところが栄えていた。宝永地震を境に、浜辺にあった集落は、段丘崖上に移転した。地下水位が深いため、雨水をためて生活用水に利用しなげはならなくなつた。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城 信幸)	伊古郡郷土誌
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	豊橋市細谷	海嘯	夏月寺の創立は承和四年(一三七八)にして、宝永四年(一七〇七)海嘯(津波)によって上につがてきたのが享保二年千七百十七年(振書)そのようが原書がありまして、この細谷では幸福寺、幸福寺、海月院、宝聚、そのから普門庵、医王寺が細谷にあつた訳ですが、その津波によってほとんど上につがてしまつた。	ふるさと細谷	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	城下(八柱神社)		本より西に約百mの崖端つたいの処には通稱「大明神」と呼んでいる地蔵がある。これは、今日、八柱神社境内に遷座されている「神代稲荷大明神」の旧地であるという。口碑によると、この稲荷社は、赤沢城築城の折、城地鎮撫と領内鎮撫を折簡し、伏見稲荷より勧請したもので、宝永四年(一七〇七)の地震によって境内地が崩壊し、今日の八柱神社境内に遷座したとされている。	高豊史	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	三河湾	田原大字野田(安楽寺)		大地震で潰れてまた遷置した。	田原町史 中巻	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	三河湾	田原大字野田(西円寺)	津波	大地震に本堂庫裡小屋など壊れ、それがために正徳年中カネイノに引越し建立した。	田原町史 中巻	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	三河湾	野田	津波	野田村保井の真宗白雲山西園寺の堂宇はすべて倒壊し、後年現在地に移転した。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号 (清田治)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	高松(八柱神社)	津波	当浜津波より流刃風く流失、一村一二人当で流死す 高松村八柱神社地丈半崩壊し家老の寛分けを受けた	赤羽根町史	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	瀧美(常光寺)	津波	宝永4年(1707)の大地震では、太平洋沿岸の村落は大半が流出してしまっただけで、峠越えな いほどに破壊されてしまった。これを契機に、東観音寺・常光寺などをはじめ多くの寺社や村落が北方の高地に 移転した。 ・応仁二年(1468)、准大臣烏丸義住が、豊洞宗の清浄堂を閉山として堀切の辺に烏丸准大臣資任が開基 したのが始まりで、その後、天保3~4年(1832~33)にかけて現在地に移された。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第2号 (加藤克己)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	瀧美半島彦兵	津波	太平洋沿岸の村落は大半が流出してしまっただけで、峠越えな いほどに破壊されてしまった。これを契機に、東観音寺・常光寺などをはじめ多くの寺社や村落が北方の高地に移 転した。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第2号 (加藤克己)	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	赤羽根 高松(八柱神社)	津波	もと宮沢に祀られていたものであるが、宝永の大地震の後現在位置に遷された。	赤羽根町史	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	赤羽根、高松村八柱神社	津波	八柱神社は、由来は「宮沢」にあって宝永4年(1707)10月4日に発生した地震(宝永の東海地 震)により、社地の多くが傾斜したため、2年後の宝永6年に比呂古山へと移転したとされる。…移転先の「比呂 古山」は現在八柱神社が鎮座する「瓜子村」のことと考えられるが、旧地を示す「宮沢」は現在の地名にはみられ ない。「田原藩日記類」にも、移転以前の同社の様子を伝える記録は確認できていない。	田原の文化第33号(石井一希) (稿本「村誌五」内 「富田由緒記」)	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河以外	太平洋岸	白須賀	津波	宝永の大地震と津波によって、宿場の大半が流された 元町から夕見坂の上にある現在の白須賀に移転したと思われる	瀧美町郷土資料館 研究紀要第2号 (加藤克己)	
1707	宝永4.10.14	豊橋市	太平洋岸	宇中屋敷(東光寺)	大津波	中興玉岫和尚の再興当時の当寺は熊野街道に沿う海辺にあり、幾度か大津波の襲撃にあい、ついに宝永四年 (一七〇七)十月十四日の大風浪には伽藍も埋没してしまっただけでなく、そのために当寺壇頭の朝倉源五エ門は当寺を北 方の宇中屋敷に移転した。	高豊史	
1707	宝永4.10.14	豊橋市	太平洋岸	東七根(東光寺)	津波	元は海辺の近くにあったが、幾度も台風などで被害を受け、特に一七〇七年一〇月十四日の巨風で、伽藍 の大半を失ってしまいました。 その後、海辺から遠く離れた北方の宇中屋敷に移りました	郷土誌「たかね」	
1707	宝永4.10.14	豊橋市	太平洋岸	東七根町(東光寺)	海嘯	海辺に面していたために幾度か海嘯の襲撃に遭い、その都度田畑を失っている。特に宝永四年(一七〇七)一〇 月十四日の大風浪によって伽藍の大半を土砂に埋め、北方の宇中屋敷に移転した。しかし、移転後、いくばくな くして火災に会い焼失。よって正徳五年(一七一一)現在地に移った。	高豊史	
1707	宝永4.11	豊橋市	太平洋岸	東観音寺(小松原町)	海嘯	創立當時は、太平洋に面せる南海原の山腹にあって、堂塔伽藍が完備して居たが、寶永四年十一月の大地震 に際し、海嘯の爲に被害があつて、翌五年から九箇年の歳月を要して、北に一八町を距る現在の地に移轉さ れたものである。	國史上より翻したる豊橋地方	
1707	宝永4.11	豊橋市	太平洋岸	小松原(東観音寺)	海嘯	創立當時は、太平洋に面せる南海原の山腹にあって、堂塔伽藍が完備して居たが、寶永四年十一月の大地震 に際し、海嘯の爲に被害があつて、翌五年から九箇年の歳月を要して、北に一八町を距る現在の地に移轉さ れたものである。	國史上より翻したる豊橋地方	
1708	宝永5	豊橋市	三河湾	吉田方 三ツ相(水神社)	大洪水	一七〇八年(宝永五)の大洪水のあと、野田と三ツ相のさかいにうまっていた神社をまもりおこして、一七一〇年 (宝永七)、いまの場所に新しい神社をたてた	よしがたが	
1714	正徳4	豊橋市	太平洋岸	西七根村(竜泉庵)	津波	創立当初は西七根村の海岸側に建てられ、津波被害により北浜道に移転した。移転は正徳四年(一七一 四)、聯松庵より移されたこと一〇年後であった。	高豊史	
享保以前	享保以前	豊橋市	太平洋岸	豊橋(聴松寺)	津波	享保以前の津波のために寺域が欠け落ち、地頭戸田三郎兵衛から替地を受けて住持持栄和尚の代に移転再 興したといわれている。	愛知県文化財調査報告書第六六集 - 田原街道・伊勢街道-	
1716以前	享保以前	豊橋市	太平洋岸	西七根字北浜道(聴松寺)	津波	享保以前の津波のため寺域が欠け落ち、移転再興	瀧美町郷土資料館 研究紀要第2号 (加藤克己)	
1837	天保8	蒲郡市	三河湾	蒲郡(栂石)	水害	栂石屋 石垣は花御岩であったが、水害で全部流失された。しかし、石は、大正の始めに庄のどいと云う道路が出来 た時に、集めて使った。此の道路は昭和二年迄で今は埋立で石垣もまうまっている。並石は神社、寺、個人の水間 口にもある。又陣屋跡にもあり、天保の災害でそれいらい跡方もなくなつた。	栂石村誌	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1854.12.23・24	嘉永7.11.4・5	清都市	三河湾	西浦	大津波	松島地蔵菩薩の由来と現在 一略 一説には安政元年の大津波による大津波で付近一帯は大きな水害を受けました。当時、松島には多くの松の木が繁茂していましたが、それらの松の木の大部分は地蔵菩薩ともども流失されたといわれています。その後、流失した地蔵菩薩は改めて新しく建立され、安政4年大光院創立と同時に、大光院の縁の下に安置され、現在に至っております。 一方、流出された松島地蔵菩薩は数々の霊験が物語られ、橋田地区の人々に厚く信仰されています。その後、漁師が漁をしていたときに、胴体がハラハラとしたが地蔵さまの網や打漁網に全部掛われ、縁の元である大光院に移し、現在大光院入口石段の下段の場所に安置されております。	西浦町の昔と今	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	江比間	大津波	津島神社と蔵島神社は鎮守山の北方、湖に近い一帯に鎮座されていた。いずれも神社というより祠であったが……。 七釜山の中間に遷座されたのはいつ頃だろうか、ほとんど記録を発見することができなかつたが、安政5年(一八五八年)のものがある。「津島神社、蔵島神社、二社一宮 本松山前ノ山へ遷座ス」がそれである。安政5年には神社の修繕再建が集中的に続いている。おそらく、安政5年十一月四日朝四つに起つた大地震と大津波の来襲で相当な被害をこうむったせいであろう。津島神社、蔵島神社が海岸近くから「前ノ山」へ移されたという記録の「前ノ山」は、鎮守山ではなく七釜山を指しているのではないだろうか。	江比間史	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	赤羽根村(若見村の弁天社)	津波	嘉永7年津波で流出した弁天社(若見村)の弁天社は地居川河口に近い地に鎮座していたこともあり、嘉永7年11月の地震(安政の東海地震)の際、同地を襲った津波により流出の難に遭っている。その後は本丸跡、五丁(赤羽根町史)に若見字下り洞窟(現地居町下り洞窟)の地に鎮座の旨がある点から、再建されたのは確実と思われるが、この再建地が流出前と同じであるかは明らかでない(また現在地も不明である)。	田原の文化第33号(石井一希)	「神社最上御神前家實書記」(赤羽根の古文書、近世史料編1700頁)に妙史料編1606頁に砂録、原史料は若見町(宮本署所蔵)の嘉永7年11月4日の項に、「弁天社高浪にて流出仕候」とある。
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	赤羽根村(若宮八幡社現在地付近)	津波	・宝暦4年(1754)、赤羽根西村では若宮八幡社が移転している。同社は天正6年(1817)以降現在に至るまで移転していないため、宝暦4年の移転先が今日の若宮八幡宮の社地にあたるものと判断できる。現在地付近は、嘉永7年(安政元年、1854)の東海・南海地震の際津波を受けている。	田原の文化第33号(石井一希)	赤羽根西村の商人宮田三郎兵衛(前掲)代附留書、「前掲」赤羽根の古文書、近世史料編1606頁、原史料は田原市所蔵)
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市	太平洋岸	赤羽根村(若宮八幡社現在地付近)	津波	若宮八幡社現在地付近は、昭和19年(1944)の東南海地震の際津波を受けている。	田原の文化第33号(石井一希)	赤羽根町の鈴木添市氏の体験談が「庄の国通信15号」(東三河地方拠点都市地域整備推進協議会 2003)2頁
1539	天文8	豊橋市	内陸	豊橋市(大村)	大津波	由緒: 当神社は、大宝元年(701)大村天神として創建、天文八年(1639)大津波により流失、天文二十年(1651)八王子社として再興、明治五年(1872)八所社に改称、明治十七年八所神社と改称した。	八所神社案内板	
不明	不明	豊橋市	三河湾	前芝町字東(西福寺)	屢々海水の難	継新前までに屢々海水の難に遭って、伝来の記録類は全部消滅して終った。	豊橋寺院誌	
不明	不明	豊橋市	太平洋岸	細谷(上細谷八柱神社)	海嘯等	住古は海辺にあつたが、海嘯等による欠流のため現在地に移転	豊橋市史 第一巻	
不明	不明	豊橋市	太平洋岸	小島町(普門庵)	海嘯	元亀創立から寛永まで五十余年間の経過は不明で、恐らく海嘯のため旧記を失つたものと思われる。	豊橋寺院誌	
不明	不明	豊橋市	太平洋岸	伊古部町字盛在谷(宝蔵寺)	津波	本堂西に庚申塔があり、庚申塔と馬頭観音石仏が安置されている。馬頭観音は、津波による村の移転によって置き去りにされたものを、本寺に納めた	麗美町郷土資料館 研究紀要第2号(加藤克己)	
不明	不明	豊橋市	太平洋岸	春浜(南下八柱神社、伊古部神社、東七根御厨神社、小島神社、東細谷八柱神社など)	海嘯等	南下八柱神社、伊古部神社、東七根御厨神社、小島神社、東細谷八柱神社など太平洋に面した神社の由緒は、海嘯等による欠流のため移転しているのが不明	豊橋市史 第一巻	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
②津波による住民生活の変化(集落移転、街道の変化)								
1493.9.20	明応7.8.25	豊橋市	内陸	豊川(とよがわ)	豊川の川瀬が変わる	豊橋付近においても豊川の川瀬が変わるほどの地変があった	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	宝飯郡一宮町誌
1498.9.20	明応7.8.25	豊橋市	内陸	豊橋	豊川の川瀬	豊川の川瀬が変わるほどの地変があった(宝飯郡一宮町誌)。この日付は6月25日8時ごろの三河強震であるが、明応地震は8月25日8時であるから日付の理向で8月と推される。	飯田及事 1985 東海地方地震、津波 災害誌(飯田及事教授論文選集)	
1539	天文8	豊橋市	内陸	大村	大津波	大村の如き低地帯では、千年以前よりの居住者は、度々住居をかえざるを得ない状態に於かれ、子孫に至りてはほとんど不明で、かてと加えて、天文八年の大津波の被害は殊の外大きく、天文以前に書き記された古文書は皆無に等しい。	大村八所神社と松原用水	
1539-40	天文8-9	豊橋市	三河湾	瓜郷	洪水	瓜郷の地は住時が下五井村の一郷であったが、寛保二年分隸して瓜郷村となった。前述天分洪水の際は下五井全村が罹災し、その後尾張の郷士五人がこれを干拓完成した。これを下五井五人衆と称し、……	豊橋寺院誌	
1540	天文9	豊橋市	三河湾	前芝	大津波(大暴風雨)、高潮、洪水	当時の梅敷の人々は、元梅敷と現在の土屋敷に住み、佐奈川はその源を遡って現在の前芝郷近くの流れ出していた。しかし、この時の大洪水により現在の流路に変わって村が二分され、神村も流失し目も出ない惨状であった。住民は住む所もなくなり、領主のほからいで飯小屋を建てる土地が与えられ、一時伊奈の北村、正庵辺りに住んだ時期があった。その後、領主の指導で現在居られる集落が出来上がった。この時、領主に協力したのが伊奈の西蔵寺といわれ、被害を受けた43戸の住民に2町1反余りの土地を与えた。救われた人々は、それ以後、子孫が代々正月と盆にお礼に上がるといわれている。また、河口の丘の上に逃げた人は助かった。この丘は今でも「命山」と呼ばれることになった。	校区のあゆみ 前芝	
1540	天文9	豊橋市	三河湾	津田	大洪水	この辺一帯に天文九年の大洪水で古記録一切を失い、下五井の地は一時荒野となったのを尾州の士五人が再開したと伝えられ、	豊橋寺院誌	
1540	天文9	豊橋市	三河湾	下五井		天文9年(1540)の暴風雨及び洪水による被害で藤村になっていた村を、今川家臣の五人衆が再興した。別説では、享禄2年(1529)松平清康が「吉田攻め」をした時、「下五井」に放火したと牛久保密談記に記述されている。この放火により藤村と下五井5人衆が再興したとの説であり、下五井5人衆による再興説は同説とも共通している。	校区のあゆみ 津田	
1540	天文9	田原市	三河湾	豊橋(前芝)	大海嘯	天文9年(1540)に大海嘯があり此の地方は社寺人家ごとごとく流失といふ大被害があった。即ち現在の伊奈真神寺は前島(前芝)にあったが、この大海嘯のため流され、そのため今の地に移されたといひ、又元梅敷もこの大海嘯のために人家が流失し、一時村人は伊奈村東新寺西附近に住んでいたが、其の後漁業上の不便から州崎(現在の梅敷)の方へ次第に移住して現在のような村づくりにしたわけ、村の形の上からみれば前芝、日色野とは少しかわって居るものである。元梅敷にもならなかったのは、元梅敷にその頃まで人が住んでいたことは、その所から室町時代頃の明細の碑片が出土していることとわかる。桑切川(今の佐奈川)は元梅敷の東方を流れ今の大長館あたりまで流れていたが、この天文年間的大海嘯によって現在の流路になったといわれる程、当時の大海嘯は思いのままにこの地方を荒れまくって大被害を与えたのである。	前芝村誌	
1589	天正17	豊橋市	内陸	吉田橋	洪水	洪水で吉田橋(土橋)が流出	校区のあゆみ 下地	
	慶長年間、元和年間	豊橋市	内陸	豊橋(吉田橋)	津波	津波のため橋が流されたので架け替え工事が行われたらしいが、記録に残ってはいない。	郷土誌 下地	
1598-1615	慶長年間	豊橋市	内陸	吉田橋	津波	津波で流失 津波のため橋が流されたので架け替え工事	郷土誌 下地	
1665	寛文5以降	豊橋市	三河湾	高須、土倉新田		この新田は寛文5年(1665)、吉田本町の高須久太夫、高須嘉兵衛、上伝馬町の真弓佐平、豊川村の高須十太夫、桂州(大飯府)池田出身で吉田に住んでいた土倉五郎兵衛の五人によって河口の左岸が開発されたものである。たびたびの台風や地震などの災害を蒙り、新田は海中に没してしまつた。5人の元締めの資力では堤防の復旧が至難となつたが、農民たちは必死になつて潮止めの堤を築き新田を守り通した。	校区のあゆみ 吉田方	
1686	貞享3	豊橋市	太平洋岸	高塚、西七福、城下		高塚、西七福、城下などの前藩が浜屋敷から山屋敷へと移転したのも、この貞享三年の地震の翌年	高豊史	
1680-1686	延享8～貞享3	豊橋市	太平洋岸	高塚村		高塚村は、延享8年(1690)の大烈台風のたために、橋や漁船は壊れず流失され、民家は倒壊され、海崖は崩れ去つた。海岸沿いの「浜屋敷」は危険な状態にさらされた。さらに、貞享3年(1686)に遠州灘を地震が襲つた。この地震は先の台風によって次第に浜屋敷の谷をさらに大きく削し、谷を中心とした崩れをつくつた。このため高塚は浜屋敷より後方の台地上の「山屋敷」に集落を移転した。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	長谷村(湖西市)から高豊村まで	大津波	豊谷村から高豊村にかけては海食崖上の天田原台地の標高は70mと高いが、開折谷により深く浸食されているため、海食崖の先端部はならぬに近づいている。江戸時代前期には、集落や耕作地が海食崖の前面に広がる後、近や開折谷の中にあり、崖半端の生活をしてきた。至永地震では、崖の崩落や大津波のために、集落の流出だけでなく、集落自体も大きな被害を受けた。毎年襲来する暴風雨や高潮に悩まされ、海岸沿いの「浜屋敷」が、台地上の「山屋敷」への移転が繰り返されていたが、至永地震後は完全に放棄された。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	高豊村から小塩津村	高さ6~7mの大津波(表浜沿岸)	高豊村から小塩津村に至るまでの集落については、池原村を除けば、浜屋敷の崩落や流木の流出はあったものの、津波による家屋への直接の被害は記録されていない。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	城下	大津波	城下岸壁の崖の上に、南北朝時代に居城が築かれ、崖下に集落や水田が存在していた。これが「城下」の地名の起源となったが、海食崖の激しい波浪浸食により海岸沿いの集落は、早い時期に消滅していた。江戸時代には、海食崖の上の台地に集落が立地していた。このため、至永地震では、大津波による集落の被害はなく、浜辺においてあった網や船などの漁具の流出が主な被害として記録された。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	内陸	吉田橋		吉田橋が崩壊	校区のあゆみ 下地	
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	内陸	吉田大橋		吉田大橋の修繕が行われたが、これは大震災の結果によるもので、所謂小破修繕であった	國史上より翻つたる豊橋地方	
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市	太平洋岸	六連村から小塩津村	大津波	六連村から小塩津村にかけては、標高60~10mの断崖絶壁の海食崖が、西方にみならず高度を下げながら連綿と、砂浜が狭いので、波浪浸食を受けやすく、海岸線も年々1mくらい内側の割合で後退してきた。記録によると、東隣の城下岸壁の崖の上に、南北朝時代に居城が築かれ、崖下に集落や水田が存在していた。また、1320年に谷原村から移住した14軒が、六連海岸の開折谷の水田を耕作し漁業に従事していた。これが「城下」や「浜田」の地名の起源となったが、海食崖の激しい波浪浸食により海岸沿いの集落は、早い時期に消滅している。江戸時代には、海食崖の上の台地に集落が立地していた。このため、至永地震では、大津波による集落の被害はなく、浜辺においてあった網や船などの漁具の流出が主な被害として記録された。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河以外	太平洋岸	白須賀	大海嘯	岩屋観音の信仰は相当に古くあるらしく、「ねごと草川にもその記事がみえる。この観音は、庶民の信仰を集めたばかりでなく、岡山藩主田沼綱政(一六三八~一七一七)は深くこの観音を信仰し、東海道往來の際は必ず参拝するのを例とした。 一中路 至永四年の東海地方大地震の際、綱政は江戸から国元への帰途で遠州白須賀に宿っていたが、夜半「大海嘯があるにより早々去れ」との観音の霊夢を受けて急ぎ供養し、海嘯の難を逃れた。その礼代として寄進したものが現存の黄金灯籠一対である。	豊橋市史 第二巻	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河以外	太平洋岸	東海道	大津波	本坂通(道)は、東海道を御宿宿から分かれ、当五、嵩山、本坂峠、三ヶ日、気賀を経て、見付宿で再び東海道に合流する総里程一五里一四町(六〇キロメートル)の東海道の付属街道である。 一中路 本坂通はハイパスであったが、江戸時代の中期、思いもかけずにぎわった時がある。宝永四年(一七〇七)十月四日、東海道通商を断つた至永の大地震は浜名湖口を大津波で激しい、今切渡船が不可能となった。東海道の通行は止まり、大名行列はもとより一般の通行もすべて本坂通へ迂回したため交通量は急増した。	とよばしの歴史	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河以外	太平洋岸	浜名湖、新居、舞浜	大津波	江戸時代、東海道の付属街道として通中奉行の支配をうけた本坂通(姫街道)は、天竜川の西にあたる東海道安間宿(浜松市)から、市野、気賀、三ヶ日それぞれに本坂峠を越して三河に入り、嵩山、当五、豊川から東海道御宿に至る一五里一四丁(約六〇km)の街道である。気賀(現細江町)には關所が置かれた。 一中路 あくまで東海道のハイパスであった姫街道が江戸時代の中期、突如としてにぎわった時がある。一七〇七(宝永四年)年一〇月四日、太平洋岸一帯を襲った至永の大地震は浜名湖口を大津波で激しい、今切渡船を不能とし、新居、舞浜の宿を荒廃に追い込み東海道の通行をためてしまったのである。そのために、大名行列はもとより一般の通行全てが姫街道通りとなり、とりわけ御朱印御朱印、公家の通行補助としての御宿御宿が急増したことは、近隣農村の負担を大きくした。	東三河の歴史	
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河以外	太平洋岸	東海道	高津浪	本坂通は東海道を御宿宿から分岐し、当五の瀬いで吉田川をわたり、嵩山から本坂峠を越えて三ヶ日・気賀を通り、三方原を横断して市野を経て、見付宿の手前(三ヶ日)の安間川に合流する。一五里一四町(六〇・四キロメートル)の総行程であった。また嵩山から吉田へ通ずる道、気賀から浜名湖へ通ずる道をも含めて、本坂通という場合もあり、要するに本坂通とは、嵩山・三ヶ日・気賀の三ヶ日町村を通ずる道を描いたものと見てよいであろう。 一中路 宝永四年(一七〇七)一〇月四日、東海道筋をおそった大地震、高津浪は、浜名湖口今切に大打撃を与え、新居・舞浜間の船路は荒廃して渡船危険となり、新居宿も家屋多数が流失、破壊された。かくて東海道を旅する人々は、今切渡船の危険を避けて隣往する本坂通をとるに至り、この道の交通量ははるかに増加した。本坂通には、前述のごとく東海道御宿と安間村を両端として、嵩山・三ヶ日・気賀・市野の四ヶ宿村があったが、至永の大地震以後急激に増加した旅人、特に大名道中に対する人馬の準備は不可能に近いものであった。	豊橋市史 第二巻	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	内陸	吉田橋	津波	11月14日の大地震は津波をよび、堤防や吉田橋に大被害を与えた。橋の土台である石垣がぐずり落ち、通行も危険な状態であった。	郷土誌 下地	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	三河湾	芦原(大山町、浜道町)	大津波襲来	三河湾に大津波襲来、家屋激流失多数、道目記地区(大山町)は松井に塵敷替えした。神社も移転した。浜海道船原(浜道町)の一部は高地へ塵敷替え(移転)した。	校区のあゆみ 芦原	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	内陸	吉田大橋	非常ナル高潮	吉田大地震/豊永二ハ非常ナル高潮ノ岸に来ルアリ。一般其被害ノ甚大ナルモリアリシガ、之ニ伴ヒ橋梁ニモ甚クノ損所ヲ生シタル	三州吉田 船町史稿	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	内陸	吉田橋	津波	これによると、吉田町内に於ける災害の加何に大なりかは推測され得るのである。たゞ其内この吉田市街の被災に對ては明瞭でないが、四日市の源十吉田千九郎の手記によると、「吉田の町には人家二百軒潰れ壊れ、田舎あり、當時船所には火災が起つたので、其被害は實に甚しきが故に、幸にこの吉田にはそれ程がなかつた、且つ大橋にも破損はあつたが、往來に支へるものではなかつたものと見える	國史上より翻したる豊橋地方	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	吉田橋	高汐	高汐が発生、新居橋の運船は全て没失、木川(吉田川)の水位は三合位に増水し逆流。幸い吉田の大橋は橋上の往來に支障を来たす程の損傷は免れた	逐城解説 詳説・吉田城と地田照政 〜ついに判明！吉田城本丸天守(代用)鉄三重櫓の概観全貌とその嚴衛〜	『西村次右衛門日記』豊橋市史々々料 叢書二・三
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	田原(堀切)	津波	安政元年(1854)11月4日の大地震と津波で西堀切村233世帯のうち113世帯、東堀切村68世帯のうち17世帯の家が津波によって流されるという被害を受けた。そのため、当時は現在の国道42号あたりに住んでいたが、100メートルほど北側に集団移転した。	堀切校区まちづくり推進計画書	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	堀切	津波	西堀切村233世帯のうち113世帯、東堀切村68世帯のうち17世帯の家が津波によって流される。当時は現在の国道42号あたりに住んでいたが、100メートルほど北側の現在地に集団移転	田原市ホームページ(堀切校区まちづくり推進計画書(平成19年3月堀切校区))	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	東堀切	津波	東堀切村は無利息の五か年年限で七十面を拝借した。同じ支配所の村々からとあるから萬両通帳額の村々からということになる。住居をもち、糶・穀を入手し、村中一回が申し合わせ石砂入りの田畑を返還した。乞食同様のくらしの中から立ちあがるのに大変だったことが想像できる。	瀧美町史 歴史編 上巻	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	西堀切	津波	田畑一円に砂入りとなり厚薄もかわらないほどに荒蕪した西堀切村の復興がどれくらいか語られていたかを見つてくれるものはないが、事態が異変であつただけに、旗本清水氏の中山陣屋も理解を示し、協力したものと考えられる。	瀧美町史 歴史編 上巻	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	堀切	津波	東・西堀切村は、漁業の盛んな村であつた。東方和地一色までで海岸断崖や岩礁が切れ、堀切に至つて白砂の海浜を形成し地引網の通地になつていたのである。	瀧美町史 歴史編 上巻	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	堀切	津波	安政2年(1855)2月、東堀切村名主即平、西堀切村名主政右衛門等面村の役人が連名で、天領三浦支那の赤坂代官所へ嘆願書を差出し出した。その嘆願書には、西堀切村の被害は総数233軒の内、流失の家113軒、流失の家275棟、半潰れ家30軒、死者8人、怪我人60人と書き上げられており、同じ内容を中山村陣屋在役の「西堀切村救米寛帳」と照合してみると、その割にはかなりの水増しがみられるようである。この時の助郷免除願いはすべて聞き届けられず、西堀切村へは陣屋役人の度々の檢分が行われ、領主より改めて40歳の御米と拝借金70両が下げ渡され、また同年3月、更に貯蓄金5百両の檢分が行われ、領主より返金15百両に増えられた	瀧美町史 歴史編 上巻	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	堀切	津波	『印章安政の御物成小物皆済目録』に、年貢が免除されているが、公儀への助郷免除願いはなかなか載附されなかつた。文久2年(1862)正月、東・西堀切村は再び助郷免除の嘆願書を差出した。今度は直ちに聞き届けられ、助郷免除は当分の間免除されることになつた。	瀧美町史 歴史編 上巻	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	日出村	前代未聞の大津波	日出村では、大堀川で高藤重左衛門が溺れ、小久保治助や高藤三次郎等の家も、村の奥に移転したという。	瀧美町の民族探訪	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	堀切村	大津波	堀切村の人々は、津波襲来の時、殆どの者が和名山へ逃げ、村の復旧するまで山に小屋掛けをして不便な仮住まいをせられた。領主は、被災者救済を中山村陣屋役人に命じ、全盛の家には豪族一人に米一升六合、半盛の家には一人米八合、浸水の家には、二〜四升を与えた。また、菩提寺である常光寺も、米三合の地に跡などを用意した。被災者にとつて毎日寺より施される食べ物は、心から感謝し、「山へ小屋掛け常光寺様 お願いされたらいつ返りよと後々まで語り伝えていた。村の復旧にあつたつては、浜藪に近い所にあつた家は、山裾の高台に移転するものもあり、今でも集落の南側に元屋敷と呼ぶ地所を持つ家がある。	堀切村常光寺の住職が書き留めた記録	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	豊橋市	内陸	吉田橋	津波	吉田橋・堤防大被害	校区のあゆみ 下地	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	田原市	太平洋岸	西堀切村	津波襲来	村の復旧にあつたつては、浜藪の近くの家は、山裾の高台に移転する者もあつた。現在の堀切集落の南側には「元屋敷」と呼ばれる地所がある。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	田原市	太平洋岸	日出村	津波	地元に流る言ひ伝えては、日出村でも浜辺に近い所に家を構えていた三次郎宅や次郎宅が津波に押し流されたので、畑中や北緑きの安全な場所に移動している。	瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)	
1854	安政元年.11.14	豊橋市	内陸	吉田橋	津波	11月14日の大地震は津波をよび、堤防や吉田橋に大被害 橋の土台である石垣がくずれ落ち、通行も危険	郷土誌 下地	
1857	安政4.5.14	豊橋市	内陸	吉田大橋	洪水	安政4(1857)5.14、先月末(4/26期)から降り続く雨により大川(吉田川)が増水し、3年前の大堤防では騒動があつた大橋を、猛烈な水勢と上流から伝へられる影しい重の材木が直撃し、橋梁の約30間(=約54m)が流失したのだ。城郭修復もままならないところに、洪水により吉田の大橋が三十分間漂流流した。	逐城解説 詳説・吉田城と地田照政 〜ついに判明！吉田城本丸天守(代用)鉄三重櫓の概観全貌とその嚴衛〜	『西村次右衛門日記』豊橋市史々々料 叢書二・三

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	原書	原書2
不明	不明	東三河全体	太平洋岸	伊勢街道		奈良時代、瀬美半島には伊勢方面に通じていた この半島と伊勢とを結んでいた街道を「伊勢街道」と呼んでいた。この街道は伊勢方面より船で伊 良湖につき、伊良湖より太平洋岸に東へと進み、橋本(現在の静岡新居町)で東海道と交わっていた。 伊勢・龍野方面に通じているこの街道は平安時代以後も東西日本を結ぶ重要な道として相当に賑わい、街道に面し建つ ていた東観音寺は交通の守護神とされ、東観音寺の沖合いを航行する船隻も沖合通過の場合には帆を下ろし 通ったという。 南郷と北郷の政権争いの渦中に瀬美半島が加えられたこと、また海難連続し返された暴風雨、さらに地震により街 道の崩壊が深刻化したことなど理由で伊勢街道は衰退の一途をたどっていた。	原書2
		東三河全体	太平洋岸	伊勢街道		原土部が伊良湖調査のために瀬美半島海岸調査をし、報告書を作成したことがある。(附三十三)その中 に赤羽根付近から伊良湖岬の間に於いては、汀線が七十一年間に平均三十メートル程度後退を示しているといわ れ、全体的に後退を受けつつあるものと考えられると書かれている。 今、小塩津の断崖地帯には、旧屋敷跡が並んでいる。この松林の北側に道があるが、江戸時代の 享保年間(1716~35)ごろの小塩津村庄岡田三郎右衛門の屋敷跡が道沿いにあって、井戸だけが保存されて いる。断崖にほど近い所である。この道が江戸時代の小塩津村の主要道であったという。 二川町の東観音寺も海岸崩壊によって二度までも移転したという。	
不明	不明	豊橋市	三河湾	吉田橋		江戸時代を通じて豊川に架る「豊橋」は、三十数回の落架の流失を記録している。東海道の重要な橋であったた り、豊橋直轄工事でも補修が行われた。(豊橋直轄の欄は四つあるがその一つ) さらに、河口が三河湾に臨んでいるため、潮の満ちこけにより、海水が河口から11km地点まで遡上するので、上 流の大河と重なる洪水を引き起こした。	ふるさと津田
不明	不明	豊橋市	太平洋岸	高豊	津波	この地域の入道は現代まで何度も断絶を繰り返している。これは、海岸浸食を要因とする台風や地震、津波によ る家屋倒壊等がもたらした	校区のあゆみ 高豊
不明	不明	豊橋市	太平洋岸	城下町		城下の旧道よりさらに南に、海食によって削られたが、中世後期の豪族陣田氏の居城跡がある。 一略— 城跡は、太平洋の海岸から60m余の絶壁上にある。出曲以南は浸食によって海中に沈んだが、主要部と北側 の家田の居城跡がよく残っている。南北朝時代には城の南方に低地があり集落があったと伝えられる。「城 下」という地名も、城より下にあったからつけられた名である。集落が北へ北へと移動し、城跡より北(上)へ移 動した後も、そのままだ「城下」と称している。	瀬美町郷土資料館 研究紀要第2号 (加藤克己)
		東三河全体	太平洋岸	「表浜」と呼ばれる瀬 美半島の太平洋岸		「表浜」と呼ばれる瀬美半島の太平洋岸には、数10~200戸程度の集落をなした40近くの集落が、断絶的に連 なり、「元屋敷」と呼ばれるかつての屋敷跡が各所に残されている。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城 信幸)
		田原市	太平洋岸	高松・大車・神戸・六 連		・表浜では、江戸時代以降から明治中期まで、地引き網が主体であった。神戸小学校の沿革に、「大字南神 戸・東神戸・大字大車、一部海岸ノ人八瀬業ヲ以テ本業トシ、...略...」とあることから理解できる。 ・高松以西は、浸食が深刻に入っているため、海岸から集落までの距離が漸次大きくなる。 ・高松以西は、海食も低く浸食谷も小規模であり、集落と海岸との距離が近接している。	田原市博物館 研究紀要第4号(鈴木 啓之)
		田原市	太平洋岸	高松以西			田原市博物館 研究紀要第4号(鈴木 啓之)
		田原市	太平洋岸	赤羽根~若見		・赤羽根~若見海岸でも、標高30~20mの海食崖が東西に続き、海食崖付近の平坦な台地の下に、赤羽根・池 尻・若見の各集落が立地している。赤羽根村西と池尻の間は、海食崖や台地が切れ、太平洋に向かって池原川 や精通川が流れ出ている。豊橋市の太平洋岸には、海食崖の間接谷を流れる長さ1.1mlも満たない小河川は あっても、この地底川のような比較的大規模な流域を持つ河川は、瀬美半島の太平洋岸には存在しない。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城 信幸)
		田原市	太平洋岸	総切		・小塩津の西にある総切村では、海食崖が消失し、標高7m以下の砂浜が広がっている。砂浜の北側には、標高 4.5m前後の後背地が広がっている。砂浜と後背地の間にある標高4.5m~5mの隆起地に総切村の集落は 分布している。集落の背後に広がる後背地は、江戸時代になって「谷ノ田」などの新田開発が行われた。総切 村は東の小塩津海岸のように海食崖や岩礁がないため、地引き網が盛んに行われていた。しかし、海岸に面し た砂丘上にあった船切の集落はたびたび大津波の襲撃を受け、消失することになった。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城 信幸)
		田原市	太平洋岸	総切		・総切村は、地下水にも悪かれ、地形も平坦であったために、自由に豊富な湧水に宅地を潤わせたため、堀 溝存した集落が海端にも存在していることである。神戸村のような自然影響を受け切迫した集落移動と比べ、堀 溝の残存する集落は特に不安を感ずることなく農業に従事していることである。	田原市博物館 研究紀要第4号(鈴木 啓之)
		田原市	太平洋岸			要知事項にはかつて、東海道の宿場から分かれて、瀬美半島の太平洋岸を伊良湖まで通じていた伊勢 街道があった。熊野詣でや伊勢詣での人々がこの街道は賑わったとされているが、天災地変がその姿を変えた といわれている。伊勢街道が盛んなのは16世紀頃までで、年々の海岸侵食により道は高台に移動し、坂道が多 い道となった。特に、至永4年(1707)の大地震で、古来の街道はほとんど海中に没し、安政元年(1854年)の大 地震では「片浜十三里」が崩壊し、大津波の記録がある。このように巨くから続く海岸侵食の歴史の中で、沿岸 では海岸付近の半島半島の生活から次第に海岸から離れた生活圏へ移行し、昭和43年の豊川用水の完成 から背後の近所に豊かな農業経営基盤が形成された。現在、海食崖、海岸林が自然の脅威からの盾となつては いるものの、潜在的に地域住民の自然への畏れおそは強い。	静岡県建設部ホームページ(遠州灘海 岸保全基本計画(平成15.7静岡県・愛 知県))

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書
③津波による史跡							
1636	寛永13	豊橋市	三河湾	豊橋市野田	豊川の洪水や台風時の高潮など	野田村は書どう切れど呼ばれていた。豊川の洪水や台風時の高潮などでしばしばこの辺りの堤防が切れたからである。寛永13年(1636)に津波に襲われ、その後倒壊した外野集人正の墓老三輪左五門が後分に来たときどう切れは不吉な呼び名だからと、水野の野をとって野田と名づけたという。	原書2
1668	寛文8	豊橋市	三河湾	前芝	津波	寛文8年(1668)吉田藩主小笠原山輝守の重臣が船が破損し難しかけた。さつとく、前芝に灯明台が建設され、翌9年8月に灯が点された。当時、近くには湖島、伊勢の神島しか灯明台はなかった。この灯明台は津波(高潮)や台風にも倒壊したり、流出したが、その都度だちに修復され、灯を点しつづけてきたのである。	校区のあゆみ 吉田方 校区のあゆみ 前芝
1707.10.28	宝永4.10.4	東三河全体	太平洋岸	豊橋、田原市などの表浜地区	大津波	多くの集落がそっくり後背地に移った。いまも海岸そばに、当時をしの碑などが建つ	東愛知新聞(2011.4.16)
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小松原	津波	江戸時代の小松原村は、一村一団東観音寺鎮であった。東観音寺は行基菩薩の開闢と伝えられ、鎌倉から室町時代にかけていよいよ栄え、江戸時代に人口も徳川氏の庇護を受けた名刹である。この東観音寺は元来海岸近くに立っていたが、宝永4年(1707)の大津波に伴う津波で大きな被害を受け、正徳3年(1713)に至って海岸より離れた現在地へ移転したもので、左の図は東観音寺が海岸近くに位置していることから江戸時代前期のものと考えられる。	絵図から地図へ—移り変わる豊橋の風景— 小松原村絵図
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	寺沢(東満寺)	大津波	【小松原観音寺古境内図】に縮尺した実測図で、南北に細長い同村田畑の地村との入り込みを色分けして示し、小松原村の田畑は黄土色、東隣小島村の田畑がオレンジ色、その西、西七根村の田畑が白色で示されている。 集落は家の形で表し、太平洋の海岸沿いに多く集まっている。また道は条線で表し、吉田・大岩・二川などの行き先を記している。この図を早ても離れた原野の中の会館を中心として耕田が点していることがわかる。 これに対して上記の図は、非常に概略的ではあるが、東観音寺が内陸部に位置することから江戸時代中期以降の小松原村の絵図である。この図には東観音寺のほかに集落をまます家の形が内陸部に多く描かれており、図下の小松原村の行基菩薩の表記があることから、津波の被害によって多くの集落が内陸部に移ったことがわかる。 東満寺の行基菩薩の表記から、墓地にありの坂道の入り口に、昔むした行者塔が祀基ある。 寺沢向の東満寺本堂から、墓地にありの坂道の入り口に、昔むした行者塔が祀基ある。 一中路— 今から380年ほど前、慶長年間までさかのぼる。北陸地方の某藩の武士が1人、父の仇をさがし求めて全国を歩き回るうちに、いつしか路銀も使い果たしてしまい、流浪の真にて寺沢の東満寺の仏門をたいた。 ある日、ほん然として悟った彼は、長い履しゆの夢から覚め、仇打ちをやめて醫かしい故郷へと思つてはみけもの、今さら仇を討たずに帰郷もできず、思いあまつた来に弘縁を得た三河の東満寺に杖を置ひ、語をまゐめて仏門に入り安禪禪師の弟子となつた。 本郷西の行者塔は、彼が後年この寺の住職となつたときに西国33か所の美しい思い出に加え、彼と同じ諸々の悩み悩みをもつ親しい運路を名の幸を願ひ、海岸の墓地に建てたものだという。 宝永4年(1707)の大津波のときも、この塔だけは不思議にも残つて現在に至っている。	校区のあゆみ 小沢
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小松原(東観音寺)	津波	東観音寺には東観音寺古境内図と呼ばれる参詣曼荼羅(横一六六・〇cm、横一四五・〇cm)がある。東観音寺は宝永四年(一七〇七)の津波により現在地へ移転しているが、本図は移転以前の境内を描いている点で貴重である。	東観音寺展
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小松原(東観音寺)	津波	小松原の海岸へ下りる途中、如の一角に雑木林が残されている。中に踏み入ると開山行基菩薩と刻まれた石碑が建っている。 ここは以前、東観音寺があったところである。 宝永4年(1707)津美半島一帯に被害をもたらした大地震により、部落が移動した。これを機に東観音寺も宝永5年(1708)から享保元年(1716)にかけて現在地に移転した。	校区のあゆみ 小沢
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小松原(東観音寺)	大海嘯	宝永四年(一七〇七)の大地震、大海嘯のために、寺は部落もろとも消滅し、ようやく正徳末年(一七一五)頃に建て、現在地への移転が完了したのである。所掲図は宝永四年の大海嘯以前、真文洞(一六六～一七三)の境内図で、立派な堂塔伽藍、多くの参詣者、山下の海辺に遊ぶ民衆、往来の人々の様子などが精密に写実的に描かれており、東観音寺の旧跡をうかがう好資料であるとともに、近世前期の地方風俗画としても貴重である。	豊橋市史 第二巻
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	海岸付近の小丘上にあつた小松原の東観音寺	宝永地震と大津波	【小松原観音寺古境内図】 江戸時代初期の小松原観音寺古境内図を見ると、下方に荒々しい波の打ち寄せる太平洋と海船や碇船が描かれていた。地引き線を引きく潮師の姿も見られる。波打ち際には伊勢街道が通り、暖簾を下げた町屋の前を、多くの人や馬に乗った武士などが往來している。伊勢街道から参道が丘陵に向かって分かれていて、開拓谷を流れる川に架かった橋を渡り、坂道を上がりながら、境内へと入る。丘陵の裏に徳義堂の観音堂や阿彌陀堂、多宝堂が建てられている。境内のすぐ下は狭い道になっていて、田畑を耕す百姓も描かれている。江戸時代初期には、海岸付近の小丘上にあつた小松原の東観音寺も、宝永地震と大津波により伽藍の大部分が破壊された。7年(一七一八)町(約1.9km)北側の現在地に移転している。	田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市	太平洋岸	小島、寺沢、西根	宝永地震と大津波	【小松原村絵図(江戸時代前期)】 東観音寺が海岸近くに位置していることから江戸時代前期のものと考えられる。図は1町を1寸(約3600分の1)に縮尺した実測図で、南北に細長い同村田畑の地村との入り込みを色分けして示し、小松原村の田畑は黄土色、東隣小島村の田畑がオレンジ色、西隣寺沢村の田畑がオレンジ色、その西、西七根村の田畑が白色で示されている。	絵図から地図へ—移り変わる豊橋の風景— 小松原村絵図

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	太平洋岸	御厨神社(西七根)	大津波	【御厨神社線馬】 去れ安政元年夏霜月四日 朝五ツ頃天地も崩る斗り 大地震也 此日宿願有りて 氏神社へ参籠す 地しん治れ 八我家へ帰る 網舟共草草なく 先浜辺へ参り候へば最早 大津波来りて 村々の網舟 悉く押流され目にも掛る 物もなし 即舟の網 山の半八にたよむ様き 是ばかりに 氏神の真跡と 身の毛もよだちて 尊し 隣村産 坂と大根所持の網 此業共 右の舟にて鼻出す 数多の漁船獲りなく 打ちくたかれ 即舟斗り空廻し即り候ハ 口裏にあらず 余りの有難さに 此始振を額に存えて 即子孫の果しに至る迄 神明の真跡を 仰き奉らんが為 轉幸もの也 慶應三年 丁卯四月五日 備に應じて 周岳之を因す	御厨神社高司 鈴木源一郎(平成二十年十月吉日)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	豊橋市	太平洋岸	豊橋市西七根町(御厨神社)	大海嘯	豊橋市西七根町の御厨(みくりや)神社(鈴木源一郎寄司)に、安政の東海地震(1854年12月23日)の惨状を伝 える線馬が保存されていることがわかった。線馬には、浜元の海岸に襲ってあった漁船が大津波によって神社 裏の小高い山に打ち上げられた様子が描かれている。 線馬には以下の書きが添えられている。「去る安政元年夏霜月四日朝五ツ頃 天地も崩るはかり大地震なり (略)まず浜辺へ参り候へば、もはや大津波来りて、村々の網舟(網を繋ぐ舟)ごとく押し流され目にもか たるものなし だが産坂と六郎持の舟のみ山の半八にたよむ様き (略)幾多の漁船獲りなく打ち砕かれ」 線馬は、地元の網元高橋徳十郎が地震から13年後、同神社が再建された慶応3年(1867)に舟だけでも助かつ たのは、神氏のおかけだと感謝し、神社の裏山に打ち上げられた舟の彫材を線馬の額にして懸納した。同神社は 当時海岸のすぐ近くにあり、安政の大地震震源に約180メートル離れた舟の現在の地に移った。	東日新聞(2011.12.14)	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	三河湾	江比間村	大地震の後の高潮	内面に面する海岸に祀られていた「一本松御宇」の、舟天社、半頭天王社が、大地震の後の高潮で境内の浜が 欠け、松の立ち枯れ等があり、安政五年(1858)六月に前山の土地に移した。	瀧美町の民族探訪	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	伊古部	高潮、大津波をともなっており、言い伝えては推定29メートルの高台まで海水が上がった	●震災、顔めの石碑 碑文 既白大王(太陽神)、八大竜王(水神) 根請大明神(海岸守護神) ●この石碑は安政6年に網元の山本殿さんが震災が二度と起きない事を祈って立てました。 安政元年(嘉永7年)の地震について「安政元年(1854)11月4日午前9時頃と、5日午前5時頃続々2度ずつわたり 起きたマグニチュード8.4と、言われる大地震により伊古部村の大明神山が800メートル高台へ押し出され一つの島 となった。漁翁に使う舟、網とも高潮に襲われ引かれた。幸願の御魂、流出基本なり」と古文書に記されている。こ の地震は大津波をともなっており、言い伝えては推定29メートルの高台まで海水が上がったとのことである。	震災顔めの石碑、及び案内板	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	堀切～日出	津波対策	地中でかいがらばとよと呼ばれる津波抜けの溝を太平洋岸(まで)に築いたりした。なお、これらの教訓によりそ の後の地震(昭和19年、東南海地震等)では、比較的被害が少なかった。	「近代未開事」高瀬家所蔵文書・「助郷免除願書」堀切区有文書・「常光寺年代記」常光寺文書・清田治「瀧美半島における嘉永東海地震の実状-現存する災害記録から-」『研究紀要』第7号『瀧美町郷土資料館』平成15年3月・「堀切村村絵図」等	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	堀切～日出地区	大津波	人家や先祖伝来の田畑を守るために、浜に沿った防溝林の中に波除け溝を長い年月かけて掘いてきた。地元(日出地区)では、特産のいり貝やかき貝殻をその程度積み上げてきたので、「かいがらば」と呼び、昭和30年 代くらいまで大事にされてきた。	清田治「瀧美半島における嘉永東海地震の実状-現存する災害記録から-」『研究紀要』第7号『瀧美半島郷土資料館』平成15年3月	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	堀切村	大地震、大津波	近代未開之事 右者当貞年迄三年、不漁凶作因海嘯二附、其後当十一月四日諸国大地震、大津波二附、海辺通りの破損之 儀ハ、当所之家財唐宅破損之儀者、本門内治三家、物数式百八拾七、人数九人、牛馬七疋并二宗方漁具道真 座候、并二隣村破損之儀八日出村、東部切村二ヶ村ハ少々之御難事ニ御座候、地震之儀ハ諸国前年●御座候 如、先年●地震實況(※實情)之如也、大津波之儀者驚入、跡二海辺多し申内、当所大難事ニ御座候、跡二村 方謀所(※業所 七所)之事、村中一度非人乞儀ト申候也、且今二候、津波之節ハ流失之及し者、檀那寺常光寺 方二而御教(ナサケ)、世者(※世話せむ)、牛馬二迄痕事皆下候、跡二御申候事、是●隣村迄も野山二透 難儀致候儀、日出村山二登り、真小堀津村二而清御林山二登り、当村方二而ハ常山氏神山二登、老女子供 二便り見せ申候事、此儀平日二御咄可申候様、右者当貞年迄四年亥十月四日大地震、算津波二西傳喜七八賢、人 數計人、此儀者左傳次儀者左傳次之 儀ハ、孫計人、船二崩壊場流失之事、是業之如、依而如件 安政元年貞十一月四日 去年丑六月十四日巳二而大地震桑名四市(※四日市)辺破損二而、人多死ル成妻子女三ヶ年六十餘二而米杯 一切なし、丑年●先之事ニ御座候也 当貞年之十一月四日巳二而大地震、皆々日二多地震振なり 安政元年貞十二月十二日改、右者先年●天災津記之事 三州瀧美郡堀切村 渡倉氏金吾侍 金藏と申者書判	瀧美郷土資料館 葉山茂生氏翻訳 高瀬家所蔵	
1854.12.23	嘉永7.11.4	田原市	太平洋岸	日出村	近代未開の大津波	この近代未開の大津波の被害を受けてから、堀切村や日出村では、村の南側の浜辺に面して築かれた津波除 けの堤防の補強に努めるようになった。特に日出村では、地元特産のいり貝やかき貝殻を積み上げていたの で、今でもこの堤を「かいがらば」と呼んでおり、近年まで子供等がこの上で遊ぶのを、年寄達は嫌っていた。	瀧美町の民族探訪	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4.5	豊橋市	太平洋岸	西七根	津浪	嘉永七年(一八五四)に一個に云われている「安政の大地震」が起った。安政の大地震は一月四日、五日と二 日にわたって雪水地震と同様に關東以西の太平洋岸に大きな被害を及ぼした。一中略一西七根御厨神社線馬(巻 取写真)には「高塚村の産築と六根の漁船が津浪後西七根の浜辺に打ち上げられた」と記してある。	高聖史 西七根御厨神社線 馬ノ下永長傳歴日 記	

西暦	旧暦	市町村	湾/外海	地名	津波	津波による被害内容	原書	原書2
		豊橋市	三河湾	小池町	津波	<p>あくる年に、三河に大地震があったそうじゃ。七月九日じゃと言われどるかのう。三河のあちこちで、うちはぶつつかれるし、海辺の村にやあ津波がくるし、そりゃあ、えれえことしやった。(省略)</p> <p>村の衆は、われ先にと逃げてもうた。どん作は、「そつじゃ、こんな時こそ、長円寺の観音様に助けてもらおう。」と言って、長円寺の観音堂の前にひれふして、「観音様、どうか津波を止めてください。おらんどの田畑やちやを守ってください。おかげでござえます。」と、くりかえしくりかえしお祈りしたんじやと。(省略) おしよせてきた津波が、ふしぎなこと、長円寺の下までくると、止まったんじやと。(省略)</p> <p>「長円寺は、おらが村のたいしなお寺じゃ。と言つて、みんなが参りするようになった。(省略)</p> <p>お坊さんまであつくほつて、みんなで力を合わせて、長円寺をりっぱなお寺に建て直してのう。新たに仁王門も作った。長円寺の下で津波が止まったということで、そのあたりの土地を、村の衆は「こまで潮が湧ちてきた」ちゆう意味で、潮溜(しおみち)とよぶようになった。後に盛衰と書くようになった。(省略)『海の潮の音が聞こえた寺』ちゆうことで、長円寺は、いっしょか潮音寺と呼ばれるようになった。地震と津波のあった七月九日を潮音寺のおまつりの日にした。</p>	豊橋市立福岡小学校ホームページ	
		豊橋市	三河湾	高師(小浜町)	津波	<p>「地しんがだ!」二人が立っておれん程の大地しんが。浜で寝ほいになつたと、沖の方でコーツという音がする。「津波だ!」こりやあ、こつちやあおれんぞ。早く濡いとこへ逃げろ。「津波だあ、津波だあ!」(省略)</p> <p>津波がひいてから、しがまじよほど、もどつてみると、土台の石だけを残して、建物も道具もこつそりと、津波が海へさらちて行つてもうた。「おみよ、雛の下の雛が残つとるかも知れんぞ。」どろをよけて、かめをうめた所をほつてみると、「やい、雛だけは、全部残つとるぞ!」よかつたのん。それだけありやあ、小さなうちが運つたらあ。(省略)</p> <p>この小さな海辺の村も、普通の平和な村になつてのう。小さな海辺の村ちゆうことで、小浜村ちゆう、名になつたそうな。</p>	豊橋市立福岡小学校ホームページ	

参考資料 2

各市における津波被害年表

参考資料2-1 豊橋市における津波被害年表
(1) 三河湾沿岸

項目	西暦	旧暦	渥美半島全体	三河湾沿岸(豊橋市を中心)	前芝	下五井(津田)	下地・松葉(吉田橋含む)	吉田方全体	馬見塚(吉田方)	高須・土倉新田(吉田方)
①津波の被害状況	1096.12.17	嘉穂3(永長1).11.24		・渥美半島裏浜:永長津波(1096年)の場合の史料はみあたらないが、慶長や宝永津波の場合と同じような影響があった。慶長や宝永津波では、堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなどの被害があり、浸水も著しく、田畑等に被害を与え荒廃地となった所も多かった。(東海地方地震・津波災害誌)						
	1498.7.23	明応7.6.25		・草間(磯辺)において、大津波の被害あり。(校区のあゆみ 磯辺(草間区地誌略))						
	1498.9.20	明応7.8.25		・吉田:3-4m(東海地方地震・津波災害誌) ・豊橋の被害が大きかったので波高も4mくらいに達したと思われる。(東海地方地震・津波災害誌)						
	1605.2.3	慶長9.12.16		・吉田:津波の高さ3m(東海地方地震・津波災害誌) ・渥美半島裏浜:慶長や宝永津波では、堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなどの被害があり、浸水も著しく、田畑等に被害を与え荒廃地となった所も多かった。(東海地方地震・津波災害誌)						
	1703.12.31	元禄16.11.23	・渥美:波高2m(東海地方地震・津波災害誌) ・津波により、渥美半島では死者が多く、船、網、漁具等が流失した。(愛知県災害誌)							
	1707.10.28	宝永4.10.4		・吉田:波高約3m。津波が海岸新田へ浸入したが大きな被害はなかった。(東海地方地震・津波災害誌)	・梅藪村の塩田が全滅(蒲郡市史 本文編2 近世編) ・(前芝)宝永4年の富士山噴火による大地震の時塩浜を失った。これがのち山内新田となった。(校区のあゆみ 前芝)				・宝永四年から取高が激減している。これは宝永四年の大地震と津浪等をはじめとしてこの間天災地変があいついだため(豊橋市史 第二巻)	・高須・土倉新田の堤防が破損して大被害があった。(愛知県災害誌) ・高須土倉地区の堤防が決壊、潮水が流れ込んで田畑の作物皆無となり(校区のあゆみ 吉田方)
	1680、1705、1707、1710	延宝8、宝永2、宝永4、正徳元		・高須・土倉新田(吉田方)、松島新田(汐田)において、宝永4年の地震・津波を含む、自然災害による津波や高潮で何度も大きな被害を受けている。(牟呂史)						・延宝八年(1680)、宝永二年(1705)、同四年、正徳元年(1711)とたびたび、津波や暴風雨による堤防決壊の被害を受け、新田はほとんど海底に沈んでしまい、新田百姓は屋敷の周囲に自力で堤を築き、牟呂・日色野方面の畑地を借りて耕作し、新田を守りとおしたという。(牟呂史(高須新田・土倉新田・下野新田開発記録))
	1854.12.23	嘉永7.11.4-5	・波高2-10m(東海地方地震・津波災害誌)	・波の高さ3-4mと推定される。豊橋の被害が大きかったので波高も4mくらいに達したと思われる。(東海地方地震・津波災害誌) ・吉田(豊橋):海辺では津波が浸入して田畑90.1ha余に海水、砂入等の被害を与えた。流失家屋4軒、難破船、生死不明3名、怪我人1名あった。(東海地方地震・津波災害誌)(豊橋市史) ・死者一四人、高潮による溺死者一人、行方不明者三人など悲惨な結果をもたらした。(とよはしの歴史) ・渡船(今切)流失破損四八隻、漁船流失破損九二隻(高豊史(尾三遠地震小史による)[山本忠佐日記])			・高汐が発生。大川(吉田川)の水位は三合位に増水し逆流。幸い吉田の大橋は橋上の往来に支障を来す程の損傷は免れた。(逐城解説 詳説・吉田城と池田照政(『西村次右衛門日記』豊橋市史々料叢書二・三))	・新田各所では堤が決壊して潮水が入るようになった所も少なくなかった。(校区のあゆみ 吉田方) ・田畑の損害は東面に軽く、西面重し。(郷土史料第三輯 吉田方の沿革 上巻) ・吉田方四十七軒倒壊、外の家は半ころび、吉田城半ころび、堤こわけ入り、高須新田、吉川村川田まで汐来る。吉川堤百二十間、幅三尺、天神西堤は二十三間、中地堤は二十間ものならず。校区のあゆみ 吉田方(吉川村大林弥平太記)	・高洲新田:波高3m。堤防破壊して大被害があった。(東海地方地震・津波災害誌) ・高須新田:死人なし。(郷土史料第三輯 吉田方の沿革 上巻)	
1944.12.7	昭和19.12.7		・(三河湾)1m位の津波。被害はなかった。(愛知県災害誌)							

項目	西暦	旧暦	渥美半島全体	三河湾沿岸(豊橋市を中心)	前芝	下五井(津田)	下地・松葉(吉田橋含む)	吉田方全体	馬見塚(吉田方)	高須・土倉新田(吉田方)
①津波の被害状況	1945.1.13	昭和20.1.13		・豊橋:津波がみられた(東海地方地震・津波災害誌) ・(三河湾)波高が1mくらいが最大でほとんど津波被害はなかった。(東海地方地震・津波災害誌) ・豊橋:最大全振幅33cm(東海地方地震・津波災害誌)			・船町:最大振幅(cm)17(第5波)、津波周期(分)15-28、平均(分)20、初動押波。(東海地方地震・津波災害誌)			
	1946.12.21	1946.12.21		・(三河湾)津波は小さく、被害はなかった。(渥美郡災害年表)	・前芝:第1波が押し波ではじまっている。(愛知県災害誌)					
	1960.5.24	昭和35.5.24		・前芝:津波2.1m、豊橋:波高1.04m(東海地方地震・津波災害誌) ・(三河湾)津波は渥美湾にも侵入してきたが、波高は低く、そのうえ最高波が到達した時刻が干潮時にあったために潮位はあまり上がらず、渥美湾沿岸の一部に若干の家屋浸水をみた程度の被害ですんだ。(渥美郡災害年表)	・前芝:津波2.1m(東海地方地震・津波災害誌) ・前芝:津波来襲回数7回、津波の周期35~75分、津波の振幅20~50cm(愛知県災害誌)					
	2010.2.28	平成22.2.28		・三河湾岸の三河港豊橋地区で10センチ(同4時51分)、第2波は三河湾岸では確認されなかった。(東愛知新聞) ・豊橋市では、三河湾で1メートルの津波が予測されるとし、同日午後1時30分に「避難準備情報」を三河湾沿岸と河口部付近に発令した。同市内の三河湾沿岸部の老津から前芝一帯の防潮堤に設置されている陸間、立切などの扉48カ所を閉じた。(東日新聞)						
2011.3.11	平成23.3.11		・三河港豊橋地区では同5時42分に高さ40センチの津波を観測した。(東愛知新聞) ・豊橋市は同3時32分、災害情報連絡室を開設。海岸近くの人々に対し、避難勧告を発令した。津波に備えて市広報車4台と消防団の5つの方面隊が太平洋側と三河湾を広報と巡視に回った。午後5時には災害対策会議を開き、施設の被害情報の共有、今後の連絡体制などを確認。(東日新聞)							
②津波による神社等の移転、史跡、言い伝え							【津波による史跡等(嘉永7.11.4:豊橋(とよばし))】 ・江戸時代を通じて豊川に架る「豊橋」は、三十数回の橋桁の流失を記録している。東海道の重要な橋であったため、幕府直轄工事で補修が行われた。(幕府直轄の橋は四つあるがその一つ)さらに、河口が三河湾に臨んでいるため、潮の満ちこみにより、海水が河口から11km地点まで遡上するので、上流の大雨と重なると洪水を引き起こした。(ふるさと津田)。以下、地震・津波に関係すると思われる記述を抜粋。 ・1596年-1615年(慶長年間)津波のため橋が流されたので架け替え工事。(郷土誌 下地)(地震による津波かは不明) ・1707.10.28(宝永4.10.4)吉田大橋の修繕が行はれたが、これは大震災の結果によるもので、所謂小破修繕であつた(國史上より観たる豊橋地方)(津波の影響かは不明) ・1854.12.23(嘉永7.11.4)高汐が発生。大川(吉田川)の水位は三合位に増水し逆流。幸い吉田の大橋は橋上の往來に支障を来たす程の損傷は免れた。安政4(1857).5.14、先月末(4/26期)から降り続く雨により大川(吉田川)が増水し、3年前の大地震では軽傷であつた大橋を、猛烈な水勢と上流から筏と思われる夥しい量の材木が直撃し、橋梁の約30間(=約54m)が流失したのだ。城郭修復もままならないところに、洪水により吉田の大橋が三十間程流失した。(逐城解説 詳説・吉田城と池田照政『西村次右衛門日記』豊橋市史々料叢書二・三))			

項目	西暦	旧暦	青竹新田(吉田方)	富士見新田(牟呂)	松島新田(汐田)	磯辺	芦原(高師)	大崎	老津	小池(福岡)	小浜(中野)
①津波の被害状況	1096. 12.17	嘉穂3 (永長1). 11.24									
	1498. 7.23	明応7. 6.25				・大津波によって海辺の多くの人々が住まいを破壊された。(校区のあゆみ 磯辺(草間区地誌略))					
	1498. 9.20	明応7. 8.25		・牟呂吉田:津波の高さ3-4mと推定。(東海地方地震・津波災害誌) ・牟呂吉田:吉田村大字牟呂大西の素盞鳴神社が流失。(東海地方地震・津波災害誌)			・高師浜に高波がきた。高さ約3m程度と思われる。(東海地方地震・津波災害誌)				
	1605. 2.3	慶長9. 12.16									
	1703. 12.31	元禄16. 11.23									
	1707. 10.28	宝永4. 10.4				・津波が海岸に打ちよせ堤防を破壊し品井潟・広嶋などに流れ込み、砂浜になってしまった。(校区のあゆみ 磯辺(草間区地誌略))					
	1680、 1705、 1707、 1710	延宝8、 宝永2、 宝永4、 正徳元			・高須・土倉新田等と同様に津波や高潮で何度も大きな被害を受けている。(牟呂史(郡史資料牟呂吉田村))						
	1854. 12.23	嘉永7. 11.4-5	・青竹新田の外新田凡百町歩程のもの堤溜りの個所出来汐入る。(郷土史料第三輯 吉田方の沿革 上巻)	・弘化四年(1847)に修築に成功した。しかし、嘉永7年(1854)の大地震で再び破損し、その後幾度かの修築計画が出たが成功せず、明治にいたった。(牟呂史)		・津波によって草間村の海岸は決壊してしまった。(校区のあゆみ 磯辺(草間区地誌略))	・三河湾に大津波襲来、家屋敷流失多数、道目記地区(大山町)は松井に屋敷替えした。神社も移転した。浜海道船原(浜道町)の一部は高地へ屋敷替え(移転)した。(校区のあゆみ 芦原)		・波高3-4m。倒壊家屋40戸、山崩れのほか津波がきた。(東海地方地震・津波災害誌(常光寺年代記))		
1944. 12.7	昭和19. 12.7				・津波は発生しなかった。(校区のあゆみ 磯辺)						

項目	西暦	旧暦	青竹新田(吉田方)	富士見新田(牟呂)	松島新田(汐田)	磯辺	芦原(高師)	大崎	老津	小池(福岡)	小浜(中野)
①津波の被害状況	1945.1.13	昭和20.1.13						・大崎:最大全振幅52cm(東海地方地震・津波災害誌) ・大崎:最大振幅26cm(第1波)、津波周期(分)10-30、平均(分)20、初動押波。(東海地方地震・津波災害誌)			
	1946.12.21	1946.12.21									
	1960.5.24	昭和35.5.24									
	2010.2.28	平成22.2.28									
	2011.3.11	平成23.3.11									
②津波による神社等の移転、史跡、言い伝え				【津波による神社等の移転(明応7.8.25:素盞鳴神社)】 ・吉田村大字牟呂大西の素盞鳴神社が流失したので現在の地(豊橋駅の西南2km)に移転。(東海地方地震・津波災害誌)					【津波による言い伝え(時期不明:潮音寺の由来)】 ・あくる年に、三河に大地震があったそうじゃ。七月九日じゃと言われとるがのう。三河のあちこちで、うちはぶつつぶれるし、海辺の村にやあ津波がくるし、そりゃあ、えれえことじゃった。(省略)村の衆は、われ先に逃げてしもうた。どん作は、「そうじゃ、こんな時こそ、長円寺の観音様に助けてもらおう。」と言うて、長円寺の観音堂の前にひれふして、「観音様、どうか津波を止めてくたせえ。おらんとこの田畑やうちを守ってくたせえ。おねげえでござえます。」と、くりかえしくりかえしお祈りしたんじゃと。(省略)おしよせてきた津波が、ふしぎなことに、長円寺の下までくると、止まったんじゃと。(省略)「長円寺は、おらが村のだいじなお寺じゃ。」と言うて、みんながお参りするようになった。(省略)お坊さんてあつくほうむって、みんなで力を含わせて、長円寺をりっぱなお寺に建て直してのう、新たに仁王門も作った。長円寺の下で津波が止まったということで、そのあたりの土地を、村の衆は『ここまで潮が満ちてきた』ちゆう意味で、潮満(しおみち)とよぶようになった。後に塩満と書くようになった。(省略)『海の潮の音が聞こえた寺』ちゆうことで、長円寺は、いつしか潮音寺と呼ばれるようになった。地震と津波のあった七月九日を潮音寺のおまつりの日にした。(豊橋市立福岡小学校ホームページ)	【津波による言い伝え(時期不明:小浜村の由来)】 ・「地しんだ!!」二人が立っておれん程の大地しんだ。浜で腹ばいになると、沖の方でコーツという音がする。「津波だ!!」「こりゃあ、こうしちやあおれんぞ。早く高いとこへ逃げろ。」「津波だあ、津波だあ!!」(省略)津波がひいてから、しよぼしよぼと、もどってみると、土台の石だけを残して、建物も道具もごっそりと、津波が海へさらって行ってしもうた。「おみよ、縁の下の銭が残っとるかも知れんぞ。」「どろをよけて、かめをうめた所をほってみると、「やい、銭だけは、全部残っとるぞ!!」「よかったのん。それだけありゃあ、小さなうちが建つらあ。」(省略)この小さな浜辺の村も、普通りの平和な村になってのう。小さな浜辺の村ちゆうことで、小浜村ちゆう、名になったそうな。(豊橋市立福岡小学校ホームページ)	

(2) 太平洋岸

項目	西暦	旧暦	東三河全体	太平洋岸(豊橋市を中心)	高豊	城下(豊南)	赤沢	伊古部
①津波の被害状況	1096.12.17	嘉穂3.11.24	・被害があったと推定(東海地方地震・津波災害誌) ・愛知県内の被害不詳。(愛知県災害誌)	・波高3-7m(明応津波はやはり高い6-8mの波高と思われるが永長津波はやや低かったように思われる。)(東海地方地震・津波災害誌) ・慶長と同様(慶長の津波においても船の破損、魚網、魚具類の流失など)の被害があり(東海地方地震・津波災害誌)				
	1498.7.23	明応7.6.25	・豊川の河流が変化した(愛知県災害誌)					
	1498.9.20	明応7.8.25	・浜辺では高津波のために滅亡したところがある(東海地方地震・津波災害誌)(大日本地震史料) ・三河に津波があったとある。(愛知県災害誌(武家年代記))	・津波5-8m(東海地方地震・津波災害誌) ・大地震、地破同時大海潮(大津波)来諸国湊浦々津々人家倒死者多数。(老津村史(細谷村記録常光寺年代記)) ・大地震津波襲来(校区のあゆみ 高豊)				
	1586.1.18	天正13.11.29	・津波が起り、家屋の流失、人畜の死傷もおびただしく(高豊史)	・津波が渥美表浜に波及したものと考えられる(東海地方地震・津波災害誌) ・大地震津波襲来(校区のあゆみ 高豊)				
	1605.2.3	慶長9.12.16	・津波は東は犬吠岬から西は九州におよび各地で甚大な被害を受けた。しかし尾張・三河に関する記録はないので、愛知県下の被害はあっても軽微だったと推定される。(愛知県災害誌)	・推定波高5-6m(明応津波はやはり高い6-8mの波高と思われるが永長津波はやや低かったように思われる。)(東海地方地震・津波災害誌) ・片浜の船皆打ち破れ、漁網も流出した。(東海地方地震・津波災害誌(常光寺年代記))				
	1703.12.31	元禄16.11.23	・波高2m(東海地方地震・津波災害誌) ・津波により、渥美半島では死者が多く、船、網、漁具等が流失した。(愛知県災害誌)	・この津波にて漁舟多く流さる。(赤羽根町史(常光寺年代記))	・津波起り、七ヶ村の漁師漁具類一切流失。この時、高塚村若宮様陸地に遷宮。(高豊史)			
	1707.10.28	宝永4.10.4	・波高3-7m(東海地方地震・津波災害誌) ・渥美半島では南方で大いに鳴動し、14時ごろに大津波があり、村村の漁具は流失し、山はくずれ、谷は埋まり、多くの人馬が死亡した。被害の最も大きかったのは、野田村の七郷だったが、被災地は赤沢・井古部・西伊古部(遠州灘沿岸)等34か所におよび、また5km四方の海中に島ができたともいう。この夜、余震が3・40回もあり、余震は翌春までつづいて、多くの田畑に海水がはいるようになった。(愛知県災害誌(参河国聞書 三州吉田記・宝永地震記))	・波高6-7m(東海地方地震・津波災害誌) ・渥美の太平洋沿岸に津波の被害が大きく。(東海地方地震・津波災害誌) ・太平洋沿岸の村落は大半が流失してしまった。これを契機に東観音寺・常光寺などをはじめ多くの寺社や村落が北方の高地に移転し、それまでの街道は修復できないまでに破壊された。(愛知県文化財調査報告書第六六集-田原街道・伊勢街道-) ・当浜津波挙り、十三里間の漁船尽く流損し、一村にて一両人宛死す。(赤羽根町史(常光寺年代記)) ・遠州灘沿岸では5-6町四方の海中に島ができたが、これは潮が引いたので現われたものかもしれない。(東海地方地震・津波災害誌)	・津波おこり家屋大破、漁船流失(高豊史) ・津浪がおし寄せ舟と網のすべてを流した。暮迄余震が続き、三度津浪が押し寄せ、浜は皆海になった。(高豊史(高塚村庄屋の田中八衛門文書))	・波の高さ6-7m(東海地方地震・津波災害誌)	・波の高さ6-7m。(東海地方地震・津波災害誌) ・太平洋に注ぐ開析谷の小河川に、宝永地震の大津波が浸入した。川筋の標高数m付近にあった村落が被害を受けた。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)) ・被災地は赤沢(愛知県災害誌(参河国聞書 三州吉田記・宝永地震記)) ・赤沢、伊古部の海中浜中に島山ができた。(校区のあゆみ 細谷(細谷校区史)) ・被災地は赤沢、伊古部、西伊古部など34ヶ村に及んだ。また、5町(約500m)四方の島が海中にできたという。この夜は余震が30~40回もあり、余震は翌春まで続いた。(藤代氏:高さ6~7mの大津波が引く際に、幅500~800mほどの海底が出現し、島のようになったものと考えたい。)(田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)(参河国聞書、三州吉田記))	・伊古部の漁業は大きな災害を受けた。船、網、道具などの多くが流失した。網の復活をはかるすべもなく、二~三人の個人が小網を作り細々と漁を続けた。(伊古部郷土誌) ・被災地は井古部・西伊古部(高豊史(高塚村庄屋の田中八衛門文書)) ・赤沢、伊古部の海中浜中に島山ができた。(校区のあゆみ 細谷(細谷校区史)) ・被災地は赤沢、伊古部、西伊古部など34ヶ村に及んだ。また、5町(約500m)四方の島が海中にできたという。この夜は余震が30~40回もあり、余震は翌春まで続いた。(藤代氏:高さ6~7mの大津波が引く際に、幅500~800mほどの海底が出現し、島のようになったものと考えたい。)(田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)(参河国聞書、三州吉田記))
	1854.12.23	嘉永7.11.4-5	・波高2-10m。三河湾・遠州灘の沿岸に津波が襲来し被害があった。(東海地方地震・津波災害誌)	・波高8-10mで被害あり(東海地方地震・津波災害誌) ・表浜(遠州灘沿岸)は大津波におそわれたが、倒壊家屋、山くずれがあり、余震は7か月ばかりつづいた。(愛知県災害誌) ・安政元年(1854年)の大地震では「片浜十三里皆がけくづる」と地元の記録にある。(静岡県建設部ホームページ(遠州灘海岸保全基本計画(平成15.7静岡県・愛知県)))	・城下、赤沢、伊古部、高塚にて津波被害の記録あり。(東海地方地震・津波災害誌)(高豊史)	・波高は地形から6-7mと推定。浜漁道具の品残らず流失。(東海地方地震・津波災害誌)	・津波の高さ6-7m(東海地方地震・津波災害誌)	・津波の高さは地形から6-7mと推定。渥美表浜において道具船3隻のうち1隻大破し、2隻流失した。地引網4状、登網38、大袋4口、中袋2口、下袋2口その他船道具残らず流失した。居宅も高波で大破した。(東海地方地震・津波災害誌) ・伊古部村宇大羽山(西伊古部海岸のことか)は凡そ八〇〇メートル海中へ押し出され、一つの島となってしまった。そして船、網ともに高浪に残らず引かれてしまった。(高豊史(下永良陣屋日記))
	1944.12.7	昭和19.12.7	・津浪ニヨル災害ハ熊野灘沿岸ニ限ラレ、遠州灘沿岸、伊勢湾内等ニモ到達シタケレドモ災害ヲ生ズルニハ至ラナカツタ(伊古部郷土誌(昭和五十年(一九七五)愛知県防災会議が復刻した文書))	・波の高さ1-1.5m(東海地方地震・津波災害誌) ・太平洋沿岸デハ地震直後海水ハ引イテ行キ約三分位ノ後、カエンテキタ。然シ波浪ハ強クナカツタ。(伊古部郷土誌(愛知県渥美半島災害状況調査)) ・波高は宝永や安政津波の約4分の1くらい(※宝永・安政両津波はだいたい同じ高さの6-8m)となっており、かなり低く被害も生じていない。(東海地方地震・津波災害誌)	・海岸ニテハ引潮ハ一潮迄露出シタルモ、ツナミモ来ラズ被害ナシ。(高豊史(高豊村の被害報告書))			

項目	西暦	旧暦	東三河全体	太平洋岸(豊橋市を中心)	高豊	城下(豊南)	赤沢	伊古部
①津波の被害状況	1945.1.13	昭和35.5.24		・渥美半島にやはり押し寄せたらしいのですが、その時二から五メートル来たではないかと言われています。(ふるさと細谷)				
	2010.2.28	平成22.2.28	・第1波は太平洋に面した田原市赤羽根で40センチ(午後3時40分)、第2波は田原市赤羽根で70センチ(午後4時37分)を記録。(東愛知新聞)	・赤羽根で最大70cmの津波の記録あり(東愛知新聞) ・表浜の海岸には多くのサーファーらが、サーフィンをしていたが、津波警報発令と同時に同市消防団、消防本部などの車両延べ47台と人員294人が巡回して避難を呼びかけた。(東日新聞) ・今回の「騒動」で、豊橋市伊古部海岸ではサーファー対策が浮き彫りになった。午前11時すぎ、数人がサーフィンを楽しんでおり、そこに津波襲来に関する「緊急情報」が流れたものの、ほとんど聞き取れず、サーファーらに情報は伝わらなかった。(東愛知新聞)				
	2011.3.11	平成23.3.11	・津波の第一波は午後5時前に東三河地域に到達し、田原市では午後4時54分、太平洋に面した赤羽根漁港で高さ1.1メートルの津波を観測した。同5時32分、同漁港でさらに大きな高さ1.6メートルの津波を観測した。(東愛知新聞)	・赤羽根で最大1.6mの津波の記録あり(東愛知新聞) ・豊橋市の海岸部に津波注意報が出されたのを確認すると、土本潤一署長は即座に「表浜にバトカーを出せ」と指示。バトカーはすぐに海岸部へ向かった。(東愛知新聞)				
②津波による神社への影響						【八柱神社(城下町)】(宝永地震(津波不明)) ・城下村の八柱神社は赤沢村より分村の当時には前述の通り、祭神として貴船大明神と天照大神であった。ところが宝永六年(一七〇六)以降には祭神が八王子と改められている。その理由は宝永四年(一七〇四)の地震により、それまで塩ヶ嶋一円に居を構えていた村人は四、五町後方の「みそか谷」一帯に居を移すと共にそれまで城下村の三嶋が別々に祀っていた貴船大明神・天照皇太神・砂宮神を一処にあつめ、八王子大明神と改名したのである。(高豊史)	【吉祥院】(宝永地震(津波不明)) ・現在地の南方海岸地にあったが、延宝八年(一六八〇)と天和元年(一六八一)の海嘯のために、少しく北方に移り、後更に宝永四年一〇月四日(一七〇七)の地震により、寺山がくずれ、危険な状態にさらされたために現在地に移転した。(高豊史)	

項目	西暦	旧暦	東三河全体	太平洋岸(豊橋市を中心)	高豊	城下(豊南)	赤沢	伊古部
③津波による住民生活の変化(集落移転の実態)				<p>【表浜の集落の概要】</p> <p>・「表浜」と呼ばれる渥美半島の太平洋岸には、数10～200戸程度の塊村をなした40近くの集落が、断続的に連なっている。この表浜集落も、海食崖の後退に伴い、北方の高地へと移転が繰り返されてきた。現在の集落の南側には「元屋敷」と呼ばれるかつての屋敷跡が各所に残されている。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸))</p> <p>【長谷村(湖西市)～高豊村での集落移転の展開】</p> <p>・長谷村から高豊村にかけては海食崖上の天伯原台地の標高は70mと高いが、開折谷により深く浸食されているため、海食崖の先端部はならだかになっている。江戸時代前期には、集落や耕作地が海食崖の前面に広がる後浜や開折谷の中にあり、半農半漁の生活をしてきた。宝永地震では、崖の崩落や大津波のために、漁具の流出だけでなく、集落自体も大きな被害を受けた。毎年襲来する暴風雨や高潮に悩まされ、海岸沿いの「浜屋敷」から、台地上の「山屋敷」への移転が続いていたが、宝永地震を契機に浜屋敷は完全に放棄された。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸))</p> <p>・高豊村から小塩津村に至るまでの集落については、池尻村を除けば、海崖の崩落や漁具の流出はあったものの、津波による家屋への直接の被害は記録されていない。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸))</p>	<p>【高豊の集落移転の特徴】</p> <p>・城下町の大円寺を始め、西赤沢町の吉祥院、伊古部町の法蔵寺、西七根町の聴松庵、東七根町の東光寺なども、延宝から宝永にかけての自然災害により、海食崖下より現在地に移転している。なお寺院移転にともない家屋の移転も行われその旧居跡などは、高塚町、伊古部町などに今なお残り、伊古部町の「本郷」などはすでに一部が海中となっている。高豊一帯の集落の記録では、江戸時代から現在までの屋敷替えの回数は、実に4回から5回にも及ぶという。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸))</p> <p>【高豊の集落移転の展開】</p> <p>・高豊村の住人の家屋敷は今日判明する限りでは、少なくとも三回から四回の屋敷替を行っている。</p> <p>(1) 貞享三年(一六八六)五月から宝永四年(一七〇一)にかけての地震、津波災害による屋敷替・・・貞享三年から宝永四年の一五年間における屋敷替は村全戸数の大移動であり、それまで渚近くに構えていた家を後背地の丘陵台地に家屋敷を移したのである。高塚町の田中八兵衛文書によると、「貞享三年八月五日の大地震により家裏山が崩れ、大分の家がその下敷となったために、やむなく山屋敷に家を移し家普請をした」とある。そして「家普請に二ヶ月弱の日数を要した」とある。</p> <p>(2) 嘉永七年(一八五四)一月の四国南海上を震源地とする地震、津波災害による屋敷替・・・今日も渚より丘陵台地に家を移した時の山屋敷跡は海の見える丘陵台地上にわずかながら残っている。この山屋敷から更に北方に約一〇〇メートル後退し、屋敷替が行われている。これが嘉永七年(一八五四)一月五日の四国南海上を震源地とした地震災害の被害者らである。今日、各家で呼んでいる「旧屋敷」の名はこのときの屋敷をさしている場合が多い。</p> <p>(3) 昭和一九年二月八日、熊野灘沖を震源地とする地震災害による屋敷替(高豊史)</p> <p>【1707.10.28(宝永4.10.4)】</p> <p>・城下、東西赤沢、伊古部、高塚、東西七根を包含した旧高豊村の地域で、この内高塚、伊古部は野依村、東西の七根は高師村からそれぞれ住昔分村されたものである。この地域の海岸は宝永四年の大津波に欠崩れて住民は数町又十数町後退移転した。随って古来の外浜街道は海岸近くを通っていたものである。(豊橋寺院誌)</p>	<p>【城下の集落移転の特徴】</p> <p>・城下の旧道よりさらに南に、海食によって削られたが、中世後期の豪族畔田氏の居城跡がある。城跡は、太平洋の海岸から50m余の絶壁上にある。出曲輪以南は浸食によって海中に沈んだが、主要部と北側の家臣団の居館跡がよく残っている。南北朝時代には城の南方に低地があり集落があったと伝えられる。「城下」という地名も、城より下にあったからつけられた名である。集落が北へ北へと移動し、城跡よりも北(上)へ移動した後も、そのまま「城下」と称している。(渥美町郷土資料館 研究紀要第2号(加藤克己))</p> <p>・城下岸壁の崖の上に、南北朝時代に居城が築かれ、崖下に集落や水田が存在していた。これが「城下」の地名の起源となったが、海食崖の激しい波浪浸食により海岸沿いの集落は、早い時期に消滅している。江戸時代には、海食崖の上の台地に集落が立地していた。このため、宝永地震では、大津波による集落の被害はなく、浜辺においてあった網や船などの漁具の流出が主な被害として記録された。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸))</p> <p>【貞享3年】</p> <p>・高塚、西七根、城下などの部落が浜屋敷から山屋敷へと移転したのも、この貞享三年の地震の翌年(高豊史)</p>		<p>【伊古部の集落移転の特徴】</p> <p>・江戸時代の伊古部集落の中心は、大塚・本郷・枇杷ヶ谷一帯にあり、海食崖の下を東西に通っていた伊勢街道に近いところが栄えていた。宝永地震を境に、浜辺にあった集落は、段丘崖上に移転した。地下水位が深いため、雨水をためて生活用水に利用しなければならなくなった。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)(伊古部郷土誌))</p>
④津波による史跡、言い伝え、住民証言								<p>【法蔵寺】(宝永地震)</p> <p>・馬頭観音は、津波による村の移転によって置き去りにされていたものを、本寺に納めたものといわれる。(愛知県文化財調査報告書第六六集 -田原街道・伊勢街道-)</p> <p>【震災、鎮めの石碑】</p> <p>・碑文 既白大土(太陽神)、八大童王(水神) 根礎大明神(海岸守護神)(震災、鎮めの石碑)</p> <p>・この石碑は安政6年に網元の仙太郎さんが震災が二度と起きない事を願って立てました。</p> <p>安政元年(嘉永7年)の地震について「安政元年(1854)11月4日午前9時頃と、5日午前5時頃続けて2度にわたり起きたマグニチュード8.4と言われる大地震により伊古部村の大羽根山が800メートル海中へ押し出され一つの島となった。漁労に使う舟、網とも高波に残らず引かれた。家屋の倒壊、流出甚大なり」と古文書に記されている。この地震は「大津波をともなっており、言い伝えでは推定29メートルの高台まで海水が上がった」とのことである。(震災鎮めの石碑案内板)</p> <p>【住民証言】</p> <p>・昭和35年のチリ地震の際には、通常の高潮より1m上がり、海岸道路付近まで来た。地引網の漁船(愛知県漁連から準会員として登録している地元有志で所有している船)が伊古部の海岸にあり、その船は引き揚げたため、特に被害はなかった。(西七根地区住民より聞き取り)</p>

項目	西暦	旧暦	高塚	七根	二川	寺沢	小松原	小島	細谷
①津波の被害状況	1096. 12.17	嘉穂3. 11.24							
	1498. 7.23	明応7. 6.25							
	1498. 9.20	明応7. 8.25							
	1586. 1.18	天正13. 11.29							
	1605. 2.3	慶長9. 12.16							
	1703. 12.31	元禄16. 11.23	・高塚村若宮様陸地に遷宮。(高豊史)						
	1707. 10.28	宝永4. 10.4	・津浪がおし寄せ舟と網のすべてを流した。暮迄余震が続き、三度津浪が押し寄せ、浜は皆海になった。(高豊史(高塚村庄屋の田中八衛門文書)) ・地震により、高塚村の家は24軒(40%)が転び、あとすべての家が傾いた。戸とうの宮様(菟頭神社)は古池、松木ともに海へ崩れ落ちてしまった。その時に左五兵衛という者1人は、浜屋敷にいて土砂の下敷きとなってしまった。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)(高塚村庄屋 田中八兵衛文書))		・大地震 大津波 山々崩壊 人馬多く死ぬ(校区のあゆみ 二川)				・高さ6mもの大津波が表浜一帯を襲い、海食崖下の集落は大半が流出してしまった。(渥美町郷土資料館 研究紀要第2号(加藤克己)) ・細谷村:大津波あり、村々網、船、その他漁具残らず流失、山は崩れ、谷は埋まりて、人馬多く死す。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)(宝永4年の細谷村の記録)) ・細谷村:宝永地震の大津波やその後の高潮によって、海食崖下にあった細谷一帯の田畑が流出していることが記されている。「去年の地震なおやまず、高潮にて、田、畑多く破壊す。」(田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)(宝永5年の細谷村の記録))
	1854. 12.23	嘉永7. 11.4-5	・安政元年の大地震の余震は翌年一杯迄続き、そのたびごとに高潮が起り、そのため漁船や網を流すという被害。 高塚村ではこの地震により村が極度に疲弊し、庄屋の小野田吉次郎は代官に助郷免除を嘆願している。(高豊史(愛知県災害誌))		・津波の高さ6-7m(東海地方地震・津波災害誌) ・波の高さは地形から6~7mと推定。地震後津波が来て過半潰れ死人が多かった。津波は二川町の海岸地帯に来たと思われる。(東海地方地震・津波災害誌(大日本地震史料)) ・大地震 津波7ヶ月続く(校区のあゆみ 二川)				・夫より直様浜へ参り見申候所、東方より津浪にて網船諸々にて流し。(渥美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)(細江村記録))
	1944. 12.7	昭和19. 12.7							

項目	西暦	旧暦	高塚	七根	二川	寺沢	小松原	小島	細谷
①津波の被害状況	1945.1.13	昭和35.5.24							
	2010.2.28	平成22.2.28							
	2011.3.11	平成23.3.11							
②津波による神社への影響			<p>【菟頭神社】(宝永地震(津波不明)) ・地鳴り、大地しん大分にゆれ、山くずれ、海へなき引申し候ふ……戸とうの宮様、古地松木共に海へゆり出し申し候」と「戸とうの宮様」が宝永四年の大地震によって海へゆり出してしまう被害にあった。(高豊史(名主田中八兵衛の「御免定書付」))</p>	<p>【竜泉寺】(宝永地震・津波) ・創立の年代は不明で、初め海辺にあったが波浪のため欠崩れたので、この地の代官戸田三郎兵衛から元屋敷同様の換地を受けて再興した。前記浜欠は宝永四年の海嘯に依ったものと思われる。(豊橋寺院誌) 【御厨神社】(宝永地震・津波) ・氏神様も河内の地(※)があった時代は其そこに建立されていたと思われるが、住家に移る時には氏神も移り、度々遷宮されていたであろう。元禄八年の棟札に、「此の下に、在りしをここに移す」とある。順に山の上に居を構えた様子を知ることができる。御厨神社が現在の赤坂の地に鎮座せしは何時の時代であるかは、確たる記録がないので知る由もないが、何れ元禄以後には間違いない。 ※西尾市岩瀬文庫に再三足を運び古文書をあさって居る中、はからずも三河古地図に、宝暦年代の地図の中に七根村の中で「家の内」と書かれた所があった。是正しく河内である。種々村の記録を調査した結果も同じく、昔の先住民は、現在の高地でなく海岸近くで生活を営み、少々の農業や漁業をして生活していたと思われる。古老より言い伝えられている事は、昭和二十五・六年迄栄えた地曳網にて二ツ山かかり(岩場)と言われる所があった。これまで昔は陸続きにして先住民が居たと言われていた。此の所が真の河内である。而し、長い年月の間に太平洋の荒波や強い季節風、又、度々の地震津波のために陸地は次第に浸蝕されていき、宝永の大津波を最後に海中に没し去ったのである。故に河内の住民は安全な北方高地に居を移すを余儀無く去れ、海岸に浜屋敷を構えた。是も長くは続かず更に北方に上り山屋敷へと移り住むようになっていった。(御厨神社)</p>		<p>【東漸寺】(宝永地震・津波) ・創立当初の所在地は現在地の南方海辺であったが、宝永4年(1707)の大海嘯の後今の地に移した。(豊橋寺院誌)</p>	<p>【東観音寺】(宝永地震・津波) ・宝永4年(1707)には大津波をうけて現在地の南方一八町の旧地より現在地に移転。(東観音寺歴史資料目録)</p> <p>【小松原進雄社】(宝永地震・津波) ・もと海辺の柄沢平に奉祀してあったが、宝永四年(一七〇七)の大津波によって現在地に移転したという。(豊橋市史 第一巻)</p>	<p>【大応寺】(宝永地震・津波) ・明暦2年(1656)住持玄釣首座の時殿宇を建造したが、宝永4年(1707)大海嘯の難に遭って衰退したのを、住持光厳祖錫首座(寛延3年5月13日寂)が現在の地に移転し、同6年8月庫裡一棟を新築した。(豊橋寺院誌) 【小島神社】(宝永地震(津波不明)) ・西小島の海岸にあったが、宝永年間の地震のため北方に移された。(校区のあゆみ 小沢)</p>	<p>【真月寺】(宝永地震・津波) ・創立後330年を経て宝永4年(1707)大海嘯の難に遭い、享保2年(1717)紹禅惠隆和尚の代、現在地に移転再興した。(豊橋寺院誌) 【幸福寺】(宝永地震・津波) ・宝永4年(1707)の大地震ならびに津波のため部屋が壊滅した頃上細谷村から地原へ分村してきた人々と共に幸福寺も移って来た。(校区のあゆみ 細谷)</p>

項目	西暦	旧暦	高塚	七根	二川	寺沢	小松原	小島	細谷	
③津波による住民生活の変化(集落移転の実態)			<p>【貞享3年】 ・高塚、西七根、城下などの部落が浜屋敷から山屋敷へと移転したのも、この貞享三年の地震の翌年(高豊史)</p> <p>【延宝8年～貞享3年】 ・高塚村は、延宝8年(1680)の大型台風のために、網や漁船は残らず流され、民家も倒壊され、海崖は崩れ谷となった。海岸沿いの「浜屋敷」は危険な状態にさらされた。さらに、貞享3年(1688)に遠州灘を地震が襲った。この地震は先の台風によって欠壊した浜屋敷の谷をさらに大きく崩し、谷を中心に地割れをつつた。このため高塚は浜屋敷より後方の台地上の「山屋敷」に家屋を移転した。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸))</p>	<p>【七根の集落移転の特徴】 ・西七根の起り:西尾市岩瀬文庫に再三足を運び古文書をあさって居る中、はからずも三河古地図に、宝暦年代の地図の中に七根村の中で「家の内」と書かれた所があった。是正しく河内である。種々村の記録を調査した結果も同じく、昔の先住民は、現在の高地でなく海岸近くで生活を営み、少々の農業や漁業をして生活していたと思われる。古老より言い伝えられている事は、昭和二十五・六年迄栄えた地曳網にて二ツ山かかり(岩場)と言われる所があった。これまで昔は陸続きにして先住民が居たと言われていた。此の所が真の河内である。而し、長い年月の間に太平洋の荒波や強い季節風、又、度々の地震津波のために陸地は次第に浸蝕されていき、宝永の大津波を最後に海中に没し去ったのである。故に河内の住民は安全な北方高地に居を移すを余儀無く去れ、海岸に浜屋敷を構えた。是も長くは続かず更に北方に上り山屋敷へと移り住むようになっていった。(御厨神社)</p> <p>【貞享3年】 ・高塚、西七根、城下などの部落が浜屋敷から山屋敷へと移転したのも、この貞享三年の地震の翌年(高豊史)</p>	<p>【二川の集落移転の特徴】 ・高豊地区の東、表浜海岸の小笠原、寺沢、小島、東細谷の地で小松原一帯は往古熊野移住民の開拓発展した処と思われ、寺沢、小島、東細谷の地は鎌倉時代高師村から分村したものといわれている。この地域も宝永四年の大海嘯に遭って社寺住民共数町又十数町後退した現在地に移った。(豊橋寺院誌)</p>					<p>【細谷の集落移転の特徴】 ・宝永4(1707)年10月、巨大地震が発生。当地は大津波に襲われた。現在の海岸線より200メートル沖合いに散在していた村は移転、新たに遠州との境界とした道路脇の丘に松を植え、お堂を建てた。(校区のあゆみ 細谷)</p>
④津波による史跡、言い伝え、住民証言				<p>【御厨神社】 ・嘉永七年(一八五四)に一般に云われている「安政の大震災」が起った。安政の大震災は一月四日、五日と二日にわたり宝永地震と同様に関東以西の太平洋岸に大きな被害を及ぼした。一中略一西七根御厨神社絵馬(巻頭写真)には「高塚村の彦坂と六網の漁船が津浪後西七根の浜辺の枝に打ち上げられた」と記してある。(高豊史(西七根御厨神社絵馬/下永良陣屋日記))</p> <p>【御厨神社絵馬】 ・去ル安政元年寅霜月四日 朝五ツ頃天地も崩る斗り 大地震也 此日宿頼有りて 氏神社へ参籠す 地しん治れハ我家へ帰り 網舟共覚束なく 先浜辺へ参り候へば最早 大津波来りて 村々の網舟 悉く押流され目に掛る物もなし 即舟のミ 山の半ノにたゞよひ徒き 是ばかり誠に 氏神の冥助と 身の毛もよだちて覚えし 隣村彦坂と六郎所持の網 此表共 右の舟にて尋出す 数多の漁船残りなく 打ちくだかれ 即舟斗り安穩に助り候ハ 只事にあらず 余りの有難さに 此船板を額に拵えて 即子孫の果へに至る迄 神明の冥助を 仰き奉らんが為 捧奉もの也 〃〃慶應三年 丁卯四月五日 儒に應じて 周岳之を圖す(御厨神社宮司 鈴木源一郎(平成二十三年十月吉日))</p> <p>【小松原村絵図(江戸時代前期)】 ・東観音寺が海岸近くに位置していることから江戸時代前期のものと考えられる。図は1町を1寸(約3600分の1)に縮尺した実測図で、南北に細長い同村田畑の他村との入り込みを色分けで示し、小松原村の田畑は黄土色、東隣小島村の田畑が紫色、西隣寺沢村の田畑がオレンジ色、その西、西七根村の田畑が白色で示されている。(絵図から地図へ―移り変わる豊橋の風景―(小松原村絵図))</p>	<p>【東漸寺の行者塔】 ・寺沢町の東漸寺本堂から、墓地におりる坂道の入り口に、苔むした行者塔が1基ある。今から380年ほど前、慶長年間にまでさかのぼる。北陸地方の某藩の武士が1人、父の仇をさがし求めて全国を歩き回るうちに、いつしか路銀も使い果たしてしま、流浪の果てに寺沢の東漸寺の仏門をたいた。ある日、ほん然として悟った彼は、長い復しゅうの夢から覚め、仇打ちをやめて懐かしい故郷へと思ってはみたものの、今さら仇を討たずに帰藩もできず、思いあまつた末に仏縁を得た三河の東漸寺に杖を運び、頭をまるめて仏門に入り安齋禪師の弟子となった。本堂西の行者塔は、彼が後年この寺の住職になったときに西国33か所の苦しい思い出に加え、彼と同じ諸々の恨み悩みをもつ悲しい遍路たちの幸せを願い、海岸の墓地に建てたものだという。宝永4年(1707)の大津波のときも、この塔だけは不思議にも残って現在に至っている。(校区のあゆみ 小沢)</p> <p>【小松原村絵図(江戸時代前期)】 ・東観音寺が海岸近くに位置していることから江戸時代前期のものと考えられる。図は1町を1寸(約3600分の1)に縮尺した実測図で、南北に細長い同村田畑の他村との入り込みを色分けで示し、小松原村の田畑は黄土色、東隣小島村の田畑が紫色、西隣寺沢村の田畑がオレンジ色、その西、西七根村の田畑が白色で示されている。(絵図から地図へ―移り変わる豊橋の風景―(小松原村絵図))</p>	<p>【東観音寺古境内図】 ・所掲図は宝永四年の大海嘯以前、寛文頃(一六六一～七三)の境内図で、立派な堂塔伽藍、多くの参詣者、山下の海辺に並ぶ民家、往来の人々の様子が精密に写實的に描かれており、東観音寺の旧態をうかがう好資料であるとともに、近世前期の地方風俗画としても貴重である。(豊橋市史 第二巻) ・江戸時代初期の「小松原観音寺古境内図」を見ると、下方に荒々しい波の打ち寄せる太平洋と漁船や帆船が描かれている。地引き網を引く漁師の姿も見られる。波打ち際に伊勢街道が通り、暖簾を下げた町屋の前を、多くの旅人や馬に乗った武士などが往来している。伊勢街道から参道が丘陵に向かって分かれていて、開折谷を流れる川に架かった橋を渡り、坂道を上がりながら、境内へと入る。丘陵の奥に檜皮葺の観音堂や阿弥陀堂、多宝塔が建てられている。境内のすぐ下は険しい崖になっていて、田畑を耕す百姓も描かれている。江戸時代初めには、海岸付近の小丘上にあった小松原の東観音寺も、宝永地震と大津波により伽藍の大部分が破壊した。7年後に18町(約1.9km)北側の現在地に移転している。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸))</p> <p>【開山行基菩薩】 ・小松原の海岸へ下りる途中、畑の一角に雑木林が残されている。中に踏み入ると「開山行基菩薩」と刻まれた石碑が建っている。ここは以前、東観音寺があったところである。宝永4年(1707)渥美半島一帯に被害をもたらした大地震により、部落が移動した。これを機に東観音寺も宝永5年(1708)から享保元年(1716)にかけて現在地に移転した。(校区のあゆみ 小沢)</p>	<p>【小松原村絵図(江戸時代前期)】 ・東観音寺が海岸近くに位置していることから江戸時代前期のものと考えられる。図は1町を1寸(約3600分の1)に縮尺した実測図で、南北に細長い同村田畑の他村との入り込みを色分けで示し、小松原村の田畑は黄土色、東隣小島村の田畑が紫色、西隣寺沢村の田畑がオレンジ色、その西、西七根村の田畑が白色で示されている。(絵図から地図へ―移り変わる豊橋の風景―(小松原村絵図))</p>			

参考資料2—2 豊川市における津波被害年表

項目	西暦	旧暦	豊川市内	大草	坪野	御馬	下佐脇	御油	赤坂	小坂井(伊奈)
①津波の被害状況	1707.10.28	宝永4.10.4	・大草、坪野、下佐脇にて塩田の被害あり(蒲郡市史 本文編2 近世編)、(御津町史 本文編)(村差出帳)	・塩田が大損害を受けた。(蒲郡市史 本文編2 近世編) ・太郎左工門代官所管下堤防破損8.5km、被害大(東海地方地震・津波災害誌)		・塩田が大損害を受けた。(蒲郡市史 本文編2 近世編)		・塩田が全滅(蒲郡市史 本文編2 近世編) ・かつては塩浜も存在していたが、宝永の地震のために消滅し、またこの時には水田二六〇石、畑三〇石が被害にあっている。(御津町史 本文編)(村差出帳)		
	1854.12.23	嘉永7.11.4-5	・御馬にて津波の被害あり(御津町史 史料編 下巻) ・御油、赤坂にて津波被害の報告あり(東海地方地震・津波災害誌)、(愛知県災害誌)			・大地震津波、潰家怪我人等在、御廻米御検査日ニテ御米野耕ノ処、激波ノ為ニ五百俵計海面へ引出サル(御津町史 史料編 下巻)		・津波の高さは4～5m。津波で過半流れ、また死人怪我人も多かった(以上大日本地震史料)。音羽川上流約8kmの位置にあり、このような大波が遡上したとは考えにくい。(東海地方地震・津波災害誌) ・被害は軽かった(愛知県災害誌)	・津波の状況では高さは5mくらい。津波で7分通り流され、死人怪我人も多かった。赤坂は陸地であるので、津波が上がるとすれば、音羽川に沿って入ったものと考えられる。しかし音羽川上流約10kmの位置に現在あり、レベルもやや高いので、このような津波の波高は困難。(東海地方地震・津波災害誌) ・被害は軽かった(愛知県災害誌)	
	2011.3.11	平成22.2.28	・午前9時45分に災害対策本部を設置。(東日新聞(2010.3.1)) ・同11時30分に伊奈町・平井町、御津町で防災無線を使って津波到達見込み時刻などを伝えて注意を呼びかけた。(東日新聞(2010.3.1)) ・午後1時からは市と消防本部、消防団が御津海岸と豊川放水路河口部で車両巡視と広報活動。両地区合わせて19ヵ所の防潮扉を閉め、ひ門をさげた。(東日新聞(2010.3.1)) ・臨海埋め立て地の立地企業には、操業中の6社に注意を促した。(東日新聞(2010.3.1))							
②津波による神社等の移転	1492以前	明応元年以前(地震によるものかは不明)								【東漸寺】 ・知多郡緒川の乾院亨隠和尚は、伊奈城主本多隼人佐泰次に迎えられて、城中に一席の法話を試みた。それより先、前芝村に東漸寺があったが、廃絶し小堂に本尊のみが祀られていた。ところが津波のために伊奈の地に漂着したので、村人が祀っていた地藏尊を本尊として、本多泰次が堂宇を建てて本多家累代の香華寺として齊田を寄付し亨隠禪師を開基として、万年山東漸寺としたのが、明応元年(1492)の事であった。(小坂井町誌) (※前芝村誌では、「天文9年(1540)に大海嘯があり此の地方は社寺人家がごとく流失という大被害があった。即ち現在の伊奈東漸寺は前島(前芝)にあったが、この大海嘯のため流され、そのため今の地に移された」とある。)
		天文年間(地震によるものかは不明)								【平井八幡社】 ・最初は社供神がお祀りしてあったが、天文年間の初期(1532頃)の大洪水によって社殿を流失してしまった(賀茂の照山の麓に流れ着いたと伝えられている)。しかし、社供神の御神体は重く、流失をまぬがれたので、天文21年(1552)の新築に当たって菟足大明神の分身を勧請し、社供神と併せ祀ったのが、この棟札に記されたのだろう。(小坂井町誌)
③津波による言い伝え、体験談	1945.1.13	昭和20.1.13				・1945年1月13日は当時17歳の高校生で、御馬村に在住。地震発生時は寝ていて、激震で目が覚めて、驚いて表にでると、南の渥美半島の方に青い火花が数回見え、ドンドンという音があったような感じがした。なにかあると浜にいく習慣があり、その後御馬の港にいくと、すでに5～6人きおており、潮が高くなっているとみんなで騒いでいた。今思うと、普通の高潮より50cmくらい高いところに海面があったと思う。その後、寒くて港を後にし家に戻ったため、海のことにはわからないが津波による被害はなかったと思う。余震が強かったので怖くて家に入らず、1ヶ月くらいのりほしたこの5枚で、四方の壁と屋根にして地震小屋を建てて、外で寝た。また、戦争中なのでその地区の状況はわからないが、後で形原の方の断層があったのを知って驚いた。(御馬地区住民より聞き取り)				
	1960.5.23	昭和35.5.23・24				・1960年のチリ地震のときは、御津町役場に勤務しており、御馬港をみにいった。御馬の港では、大潮(満潮)の時は防波堤のあるところまでくこともあるが、チリ地震でもその満潮時のところ(防波堤の地面まで)まで水位があがってびっくりした。地震によるものが満潮によるものかはわからないが、潮が増したことはまちがいない、また引きも何度かあり、一日に何度か満ち引きがあった。港に特に被害はなかった。(御馬地区住民より聞き取り)				

参考資料2—3 蒲郡市における津波被害年表

項目	西暦	旧暦	蒲郡市内	形原・西浦	西浦	形原	形原(下市より東)	塩津	蒲郡町	三谷	大塚	
①津波の被害状況	1498.9.20	明応7.8.25	・塩津にて高さ4m 白山神社流される(東海地方地震・津波災害誌)					・高さ4mと推定(東海地方地震・津波災害誌) ・(竹谷)白山神社流される(東海地方地震・津波災害誌)				
	1707.10.28	宝永4.10.4	・塩津にて塩田の被害あり(蒲郡市史 本文編2 近世編)、(塩津村誌)					・(鹿島)諸引き高(約二〇石)のうち約六石が塩浜潰地。(蒲郡市史 本文編2 近世編) ・(竹谷)塩田は被害を受け「松平左門様御代ヨリ汐入段々潰地引二罷成候」のように18世紀初期には減少している。(塩津村誌)			・大塚村の被害は少なかった(蒲郡市史 本文編2 近世編)	
	1854.12.23	嘉永7.11.4	・西浦にて津波の高さ2mの記録あり(東海地方地震・津波災害誌) ・蒲郡市内においては、人的な被害は少なかったようであるが、一部家屋や田畑に被害を及ぼした。(形原役所記録)(総務省消防庁ホームページ(防災課 全国災害伝承情報(平成17年3月))) ・津波二而流し其数未篤と不知不分(王捻記)	・建物の破損はあっても倒れるほどのことはなかったが、海辺には津波がきた。(新収日本地震史料 続補遺別巻(東京大学地震研究所))(形原役所記録)	・津波の高さ2m(東海地方地震・津波災害誌) ・津波の被害をうけ、住民は屋外に小屋をたてて寝た(蒲郡市誌)(御獄神社日誌) ・橋田沖にある松島を波が打ち越し、5人の家に海水が入った。(新収日本地震史料 続補遺別巻(東京大学地震研究所))(形原役所記録) ・一説には安政元年の大地震による大津波で付近一帯は大きな被害を受けた。当時、松島には多くの松の木が繁茂していましたが、それらの松の木の大部分は地蔵菩薩ともども流失されたと聞いております。(西浦町の昔と今)	・津波ニテ家ヲ引キ出サルル所モアリ、当地ハマダマダサハリ少シ(塩津村誌)(御獄神社日誌) ・大きな津波の被害といったものはなく(蒲郡市史 本文編2 近代編)(形原役所記録) ・津波に備えて立ち退く用意はしたものの、波はおいおい穏やかになり、けが人もなかった。(新収日本地震史料 続補遺別巻(東京大学地震研究所))(形原役所記録)	・(拾石)津波で拾石村本郷の陣屋は跡形もなく流された(塩津村誌) ・(拾石)拾石陣屋(逸見陣屋)は、津波で跡形もなく残っていた石(延石や花崗岩)も流されてしまった。(塩津村誌) ・(竹谷)竹谷村地先の太田新田も堤防が決壊し、犬飼港の陸続き堤防が流されたと伝えられている。(塩津村誌)					
	1855	安政2年	・大塚にて高潮による被害あり(蒲郡市史 本文編2 近世編)									・高潮による被害を受け、籠の破損五七七、杭木の流失二二二八本の損害(蒲郡市史 本文編2 近世編)
	1891.10.28	明治24.10.28	・三谷にて津波被害の報告あり(海嘯汐入免租下戻簿 旧三谷町行政文書)									・十月二十八日大地震(濃尾)(蒲郡町誌) ・津波被害のため納税還付内訳 ※金額と名前のみ記載で、被害状況は不明(海嘯汐入免租下戻簿 旧三谷町行政文書)
	1944.12.7	昭和19.12.7	・西浦・形原にて波の高さ0.5mの記録あり(東海地方地震・津波災害誌) ・三谷町から蒲郡町にかけてほとんど被害はない。(愛知県災害誌)		・波の高さ0.5m(東海地方地震・津波災害誌) ・小津波、引き潮で始まった(東海地方地震・津波災害誌)	・波の高さ0.5m(東海地方地震・津波災害誌)						
	1945.1.13	昭和20.1.13	・蒲郡町で1mの津波の記録あり(東海地方地震・津波災害誌) ・人や建物に被害をおよぼすような津波は起きていない(三河地震Q&A)		・1m海面が下がる(東海地方地震・津波災害誌) ・最大全振幅50cm(東海地方地震・津波災害誌) ・隆起1.3m(蒲郡市誌)(地震研究彙報24号(東大) 深溝断層 津屋弘達)	・水の変化がみられたところとみられないところがあった。(東海地方地震・津波災害誌) ・形原漁港では1.5mの隆起(蒲郡市誌)(験震時報14号 昭和20年1月13日 三河地震について 井上宇胤)	・形原町音羽の東から江川下市辻新田方面0.7mの沈下を見る。それは蒲郡市府相の海岸辺に及んでいる。(形原震災記録)	・津波の高さは約60cm。(愛知県災害誌) ・塩田の周囲の高さ1.5mの堤防の一部が東南海地震(1944.12.7)で1m沈下したが、そこがさらに三河地震(1945.1.13)で幅10mほど決壊したため海水が浸入した。(東海地方地震・津波災害誌)			・岸壁では1mほどの津波が襲来し、岸壁の上まで水が来たという。(東海地方地震・津波災害誌)	
	1946.12.21	昭和21.12.21	・形原にて2mを越す潮位ありとの記録あり(伊古部郷土誌) ・形原にて津波の現象あり(愛知県災害誌)、(伊古部郷土誌)				・押し波で始まり最大振幅15cm(愛知県災害誌) ・二メートルを越す潮位(伊古部郷土誌)					

項目	西暦	旧暦	蒲郡市内	形原・西浦	西浦	形原	形原(下市より東)	塩津	蒲郡町	三谷	大塚
①津波の被害状況	1960.5.24	昭和35.5.24	・形原にて波高1.12mの記録あり(東海地方地震・津波災害誌) ・蒲郡など潮位が約一メートル(中部日本新聞(1960.5.24)(夕刊))			・波高1.12m(東海地方地震・津波災害誌) ・津波の振幅23~86cm(愛知県災害誌)					
	2010.2.28	平成22.2.28	・形原にて潮位が約10cm上昇との記録あり(東日新聞(2010.3.1)) ・竹島水族館、生命の海科学館、市民会館、市博物館が臨時休館。(東愛知新聞(2010.3.1)) ・蒲郡市で避難勧告は2723世帯、避難したのは12世帯15人。(東日新聞(2010.3.1))			・潮位が約10cm上昇(東日新聞(2010.3.1))				・潮位が約10cm上昇(東日新聞(2010.3.1))	
	2011.3.11	平成23.3.11	・避難勧告は2723戸、8198人。午後6時半現在、6世帯13人が避難した。(東愛知新聞(2011.3.12))								
②津波による神社移転等	1498.9.20	明応7.8.25						【白山神社】 ・(竹谷)明応8年の津波で社殿は流壊した。神夢によって爾来凡そ百年後に北方の山の現所に遷し祀った(塩津村誌)			
	1854.12.23	嘉永7.11.4-5			【松島地藏菩薩の由来と現在】 ・一説には安政元年の大地震による大津波で付近一帯は大きな被害を受けました。当時、松島には多くの松の木が繁茂していましたが、それらの松の木の大部分は地藏菩薩ともども流失されたと聞いております。その後、流失した地藏菩薩は改めて新しく建立され、安政4年大光院創立と同時に、大光院の縁の下に安置され、現在に至っております。一方、流出された松島地藏菩薩は数々の霊験が物語られ、橋田地区の人々に厚く信仰されてきました。その後、漁師が漁をしていたときに、胴体がバラバラでしたが地曳き網や打瀬網に全部拾われ、縁の元である大光院に移し、現在大光院入口石段の下段の場所に鎮座されております。(西浦町の昔と今)			【拾石陣屋】(拾石) ・石垣は花崗岩であったが、水害で全部流されこわれた。しかし、石は、大正の始めに浜のどいと云う道路が出来た時に、集めて使った。此の道路は昭和二年迄で今は埋立で石垣も残っている。延石は神社、寺、個人の水間口にもある。又陣屋跡にもあり、天保の災害でそれらしい跡方もなくなった。(塩津村誌) ・拾石陣屋(逸見陣屋):享保3年5カ村五百石の旗本逸見家は、二百参石と持高の多い拾石村の本郷に陣屋を構えていた。陣屋は大小の延石を並べ石垣は花崗岩で頑丈であったというが、天保8年の大水害で崩壊し延石や花崗岩を残して流されてしまった。以後修復されないうでいた。安政元年の東海大地震の津波で跡形もなく残っていた石も流されてしまったという。陣屋一角にあった稲荷神社は、その後陣屋跡に再建されている。(塩津村誌)			
	1945.1.13	昭和20.1.13				【形原神社 わすれじの碑】 ・碑文 昭和二十年一月十三日未明 突如として当地方を襲った大地震により 犠牲者二百有余人全壊家屋三百有余にのぼる大惨害を被り 戦争末期の困窮と相まって 筆舌に尽し難い惨害をなめたのである 今ここに三十三年を迎えるにあたり 当時の惨状に思いを新たにし 非命にたおれた人人の霊を慰めるとともに 永く後世に伝えるべきしを遺すということは まさに生き長らえることを得た者の果すべき重要な課題であると考え 有志相計り 形原地区民多数の賛同を得て その芳志を結集し 一碑を建立して その意を表するものである 昭和五十二年一月十三日 三河地震記念事業委員会(わすれじの碑 碑文)					
③津波による言い伝え、体験談	1945.1.13	昭和20.1.13			・外へ出たら、家の前の海の水がものすごい勢いで沖のほうへ引いていくのが見えた。それを見て、集落のおばあちゃんたちが口を揃えて「津波が来るから上がらなきゃ」と言った。そこで周囲の家4~5軒みんなで高台にあるお稲荷さんの方へ急いで避難した。(歴史地震研究会ホームページ(歴史地震・第22号))	・前日は津波もない。当日は津波はなかった。(三河地震Q&A)	・下市に津波が来た。(三河地震Q&A) ・家の前の、林光寺の坂は、平らな道が坂になった。私の家の前が、海だった。・・・形原町の被害は大きく、死者は211名 私の家の周りは、ほとんど海で、地震と津波で、海が沈んでいった。実際に、知っている人は、もうほとんどいません。(三河地震Q&A)				

参考資料2—4 田原市における津波被害年表

(1) 三河湾沿岸

項目	西暦	旧暦	渥美郡 渥美半島全体(田原市を中心)	三河湾沿岸(田原市を中心)	福江全体	向山新田(福江)	畠(福江)	古田(細江)	伊井新田(伊川津)	村松
①津波の被害状況	1096.12.17	嘉穂3(永長1).11.24	・波高5-7m(東海地方地震・津波災害誌)	・永長津波(1096年)の場合の史料はみあたらないが、慶長や宝永津波の場合と同じような影響があったものと考えられる。※明応、慶長、宝永、安政の四大津波ではだいたい同じくらいの影響と見なされる。波高は概ね3m位で、所により4mにもなったものと思われる。堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなどの被害があり、浸水も著しく、田畑等に被害を与え荒地となった所も多かった。(東海地方地震・津波災害誌)						
	1498.9.20	明応7.8.25	・波高内海3-4m、外海6-8m(東海地方地震・津波災害誌) ・地割れし、同時に大津波がきて人家倒壊、死者がでた。(東海地方地震・津波災害誌)	・概ね3m位、所により4m(東海地方地震・津波災害誌) ・堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなど被害があり、浸水も著しく田畑等に被害を与え荒地となった所も多かった。(東海地方地震・津波災害誌)						
	1586.1.18	天正13.11.29	・震動と共に海鳴りが起り、屋舎の流失人畜の死傷も夥しく(東海地方地震・津波災害誌)(田原町史 中巻)							
	1605.2.3	慶長9.12.16	・津波は東は犬吠岬から西は九州におよび各地で甚大な被害をうけた。(死者5,000余人)。しかし尾張・三河に関する記録はないので、愛知県下の被害はあっても軽微だったと推定される。(愛知県災害誌)	・概ね3m位、所により4m(東海地方地震・津波災害誌) ・堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなど被害があり、浸水も著しく田畑等に被害を与え荒地となった所も多かった。(東海地方地震・津波災害誌)						
	1703.12.31	元禄16.11.23	・波高2m余り(東海地方地震・津波災害誌) ・海水溺溢し船網漁具等流失(東海地方地震・津波災害誌) ・関東・東海地方に大地震があり、津波が房総半島・鎌倉・小田原の海岸に押し寄せ、さらに渥美半島においても船・網・漁具が流出し、多くの死者が出た(東海地方地震・津波災害誌)							
	1707.10.28	宝永4.10.4	・波高3-7m(東海地方地震・津波災害誌) ・渥美半島では南方で大いに鳴動し、14時頃大津波で村々の漁具は流失し、山くずれ、谷は埋まり多くの人馬が死亡した。この夜は余震が30~40回もあり、多くの田畑に海水が入るようになった。渥美郡二川では半分が破壊された。(渥美郡災害年表)	・高さ3-5m(東海地方地震・津波災害誌) ・概ね3m位、所により4m(東海地方地震・津波災害誌) ・堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなど被害があり、浸水も著しく田畑等に被害を与え荒地となった所も多かった。(東海地方地震・津波災害誌)	・福江や田原で波高やや大きかったようで、5m近くにも達したものと思われる(東海地方地震・津波災害誌)					
			被害状況詳細 ①飯田汲事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田汲事教授論文選集) ・田原領内で船320隻流失 ②田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)(参河国聞書、三州吉田記) ・田原藩領内の居宅、小屋の倒壊、破損家屋は1400軒に及んだが、この内580軒を野田村が占めていた。 (ただし、つなみによる被害かは不明)							
	1854.12.23	嘉永7.11.4-5	・波高2-10m(東海地方地震・津波災害誌) ・城、城下の町および領内で、大きな震・浪害がでた(愛知県災害誌)(三宅家日記・阿知和内田家日記) ・津波による被害もあり災害復旧のため、拳母、田原、吉田、刈谷その他の緒領主は、千両から数千両を幕府から借用している。(蒲郡市史 本文編2 近代編)(愛知県災害誌)	・概ね3m位、所により4m(東海地方地震・津波災害誌) ・堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなど被害があり、浸水も著しく田畑等に被害を与え荒地となった所も多かった。(東海地方地震・津波災害誌)	・福江では床上3尺、約1mまで津波が来ており保美のあたりまで潮水が入ってきている(国際自動車コンプレックス研究会NEWSLETTER vol.38)(渥美郡泉福寺史料)	・大津波のために囲い堤が決壊し、総反別56町4反歩余の向山新田は、開発以前の元の姿の入江同然になってしまった(渥美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)) ・向山新田では、常堰は砕け、両水門の間の堤防が凡そ25間切れ、新開田の堤も30間程欠損した。その他の堤も5~6尺ゆり込み、道通りには7~8寸の割れ目ができ、新田一面亡所同様になってしまった。(渥美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)) ・被災後、向山新田の堤防復旧工事に官民挙げて取り掛かった。(渥美町の民族探訪)	・高汐、新田堤水門より切込常堰だけ新田不残水入(渥美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治))(畑村文書) ・畑村の川岸通りの家は水に浸かり、水道橋、観音橋も破損した。(渥美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治))	・大津波打寄、古田にて網船式艘、浜道具大はん流失。(収新日本地震史料第五巻別巻五ノ一(五月雨漸し))	・高津波のために囲い堤は残らず欠け崩れ、亡所同様になってしまった。(渥美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)) ・囲い堤が津波によって破壊され、その修復のための普請が、安政二年(1855)の七月までかかった。(渥美町の民族探訪)	・全壊5戸、大川境大破(泉村々史)(江比間村霜月四日大地震破損書上帳)(村松村回状附留帳)
			被害状況詳細 ①渥美町の民族探訪 ・城外では、漁船の流失十九艘、同破損三十二艘、漁網流失五十三帖、同破損八十四帖、浜辺の欠崩れ七千八百八十四間余、等					①渥美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治) ・地震津波による潰家居宅1軒、居宅庇2ヶ所、灰部屋1ヶ所、土蔵半潰24ヶ所、寺半潰1ヶ所、寺厨1ヶ所、店半潰1軒、長屋潰2ヶ所、		

項目	西暦	旧暦	渥美郡 渥美半島全体(田原市を中心)	三河湾沿岸(田原市を中心)	福江全体	向山新田(福江)	畠(福江)	古田(細江)	伊井新田(伊川津)	村松
①津波の被害状況	1944.12.7	昭和19.12.7		・1m足らずの波高であり、被害はなかった。(東海地方地震・津波災害誌)	・地震後30分位にして引潮に始まる津波を観測、波高約50cm(東海地方地震・津波災害誌) ・潮が今まで足首くらいしかかかれなかったのに、地震後膝までくるようになった所がある。(東海地方地震・津波災害誌)					
	1945.1.13	昭和20.1.13		・1mくらいが最大(東海地方地震・津波災害誌) ・ほとんど津波被害はなかった。(東海地方地震・津波災害誌)						
	1946.12.21	昭和21.12.21		・福江にて約一メートル五十センチの潮位の記録あり(伊古部郷土誌)	・約一メートル五十センチの潮位(伊古部郷土誌) ・押し波ではじまり最大全振幅15cmその周期25分(愛知県災害誌)					
	1960.5.24	昭和35.5.24		・衣浦や矢作川下流域で3mくらいになった所もあり、若干浸水した所もたようであるが、日本近海の近地津波のような激しさはなく、それほどの被害はなかった。(東海地方地震・津波災害誌) ・津波は渥美湾にも侵入してきたが、波高は低く、そのうえ最高波が到達した時刻が干潮時にあったために潮位はあまり上がらず、渥美湾沿岸の一部に若干の家屋浸水をみた程度の被害ですんだ。(渥美郡災害年表)	・福江：津波来襲回数7回、津波の周期35～75分、津波の振幅20～50cm(愛知県災害誌) ・小中山：津波来襲回数11回、津波の周期30～85分、津波の振幅25～95cm(愛知県災害誌)					
	2010.2.28	平成22.2.28	・三河湾にも最大で1メートルの津波が予想されるとあって、伊勢湾フェリー、名鉄フェリーが午前11時45分から欠航した。(東日新聞(2010.3.1)) ・避難勧告は、田原市1万921世帯。しかし、避難したのは田原市で3世帯3人ととどまった。(東日新聞(2010.3.1))							
	2011.3.11	平成23.3.11	・田原市は、各校区市民館20カ所に避難所を開設。神戸、伊良湖、福江、泉、清田の5校区で計14人が自主避難した。(東愛知新聞(2011.3.12))							
②津波による神社等の移転	1707.10.28	宝永4.10.4								
	1854.12.23	嘉永7.11.4-5								
③津波による史跡	1854.12.23	嘉永7.11.4-5								

項目	西暦	旧暦	津波の被害状況						
			馬伏	江比間	宇津江	野田	波瀬	田原	
①津波の被害状況	1096.12.17	嘉穂3(永長1).11.24							
	1498.9.20	明応7.8.25						・三遠大地震で暴風雨、大津波あり、津波の高さは約3-4mと推定される。(東海地方地震・津波災害誌)(田原町史)	
	1586.1.18	天正13.11.29							
	1605.2.3	慶長9.12.16						・津波の高さ2-3m(東海地方地震・津波災害誌)	
	1703.12.31	元禄16.11.23							
	1707.10.28	宝永4.10.4						<ul style="list-style-type: none"> ・村々の網船其の他の漁具不残流失し、山は崩れ、谷は埋りて人馬多く死す。別て破損夥しきは野田七郷なり(伊古部郷土誌)(常光寺年代記) ・野田村保井の真宗白雲山西園寺の堂宇はすべて倒壊し、後年現在地に移転した。(渥美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)) ・海辺へつなみ上り、浜筋の者は残らず山へ逃げた。(野田史)(金五郎文書「歳代覚書」) 	<ul style="list-style-type: none"> ・三河湾・知多湾・渥美湾にも津波が浸入し田原や一色・寺津・平坂にも大被害を及ぼした。(東海地方地震・津波災害誌) ・福江や田原で波高やや大きかったようで、5m近くに達した者と思われる(東海地方地震・津波災害誌) ・津波の高さは4m余と推定される。地震後潮位5-6寸(15-18cm)上がり高潮時々起り補強した。(東海地方地震・津波災害誌) ・汐川筋の堤防も数百間にわたって欠壊した。海新田等の堤も津波によってさらわれてしまった(西円寺史)(御祐筆日記) ・田地の損耗もまた大きく特に津波によって海新田の堤防が決壊し被害が大きかった。また汐川の堤も壊れ田畑も荒廃した。このように地震と津波の被害が汐川を中心に大きかった。(東海地方地震・津波災害誌) ・田原御城下、藤田の二ツ池堤まで汐さす。漆田正楽寺地内、清谷の橋までも汐さす。(野田史)(金五郎文書「歳代覚書」)
			被害状況詳細					<ul style="list-style-type: none"> ①田原市博物館 研究紀要第3号(藤城信幸)(参河国聞書、三州吉田記) ・田原藩領内の居宅、小屋の倒壊、破損家屋は1400軒に及んだが、この内580軒を野田村が占めていた。(ただし、つなみによる被害かは不明) 	
1854.12.23	嘉永7.11.4-5	<ul style="list-style-type: none"> ・大地震に付、登り川堤大波大われ修復に候(渥美町郷土資料館研究紀要第7号(清田治))(諸向書留覚帳写) 	<ul style="list-style-type: none"> ・波高3-4m(東海地方地震・津波災害誌) ・津波により浸水があった(東海地方地震・津波災害誌) ・高汐満、追々浪欠御宮松木不残立枯に相成候(渥美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治))(八王子様造立、弁財天様造立、山ノ神様造立、天王様屋根替入用帳) 江比間港: ・朝四ツ大地震二相成り大津浪来襲「地震、津浪大変ニテ何事モ打忘レ」云々トアリ(泉村々史)(江比間郷史) 	<ul style="list-style-type: none"> ・3-4m(東海地方地震・津波災害誌) ・津波では制札場破損し、地引綱引揚波冠(東海地方地震・津波災害誌) 		<ul style="list-style-type: none"> ・高さ3-4mと推定(東海地方地震・津波災害誌)(青窓紀聞) ・船倉橋辺りまで高潮が上がり(渥美町の民族探訪) ・高汐打入り、橋・堤等に損所あり、海岸が欠込み村々の漁船船道具等多数流失(東海地方地震・津波災害誌)(青窓紀聞) ・海新田は、つなみにて堤切れ、翌年迄も海に成申候 すべて底き所は一尺五寸、或は二尺位の広さ割れ申候 浜田辺は高ミ故地は割れ不申候、枯木川辺割れ申候 浜方はツナミ、地震の後半刻計過ぎツナミ三本打申候 此の節手網四帖・網船・諸道具共流失申候、片浜不残の事に御座候、浜辺は、五間・八間・十間・二十間、或は百間欠け申候(収新日本地震史料 第五巻五ノ一)(庄屋日記 田原町庄屋 彦坂弥八郎) 			
		被害状況詳細	<ul style="list-style-type: none"> ①泉村々史(江比間村霜月四日大地震破損書上帳)(村松村回状附留帳) ・川向、山崎堤等破損二百八十四間(約500m)。全壊三戸、半壊五戸。山より大石十三落下 ②飯田汲事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田汲事教授論文選集) 東御本田2反6畝23歩浸水、浜田分2反7畝分、新田分3反8畝5歩浸水、 	<ul style="list-style-type: none"> ①飯田汲事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田汲事教授論文選集) 東御本田2反6畝23歩浸水、浜田分2反7畝分、新田分3反8畝5歩浸水、 					

項目	西暦	旧暦						
			馬伏	江比間	宇津江	野田	波瀬	田原
①津波の被害状況	1944.12.7	昭和19.12.7		・付近の岩礁は大潮の高潮時でも波が来なかったのに、潮位が上昇し海水に浸かる(東海地方地震・津波災害誌)				・0.5m(東海地方地震・津波災害誌) ・汐川や蜷川の岸では堤防が所々沈下した。また吉胡地内の凸出の低湿地約0.5×0.25kmは海水面に沈下した。海水が海岸低地に浸入した。(東海地方地震・津波災害誌)
	1945.1.13	昭和20.1.13						
	1946.12.21	昭和21.12.21						
	1960.5.24	昭和35.5.24						
	2010.2.28	平成22.2.28						・「三河湾岸だが、汐川を津波が遡(そ)上する心配がある」として、市総合体育館や市文化会館は午後2時から休館に入った。(東愛知新聞(2010.3.1))
	2011.3.11	平成23.3.11						
②津波による神社等の移転	1707.10.28	宝永4.10.4					【真宗白雲山西園寺】 ・野田村保井の真宗白雲山西園寺の堂宇はすべて倒壊し、後年現在地に移転した。(渥美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)) ・西円寺:大地震に本堂庫裡小屋など残らず潰れ、それがために正徳年中カネイバに引越し建立した。(田原町史中巻) 安楽寺(野田) ・大地震で潰れてまた建直した。(田原町史中巻) ・西園寺、安楽寺ともに、津波による被害かは不明。(寺院関係者より聞き取り)	
	1854.12.23	嘉永7.11.4-5		・津島神社と巖島神社は鎮守山の北方、海に近い「一本松」に鎮座されていた。いずれも神社というより祠であったが……。七峯山の中腹に遷座されたのはいつ頃だろうか。ほとんど記録を発見することができなかったが、安政五年(一八五八年)のものがある。「津島神社、巖島神社、二社ヲ一本松ヨリ前ノ山へ遷座ス」がそれである。安政年間には神社の修復再建が集中的に続いている。おそらく、安政元年十一月四日朝四つに起った大地震と大津波の来襲で相当な被害をこうむったせいであろう。津島神社、巖島神社が海岸近くから「前ノ山」へ移されたという記録の「前ノ山」は、鎮守山ではなく七峯山を指しているのではないだろうか。(江比間史)				
③津波による史跡	1854.12.23	嘉永7.11.4-5		・江比間村:内面に面する海岸に祀られていた「一本松御宮」の、弁天社、牛頭天王社が、大地震の後の高潮で境内の浜が欠け、松木の立ち枯れ等があり、安政五年(1858)六月に前山の土地に移した。(渥美町の民族探訪)				

(2) 太平洋岸

項目	西暦	旧暦	遼美郡 遼美半島全体(田原市中心)	太平洋岸(田原市を中心)	伊良湖	日出	堀切	西堀切	東堀切
①津波の被害状況	1096.12.17	嘉種3(永長1).11.24	・波高5-7m(東海地方地震・津波災害誌)	・波高3-7m(明応津波はやはり高い6-8mの波高と思われるが永長津波はやや低かったように思われる。)(東海地方地震・津波災害誌) ・愛知県内の被害不詳(愛知県災害誌) ・船の破損、魚網、魚具類の流失などの被害(東海地方地震・津波災害誌)					
	1498.9.20	明応7.8.25	・波高内海3-4m、外海6-8m(東海地方地震・津波災害誌) ・地割れし、同時に大津波がきて人家倒壊、死者がでた。(東海地方地震・津波災害誌)	・6-8mの波高(東海地方地震・津波災害誌) ・漁船の流失・破壊、漁網の流失、家屋の破壊、死者・溺死者をだすなどかなりの被害(東海地方地震・津波災害誌)			・約6-8mと推定(東海地方地震・津波災害誌) ・人家倒壊、死者があった。(東海地方地震・津波災害誌)(常光寺年代記)		
	1586.1.18	天正13.11.29		・津波が遼美表浜に波及したものと考えられる(東海地方地震・津波災害誌) ・大地震津波襲来(校区のあゆみ 高豊)			・『常光寺年代記』には、津波の記録がない(天正大地震誌) ・津波が発生したとしても、それは堀切付近に被害を与えるほどの津波ではなかったと考えるのが至当ではなからうか。(天正大地震誌)		
	1605.2.3	慶長9.12.16	・波高内海2-3m、外海5-6m(東海地方地震・津波災害誌)	・波高5-6m(明応地震と比べてやや低かったように思われる)(東海地方地震・津波災害誌) ・船の破損、魚網、魚具類の流失などの被害(東海地方地震・津波災害誌) ・片浜の船皆打破れ、魚網を流失した。人知らず明日見て驚くなり。(東海地方地震・津波災害誌)(常光寺年代記)			・波高5-6m(東海地方地震・津波災害誌) ・魚網、船打破る(東海地方地震・津波災害誌)		
	1703.12.31	元禄16.11.23	・波高2m余り(東海地方地震・津波災害誌) ・海水溺溢し船網漁具等流失(東海地方地震・津波災害誌) ・関東・東海地方に大地震があり、津波が房総半島・鎌倉・小田原の海岸に押し寄せ、さらに遼美半島においても船・網・漁具が流出し、多くの死者が出た(東海地方地震・津波災害誌)	・船網漁具等を流失(東海地方地震・津波災害誌)(愛知県遼美郡史)(細谷村記録常光寺年代記等) ・海水溺溢人多く死し、船網漁具等流失す(細谷村記録常光寺年代記等(元禄16年11月22日の記録として))					
	1707.10.28	宝永4.10.4		・6-8mであり、場所により10mにも達している。(東海地方地震・津波災害誌) ・漁船の流失・破壊、漁網の流失、家屋の破壊、死者・溺死者を出すなどかなりの被害(東海地方地震・津波災害誌) ・漁船や漁網などがことごとく流失し、地引網を主体とした半農半漁の表浜の村々は、大打撃を受けた。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤代信幸))			・津高6-7m(東海地方地震・津波災害誌) ・津波の直撃を受け集落全体が大きな被害にあった。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤代信幸)) ・郷内全ての村人が城山に逃れ、2日3晩山中で過ごした。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤代信幸))(常光寺年代記) ・家屋や田畑も呑み込まれ、集落跡も残さないなどの被害(田原市博物館 研究紀要第3号(藤代信幸))		
			被害状況詳細	①飯田没事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田没事教授論文選集) ・田原領内で船320隻流失			①飯田没事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田没事教授論文選集) ・浜辺52km、間漁船悉く流失 ・民家30余破壊 ・溺死者1村で1-2人(死者2流死)		
			地形による津波被害の要因	①飯田没事 1985 東海地方地震・津波災害誌(飯田没事教授論文選集) ・田原領内で船320隻流失	・池尻村と堀切村を除けば、六連村から伊良湖村までの田原市の表浜集落では、海崖の崩落や漁具の流出以外は、津波による家屋被害の記述はほとんど見当たらない。…城下以西の海食崖は帯水層をもたない砂礫の互層からなり、浜辺では生活用水や農業用水が容易に得られなかった。このため、背後の海食崖上の台地に集落を置くほかなかった。そのため、漁具の流出はあったものの、津波による家屋への被害は免れたのである。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤代信幸)) ・太平洋沿岸の村落は大半が流失してしまった。これを契機に東観音寺・常光寺などをはじめ多くの寺社や村落が北方の高地に移転した。(遼美町郷土資料館 研究紀要第2号(加藤克己))	・表浜の海食崖も、伊良湖付近になると次第に高度を下げ、小塩津村以西は砂浜の下に消失する。海食崖が消失した堀切村は、標高4.5~5mの砂浜の微高地に集落が密集している。堀切村では大津波の被害を度々受けていて、宝永地震の巨大な津波では、家屋も田畑も呑み込まれ、集落跡も残さないほどの被害にあった。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤代信幸)) ・小塩津の西にある堀切村では、海食崖が消失し、標高7m以下の砂浜が広がっている。砂浜の北側には、標高4.5m前後の後背湿地が広がっている。砂浜と後背湿地の間にある標高4.5m~5mの微高地に堀切村の集落は分布している。集落の背後に広がる後背湿地は、江戸時代になって「タノ田」などの新田開発が行われた。堀切村は東の小塩津海岸のように海食崖や岩礁がないため、地引き網が盛んに行われていた。しかし、海岸に面した砂丘上にあった堀切の集落はたびたび大津波の直撃を受けることになった。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤代信幸)) ・堀切村は、地下水にも恵まれ、地形も平坦であったために、自由に最適な場所に宅地を選択できたのである。残存した集落が南端にも存在していたことである。神戸村のような自然影響を受け切迫した集落移動と比べ、堀切の残存する農家は特別な不安を感ずることなく農業に従事しているのである。(田原市博物館 研究紀要第4号(鈴木啓之))			
	1708	宝永5	・波高2-3m(東海地方地震・津波災害誌) ・津高2-3m(東海地方地震・津波災害誌)	・波高2-3m(東海地方地震・津波災害誌) ・田畑の浸水被害(東海地方地震・津波災害誌) ・宝永五年(一七〇八)春、去年ノ地震止マズ、所所高汐満チテ、田畑多ク破壊ス。(老津村史)(細谷村記録常光寺年代記)					
	1854.12.23	嘉永7.11.4-5		・波高2-10m(東海地方地震・津波災害誌) ・城、城下の町および領内で、大きな震・浪害がでた(愛知県災害誌)(三宅家日記・阿知和内田家日記) ・津波による被害もあり災害復旧のため、拳母、田原、吉田、刈谷その他の緒領主は、千両から数千両を幕府から借用している。(蒲都市史 本文編2 近代編)(愛知県災害誌)	・6-8mであり、場所により10mにも達している。(東海地方地震・津波災害誌) ・漁船の流失・破壊、漁網の流失、家屋の破壊、死者・溺死者を出すなどかなりの被害(東海地方地震・津波災害誌) ・三度津波が押し寄せ、ほうべの七分目程まで潮が上がった(遼美町の民族探訪) ・堤防等の4mもゆり落ちた所があり、表浜(遠州灘沿岸)は大津波におそわれたが、倒壊家屋、山くずれがあり、余震は7か月ばかりつづいた。(愛知県災害誌) ・片浜筋村にも高ほうべ迄打付、其浪引取候節は昔より見たる人もなき沖の磯々皆々あらわれ、目の届くだけは汐一水も無之(遼美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治))(田中家文書)		・家多く流る(東海地方地震・津波災害誌) ・日出村では、大堀川で齋藤重左衛門が溺れ、小久保治助や齋藤三三郎等の家も、村の奥に移転したという。(遼美町の民族探訪) ・日出村の者は西骨山へ逃れ、家屋や網船や漁道具の流失により、不自由な暮らしをしたという。(遼美半島—郷土理解のための32章—改訂版)	・6-7m(東海地方地震・津波災害誌) ・ほとんどの家屋が流失し、(国際自動車コンプレックス研究会 NEWSLETTER vol.38)(遼美郡福寿寺史料) ・死傷者も多かった(地震を冷静に見て書いた、赤羽根村農民の災害記録)(天地之間 珍事変事書留 万物用心記(鈴木三十郎)) ・家屋や網船や漁道具の流失により、不自由な暮らしをした(遼美半島—郷土理解のための32章—改訂版) ・領主は、被災者救済を中山陣屋役人に命じ、全壊の家には家族一人に米一升六合、半壊の家には一人米八合、浸水の家には、二~四升を与えた。また、菩提寺である常光寺も、米三合の他に粥などを用意した。被災者にとって毎日寺より施される食べ物には、心から感謝し、山へ小屋掛け常光寺様で お粥よばれたいつ忘りよと後々まで語り伝えていた。(遼美町の民族探訪)(堀切村常光寺の住職が書き留めた記録) ・当時は現在の国道42号あたりに住んでいたが、100メートルほど北側の現在地に集団移転することになった(堀切校区まちづくり推進計画書) ・表浜ハ驚涛ニテ網船等不残流、殊ニ堀切村ナドハ甚々々溺死多数アリ。(遼美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治))(西園寺過去帳)	西堀切:旗本清水氏領 ・山中に小屋掛けをして不便な仮住まいをしいられた。汐除堤や土居敷が残らず欠崩し、田畑も一円に土砂が流入し、境界もわからなくなった。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤代信幸)) ・11月4日に堀切中村の伊八の嫁、伊平の妻、新助の妻、同村西の善兵衛母、六之右衛門の父、母、妻の8人が溺死。翌5日に、忠右衛門の妻が死亡(遼美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)) ・堀切村の者が常光寺山にのがれ津波をさけた(遼美町史 歴史編上巻『前代未聞事』)
被害状況詳細			①遼美町の民族探訪 ・城外では、漁船の流失十九艘、同破損三十二艘、漁網流失五十三帖、同破損八十四帖、浜辺の欠崩れ七千八百八十四間余、等		①地震を冷静に見て書いた、赤羽根村農民の災害記録(「天地之間 珍事変事書留 万物用心記」(鈴木三十郎)) ②堀切村(遼美町)では津波に低地の家が九十軒ほど流され、死傷者も多かった ③遼美町史 歴史編 上巻『前代未聞事』 ・堀切村の者が常光寺山にのがれ津波をさけたが、九十三家の母家の流失、その他を加えると全部で二百八十七棟の流失という被害。死者八人とあり、網船や漁道具など流失した。「其後皆々乞食同様にならした。 ④遼美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)(田中家文書) ・92軒流失、内50軒は銘々命助かりて、 ・此時、死人8人		①遼美町史 歴史編 上巻「西堀切村から中山陣屋の志満津式右衛門・太田基三郎・志満津藤四郎宛に提出した文章」 ・安政元年の地震・津波被害(西堀切村):総家数233、流失家数113、流失棟数275棟、半潰家数90、破損家数30、死者8、怪我60、田畑(田畑一円に土砂入、境界もわからず)、その他被害(牛馬七疋死、地引道具・網・船共に皆流失、汐除堤・土居敷欠崩、雑穀、家財などみな流失) ②遼美町史 歴史編 上巻『前代未聞事』 ・堀切村の者が常光寺山にのがれ津波をさけたが、九十三家の母家の流失、その他を加えると全部で二百八十七棟の流失という被害。死者八人とあり、網船や漁道具など流失した。「其後皆々乞食同様にならした。 ③遼美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)(田中家文書) ・92軒流失、内50軒は銘々命助かりて、 ・此時、死人8人		

項目	西暦	旧暦	渥美郡 渥美半島全体(田原市中心)		太平洋岸(田原市を中心)		伊良湖		日出		堀切		西堀切		東堀切	
①津波の被害状況	1854.12.24	嘉永7.11.5				・堀切、赤羽根にて津波の記録あり(研究輯録 三遠の民俗と歴史)										
	1855	安政2.2.1				・赤羽根にて津波の記録あり(赤羽根の古文書 近世史料編)										
	1855	安政2.3				・赤羽根にて津波の記録あり(赤羽根の古文書 近世史料編)										
	1855	安政2.6.16				・赤羽根にて津波の記録あり(赤羽根の古文書 近世史料編)										
	1855.11.7	安政2.9.28	・軽微な被害(東海地方地震・津波災害誌)			・魚網の流失などの被害がみられているので波高は3mくらいあったと思われる。(東海地方地震・津波災害誌)										
	1944.12.7	昭和19.12.7				・津波の高さ1-1.5m(東海地方地震・津波災害誌) ・波高は宝永や安政津波の約4分の1くらい(※宝永・安政両津波はだいたい同じ高さの6-8m)かなり低く被害も生じていない。(東海地方地震・津波災害誌) ・津波が表浜一帯を襲った(田原市博物館 研究紀要第4号(藤代信幸)) ・太平洋沿岸デハ地震直後海水ハ引イテ行キ約三分位ノ後、カエシテキタ。然シ波浪ハ強クナカッタ。(伊古部郷土誌)(愛知県渥美半島災害状況調査)										
	1960.5.24	昭和35.5.24	・津波1m内外(東海地方地震・津波災害誌) ・二から五メートル来たではないか(ふるさと細谷)(豊橋寺院誌、豊橋市史、三河国分書、三河)			・地元伊良湖漁協組調べの潮位はいつもより二メートルほど高く、満ちひきの差も三倍ほど大きく潮が陸までよせている。(中部日本新聞(1960.5.24)(夕刊)) ・潮位も二メートルほど高まり、それが約30分ごとに満ち引きし4、5時間目でいっそう大きくなった。このため、いままで海水に隠れていたイソの岩がすっかり背を現わし逃げ遅れた黒タイやワガ、アイナメ、エビ、などのイソ魚やワカメがどっさり網ですくえ思わぬ拾いものに沿岸漁民は大喜び。しかし、一方では高潮に浜の揚げ舟を波にさらわれあわてて全部の船を丘にあげるなど大騒ぎだった。(中部日本新聞(1960.5.25))										
	2010.2.28	平成22.2.28	・三河湾にも最大で1メートルの津波が予想されるとあって、伊勢湾フェリー、名鉄フェリーが午前11時45分から欠航した。(東日新聞(2010.3.1)) ・「三河湾岸だが、汐川を津波が遡(そ)り上する心配がある」として、市総合体育館や市文化会館は午後2時から休館に入った。(東愛知新聞(2010.3.1)) ・避難勧告は、田原市1万921世帯。しかし、避難したのは田原市で3世帯3人にとどまった。(東愛知新聞(2010.3.1))				・赤羽根漁港にて0.7mの津波あり。(東日新聞(2010.3.1)) ・三河湾にも最大で1メートルの津波が予想されるとあって、伊勢湾フェリー、名鉄フェリーが午前11時45分から欠航した。(東日新聞(2010.3.1)) ・「三河湾岸だが、汐川を津波が遡(そ)り上する心配がある」として、市総合体育館や市文化会館は午後2時から休館に入った。(東愛知新聞(2010.3.1)) ・避難勧告は、田原市1万921世帯。しかし、避難したのは田原市で3世帯3人にとどまった。(東愛知新聞(2010.3.1))									
2011.3.11	平成23.3.11	・田原市は避難勧告は出さなかったものの、市民の心情を考慮して市内すべての市民館20カ所を自主避難場所として開設した。うち4カ所の市民館に計14人が自主避難した。(東愛知新聞(2011.3.12))				・赤羽根漁港にて1.6mの津波。2隻浸水(廃船)。(東愛知新聞(2011.3.12)) ・田原市は避難勧告は出さなかったものの、市民の心情を考慮して市内すべての市民館20カ所を自主避難場所として開設した。うち4カ所の市民館に計14人が自主避難した。(東愛知新聞(2011.3.12))										

項目	西暦	旧暦	瀨美郡 瀨美半島全体(田原市中心)	太平洋岸(田原市を中心)	伊良湖	日出	堀切	西堀切	東堀切
②津波による神社等の移転							<p>【1707.10.2(宝永4.10.4)】</p> <p>・宝永4年(1707)の大地震では、太平洋沿岸の村落は大半が流出してしまっ。これまでの街道は、修繕できないほどに破壊されてしまった。これを契機に、東観音寺・常光寺などをはじめ多くの寺社や村落が北方の高地に移転した。(瀨美町郷土資料館 研究紀要第2号(加藤克己))</p>		
③津波による住民生活の変化(集団移転)				<p>【1707.10.2(宝永4.10.4)】</p> <p>・宝永4年(1707)の大地震では、太平洋沿岸の村落は大半が流出してしまっ。これまでの街道(伊勢街道)は、修繕できないほどに破壊されてしまった。これを契機に、東観音寺・常光寺などをはじめ多くの寺社や村落が北方の高地に移転した。(瀨美町郷土資料館 研究紀要第2号(加藤克己))</p> <p>【表浜の集落】</p> <p>・「表浜」と呼ばれる瀨美半島の太平洋岸には、数10～200戸程度の塊村をなした40近くの集落が、断続的に連なっている。この表浜集落も、海食崖の後退に伴い、北方の高地へと移転が繰り返されてきた。現在の集落の南側には「元屋敷」と呼ばれるかつての屋敷跡が各所に残されている。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤代信幸))</p> <p>【伊勢街道】</p> <p>・伊勢街道が盛んなのは16世紀頃までで、年々の海岸侵食により道は高台に移動し、坂道が多い道となった。特に、宝永4年(1707)の大地震で、古来の街道はほとんど海中に没し、安政元年(1854年)の大地震では「片浜十三里皆がけくづる」と地元の記録にある。(遠州灘海岸保全基本計画(平成15.7静岡県・愛知県))</p>		<p>【1854.12.23(嘉永7.11.4)】</p> <p>・地元に残る言い伝えでは、日出村でも浜辺に近い所に家を構えていた三次郎宅や次助宅数軒が津浪に押し流されたので、郷中や北続きの安全な場所に移転している。(瀨美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治))</p> <p>・日出村では、大堀川で齋藤重左衛門が溺れ、小久保治助や齋藤三次郎等の家も、村の奥に移転したという。(瀨美町の民族探訪)</p>	<p>【1854.12.23(嘉永7.11.4)】</p> <p>・安政元年(1854)11月4日の大地震と津波で西堀切村233世帯のうち113世帯、東堀切村68世帯のうち17世帯の家が津波によって流されるという大被害を受けた。そのため、当時は現在の国道42号あたりに住んでいたが、100メートルほど北側の現在地に集団移転した。(堀切校区まちづくり推進計画書)</p> <p>・安政2年(1855)2月、東堀切村名主卯平、西堀切村名主政右衛門等両村の役人が連名で、天領三河支配の赤坂代官所へ嘆願書を差し出した。その嘆願書には、西堀切村の被害は総数233軒の内、流失の家113軒、流失の棟数275棟、半潰れ家30軒、死者8人、怪我人60人と書き上げており、同じ内容を中山村陣屋在役の「西堀切村救米覚帳」と照合してみると、その数にはかなりの水増しがみられるようである。この時の助郷免除願いはすべてには聞き届けられず、西堀切村へは陣屋役人の度々の検分が行われ、領主より改めて40俵の御救米と拝借金70両が下げ渡され、また同年3月、更に許借金百五拾両が下賜された。翌安政3年(1856)4月に陣屋より渡された「卯歳(安政2)御物成小物皆済目録」に、年貢が免除されているが、公儀への助郷免除願いはなかなか裁許されなかった。文久2年(1862)正月、東・西堀切村は再び助郷免除の嘆願書を差し出した。今度は直ちに聞き届けられ、助郷役は当分の間免除されることになった。(瀨美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治))</p>	<p>【1854.12.23(嘉永7.11.4)】</p> <p>・東堀切村は無利息の五か年賦で七十両を拝借した。同じ支配所の村々からとあるから幕府直轄領の村々からということになる。住居をもつ家がある。(瀨美町の民族探訪)堀切村常光寺の住職が書き留めた記録)</p> <p>・田畑一円に砂入りとなり境界もわからないほどに荒廃した西堀切村の復興がどれだけの苦勞であったかを語ってくれるものはないが、事態が異変であっただけに、旗本清水氏の中山陣屋も理解を示し、協力したものと考えられる。(瀨美町史 歴史編 上巻)</p> <p>【集落の特徴】</p> <p>・東・西堀切村は、漁業の盛んな村であった。東方和地一色までで海岸断崖や岩礁が切れ、堀切に至って白砂の海浜を形成し地引網の適地になっていたためであろう。(瀨美町史 歴史編 上巻)</p> <p>【集落の特徴】</p> <p>・東・西堀切村は、漁業の盛んな村であった。東方和地一色までで海岸断崖や岩礁が切れ、堀切に至って白砂の海浜を形成し地引網の適地になっていたためであろう。(瀨美町史 歴史編 上巻)</p>	
④津波による史跡						<p>【1854.12.23(嘉永7.11.4)】かいがらぼた</p> <p>・人家や先祖伝来の田畑を守るために、浜に沿った防潮林の中に波除け堤を長い年月かけて築いてきた。地元(日出地区)では、特産のいの貝やカキの殻をその都度積み上げてきたので、「かいがらぼた」と呼び、昭和30年代くらいまで大事にされてきた。(瀨美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治))</p> <p>・地元で「かいがらぼた」と呼ばれる津波除けの堤を太平洋岸(まで)に築いたりした。なお、これらの教訓によりその後の地震(昭和19年、東南海地震等)では、比較的被害が少なかった。(「前代未聞事」高瀬家所蔵文書・「助郷免除願書」堀切区有文書・「常光寺年代記」常光寺文書・清田治「瀨美半島における嘉永東海地震の実状・現存する災害記録から」、『研究紀要・第7号』瀨美町郷土資料館 平成15年3月・「堀切村村絵図」等)</p>	<p>【1854.12.23(嘉永7.11.4)】かいがらぼた</p> <p>・人家や先祖伝来の田畑を守るために、浜に沿った防潮林の中に波除け堤を長い年月かけて築いてきた。地元(日出地区)では、特産のいの貝やカキの殻をその都度積み上げてきたので、「かいがらぼた」と呼び、昭和30年代くらいまで大事にされてきた。(瀨美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治))</p> <p>・地元で「かいがらぼた」と呼ばれる津波除けの堤を太平洋岸(まで)に築いたりした。なお、これらの教訓によりその後の地震(昭和19年、東南海地震等)では、比較的被害が少なかった。(「前代未聞事」高瀬家所蔵文書・「助郷免除願書」堀切区有文書・「常光寺年代記」常光寺文書・清田治「瀨美半島における嘉永東海地震の実状・現存する災害記録から」、『研究紀要・第7号』瀨美町郷土資料館 平成15年3月・「堀切村村絵図」等)</p>	<p>【1854.12.23(嘉永7.11.4)】西堀切村絵図</p> <p>・東堀切村の浜境より日出村境までの20町37間の砂浜に墨引きをし、「此筋印嘉永七寅年、大津浪ノセツ御アリ」と、浪音により砂浜が広く欠損した。(瀨美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)) (西堀切村絵図)</p>	
④津波による言い伝え、体験談						<p>【1854.12.23(嘉永7.11.4)】言い伝え</p> <p>①中村の角左衛門には、9才の源蔵と5才の政平の2人の侍があった。一家は地震のあとの津波を予想し、源蔵に仏壇の本尊様と御先祖の位牌を背負わせ、女房は幼い政平を背に常光寺山に向かって駆け出した。・・・女房が転んだ時、何気なしに脇の下より浜の方を見ると、山のような高波が押し寄せて来るのが見えたので、もうだめかと目をつぶり観念していると、夫の角左衛門が手を引っ張って起こしてくれたので、無事に避難することができた。一度にどっと押し寄せた津波は、多くの家を壊し沖へ去って行ったが、その引く潮の高さに遮られ沖に浮かぶ神島の島陰が隠れてしまったということである。(瀨美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)) (荒木保作氏談、母は政平の娘)</p> <p>②村に「猫ばあさん」と渾名される猫好きの人がいた。津波が来ると隣家の人にいわれ、山へ逃げようとしたが、あまりの大地震に脅えたのか、可愛い猫が庭の木に駆け上がったまま、いくら呼んでも下りて来ない。それでも猫と一緒に逃げたいと木の下でうろちょろしているうちに、大波に巻かれて命を落としてしまった。(瀨美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)) (小久保進氏談)</p> <p>③機織りの得意な女の人が、朝早くから機織(はたご)に向かって一生懸命反物を織っていた。もうすぐ一反織り上げようとした時、天地が鳴動し大地震が起こった。人々は、津波の来ることを感じすぐに常光寺山へ逃げようと誘ったが、もうすぐ織り上がる反物を捨てて行くことに心を引かれ、なんとか仕上げようと再び機織に向かっているうちに、押し寄せた大波に流され家の井戸にはまって溺れ死んでしまった。(瀨美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治)) (小久保進氏談)</p>	<p>【1854.12.23(嘉永7.11.4)】言い伝え</p> <p>①堀切村の人々は、津波襲来の時、殆どのが和名山へ逃げ、村の復旧するまで山に小屋掛けをして不便な仮住まいをしられた。領主は、被災者救済を中山村陣屋役人に命じ、全壊の家には家族一人に米一升六合、半壊の家には一人米八合、浸水の家には、二～四升を与えた。また、菩提寺である常光寺も、米三合の他に粥などを用意した。被災者にとって毎日寺より施される食べ物は、心から感謝し、「山へ小屋掛け常光寺様で お粥よばれたいつ忘りよ」と後々まで語り伝えていた。村の復旧にあたっては、浜敷に近い所にあつた家は、山裾の高台に移転するものもあり、今でも集落の南側に元屋敷と呼ぶ地所を持つ家がある。(瀨美町の民族探訪) (堀切村常光寺の住職が書き留めた記録)</p>		

項目	西暦	旧暦	津波										
			小塩津	和地	越戸	赤羽根	若見	池尻	赤羽根				
①津波の被害状況	1096.12.17	嘉種3(永長1).11.24											
	1498.9.20	明応7.8.25											
	1586.1.18	天正13.11.29											
	1605.2.3	慶長9.12.16											
	1703.12.31	元禄16.11.23									・漁舟多く流さる(赤羽根町史)		
1707.10.28	宝永4.10.4										・津高6-7m(東海地方地震・津波災害誌) ・池尻川に津波襲来し被害が大きかった(東海地方地震・津波災害誌) ・河口付近の低地にあった池尻村の一部の民家が流出した。(田原市博物館研究紀要第3号(藤代信幸)) ・池尻川の河口部にも波高6~7mの津波が襲来し、池尻川や精進川を遡上した。このため、標高の低い「赤羽根池尻の川筋の村が大破する」など、河口部にあった民家が津波によって大きな被害を受けたのである。(田原市博物館研究紀要第3号(藤代信幸))	・当所も大地震跡大津波(研究輯録 三遠の民俗と歴史)(鈴木三十郎文書(天地の間珍事変事書留)、及び庄屋文書) ・高砂にて浜道具流れ候(研究輯録 三遠の民俗と歴史)(鈴木三十郎文書(天地の間珍事変事書留)、及び庄屋文書)	
	被害状況詳細												
			地形による津波被害の要因	・六連村から小塩津村にかけては、標高60~10mの断崖絶壁の海食崖が、西方に少しずつ高度を下げながら連続する。砂浜が狭いので、波浪を受けやすく、海岸線も年1mくらいの割合で後退してきた。記録によると、1320年に谷熊村から移住した14軒が、六連海岸の開折谷の水田を耕作し漁業に従事していた。これが「浜田」の地名の起源となったが、海食崖の激しい波浪浸食により海岸沿いの集落は、早い時期に消滅している。江戸時代には、海食崖の上の台地に集落が立地していた。このため、宝永地震では、大津波による集落の被害はなく、浜辺においてあった網や船などの漁具の流出が主な被害として記録された。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤代信幸)) ・高松以西は、海食崖も低く浸食谷も小規模であり、集落と海岸との距離が近接している。(田原市博物館 研究紀要第4号(鈴木啓之))							・赤羽根~若見海岸では、標高30~20mの海食崖が東西に続き、海食崖付近の平坦な台地の上に、赤羽根・池尻・若見の各集落が立地している。赤羽根村西と池尻の間は、海食崖や台地が切れ、太平洋に向かって池尻川や精通川が流れ出ている。豊橋市の太平洋岸には、海食崖の開折谷を流れる長さ1kmにも満たない小河川はあっても、この池尻川のような比較的広い流域を持つ河川は、渥美半島の太平洋岸には存在しない。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤代信幸)) ・高松以西は、海食崖も低く浸食谷も小規模であり、集落と海岸との距離が近接している。(田原市博物館 研究紀要第4号(鈴木啓之))		
1708	宝永5												
1854.12.23	嘉永7.11.4-5		・波高6-8m(東海地方地震・津波災害誌)(下永良陣屋日記) ・堀切村、小塩津村の人たちは御林山にのがれた(渥美町史 歴史編 上巻)(前代未聞事) ・小塩津村大磯、白砂に相成(渥美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治))(田中家文書)	・和地村しよほしと号す磯等も白砂に相成(渥美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治))(田中家文書) ・大震災にて、所々家居打倒大騒動致す所に不寄存大津波打寄家居其他海辺は田畑迄も押し、誠にかかる天災前代未聞。(渥美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治))(田中家文書) ・大津波打寄、和地村にては川尻にて三軒流砕致し、和地村にて小船磯船五拾艘程流失。(収新日本地震史料第五巻別巻五ノ一(五月雨嘯し))							・波の高さ6-10m(東海地方地震・津波災害誌) ・ひる四ツ時大地震、九ツ時津波、八ツ時半までにおだやかなる。(赤羽根町史)(村記録その他) ・若見村の弁天社は池尻川河口に近い地に鎮座していたこともあり、嘉永7年11月の地震(安政の東海地震)の際、同地を襲った津波により流出の難に遭っている。(田原の文化第33号(石井一希))(赤羽根の古文書 近世史料編)(神祇最上御神前家寶書記) ・津波は500mくらい海水が引いてからきて池尻川の支流精進川を遡上り、付近の下り部落(池尻)では床上浸水して被害を与え、前古田まで浸入した。辨天社(高さ10m)が高波で流失した(東海地方地震・津波災害誌)(赤羽根宮本家文書)(赤羽根町史)	・6-10m(東海地方地震・津波災害誌) ・津波は500mくらい海水が引いてからきて池尻川の支流精進川を遡上り、付近の下り部落(池尻)では床上浸水して被害を与え、前古田まで浸入した。(東海地方地震・津波災害誌)(赤羽根宮本家文書)(赤羽根町史) ・池尻下りひくみの家ハゆか上迄余汐上り(赤羽根の古文書 近世史料編)(神祇最上御神前家寶書記) ・人所々にてし(渥美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治))(渥美家文書) ・一度ニドツ押寄せ来り池尻川ヲ溯リテ非常ニ侵入シ、漁舟ハ漂流シ漁網類ノ樹ニカカレルアリ、(赤羽根の古文書 近代史料編)(高松長谷川家記録) ・カレイ、ヒラメ、舌ヒラメ等ノ魚類ハセ上リテ沢山拾ヒタル者アリ(赤羽根の古文書 近代史料編)(高松長谷川家記録) ・家の内に魚あり、おぼへに2斗づきのうすがる。皆人野宿す。(東海地方地震・津波災害誌)(彦坂弥太郎、渥美重儀)	・波の高さ6-10m(東海地方地震・津波災害誌) ・ひる四ツ時大地震、九ツ時津波、八ツ時半までにおだやかなる。(赤羽根町史)(村記録その他) ・船はくだけ網道具はこなみじんに破れる(研究輯録 三遠の民俗と歴史)(赤羽根町史(天変地異等の記録の部)) ・若宮八幡社現在地付近は、嘉永7年(安政元年:1854)の東海・南海地震の際津波を受けている。(田原の文化第33号(石井一希))(赤羽根の古文書 近世史料編)(赤羽根西村の商人宮田三郎兵衛「年代附留覧」)
		被害状況詳細	①下永良陣屋日記(東海地方地震・津波災害誌) ・浜道具残らず流失、船7隻中3隻大破、4隻流失	①「表浜ハヶ村漁船流失損」出し調帳(岡田与次右衛門) ・和地村:船三艘流失、同九艘大損シ、櫓式拾挺流失、袋六ツ流失、同七ツ大損シ、網巻帖分流失、同拾巻帖分大損、諸道具拾式帖分流失、櫓六挺損シ(「右者上田村ら一色」(迄)網敷拾式帖分流失損し候)	①「表浜ハヶ村漁船流失損」出し調帳(岡田与次右衛門) ・越戸村:船壹隻流失、揚操舟壹隻流失、瀬取舟一隻流失、網六帖流失、ろくろ網四拾枚流失、袋三ツ流失、櫓九挺流失、碇巻頭流失、揚操網式帖分諸道具共流失	①「表浜ハヶ村漁船流失損」出し調帳(岡田与次右衛門) ・若見村:舟拾壹隻大損シ、小操船二隻大損シ、櫓拾挺流失、同八挺打、大目網九枚流失、同七拾式枚切之、袋三ツ流失、同四ツ 切之、小目網拾帖流失共切之	①「表浜ハヶ村漁船流失損」出し調帳(岡田与次右衛門) ・赤羽根中村:船三隻大破、櫓式挺流失、同巻挺損し、大目網拾八枚流失、同三拾二枚流失、同九拾八枚大破、脇網半帖流失、同 五拾四帖大破、袋巻ツ流失、同九ツ大破 ・赤羽根西村:大目網七拾式枚流失、脇網五帖流失、同式帖大破、櫓三挺流失、袋巻ツ流失、 ・赤羽根東村:船八隻大破、櫓巻挺流失、同巻挺損し、脇網三帖流失、同拾帖大破、大目網七拾四枚流失、袋巻ツ流失、同十大破						

項目	西暦	旧暦	和地					赤羽根	若見	池尻	赤羽根
			小塩津	和地	越戸	赤羽根	若見				
①津波の被害状況	1854.12.24	嘉永7.11.5					・七ツ時過ぎ又々地震ゆり尤も格別大キニは無之少々ゆり候七ツ半時雷の如く鳴物聞へ申の方より未ノ方ニ鳴渡り何れ入にて鳴り候様に聞へ候。此時大阪表へ大津波打上げ人数多く死す。今日の津波は当所に至りては軽し(研究輯録 三遠の民俗と歴史)(鈴木三十郎文書(天地の間珍事変事書留)、及び庄屋文書)				
	1855	安政2.2.1					・七ツ時前※(より)七ツ時半迄三度地じん。海辺汐ハ増し候(赤羽根の古文書 近世史料編)(天地の間 珍事変事書留 万物用心記(鈴木三十郎))				
	1855	安政2.3					・間々ニ地じんあり。海汐ハまし候(赤羽根の古文書 近世史料編)(天地の間 珍事変事書留 万物用心記(鈴木三十郎))				
	1855	安政2.6.16					・ハツ時頃ニ地しん少々ゆり候。度々海汐まし候(赤羽根の古文書 近世史料編)(天地の間 珍事変事書留 万物用心記(鈴木三十郎))				
	1855.11.7	安政2.9.28					・先ズ此度は大地しんでもゆり候間みじかく候故津波もナク家蔵ノ破損去年よりは大に少し。乍併下浜辺津波の気味合あり。余程高汐揚り。(研究輯録 三遠の民俗と歴史)(鈴木三十郎文書(天地の間珍事変事書留)、及び庄屋文書)				
	1944.12.7	昭和19.12.7					・波の高さ1.5m(東海地方地震・津波災害誌) ・潮の高さは数十cmから1m程度(東海地方地震・津波災害誌) ・津波による被害はなかった(田原市博物館 研究紀要第4号(藤代信幸))				
	1960.5.24	昭和35.5.24									
	2010.2.28	平成22.2.28					・赤羽根漁港では同3時14分に30センチの第1波が到達、最大は同4時37分に70センチが観測(東日新聞(2010.3.1)) ・津波警報が発令されたのを受け同漁港では朝から対応に追われた。約170隻の漁船がロープなどで結ばれ、沖合に避難したのは6隻だった。漁業組合側は「前日が時化(しけ)で操業できなかったためにこのような措置をとった」と話した。午後5時ごろ、満潮が近づく同漁港には、多くの関係者が潮位の上下を見守った。津波が近づくと、潮位は50センチ以上下げ、関係者を不安がらせた。だが、その後はじわじわと潮位が上昇しただけで混乱はなかった。(東日新聞(2010.3.1)) ・愛知県田原市の赤羽根漁港では、七十代の男性が「満潮に向っているのに潮位が急激に下がった。漁を三十年以上して初めて」と驚いた。(中日新聞(2010.3.1))				
2011.3.11	平成23.3.11					・田原市では午後4時54分、太平洋に面した赤羽根漁港で高さ1.1メートルの津波を観測した。同5時32分、同漁港でさらに大きな高さ1.6メートルの津波を観測した。(東愛知新聞(2011.3.12)) ・津波の威力はすさまじく、午後4時半すぎ第一波で水位が1メートルほど上昇すると、今度は急激に引き出し、同5時過ぎには水位は2メートル半も下がり、漁港一帯の海底が露呈するほど。漁協事務所の岸壁に停泊中のシラス漁船は大きく傾いた。続いて、津波の第二波が湾内へ、水位はあっという間に再上昇し、関係者は停泊中のシラス漁船18隻、釣り船4隻を急いで沖へ避難させた。さらに同6時20分頃には再度の引き波で荷揚げ用の浮き浅橋が沈降。通常平らなタラップだが、棧橋側が2メートルほど落ち込んだ。(東愛知新聞(2011.3.12)) ・最初の転覆は11日午後8時ごろ。一本釣り漁船(約3トン)が押し寄せた津波が岸壁にぶつかり、激しい勢いで引く波によって横転させられた。第2の転覆は12日午後8時、漁港を見回りに来た関係者が見つけた。被害にあったのは小型刺網漁船(約0.5トン)。転覆の原因はわかっていないが、船首が棧橋下部の溝に引っかかっていたことから、津波が激しい勢いで引いた瞬間、湾内の水位が極端に下がった結果とみられる。両船とも海水に浸かったせいで電気系統がだめになった。廃船にするという。関係者は「昨年2月のチリ地震では70センチの津波に襲われたものの、被害はなかった。今回は1メートル以上の津波が2回(1.6メートルと1.2メートル)も襲った。あらためて津波の怖ろしさを知った」と口をそろえた。同漁港を管理する愛知県外海漁協の吉武正康組合長は「決して港湾施設や緊留法に不備があった起きた転覆事故ではない。津波は本当に怖ろしい」とくちびるを噛みしめた。(東愛知新聞(2011.3.13))					

項目	西暦	旧暦								
			小塩津	和地	越戸	赤羽根	若見	池尻	赤羽根	
②津波による神社等の移転								【1854.12.23(嘉永7.11.4)】 ・津波は500mくらい海水が引いてからきて池尻川の支流精進川を遡り、付近の下り部落(池尻)では床上浸水して被害を与え、前古田まで浸入した。辨天社(高さ10m)が高波で流失した(東海地方地震・津波災害誌)(赤羽根宮本家文書)(赤羽根町史)		
③津波による住民生活の変化(集団移転)										
④津波による史跡										
④津波による言い伝え、体験談			<p>【天長4年(827)7月13日 言い伝え】 ・その昔小塩津が難崎と呼ばれていた頃には、磯岩が沖合はるか湾曲して続き入江となり、波も静かに風光もよく、伊勢へ渡る舟にとて喜ばれる港だったそうです。戸数も三百、よい港街であったと思われまふ。大宝二年持統上皇がこの地方を御巡幸の砌この海岸の眺が大変お気に召したとも伝えられ、その時の御言葉により日吉神社が勧進され村の名も越津と改めたと伝えられています。天長四年(827)七月十三日この地方に大地震が起こって越津の海岸は大陥没、美しく湾曲していた磯岩も賑やかだった家並も半分過ぎ海底に沈んでしまいました。危く難を免れた人たちは北へ避難して地名も今の小塩津と改めたと伝えられています。正福寺も日吉神社もまたこの時今の地に移ったそうです。(渥美町の伝説)(小塩津日吉神社の由緒より)</p>	<p>【1854.12.23(嘉永7.11.4)地元住民からの言い伝え】 ・和地町の川尻には、川尻川が太平洋岸に流れ込んでいる場所がある。川尻の集落は現在は国道42号線沿いに住んでいるが、以前は違う場所にあり、海岸沿いに元屋敷がある。元屋敷には、対馬神社があり、安政のときに2~3件くらい流されたといういつたえがある。元屋敷付近は海岸の崖が10m位であるが、元屋敷は8mくらいのため、安政の津波が川尻川沿いに入ってきて被害をうけたので、元屋敷から42号線沿いに集落移転した。なお火事で移転したといういつたえもある。記録として、昭和15年くらいに書いた村の書物があり、津波でみんな山ににげたという記録がある。(川尻地区住民より聞き取り)</p> <p>【2011.3.11(平成23.3.11) 住民証言】 ・東日本大震災の時は、4時まで郷土資料館におり、そこから川尻に帰って来ていたが、30分間に2mあがっていた。ちょうど5月の最満潮と12月1日(夜11時12時)の最干潮との差くらいに潮が30分くらいあがってきた。当時4時半くらいが干潮だったためよかったです。満潮のときにきたらまずかったです。(川尻地区住民より聞き取り)</p>				<p>【1854.12.23(嘉永7.11.4)言い伝え】 ・津波の前触れとして常時は海上にある一色の大磯が、砂浜にある岩に見えてしまう程沖合いにまで海が引いたとの老人の談が見られる。(赤羽根の古文書近代史料編)(長谷川家記録)</p>		

項目	西暦	旧暦				
			高松	大草	神戸	六連
①津波の被害状況	1096. 12.17	嘉穂3 (永長1) .11.24				
	1498. 9.20	明応7. 8.25				
	1586. 1.18	天正13. 11.29				
	1605. 2.3	慶長9. 12.16				
	1703. 12.31	元禄16. 11.23				
	1707. 10.28	宝永4. 10.4	<ul style="list-style-type: none"> ・高松など常より五丈(1丈3mとして約15m)程高(野田史)(金五郎文書「歳代覚書」) ・ほうへの低い所を越えてしまった。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤代信幸))(金五郎文書「歳代覚書」) ・あみ、舟残らず流れる(金五郎文書「歳代覚書」) 			
		被害状況詳細				
		地形による津波被害の要因	<ul style="list-style-type: none"> ・六連村から小塩津村にかけては、標高60~10mの断崖絶壁の海食崖が、西方に少しずつ高度を下げながら連続する。砂浜が狭いので、波浪浸食を受けやすく、海岸線も年1mくらいの割合で後退してきた。記録によると、1320年に谷熊村から移住した14軒が、六連海岸の開折谷の水田を耕作し漁業に従事していた。これが「浜田」の地名の起源となったが、海食崖の激しい波浪浸食により海岸沿いの集落は、早い時期に消滅している。江戸時代には、海食崖の上の台地に集落が立地していた。このため、宝永地震では、大津波による集落の被害はなく、浜辺においてあった網や船などの漁具が主な被害として記録された。(田原市博物館 研究紀要第3号(藤代信幸)) ・表浜では、江戸時代以降から明治中期まで、地引き網が主体であった。神戸小学校の沿革史に、「大字南神戸・東神戸・大字大草、一部海岸ノ人民ハ漁業ヲ以テ本業トシ、…略…」とあることから理解できる。(田原市博物館 研究紀要第4号(鈴木啓之)) ・高松以東は、浸食谷が深く入っているため、海岸から集落までの距離が漸次大きくなる。(田原市博物館 研究紀要第4号(鈴木啓之)) 			
1708	宝永5					
1854. 12.23	嘉永7. 11.4-5	<ul style="list-style-type: none"> ・高松村沖に鯛の嶋と号す磯有之趣、此時迄は咄しのように承居候処、此嶋三つ迄相見へ候由、此嶋迄は凡二里程も有之よし(瀧美町郷土資料館 研究紀要第7号(清田治))(田中家文書) 		<ul style="list-style-type: none"> ・海面大いに轟き、一見すれば、南大崎より大山の如き大ツナミ、東の方より同ク大ツナミ、其の前凡そ海面二十丁位潮干となり、然る所東西より斜に大ツナミ寄来り、欠穴、七合迄海となる、是をツナミと言ふ、此の時に当り人民恐怖し、食物を荷い、土地高き所へ逃行(収新日本地震史料 第五卷 別巻五ノ一)(神戸村庄屋日記(鈴木佐平太)) 		
		被害状況詳細	<ul style="list-style-type: none"> ①「表浜八ヶ村漁船流失損 出し調帳」(岡田与次右衛門) ・高松村: 船八隻流失、櫓三拾五根流失、脇網拾貳根流失、洞網百六拾壹枚流失、袋拾壹流失、小操網船諸道具入不残流失 	<ul style="list-style-type: none"> ①「表浜八ヶ村漁船流失損 出し調帳」(岡田与次右衛門) ・大草村: 船壹隻流失、袋五ツ半流失、洞網二拾七流失、脇網三帖流失、碇壹頭流失、櫓三根流失 	<ul style="list-style-type: none"> ①「表浜八ヶ村漁船流失損 出し調帳」(岡田与次右衛門) ・久美原村: 袋四ツ半流失、網壹帖半流失、罾網十四流失、櫓九根流失、わだ三拾花流失、ろくろ十流失、網六拾壹郷房流失 	

項目	西暦	旧暦					
			高松	大草	神戸	六連	
①津波の被害状況	1854. 12.24	嘉永7. 11.5					
	1855	安政2. 2.1					
	1855	安政 2.3					
	1855	安政2. 6.16					
	1855. 11.7	安政2. 9.28		・大草村にて流し候網、高松神井浜迄流れ候位の事(研究輯録 三遠の民俗と歴史)(鈴木三十郎文書(天地の間珍事変事書留)、及び庄屋文書) ・津波は無之候え共、大草村より下り高汐にて浜道具多く流れ候(研究輯録 三遠の民俗と歴史)(宮田三郎兵衛文書(年代諸事附留))	・津波の気味合あり、余程高汐揚り。谷ノ口浦にてはガケ下へ八尺位も打付ケ候、汐登り候様子網丈ケは船流し候え共、遠く流れ行不致(研究輯録 三遠の民俗と歴史)(鈴木三十郎文書(天地の間珍事変事書留)、及び庄屋文書)		
	1944. 12.7	昭和 19. 12.7					
	1960. 5.24	昭和 35. 5.24					
	2010. 2.28	平成 22. 2.28					
	2011. 3.11	平成 23. 3.11					

項目	西暦	旧暦				
			高松	大草	神戸	六連
②津波による神社等の移転			<p>【1707.10.2(宝永4.10.4)】</p> <p>・八柱神社は、旧来は「宮沢」にあったとされる。そして宝永4年(1707)10月4日に発生した地震(宝永の東海地震)により、社地の多くが崩壊したため、2年後の宝永6年に比呂古山へと移転したとされる。・・・移転先の「比呂古山」は現在八柱神社が鎮座する「広子村」のことと考えられるが、旧地を示す「宮沢」は現在の地名にはみられない。「田原藩日記類」にも、移転以前の同社の様子を伝える記録は確認できない。(田原の文化第33号(石井一希))(稿本「村誌五」内「當社由緒記」)</p>			
③津波による住民生活の変化(集団移転)						
④津波による史跡						
④津波による言い伝え、体験談						

参考資料 3

関係者へのヒアリング調査結果

参考資料 3 関係者へのヒアリング調査結果

参考資料 3-1 豊橋市

(1) 豊橋市美術博物館

日時・場所：平成 23 年 11 月 2 日 10 時～ 豊橋市美術博物館内

出席者：豊橋市美術博物館 学芸員 増山真一郎氏

訪問者：愛知大学名誉教授 藤田佳久氏、センター 加藤、佐藤

1. 入手資料

- ・研究紀要（豊橋市美術博物館）
- ・後日、東観音寺の由緒（記録）、加藤家の文書等のコピーをいただくことで承諾。

2. 博物館の資料について

- ・別の担当者が、古文書のタイトルだけみて、地震で津波の関係があるかどうか調べたが、牟呂や太平洋岸であるが、村方の古文書では見いだせなかった。そのほか、村の神主さんの文書などを丹念にみればあるかもしれないが、タイトルだけでは津波の関係はわからない。
- ・経緯がわかるものについては、目録をみれば大体のものがわかるが、表題だけでは津波のことはわからない。
- ・研究紀要をまとめた担当者に聞いたが、津波関係はない。

3. 津波の記録について

(1) 東観音寺：津波に関係するものであれば、東観音寺（とうかんのんじ）が 宝永 4 年（1707）の津波で被災し、正徳 6 年（1716）に移転した記録がある。東観音寺について、愛知県教育委員会から刊行されている資料がある。東観音寺の由緒（記録）についてもみてる。

(2) 吉田藩日記（羽田八幡宮？）：藩日記の史料集は、地震が主であるが、豊川の水位が若干あがったという記述はある。藩日記では東三河の場内ではあまり被害記録はなかったようだが、新居の関所（今切）は吉田藩の管轄であったため、津波の歴史の記録が若干ある（安政の地震）。

当美術博物館では、中世のものについてはわからないが、安政の地震が藩日記で記録されている。潮が田畑に入り荒れたことは記載されており、どこの村に入ったかはある程度わかると思う。なお、藩日記ではどこかの集落が移転したとかの記述はなさそうである。

(3) 牟呂町施行：豊橋（ばし）がながれたという記録が記載されており、これは刊行された書物であり図書館でもみられる。

(4) 西村次右衛門日記、三浦深右衛門日記：安政（嘉永 7 年）の地震については、「西村次右衛門日記、三浦深右衛門日記」の p235～p237 に記録されている。西村氏は家臣のため、お城の被害が忠実にあるが、街の被害は村の役人からの報告が記載されている程

度で、地図上でここまで潮がきたという記録はない（愛知大学の郷土研もある）城内では被害報告は少なく、吉田藩は新居の関所などポイントの被害記録（家が流された、亡くなった方）はでている。ただし、この日記の中で、安政の地震で、豊川用水の水位が3合180cm（1合=60cm）あがったと報告がでている。

三浦氏は税金の記録を付ける人であるが、日記が嘉永6年（地震の前）で記録が終わっている。

(5) ちょうじいんの記録：安政の地震について、余震など揺れ方と回数が何月何日に起こったか地震がどれくらいつづいたかの記録がある（藤田先生資料）。また同じ資料として松坂家の史料もある。二人の記録があれば信憑性もある。（藤田先生）

(6) 国史上より観たる豊橋地方（大口元豊橋市長）：本文の p660 あたりに、安政の地震についての記録がある。この本は、それ以降の豊橋市史の枠組みになっている。

大口豊橋市長は、豊橋の下水道を作った人で、大変すぐれた市長であった（藤田先生）。

(7) 牟呂の神主「森田家」については、タイトルをみただけでは津波が記載されているかどうかわからない。地震の時にあった安政の記録について、一つ一つあたって内容をみていくしかないが、2～3日はかかる。

(8) 前芝村史：前芝村史のような郷土史については、まだみていない。

(9) 愛知県災害誌；防災については、愛知県災害誌があるが、豊橋は魚市場はあるが、漁港としては大きなものがあるわけではないので、被災での陳情する古文書はなく記録としてはないと思う。

(10) 加藤家古文書：前芝の加藤家文書は当博物館にある。加藤家は江戸時代からあり、安政の記録はあると思う。ただし中身は見えていない。目録はできているので、地震の年号のところだけやればわかると思う。

加藤家の文書は、コンピュータに入っているのので、後日、打ち出していく。

(11) 豊橋市図書館：藩日記は刊行されているので、それ以上のものがあるかわからない。羽田村の神主「はだのたかすか」という書類があるが、街道の地震の被害が多い（郷土研究所にある）新居の関所の史料はあると思う。

4.その他

- ・地図については、安政の地震には江戸時代には新田開発ができていたため、豊川の河口はそんなに変わらない。変わったのは最近の埋め立てであり、大崎などである。国土地理院のHPからは古い地図が注文できる。古文書に乗っている村の地名などは、「三河の国の絵」が「じんぶんしゃ」が売っている800円くらい。問い合わせるのがよい。また、博物館にもいくつか地図はある。（博物館）
- ・田原の博物館の天野さんが、伊勢街道の展示会をやっており、津波の関係で報告書を書くといっているの、一番知っていると思う。

(2) 豊橋市西七根住民

日時・場所:平成 24 年 1 月 16 日 13 時～ 福田電設(株)(豊橋市西七根町字北浜辺 93-1)

出席者: 福田電設(株) 代表取締役会長 福田雅夫氏

訪問者: 愛知大学名誉教授 藤田佳久氏、センター 佐藤

入手資料: 御厨神社資料

視察先: 御厨神社、伊古部西海岸 (ササユリの里、色見場)

1. 福田氏の経歴について

- ・西七根町は伊勢神宮の台所を預かる神領地であり、毎年一回奉納している。この地域(田原、豊橋)の一带の郷社であった。
- ・福田氏は御厨神社の現在の地元総代である。3.11 後の震災による津波の被害について、地元の絵馬を中心に地域で情報発信を行おうとしている。

2. 伊古部海岸の石碑と立て看板の説明について

- ・石碑が作られた時期は定かではないが、伊古部西海岸の色見場周辺に転がっていたものを、伊古部町の人たちが平成 20 年に設置した。その中の「八大龍王」は、漁師の人が進行している神様である。当初、石碑の意味は分からなかったが、伊古部町で気にする方がみえてから、皆さんに知ってもらうために設置したと思う。
- ・なお石碑はもともとはここにあったものではないと思う。現在設置しているところは、地元の有志の方が行っている「ササユリの里」の中にあり、伊古部町に「ささゆり保存会」があり、その伊古部町の人がボランティアで設置している。特別に管理している人はなく、あくまで個人として設置した。
- ・石碑の説明にある安政の地震で 29m 津波があがったという記述について、安政 6 年の網元の仙太郎さんの伝承として伝わっている。なおこのことは、古文書に記されていることであるが、その裏付けとなる古文書がどこにあるかわからない。また、29m の津波という説は、地元の人から津波がここまで来たという印みみたいなものがあり、それをもとにつくられたのではないかとされている。これについては、鈴木源一郎氏が作った人を知っているため、そのいきさつについてもわかると思う。

→1 月 17 日に鈴木源一郎氏に問い合わせたところ、根拠となる資料は持ち合わせておらず、この説については慎重に取り扱ったほうが良いように思われると回答をいただいた。

3. 御厨神社の絵馬について

(1) 絵馬の内容について

- ・安政地震の津波についての絵馬である。地震後何年か経ってから作成され、奉納されたと思われる。東北地震後、絵馬の文章を解読して、大事なものだとなった。この絵馬は御厨神社内にある社務所の中に飾られていた(ほこりまみれになっていた)が、今は倉庫に保管されている。
- ・絵馬の説明文章は、御厨神社の宮司の鈴木源一郎先生が古文書を解読した(元時習館教諭)。舟の持ち主がお宮に宿直みたいな形で、こもっていた時期があり、その時に地震があつて、自宅に帰って自宅は大丈夫だったが、網元なので船と網は大丈夫かと思った

ら、跡形もないことが記述されている。また、絵馬では助かった船の板でこの絵馬を作ったことを文章で記載されている。

- ・現時点のお宮の位置は、この西七根町の一番高台であり、経験からくる知識でぜったい流されない場所に設置する思いで建てられたと思う。
- ・絵馬で描かれているお宮の松の木に船が引っかかって助かったという場所は、地元でもなかなかわからない。
- ・この絵馬に記載されている名前は、だれの先祖なのか調べても、2～3名しかわからない。後世に伝えないといけないという気持ちで、皆さんでお金をだして、流れ着いた舟板で書いたのだと思う。
- ・この絵馬は、西七根町の網元（高橋徳十郎）が作ったものであるが、流れ着いた船は、西七根町のもではなく、伊古部町の船が流れ着いてお宮に引っかかったとのこと。（西七根町の船は流されてなくなった）

(2) 絵馬の場所について

- ・御厨神社は、3回移転してきた。始めは、海岸線より50mくらいの海の底にあり、当時「河内」と呼ばれた山状になっている場所にあると思われる、伊勢街道などもそこを通過していたと思う（茶碗や石碑が埋まっているのが発掘されている）。その後、宝永の地震で被害があり、次は山の中腹の松がある場所（海拔30mくらい）に移ったが、絵馬にある安政の地震で被害があり、現在の町内で一番高台の位置に移転したと思う。
- ・なお、絵馬にある場所は、2回目の御厨神社の場所を表現しており、松の木の絵についても、10m～20mの崖の途中では松の大木は育たない。そのため、崖の中腹（30m）に位置しており、津波もかなりの高さの波であったことがうかがえる。
- ・なお、絵馬で描かれている場所（つまり2回目にあった御厨神社の場所）については、この辺ではないかという人もいるが特定はできていない。福田電設（豊橋市西七根町宇北浜辺93-1）から西に800mいった場所から南に下った、標高30mあたりではないかと思われる、自転車道が通っている。宮司の鈴木氏からも、その場所に記念碑でも立ててくださいと言われており、記念碑を建てる予定である。（なお、御厨神社の場所は民地になっている可能性があるため、周辺に御厨神社の宮地（お宮の地所（財産））があり、整合性を整えて記念碑を建てる予定にしている。（土地改良の時に共有地を農地に変え、皆さんにあてた。その時にお宮の地所も処分して、その資金でお宮を新しくするときの移転費にあてた））
- ・現在の集落について、その元屋敷はどこにあったかはわからない。

4. 過去の地震・津波について

- ・御厨神社は宝永の時の地震で、1回目に移転したと思う。その宝永地震での津波は、渥美一帯（伊良湖から豊橋の細谷までの表浜）で3,000人の死者がでたと言い伝えで伝わっている（古文書にもあると思う）。これは、現在の居住している方が、そのおじいさんに聞いてももっと前ではないかといっていることから、宝永の時にもっと大きな津波でかなり被害が大きかったといわれており、多くが津波による被害と思われる。
- 豊橋市美術博物館の増山氏に問い合わせたところ、宝永時代はいろんな領主に分かれており、それらの記録を引用して、合計したという研究結果なら理解できるが、そうであ

れば公開されており、その数字に根拠は見いだせない。

- ・チリ地震や東北地震の際に潮が上がった。ただし、地元の消防がでて一般の人は海岸に出られなくなったため、どの程度かはわからない。
 - ・平成 23 年 3 月 11 日の東北の地震時は、津波はほとんどなかった。
 - ・昭和 35 年のチリ地震の際には、通常の高潮より 1m 上がり、海岸道路付近まで来た。地引網の漁船（愛知県漁連から準会員として登録している地元の有志で所有している船）が伊古部の海岸にあり、その船は引き揚げたため、特に被害はなかった。
 - ・地震ではないが、伊勢湾台風などは、波そのものはすごくて、高潮より 3~4m 上がって、海岸道路を乗り越えた。
- ・三河地震については軍国政治の中で資料がなかった。

5. その他について

- ・現在は農業が盛んであるが、昔は漁業で生計をなしていた。地域に網元 1 名が中心となり、村中と一緒に共同で漁業で生計をなしていた。
- ・29m という規模の大津波については、地元も体験していないし、私どもも教えてもらってきいておらず、私の親も知らないため、将来の孫たちのためにも知らせていくべき。海岸前には家を建てないということは伝えるべきだろう。100 年に 1 回はくることを後世に伝えていくべきだろう。
- ・配布してもらって、どうするかは個人の責任であろう。地域の各自治会で避難方法を策定するが、起こったときは自己責任で逃げるしかない。なお、現在の場所は海拔 60m くらいであり、海岸線はかなり下のため、20~30m の大津波でも対応はできている。これは過去からの歴史で現在の住まいが形成されており、最近老人ホームなどを海岸設置しているが、それは許可した行政も問題であろう。地元の人には現時点で高台に造っている。
- ・この近辺において、海岸線に津波に関する史跡は特にない。
- ・御厨神社は伊勢神宮の直轄の神社であり、伊勢神宮には、伊勢の周辺の津波の記録はあるが、伊古部の地域の記録は特にない。

参考資料 3 - 2 豊川市

(1) 豊川市役所

日時・場所：平成 23 年 11 月 1 日 15 時～ 豊川市音羽支所 豊川市教育委員会

出席者：豊川市教育委員会 生涯学習課 課長 佐竹浩二氏、係長 平松弘孝氏、主事 栗原将人氏、豊川市消防本部 防災対策課 消防司令補 伊藤正人氏

訪問者：愛知大学名誉教授 藤田佳久氏、センター 加藤、佐藤

1. 入手資料について

- ・蒲郡市教育委員会資料（津波歴史調査の事前聞き取り、蒲郡市史コピー、御津町史コピー）。
- ・御津町史 史料編（上巻・下巻）借用

2. 津波記録について

- (1) 御津町史：教育委員会で調べたところ、豊川市は内海のため、津波の資料はほとんどないが、御津町史に、安政元年の際、地震で津波があったと記載がある。その内容をもって、7 月に 2 名の編さん委員（波多野氏、鈴木氏）にうかがったが、津波の資料はなくて、高潮ならあるという。

御津町史の編集に際し、現在活字になっていない古文書も解読して編集したが、それを踏まえても二人の編集員からは津波の記述はなかったと証言している。

- (2) 御馬村史：明治の御馬村史では、安政の大地震でなにかしらの被害があったと記録されている。これは蒲郡市史の形原でも被害があった（家が流された）と記録されているため、同じような被害が御津町でもあったというのがわかる。御馬村は現在の工業団地の埋め立て地である。

なお、蒲郡については、現在の市街地は最近で、地震があっても人家がなく被害がわからない。当時は塩津や形原のほうの記録しかないだろう。また、御津や三谷も古いとのこと（藤田先生）。

- (3) 小坂井町史：藤田先生が編集に関わったが、資料そのものがあまりなく、津波の記載はない。

- (4) 愛知県災害誌（飯田氏）：藤田先生より、「赤坂宿で音羽川が津波をさかのぼり氾濫した」という新聞記事であるが、これは東海地方地震・津波災害誌で、音羽川が氾濫して赤坂と御油が洪水の被害があったというのがあるが、津波で音羽川が氾濫したのか、堤防がくずされたのかはわからない（藤田先生）。

このことは、名大の飯田氏の記載にもあり、津波がよくわからないとある。

- (5) 前芝村史などが一つ有力である。また前芝には加藤ろくぞう氏がおり、県議会議員などを務めて、江戸～明治の指導者である。現在の加藤さんのお宅に、書物の確認ができればよい（藤田先生）。

また、御津では、渡邊家、山本家が庄屋クラスであるが、すでに山本家の古文書は藤田先生がみている（豊川市役所）。

- (6) 博物館・図書館：博物館は桜ヶ丘ミュージアムがあるが、そこには津波の資料はな

い（平松氏が以前勤務）。図書館については、旧豊川市の図書館は新しくあまり資料がない。旧宝飯郡四町の図書館も同様である。

(7) 津波がきたとなると、豊川では「ためとう」地域が考えられるがそうした資料はないか？また小学校では日誌を書くことになっており、そうした資料もあればよい（藤田先生）。

(8) 御津町史の史料編をお貸しする。細かく読んでいけば、もう少し詳しい情報があるかもしれない。（豊川市）

3. 集落移転について

- ・集落移転については、御津町にかぎっていえば、資料はない。なお、高潮の資料や聞き取りなら、たくさん情報があり、御津町史の編集委員の二人にもそのあたりなら協力できると回答をいただいている。特に伊勢湾台風の時の被害は大きかった（豊川市役所）。高潮の時に、どこまで浸水したかは今後地震における津波の参考になる（藤田先生）
- ・集落移転は、梅藪が高潮で集落した例はあるが、津波はない。また三谷も古い町で、船の街のためそうした移転はあるが、津波の影響ではない（藤田先生）
- ・伊奈の東漸寺の津波の話は、高潮ではないかと思うが、わからない（豊川市役所）。また、伊奈城があり海辺の資料があるかもしれない。（藤田先生）

4. その他

- ・一般市民への広報誌の情報提供は、豊川市防災課では、教育委員会とも相談した結果、編集委員の2名も知らないとのことで、豊川市役所では行わない（豊橋市にも連絡済み）。

（2）豊川市教育委員会

日時・場所：平成24年1月11日 14時～ 電話

出席者：豊川市教育委員会 係長 平松弘孝氏、センター 加藤、佐藤

- ・伊奈の東漸寺の津波の話について、文献があるか問い合わせたが、そうした史料はなく、口伝えであるとの回答をいただいた。

（3）東漸寺

日時・場所：平成23年11月1日 17時半～ 豊川市東漸寺

出席者：東漸寺 住職

訪問者：愛知大学名誉教授 藤田佳久氏、センター 加藤、佐藤

1. 東漸寺について

- ・1492年（明応元年）に前芝村の東漸寺の延命地蔵が流され、伊奈の市場に流れ着いた。当時の村人がここにお堂をたてて、延命地蔵をこの地でお祀りしようということになった。なお、この延命地蔵の供養については、毎年8月24日に地蔵門が開かれ、お地蔵さんを前面にして供養することになっている。

2.当時の津波について

- ・545年前に、大風か地震か定かではないが、津波があったと聞いている。書物（記録）はない。当時の津波の被害について、他の地域での話は聞いていないが、こちらでは歴代の和尚からのいいたえで、当時はすごい津波であったと聞いている。
- ・その津波については、現在の東漸寺まではこずに、少し低い伊奈中村市場まできたと聞いている。ただし文章はなく、私が37世の住職であり、それまで口で伝えられている。
- ・その当時前芝村を襲った津波は、部落が全部流され、引き潮で全部海にいったと聞いている。ここのお地蔵さんは流されずに木に引っ掛かって流されずにすんだと聞いている。
- ・前芝村については、資料らしきものはない。また資料があったとしても以前のことで、お地蔵さんがまつられたわけもあったと思うが、津波でながされ資料がない。前芝村で残られた庄屋や村人は、お地蔵が流され、伊奈の東漸寺に預かってもらっているということで伝わっている。なお、前芝のお堂は、無人のお堂であったと思われる。

3.他の神社について

- ・豊橋の梅藪に観音寺があるが、同じように津波で観音様が梅藪に流され、その場所に本堂を立ててお祀りしている。その津波は、どの時期かわからないが、たぶん、東漸寺の津波と同じ時期であったと思う。なお、観音寺は8月10日に観音様を村中で供養する（観音様は住職の背丈くらいあり、前日の9日に開戸して、10日3時からご供養して、同日8時に閉める）。
- ・御馬村の引馬神社（過去、持統天皇が行幸されたと、万葉集にも書いてあるらしい）にも来たと思うが、御馬の長老に聞かないと分からない。資料などは残っていないが、関心のある人が聞いて、伝わっているかもしれない。

4.その他

- ・なにか資料がみつければ、お知らせする。

（4）豊川市御馬住民

日時・場所：平成24年1月12日 13時～ 豊川市御津支所 生涯学習会館

出席者：波多野 近二氏（御津町史編纂委員）、鈴木光保氏（御津町史編纂委員）

訪問者：愛知大学名誉教授 藤田佳久氏、センター 佐藤

視察先：海岸復興記念碑、御馬江川樋門、御馬湊の槇の木、御馬港、榎エクシム

1.波多野氏の経歴

- ・御馬村出身。御津町役場に入社後、総務課長を経て、昭和61年に退職。御津町史編纂委員。現在84歳。地震については、三河地震と東南海地震の印象が強い。
- ・役場のころから港湾計画に携わり、現在も引き続き、三河港の港湾計画の審議会の地元協力員を行っている。また御津町史編纂委員の関係から歴史教室（月1回）を地元で開催している。

2.波多野氏が経験した地震による津波について

(1) 東南海地震

- ・1944年12月7日の時は、この時は中学4年で豊川市の「やまじゅう」（現 中尾工業 株）に学徒動員でいていた。地震発生時、ひどくゆれ、工場の煙突が倒れるのではと心配した。その時も御馬港を含めて被害というのはあまり聞いていないので、津波による被害はなかったと思う。その後、4月10日に入校式で静岡県の清水にいったときは、清水港の倉庫が壊れているなど、ひどい状況であった。

(2) 三河地震について

- ・1945年1月13日は当時17歳の高校生で、御馬村に在住。地震発生時は寝ていて、激震で目が覚めて、驚いて表にでると、南の渥美半島の方に青い火花が数回見え、ドンドンという音があったような感じがあった。なにかあると浜に行く習慣があり、その後御馬の港にいくと、すでに5~6人来ており、潮が高くなっているとみんなで騒いでいた。今思うと、普通の高潮より50cmくらい高いところに海面があったと思う。その後、寒くて港を後にし家に戻ったため、海のことにはわからないが津波による被害はなかったと思う。余震が強かったので怖くて家に入れず、1ヶ月くらいのりほしのたこ5枚で、四方の壁と屋根にして地震小屋を建てて、外で寝た。また、戦争中なのでよその地区の状況はわからないが、後で形原の方の断層があったのを知って驚いた。

(3) チリ地震

- ・1960年のチリ地震のときは、役場に勤務しており、御馬港をみにいった。御馬の港では、大潮（満潮）の時は防波堤のあるところまでくることがあるが、チリ地震でもその満潮時のところ（防波堤の地面まで）まで水位があがってびっくりした。地震によるものか満潮によるものかはわからないが、潮が増したことはまちがいなく、また引きも何度かあり、一日に何度か満ち引きがあった。港に特に被害はなかった。

3.津波についての文献について

(1) 御馬村誌

- ・記録については御馬村誌しか記録がない。
- ・御馬村誌に記載される「津波」について、地震だろうが台風だろうが同じ「津波」として表現をしていた。大風があつて津波があると台風とおもうが、津波のみが単独で記載されているとどちらかがわからない。
- ・御馬村誌については、安政の記述のみが地震によるもので、暴風波浪のところは台風だと思う。なお、御馬村誌にある災害記録について、他の文献で詳しく残っているものはない。（「みと歴史散歩」の中に、寛永十三年の大津波で浄願寺が被害を受けたことが記載されている。）

(2) 海元寺の古文書

- ・御馬に海元寺という神社があり、その古文書がある。これは町史を編纂した後にでてきたものであり、まだ公表されていない。まだ翻訳していないがよくみると、「大風津波」という記載があるので、もしかしたら地震による津波の記録があるかもしれない。なお、海元寺ではヒアリングできる住職などはいない。

(3) 御津町史史料（第19集）

- ・御津町史史料（第19集）には、明治22年の台風による津波の記載が詳しく記載されている。その中には、家が流されたなど生々しい記録が残っている。また御馬港に太い榎（まき）の木があるが、その一家6人死亡したという記述もある（この榎の木にしがみついて助かった人もいるという）。鈴木光保氏も祖母から「屋根の上ののって流された」と聞いている。

(4) 羽田文庫について

- ・波多野氏は、羽田野敬雄（はだの たかお（1798年（寛政10）～1882年（明治15）））研究会に以前所属していた。その中に「羽田野敬雄日記」「羽田野敬雄の神主記録」などがあり、津波のことが書き留めてあるかもしれない。
- ・具体的には、安政3～5年の地震の時に、羽田野敬雄氏は年貢免除のお願いのため江戸にいきそこで地震にあった。その帰る道中に各地の被害をまとめたものがあり、豊橋での津波のこともあるかもしれない。

(5) その他

- ・地震による津波の言い伝えはない。

4. その他

(1) 13号台風、伊勢湾台風について

- ・三河湾では昭和28年の台風13号の被害があり、その後に4mの堤防を造った。また御津では昭和32年に海岸復興記念碑を建てた。伊勢湾台風の際は、大潮が音羽川をさかのぼり、内陸の御津南部小学校の南側まで潮がきた（地図あり）。また御馬港の堤防では上すれすれまで潮がきて危なかった。御馬港の漁船は陸地にまで流され、再度港に戻すときは音羽川までもって行って川を伝って港に戻した。
- ・波多野氏は御馬の浄楽寺付近に住まいがあり、13号では床上1m、伊勢湾台風では床上30～40cmまで潮がきた。

(2) 波多野氏の私見

- ・波多野氏は、①防潮堤が危険（防潮堤の構造自体に危険性がある（老朽化や強度の問題。また御馬港にある防潮堤が低く津波が集中することが懸念）、②樋門が危険、③内陸の排水・潮位のタイミングが問題の3点をあげている。そのため地震時は、防潮堤が壊れる危険性もあいまって、その上津波がきたら、そうとう危険性が高いという意識を植え付ける必要がある。
- ・また、過去の地震による津波について、御津では安政の地震以外の津波の記載がないが、近代の三河地震やチリ地震でも津波を目撃しており、全然ないとはいきれない。
- ・現在の旧御津町のハザードマップでは、新幹線の南側までしか指定されていないが、伊勢湾台風の際は、新幹線北側の御津南部小学校まで浸水しており、見直す必要がある。

(3) 御馬湊について

- ・「御馬湊 御城米積立場跡」とあるが、ここは東三河の幕府の年貢米がここに集まって、舟を付けて、小舟で沖まで運んで、積みだした。幕府の指定の湊で、赤坂代官所の支配下にあった。

参考資料 3 - 3 蒲郡市

(1) 蒲郡市役所

日時・場所：平成 23 年 11 月 1 日 10 時～ 蒲郡市役所安心安全課

出席者：蒲郡市役所総務部安心安全課 主査 磯貝 友宏氏

訪問者：センター 加藤、佐藤

1. 資料について

- ・ 入手資料：三河地震の記録（借用ファイル）
- ・ 蒲郡市では、とくに地震をまとめた資料はない。

2. 地震記録について

- ・ 昭和の三河地震の資料については、資料を貸し出す。

3. 市民へのヒアリングについて

- ・ 安心安全課では、市民の 75 歳以上を対象に家具の耐震補強を実施している。その際、市民の中で「あまのさかえ」さん（形原町）から三河地震の話聞かされた（ただし地震関係で津波の話はない）。そのほか、形原町の老人ホームなどでヒアリングするののも一つの方法である。

4. 遺跡等について

- ・ 蒲郡市では、蒲郡市一色町に三河地震の地割れ看板がある（宗徳寺）。なお、三河地震は直下型でごく浅く、活断層近辺では被害はあるが、それ以外の周辺ではほとんど被害がないのが特徴。（津波は海溝型が多いと聞いている）

5. その他

- ・ 蒲郡市では、東海・東南海地震への対応として出前講座を実施している。地震発生から 40 分が猶予としており、1 分間揺れるようなら、高台に避難するように呼びかけている（避難所への避難はだめ）
- ・ ハザードマップで津波危険地域を標高 10m のラインを目安としている。また液状化の可能性のある土地も示している。
- ・ 広報誌での市民の津波資料の呼びかけについては、11 月末号に掲載する予定。

(2) 蒲郡市博物館（1 回目）

日時・場所：平成 23 年 11 月 1 日 10 時半～ 蒲郡市博物館

出席者：蒲郡市博物館 学芸員主査 小田 美紀氏

蒲郡市役所総務部安心安全課 主査 磯貝 友宏氏

訪問者：センター 加藤、佐藤

1. 入手資料について

- ・史料にみられるおもな災害（博物館まとめ）
 - 今回作成した「史料にみられる主な災害」は、『蒲郡市史 近世編』掲載の「史料にみられる江戸期の災害」の出典の内容を加筆し、他の文献を追加したものである。
- ・1854年（嘉永7年）三州表大地震（形原役所記録、新収日本地震史料）（コピー）
- ・1855年（安政2年）高波高潮被害報告（乍恐書付以奉願上候 大塚村）（コピー）
 - 1855年（安政2年）の高潮高波については、津波かどうかかわからないが、相当の被害をうけたと報告されている。（雨かもしれない）
- ・1860年（万延元年）三州表強風雨災害（形原役所記録）（コピー）
 - 1860年（万延元年）大雨の被害であり、汐水が入り作物に被害がでたため、免除してくださいという記録が残っている。
- ・1870年（明治3年）（乍恐書付以奉願上候 大塚村）（コピー）
- ・1896～1899年 暴風高潮被害（三谷町 町会議決留）（コピー）

2. 地震記録について

- (1) 王稔記：蒲郡市蒲郡町にある天桂院所蔵の記録で、何月何日になにがあったかという記録内容であるが、この中に、洪水や地震の年月日が記録されている。天桂院は、蒲郡の中心部を治めていた竹谷松平家の菩提寺である。なお津波でどの程度影響があったかという詳細まではわからない。天桂院にいつてみれば詳細な資料があるかもしれない。
- (2) 形原役所記録：蒲郡市の旧形原町の記録で、その中で安政の大地震（嘉永7年（最後の東海地震））の記録がある。ところどころで浸水した地域もあり、土地に汐水がはいつてきたという記述もある。形原町は海面が荒くなり立ち退く用意をしていたが、追々穏やかになったという記述がある。
- (3) 形原役場文書（三河地震関係）：一括保管（博物館）
- (4) わすれじの記：市川先生（故人）を中心にまとめたものである。これは三河地震の記録であり、デジタルアーカイブでインターネットで印刷できる。（印刷済み）
- (5) その他、台風や高潮はあるが、津波の被害の記録はない。
- (6) 蒲郡市史：1707年（宝永4年）の記録、1633年の三河大地震の記録については、どこが出典かわからない。
- (7) 西の郡：郷土史研究集録。その中には地震や津波をとりまとめたものはなかったと思う。
- (8) 台風23号と伊勢湾台風で文献がやられていてなくなっている。特に犬飼あたりでは殆ど文献がない。

3. ヒアリングについて

- ・蒲郡市史郷土研究会の会員の皆さんはなくなられて、ヒアリングできる方がいらっしゃらない。どなたに聞いていいかわからない。
- ・地名研究会は蒲郡市内の方で月1～2回集まって、蒲郡のいろんなところに行く。

4. 神社の移転や地名の由来について

- ・移転等は、長興寺が考えられるが、文献はない。
- ・長興寺（蒲郡市大塚町）：南から高台に移転しているが、津波の影響かはわからない。
- ・八剣神社（蒲郡市三谷町）：三河地震か台風かわからないが、波で被災したということを知ったが、そうした文献はない。しかし海岸から山まで長いので、どこまで波がきたかわからない。三谷祭で八剣神社が使われるため、お宮の方などがいれば文献や話を聞けるかもしれないが、だんだんそうした話ができる人がいなくなっている。
- ・蒲郡は地名があまり変わっておらず、現在まで地名が残っている（蒲郡市誌資料編に地名表がある）。なお地名の由来の文献はないと思う。

5. その他

- ・王稔記は天桂院の所有物であるため（博物館に寄託）、必要なら天桂院に許可をとる必要がある。

（3）蒲郡市博物館（2回目）

日時・場所：平成24年1月18日 13時～ 電話
出席者：蒲郡市博物館 学芸員主査 小田 美紀氏
対応者：センター 佐藤

1. わすれじの記載内容について

- ・下市（しもいち）とは形原漁港付近である。「下市に津波が来た」との記述があれば本当だろう。川を挟んで、東側が下市で、南側が音羽（おっぱ）、出屋敷であり、東側の下市が下がって、南側が隆起して上がっており、下がった下市に津波が入った。
- ・「家の前の、林光寺の坂が平らな坂になった。私の家の前が、海だった。私の家の周りほとんど海で、地震と津波で海が沈んでいった。」「魚市場はすぐ海だったみたいです」は、下市（形原漁港）付近のことを言っており、津波で海水が入ったことをいっていると思われる。また、「海が沈んでいった」は、港が1m沈下したことをいっているのではないか。
- ・「音羽全部の家が倒れた」・・・倒壊によるもので、津波ではない。

（4）天桂院

日時・場所：平成23年11月1日 13時半～ 天桂院（その後、宗徳寺遺跡視察）
出席者：天桂院 住職
訪問者：センター 加藤、佐藤

1. 天桂院について

- ・この天桂院は、建築270年たつが、津波の被害はない。ここは海拔25mである。また、天桂院の移転はなく、建築後ここにずっといる。
- ・天桂院は、江戸初期に入ってからまったく動いていない。ここはもともと松平家の菩提で1512年（永正9年）から始まっており、1589年（天正17年）に当時の殿様が徳

川家康と関東に行くときに寺も一緒にもっていき、その後歴代の殿様が吉田城主（3万石（6代・7代））になり、7代でお家断絶になったが、親類が8代となり5千石に降格し、西の松平家を引き継ぎ、元の蒲郡市に戻ってきた。なお、西の方の松平家も約海拔18m位であり、津波に関するものはない。

2. いろいろたえや昔話

- ・王稔記以外に記録されている書物はない。
- ・津波に関するいろいろたえはなく、昔も話はきいたことはない（台風はある）。地震もこの寺は特になく、台風で少し傾いているが、本堂は270年あるが、地震の被害（三河地震など）もあっていない。
- ・ここは地盤もよく、三河地震についての被害もなく、私の父が、井戸水が白くにごったといていた程度である。

3. 他の神社について

- ・蒲郡市内で天桂院より古い寺は、安楽寺という、家康の正室「於大の方」の位碑があるが、ここよりも北のほうである（海から1.5km離れており、海拔25mである。）
- ・長興寺（大塚町）の移転は津波ではなく、戦後に隣の敷地に移転した。
- ・八剣神社（三谷町）は、三谷のお祭りで海岸に近く、山車を八剣神社から若宮神社に行くときに、道がなかったので、海をわたった。八剣神社は津波での被害の可能性はあると思う。
- ・宗徳寺（一色町）には、三河地震の断層が残っている。史跡になっている。
- ・田原市小中山にある帰命寺（渥美発電付近）は沈んでいると思う。

4. その他

- ・博物館の館長のおやまさんに聞いた方がよい。資料などよく知っている。情報は博物館が一番もっている。教育委員会にはそれに詳しい方はいない。

参考 3 - 4 田原市

(1) 田原市役所

日時・場所：平成 23 年 11 月 4 日 10 時～ 田原市役所防災対策課

出席者：田原市役所 防災対策課 課長 鈴木義治氏、主任 藤井一彦氏

訪問者：愛知大学名誉教授 藤田佳久氏、センター 加藤、佐藤

1. 入手資料

- ・ みんなで守る・伝える 堀切・日出海岸ものがたり 「ボタの話」(CD 借用)
- ・ 田原市地震防災対策基礎調査(平成 18 年 2 月 田原市)

2. ヒアリング先の紹介

- ・ 田原市博物館学芸員 天野氏：田原市役所では、津波の史料は博物館で入手しており、田原市博物館学芸員の天野氏が詳しい。
- ・ 田原市立和地小学校 藤代氏：和地小学校校長先生の藤代(ふじしろ)先生が独自調査をしており、調査資料をこちらでももらっている。
- ・ 渥美郷土資料館 葉山氏：渥美の資料館の嘱託職員の葉山茂生さんにも聞いてほしい。元福江高校の校長先生で、古文書を研究している。週 4 日ほどきている。(古文書研究の山内さんの後継者)堀切の常光寺の古文書もある。

3. 津波記録や遺跡

- ・ 渥美郷土資料館では堀切の村絵図があり、安政の東海地震の炭火絵図(本物)がある。
- ・ 貝ボタの紙芝居(CD)がある(市役所より入手済み)。堀切から日出までである。これがボタだよという看板はないが、県の治山工事をしており、一部ボタの修復もしてもらっている。海岸から盛り上がっている。日出にいき、日出の住職(帰命寺)などに聞いたほうがよい。なお貝ボタは安政後につくられたと聞いている。
- ・ そのほか、地名で津波の移転の話はきいていない。また津波に関する遺跡は貝ボタくらいしかない。

4. 神社へのヒアリングについて

- ・ 常光寺：住職より、常光寺は安政の地震の際には被害が起きなかったと聞いている。そのため、宝永地震に津波の被害にあい、その後山のふもとに移転し結果、安政地震では津波の被害にあわなかったと思う。そのあたりは住職に確かめた方がよい。なお、近くの寅之神社は移転したかどうかわからない。
- ・ 泉福寺：山田の泉福寺の古文書では、安政の地震で、内海の向山や伊川津が津波で被害(3 尺(2m))をうけたという記録がある(藤田先生)。なお泉福寺は市内で一番古いお寺であったが、50 年前に火事で焼けて再建したので、資料はあるかわからない。なお住職は亡くなって、奥さん一人で住んでいるので、話がきける人はいない。
→ (藤田先生) 泉福寺の記録では、田原城、吉田城は半壊でやられて、新居の関所は全壊となったという記録がある。なお田原城は津波の影響の記録はない。

→（市役所）新居は、堀切より低いと思う。新居は海拔 2m くらいと思う。仙台の空港が 2.5m といっているの、堀切は 5m あり高い。

→（藤田先生）記録は嘉永 7 年の地震は、11 月 4～7 日にかけてあり、東海が単独で始まり、その後東南海、南海とそれぞれ単独でつづいたと思われる。その後安政に年号をかえたら、江戸で大地震があり、全国的には江戸の大地震が有名に合った。房総半島は地震のたびに土地が隆起して、ひな壇になっている。東北も今は沈んでいるが、そのうち隆起するだろうといわれている。

→（田原市役所）こちらのほうは 50m から 1m くらい下がるといわれている。

5. 日出の集落移転について

- ・日出の集落が、まるまる浜名湖の方に移転して、また日出にもどってきたという話を聞いたことがある。ただしその理由が津波かわからないので、その話については、帰命寺の住職に聞いた方がよい。ここの住職は、渥美の郷土資料館の職員でもあったため、かなり詳しい。帰命寺は、東京のだいそうじの知念大僧正がその村からでており、由緒がある。
- ・伊良湖村と堀切村は地引網が盛んであったが、日出は砂浜がなかったためできなかった。そのため知念大僧正が地引網ができるよう、地区を拡大し漁をできるようにした。古文書もあるかもしれない。

6. 田原市における津波による被害状況

(1) 全体について

- ・渥美半島は、外海（太平洋岸）では堀切から日出までの土地が低い場所は津波の被害を受けている。しかし、中山町（渥美半島の先端部分で外海と内海の間）は、津波の被害は聞いていない。一方、内海では、向山町の向山新田は安政の地震で浸水した。また同じく伊川津町の新田開発も文献で津波がきたというのを見たことがある。

(2) 堀切と保美の関係

- ・外海では日出、堀切、川尻が被害を受けたという記録になっていると思う。なお、堀切の地名の由来はわからないが、もしかしたら、堀を切って水路をつくったのではないか？池がたくさんあり、沼地がある。太平洋岸には、人工にほった川があり、分水嶺で内海の中山に流れるほうと、外海の堀切に流れるほうとつくったが、堀切のほうは埋まってしまうため、強制的にポンプで送っている。

→（藤田先生）堀切は渥美半島の山と山との間であり、安政の地震で、津波や高潮などで、一番影響をうけやすい。内海側の保美でも塩水がたまったという記録があるが、津波の影響で外海からきたのか内海からきたのかはわからない。

→（田原市役所）保美は範囲が広いため、たぶん内海のめめだ川付近が被害にあったのではないか。内海からめめだ川をつたってきたのではないか。また保美には貝塚があり、海に近い場所もあるため、そのあたりではないか。

(3) その他の場所

- ・太平洋岸の赤羽根港もやられており、古文書がある。
- ・太平洋岸の小塩津は昔はもっと海岸線があったが、津波か海岸浸食で動いたということ

を聞いている。津波以外の理由のほうがたかいと思う。

- ・伊勢街道は今は海の中だと思う。一部、豊橋との境界では、陸にあがったというものがあるそうである。豊橋市の東観音寺ではそうした古文書があると聞いている。また、豊橋の伊古部の大円寺であり、東観音寺と同じように動いたと思われる。
- ・三河地震では内陸の野田あたりが被害を受けた。あまり地盤がよくない。

7.その他

- ・田原市では、内海の堤防は3.5mであり、5mの津波なら超える。地震発生後4時間がピークで、湾の中に入った波がでていけずに、どんどん高くなるといわれている。四日市や名古屋など奥の方で津波が大きくなる危険性が高い。東日本でも翌日まで動いており、1日半は警戒しないとイケない。
- ・田原市の地震防災対策基礎調査（H18年2月）は応用地質が作った（市役所より入手済み）。また、田原市地域防災計画は歴史が載っているが、歴史を加味して作っていない（HPにて資料入手）。
- ・田原市では、広報誌での市民への津波の情報提供の呼びかけは実施する。

（2）田原市博物館（1回目）

日時・場所：平成23年11月4日 11時半～ 田原市博物館

出席者：田原市博物館 学芸員 天野敏規 氏

訪問者：愛知大学名誉教授 藤田佳久氏、センター 加藤、佐藤

1.入手資料について

- ・「渥美半島における嘉永東海地震の実状」（清田治氏）；旧渥美町では、渥美郷土資料館にて渥美町の研究紀があり、合併前の平成15年3月（7号）で、清田治先生が安政の地震をまとめた研究が一番詳しい。民俗学が専門である。（コピー）
- ・「渥美半島の表浜集落における宝永地震の被害状況と海食崖との関係」（藤代信幸氏）：田原市博物館では、藤代先生が平成20年3月（3号）に研究紀だしており、主に宝永地震の主に太平洋側の被害をまとめている。藤代先生は地質学が専攻で、地形から地震の考察をしている。なお、先日、藤代先生は、渥美自然の会で、地震のことを講演しておりある程度お話が聞けると思う。（コピー）
- ・内山茂雄氏作成資料：渥美郷土資料館の指導員で、山内茂雄氏（故人）がまとめた地震の資料がある。愛知県災害誌などでこうした記録があったことを取りまとめたと思われる。なお渥美郷土資料館では中期はあまりなく、宝永の地震の記録はないが、安政の地震の記録は少々残っている。（コピー）
- ・堀切の村絵図と津波の被害：堀切の村地図は現本が渥美郷土資料館にあり、申請すればみることにはできる。また、その時の被害状況を助郷免除する文書の控えも残っている。その被害状況をみると、当時は西堀切と東堀切に分かれていて、特に西側の被害が大きく、海拔が低いためである。その西堀切村の助郷免除の文書がある。当時堀切は、赤坂代官所所管で、幕府直轄であった。その内容は家族が233あった中で、流された家族113、流失棟数275、半潰家数90、破損家族30、死者8となっている。（コピー）

- ・堀切の助郷免除の古文書：助郷免除（結果的には免除されなかった）なので誇張して書かれており、実際の物は渥美郷土資料館の渥美町史の目録編の 148～150 が該当し、特に 149 が詳しく書かれている。目録の 612 にも安政元年の文書があり少し内容が書かれている。これらは申請でき、堀切がわかると思う。（コピー）
- ・「全体未聞のこと」（堀切村 高瀬家）：個人であるが、堀切の高瀬家（今の当主がどこになるかわからない）の古文書で、「前代未聞のこと」という古文書がのこっており、安政の地震の記録が書かれている。この古文書は資料館のほうにコピーが入っており、本日コピーを渡します。古文書は 3 つあり、どれが本物かわからないが、三つともコピーしておく。その中で最もよく書かれているのが 307 であり、渥美町史の史料編に書き下しがあったのでコピーしておく。また 308 も書き下しがあったのでコピーしておく。
- ・渥美町史（資料編下巻、資料目録編）：渥美町史の中に記録がのこっているものをコピーしてわたす。（コピー）なお、山内氏は渥美町史を編纂された方で、古文書はほとんど目を通して。ご存命であれば一番わかると思う。
- ・「渥美町の民族探訪」（清田治氏）：清田治先生が一般向けにかいた「渥美町の民族探訪」の中に津波の記録があるためコピーしておく。
- ・「渥美町のむかし探訪」（山内茂雄氏）：山内茂雄氏が一般向けにかいた「渥美町のむかし探訪」も安政の地震などがある。（コピー）
- ・「渥美の伝説」：小塩津、保美について記載がある。（コピー）
- ・「赤羽根の古文書」：赤羽根地区の古文書も史料目録で、災害に関するところを見たが、津波や地震という被害は残されていない。近代編には書かれているのでその資料名がここに残っていると思う（渥美郷土資料館でコピーを入手済み）。原本をあたっていないのでわからないが、そういうものを当たれば、原本はこちらにあるものはみせることはできるが、個人のは直接あたってもらうしかない。書き下しでよければこちらでのこっているものは見せることはできる。

2. ヒアリング先について

- ・清田氏、藤代氏のほかに、渥美郷土資料館の葉山先生に月曜日以外の平日に勤務されており、お会い是可以する。なお、清田治先生は 76 歳で体調を崩されており、どうしても話を聞きたいなら別だが、現在は難しい。和地小学校の現役の校長先生である。葉山氏を含め 3 名の方なら天野氏を通じて連絡してほしい。
- ・常光寺は津波の被害で現在の場所に移転しているといわれているので、記録はあると思うが、住職に聞いてもあまり関心がなく、わからないといわれる可能性がある。清田氏、藤代氏、葉山氏の三名の方にきいたほうがよい。
- ・帰命寺は日出であり、その住職（岡田よしひろ氏）はもともとは渥美郷土資料館の職員であり、それなりの話をきける。ただ津波に詳しいかといえば詳しくはない。日出地区やそれ以外の地区のむかし話や人のつながりは強い方であり、いろんな人や場所を紹介いただける可能性はある。
- ・山田の泉福寺は住職はおらず、奥さんがいるだけで、話はきけない。現在は、豊橋の住職がそこを兼ねているが、その方に聞いてもわからない。

3.太平洋岸の地形について

- ・堀切は太平洋側で一番低い。豊橋から見ていくと、赤羽根漁港のところで低くなり、そこから和地までは「海食崖（かいしょくがい）」といい崖が景勝されており、津波の被害が受けにくく、和地から堀切までは一気に崖がなくなって低くなり日出から崖ができている。なお、安政になるとほぼ今の状態と崖は変わらない状態だと思う。
- ・「海食崖」はところどころ「ほうべ」という切り込んで低くなっているところがあり、ここを通ってくる津波はあったと思うが、普通は崖にあたって集落に入ってくることは安政の時代はなかったと思う。ただそれ以前は「ほうべ」も荒波によってできた地形であり、集落自体も浜側にあり、以前の伊勢街道も浜側（現在は海に沈んでいる）にあった。東観音寺も移転（津波にあつて海に沈んだといわれている）している。

4.堀切について

- ・日出から堀切までが低いところで、津波がくるといわれている。特に、西堀切のほうが低く、背後地は沼地となっている。
- ・常光寺は、城山と常光寺山と山が背後にあり、安政の地震の時はそこに逃げて被害が少なかったといわれている。宝永の地震のときはかなり被害を受け、その言い伝えが堀切村に残っていて「大きい地震があったら逃げないとだめだ」といわれていたので、安政の地震の時にそれが生きて山ににげてほとんどが助かった。一方、そのいいつたえを信じなかった8名がなくなった。そのことは清田先生の論文にはあるほか、地元の言い伝えで残っている。
- ・貝殻ボタなどの遺跡がある。ただし、貝殻ボタが、だれがなんのために造ったかわからない。貝殻ボタも津波のためというわけではなく、地引をやるなかで高見をつくって海の状態をみるために貝殻ボタをつかっていたようで、津波除けにもなっていたがそれ以外の用途もあったと思われる。

5.日出の移転について

- ・日出の移転は渥美町史にある。日出は土地も痩せていて、農地も少なく厳しくなった時に新天地を求めて、江戸時代の前の文禄3年に浜松の掛塚に移転した（津波が理由ではない）。そして文禄5年に帰ってきた。
- ・移転の理由として、伊良湖と日出は仲が良くなく、いざこざの中で田畑を伊良湖にとられた。耕作ができず食べられなくなったため、掛塚にいったがうまくいかずに伊良湖の集落と仲良く（結構折れた）して、山や田畑を取られたといっているが、日出に戻ってほそぼそとやっている。
- ・現在、伊良湖と日出は同じ校区になっているが、あまり仲が良くないといわれている。
- ・集落移転は、藤代先生がよくわかると思う。

6. 安政の地震以外の情報について

- ・宝永の地震の資料はまったくない。安政は残っているが、それ以外はなかなか残っていないのが現状である。山内茂雄先生の作成資料は愛知県災害誌を中心に地元の資料で調べたと思う（根拠はわからない）。現在は安政の地震と昭和東南海地震であるが、昭和

の東南海地震はあまり津波はないため、安政の地震を中心にいかざるを得ないと思う。そのあたりは豊橋市（吉田藩日記）も同じだと思う。

- ・昭和の東南海地震で資料は残っていないが、畑村（現福江村）に、日記が残っており、昭和 19 年の地震の記録がでてきますので、東南海で私が把握しているものは、福江という地域の被害状況はわかる。それはか活字かされておらず、原本からあたるしかない。

7.残された遺跡や記録

- ・いいつたえは、堀切のものしか思いつかない。
- ・天野氏がする上で、表浜で津波についてのビジュアルにみえる遺跡やお寺の看板はない。潮音寺の由来もわからない。ボタもそうしたものを示すものはない（藪になっており、分かりづらい）。ひょっとしたら葉山先生は和地の出身のため、そうした遺跡をしっているかもしれない。

8.堀切のまちづくり計画について

- ・堀切のまちづくり計画書については、私達が目に触れていないものである。これをみると安政で被害をうけて移転したと読み取れるが、私たちは宝永で被害を受けて、移転して今の集落の状態になって、安政は被害をあまりうけなかったととらえている。常光寺は天保に移転しており、渡邊華山も移転直後の常光寺をみたスケッチを天保 4 年にしており、安政より前である。お寺が動いたということは集落もある程度うごいて現在の位置にあると思う。それでも浜側にあった集落も何件かあって安政で被害があつて山側にうつったものもあつたと思うが、安政の津波で集落自体が移つたというのはどうかと思う。現在の集落は、あれ以上山側にいけないところにあり、一分で山ににげることができる。現在は土地がないので逆に浜側に集落が拡大している。

9.その他

- ・渥美の資料館の資料については、学芸員など職員はいないため、田原市博物館に申請書をだして、それで向こうに行つて、私達も責任上立ち会うことになる。そのため、早めに連絡してもらえれば、希望日に合わせることができる。
- ・天野氏は元は渥美郷土資料館に勤務で、渥美の史料はもっているが、田原市博物館の史料はあまり詳しくない。ただ田原には田原藩日記があり、そこで嘉永の地震の記録をみればでてくるかもしれない。そのあたりも清田治先生がみられており、その原本ならこちらでみることは可能である。現代文で報告書も作成されつつあるが、安政の地震まで作成できているかはわからない。

（3）田原市博物館（2回目）

日時・場所：平成 24 年 1 月 28 日 16 時半～ 電話

出席者：田原市博物館 学芸員 天野敏規 氏

対応者：センター 佐藤

1.小シカ浦について

- ・小シカ浦は、渥美半島にはない。多分神島にあるのではないか。
- ・常光寺過去帳に書かれているのは、常光寺の支配は渥美だけでなく、鳥羽、神島などが末寺であり、そのため、神島村での災害が書かれたのではないか。

2.海新田について

- ・汐川の海新田については、わからないので、他の者に聞いてみるので FAX してほしい。

3.江比間 一本松について

- ・津島神社、巖島神社、弁天社、牛頭天王社にある一本松は、江比間の地域である（小中山ではない）。
- ・七峰山は今は「七つ山」といい、江比間と野田の間の山をさし、「前ノ山」はそのうちの一つの山ではないだろうか。具体的な山の地名は特定できない。

4.常光寺の移転について

- ・常光寺の移転の記録がないが、「渥美町郷土博物館 研究紀要」の「加藤氏」の文章を使っていいかについては、出典を記載してもらえれば OK とのこと。

5.海新田について

- ・宝永 4 年や嘉永 7 年で被害にあった海新田は、場所が特定できない。なお嘉永 7 年の記録は、田原町庄屋 彦坂弥八郎の日記であるが、彦坂氏は神戸村の庄屋であったため、海新田は太平洋岸の新田であった可能性もある。

6.御林山について

- ・御林山とは、領主直轄の山のことをいい、現在の小塩津地区にある「後山」と「馬越山」のことを指していると思われます。
- ・「渥美町史 歴史編 上巻」にて、「御林山（領主直轄の林）は、後山に二十町八反、馬越山に八町四反ほどある」と記されている。

（４） 渥美郷土資料館

日時・場所：平成 23 年 11 月 4 日 11 時半～ 渥美郷土資料館

出席者：渥美町文化財保護審議会委員 葉山 茂生 氏

訪問者：愛知大学名誉教授 藤田佳久氏、センター 加藤、佐藤

1.入手資料

- ・常光寺年代記（コピー）現代文：宝永の地震の時に被害がうけたという記録
- ・「前代未聞の事」（原本と活字のコピー）：安政地震の報告資料（最近も堀切の人が古文書を持ち込んできた）
- ・助郷免除記録（渥美町史）
 - ・「前代未聞の事」は、安政の大地震の一か月あと、誰かが書いた古文書がでてきてい

る（渡会さん）資料で、葉山氏が活字にしている。この古文書で助郷免除してくださいという嘆願書をだしており、町史の史料編に記載されている（コピー）。具体的には、安政元年寅 11 月 4 日に金蔵が書いたものをだれかが 12 月 12 日に書き写しており、記事は地震一か月後のため新鮮な記事である。内容は、「地震は前からなれていたが、しかし津波はまったく予知できなかった。ただ、昔から地震があったら老女、子供を真っ先に逃がせといわれていた。」とあるので、宝永の大地震と津波の経験が生きている。なお、堀切には渡会姓が多いのでこの渡会氏かわからない。

- ・「渥美郡災害誌」（コピー）：地震津波一覧
- ・赤羽根の古文書（コピー）：宝永の地震について（p668）（なお出典は常光寺年代記）
- ・川尻村住宅地図（コピー）：滅集落と元屋敷の位置関係
- ・堀切村の地図（原図）：写真

2.津波による被害地域について

- ・田原町内では津波による被害は、川尻と堀切の 2 つになると思う。

(1) 堀切村

- ・堀切という村であるが、元屋敷が海岸沿いにある（はっきりとは分からないが）ため、移転の元の場所がわかると思う。清田治先生の論文にもそのあたりが書いてあったと思う。
- ・堀切村で安政の地震で移転した資料というのを見たことがない。ただ、堀切は 42 号線沿いに元屋敷があるから、安政の地震で移転した可能性はあると思うので、宝永か安政がどちらかわからない。宝永の地震で、堀切が被害をうけたということは「常光寺年代記」で書かれている（清田治先生がつかっている）。

(2) 川尻村

- ・葉山氏が住んでいる和地町の川尻には、川尻川が太平洋岸に流れ込んでいる場所がある。川尻の集落は現在は国道 42 号線沿いに住んでいるが、以前は違う場所にあり、海岸沿いに元屋敷がはっきりとある（住宅地図）。元屋敷には、対馬神社があり、安政のときに 2~3 件くらい流されたといういつたえがある。元屋敷付近は海岸の崖が 10m 位であるが、元屋敷は 8m くらいのため、安政の津波が川尻川沿いに入ってきて被害をうけたので、元屋敷から 42 号線沿いに集落移転した。なお火事で移転したといういつたえもある。記録として、昭和 15 年くらいに書いた村の書物があり、津波でみんな山ににげたという記録がある。

3.神社について

- ・常光寺は 13~14 世紀に浜松の「つかえ寺」で 13 の優れた弟子がおり、豊川稲荷と同じ格をもったお坊さんがきている。常光寺は江戸時代に、渥美半島と伊勢（三重県上嶋）にかけて、お寺が代々書いていたものが常光寺年代記となり、それには安政の大地震の記事（活字になっている）がある。なお常光寺は 1400 年からある。

4.ヒアリングについて

- ・西堀切の元屋敷の畑については、現地にいって調べないといけない。東堀切には津波は

っていないと思うが、村境がどうであったかも調べないといけない。堀切の校区総代などがある。

5.集落移転について

- ・近世は行政組織がしっかりしており、記録が残っている。日出の集落移転は、安政の津波とはかんけいない。川尻村の移転は、地震津波と火事の2つの説がある。
- ・川尻の村は、もともとは内陸部（和地の三島神社付近で海岸から小さな山を一つ越えた場所で距離にしたら数役メートルくらい）から表浜に引っ越している古文書がある（和地村の庄屋が書き遺した文書。その庄屋は1610年に2代将軍秀忠がまき貝かりにやってきたときに家臣が泊まった記録が残っている）。川尻の集落移転の理由は地引網であり、文字資料として震災関係の記録も残っている。
- ・宝永の地震は安政の地震の150年前で、3代になり、代々おじいさんに聞いてそだった村人が多く、情報も多くないため、頭の中に入っていた。だから、堀切で安政の地震で死者が7～8人は、多くは逃げられた。

6.小塩津村史

- ・小塩津村史の資料については、小塩津のお宮さんの言われとして書かれており、持統天皇の行幸は伝統（あてにならない）であり、828年の大陥没で家が海に沈んだ話は伝承である。（信憑性に疑問がある）

7.その他

- ・東日本大震災の時は、4時まで郷土資料館におり、そこから川尻に帰って見ていたが、30分間に2mあがっていた（写真をとってある）ちょうど5月の最満潮と12月1日（夜11時12時）の最干潮との差くらいに潮が30分くらいであがってきた。当時4時半くらいが干潮だったためよかったが、満潮のときにきたらまずかったと思う。

（5） 西圓寺、安楽寺

日時・場所：平成24年2月27日 13時半～ 電話

出席者：西圓寺住職、安楽寺関係者

訪問者：センター 佐藤

1. 西圓寺

- ・宝永4年の地震において、被害があったことは聞いている。その時は、川沿いに神社があったときいているが、その後現在地に移転した。なお、津波の影響で建物が壊れたかはわからない。
- ・パンフレットの掲載については、構わない。

2. 安楽寺

- ・明治に火事にあいそのあたりの記録がなく、宝永4年の地震自体の口伝えもなく、津波被害もわからない。
- ・パンフレットの掲載については、構わない。

参考資料 4

参考文献一覽

参考資料 4 参考文献一覧

『1854 安政東海地震・安政南海地震報告書』

中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会 平成 17 年 3 月

http://www.bousai.go.jp/jishin/chubou/kyoukun/rep/1854-ansei-toukai_nankaiJISHIN/

『1891 濃尾地震報告書』

中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会 平成 18 年 3 月

<http://www.bousai.go.jp/jishin/chubou/kyoukun/rep/1891--noubiJISHIN/index.html>

『1944 東南海・1945 三河地震報告書』

中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会 平成 19 年 3 月

<http://www.bousai.go.jp/jishin/chubou/kyoukun/rep/1944-tounankaiJISHIN/index.html>

『1945 年三河地震の被災地社会の変遷と被災者心理・行動パターン』

— 災害発生後 1000 時間 すまいとくらしの再建 —』

名古屋大学大学院環境学研究科 木村玲欧、林 能成 歴史地震研究会（歴史地震・第 22 号（2007）

http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/rzisin/kaishi_22/P127-143.pdf

『愛知県渥美郡史』（株）千秋社 1998 年 6 月 30 日

『愛知県渥美半島震災状況調査』

『愛知県災害誌』 愛知県 監修：名古屋地方気象台 昭和 45 年 3 月

『愛知県災害誌（昭和 56 年～平成 3 年編）』 愛知県 監修：名古屋地方気象台 平成 5 年 3 月

『愛知県名古屋測候所（明治 24 年 10 月 28 日愛知県大震録）』 明治 30 年 10 月

『愛知県被害津浪史』

『愛知県文化財調査報告書第六六集 平成 5 年度愛知県歴史の道調査報告書 VI-田原街道・伊勢街道-』

愛知県教育委員会文化財課 愛知県教育委員会 平成 6 年 3 月 30 日

『愛知の古寺』 神谷素光 生田良雄 昭和五十五年七月二十三日

『赤羽根地域史に残る災害と異変の記録』 菊池辰夫・渡辺賢治

『赤羽根町史』 赤羽根町史編纂委員会 愛知県渥美郡赤羽根町 昭和四十三年十一月一日

『赤羽根の古文書 近世史料編』

赤羽根町史編さん委員会 愛知県田原市教育委員会 平成十七年三月三十一日

『赤羽根の古文書 近代史料編』

赤羽根町史編さん委員会 愛知県田原市教育委員会 平成十八年三月三十一日

『渥美郡災害年表』 渥美町 昭和 60 年 12 月 監修：伊良湖測候所

『渥美町史 資料編 下巻』 渥美町町史編さん委員会 渥美町 昭和六十年三月三十日

『渥美町史 資料目録編』 渥美町町史編さん委員会 渥美町 昭和五十八年二月十九日

『渥美町史 歴史編 上巻』 渥美町町史編さん委員会 渥美町 平成三年三月三十日

『渥美町の伝説』 渥美町教育委員会 平成五年一月十六日

『渥美町の民族探訪』 清田治 愛知渥美町農業協同組合 平成十三年三月三十一日

『渥美町のむかし探訪』 山内藤雄 愛知渥美町農業協同組合 平成四年七月三十一日

『渥美半島—郷土理解のための 32 章—改訂版』

愛知県立福江高等学校 愛知県立福江高等学校同窓会

初版平成 13 年 3 月 27 日 改訂版平成 18 年 3 月 21 日

『伊古部郷土誌』 伊古部郷土誌編集委員会 代表 彦坂延一 伊古部町 平成元年三月十七日

『泉村々史』 泉村々史編纂会 泉村々史編纂会 昭和三十一年五月三十一日

『伊勢湾台風状況調』 愛知県東三河事務所

『牛久保の牧野氏年譜』 木下武次 光輝院 牧野公奉賛会 昭和六十年十一月二十三日

『氏子神社 畠神社』 畠神社 平成5年10月11日

『浦区郷土史』 郷土史研究同志会 浦区事務所 昭和三十二年七月一日

『絵図から地図へ—移り変わる豊橋の風景—』
豊橋市二川宿本陣資料館 平成23年4月23日～6月5日

『江戸時代 人づくり風土記 -ふるさとの人と知恵 愛知-』
社団法人農村漁村文化協会 平成7年11月30日

『江比間史』

『遠州灘海岸保全基本計画』 静岡県・愛知県 平成15年7月
<http://doboku.pref.shizuoka.jp/kawa/seaplan/ensyuplan/contents/1.pdf>

『老津村史』 老津村史編纂委員会 老津村史編纂会 昭和三十三年四月一日

『御馬村誌』 明治二十年

『王稔記 郷土資料抜書』 原田耕治

『大塚村の思いで』 大塚相楽親睦会 昭和三十二年十月一日

『大村八所神社と松原用水』
八所神社昇格記念誌発行委員会 八所神社昇格記念奉賛会 昭和五十七年十月十七日

『御城御破損所御伺絵図』

『御嶽神社日誌』

『表浜八ヶ村漁船流失損々出し調恍』 岡田与次右衛門 嘉永七年甲寅年十二月

『形原震災記録』 形原町

『蒲郡市 HP』
<http://trpla.nrc.gamagori.aichi.jp/kyoiku/mikawajisin/wasureji-htm/17-25/p30.htm>

『蒲郡市誌』 蒲郡市誌編纂委員会 蒲郡市教育委員会 蒲郡市 昭和49年4月1日

『蒲郡市誌 資料編』 蒲郡市誌編纂委員会・蒲郡市教育委員会 蒲郡市 昭和51年3月1日

『蒲郡市史 本文編2 近世編』 蒲郡市史編さん事業実行委員会 蒲郡市 平成十八年三月三十一日

『蒲郡市史 本文編4 現代編』 蒲郡市史編さん事業実行委員会 蒲郡市 平成十八年三月三十一日

『蒲郡春秋』 一九九五年度社団法人蒲郡青年会議所 企画渉外委員会
社団法人 蒲郡青年会議所 一九九五年九月

『明治震災輯録』 木沢成肅・山羽善彦編集 金池堂 明治24年11月

『郷土研究』 寶飯郡西浦尋常高等小學校 調査 昭和七年九月

『郷土誌 老津』 豊橋市立老津小學校 郷土誌老津編集委員会
郷土誌老津刊行委員会 平成2年3月

『郷土誌 下地』 豊橋市立下地小學校郷土誌編集委員会・藤田直正
豊橋市立下地小學校 昭和61年2月

『郷土誌「たかね」』 豊橋市立高根小學校 豊橋市立高根小學校 昭和60年3月8日

『郷土史料第三輯 吉田方の沿革 上巻』 林泉佑 林泉佑 昭和三十一年七月十五日印刷

『恐怖のM8 東南海、三河大地震の真相』 中日新聞社会部 杉原宏一 昭和58年3月31日

『記録綴』 昭和二十年一月二十五日

『國史上より觀たる豊橋地方』

大口喜六 校訂増補 豊橋史談刊行會 代表者 福谷元次 昭和十二年十月三十日

『研究輯録 三遠の民俗と歴史』 赤羽根支部 菊池辰夫・渡辺賢治（郷土史研究会「鬼おとしの会」）

三遠地方民族と歴史研究会 2010年

『研究紀要 第2号』

（田原街道・伊勢街道の古道の調査（その2） 加藤克己）

渥美町郷土資料館 平成10年3月

『研究紀要 第7号』

（渥美半島における嘉永東海地震の実状 - 現存する災害記録から - 清田治）

渥美町郷土資料館 平成15年3月

『研究紀要 第3号』

（渥美半島表浜の海食崖の形状に関する一考察 藤城信幸）

（渥美半島の表浜集落における宝永地震の被害状況と海食崖との関係 藤城信幸）

（『鵜飼金五郎文書』に記された宝永地震による野田村の被害と地盤との関係 藤城信幸）

田原市博物館 平成20年3月1日

『研究紀要 第4号』

（渥美半島表浜の集落 鈴木啓之）

（赤羽根地区の地形とくらしの変化

—これまでの研究成果をもとに赤羽根地区50年間の変遷を追う— 藤城信幸）

田原市博物館 平成21年3月1日

『校区のあゆみ 芦原』

芦原校区総代会 芦原校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 磯辺』

磯辺校区総代会 磯辺校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 大村』

大村校区総代会 大村校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 小沢』

小沢校区総代会 小沢校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 下地』

下地校区総代会 下地校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 杉山』

杉山校区総代会 杉山校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 高豊』

高豊校区総代会 高豊校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 高師』

高師校区総代会 高師校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 津田』

津田校区総代会 津田校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 中野』

中野校区総代会 中野校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 福岡』

福岡校区総代会 福岡校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 二川』

二川校区総代会 二川校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 細谷』

細谷校区総代会 細谷校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 前芝』

前芝校区総代会 前芝校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 牟呂』

牟呂校区総代会 牟呂校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『校区のあゆみ 吉田方』

吉田方校区総代会 吉田方校区史編集委員会 豊橋市総代会 平成18年12月25日

『広報ぼうさい（1944年東南海地震・1945年三河地震）平成20年3月号』

内閣府（防災担当） <http://www.bousai.go.jp/kouhou/pdf/kouhou044.pdf>

『国際自動車コンプレックス研究会 NEWSLETTER vol.38』

国際自動車コンプレックス研究会 平成23年9月30日

『小坂井町誌』 小坂井町誌編集委員会 小坂井町 昭和51年7月1日

『古文書の中の東三河の大地震—地震は定期的に襲う—』 松山雅要 平成7年6月1日

『災害伝承情報データベース整備検討報告書（平成16年度分）参考資料』

総務省消防庁防災課 平成17年3月

『災害の記録（平成22年）』 愛知県防災局災害対策課

『三州吉田 船町史稿』 佐藤又八 校訂者：歌川學 佐藤公彦・佐藤利恭 昭和十六年九月七日

『塩津村誌』 鋤柄渡 塩津村誌刊行会（塩津公民館内） 平成10年4月1日

『地震を冷静に見て書いた、赤羽根村農民の災害記録』 小川幸代

『収新日本地震史料 第二巻 別巻（自慶長元年 至元禄十六年）』 東京大学地震研究所

『収新日本地震史料 第三巻 別巻（宝永四年十月四日）』 東京大学地震研究所

『収新日本地震史料 第五巻（自弘化元年 至明治五年）』 東京大学地震研究所

『収新日本地震史料 第五巻 別巻五ノ一（安政元年十一月四・五・七日 一頁～一四三八頁）』

東京大学地震研究所

『常光寺年代記』 故伊奈森太郎 清田治 昭和三十七年五月十八日

『震害都市別一覧表（明治24年11月12日調）』 愛知県

『震災、鎮めの石碑』

『震災記録』 昭和二十年一月十三日

『図説 愛知県の歴史』 林 英夫 清水 勝 昭和62年9月26日

『前代未聞事』 高瀬家所蔵文書

『総務省消防庁 HP』

（全国災害伝承情報「4. 組織による防災に係る取り組み」） 防災課

http://www.fdma.go.jp/html/life/saigai_densyo/04.pdf

- 『続地震雑纂・紙津重郎右衛門遠州よりの書状』
- 『続地震雑纂・東海道之次第聞書之実説』
- 『大日本地震史料』
- 『高豊史』 高豊史編纂委員会 昭和五七年三月一四日
- 『田原市 HP』
- （田原市の沿革～我がまちの歩み）
<http://www.city.tahara.aichi.jp/city/statistics/pdf/100401ayumi.pdf#search=>
（堀切校区まちづくり推進計画書） 平成 19 年 3 月
<http://www.city.tahara.aichi.jp/section/somu/pdf/community/horikiri.pdf>
- 『堀切村村絵図』
- 『ふるさと歴史探訪 田原』
- 『田原市地震防災対策基礎調査 報告書』 田原市 平成 18 年 2 月
- 『田原市地域防災計画』
- 『田原城主考付録』
- 『田原町史』
- 『田原町史 中巻』 田原町文化財調査会 田原町教育委員会 昭和五十年三月三十一日
- 『田原の文化 第 33 号』
- （神社と街道の移転から見た渥美半島の海岸浸食
— 赤羽根地域とその周辺を中心に（前編）— 石井一希）
田原市教育委員会 文化財課 平成 19 年 3 月 31 日
- 『逐城解説 詳説・吉田城と池田照政
～ついに判明！吉田城本丸天守（代用）鉄三重櫓の概観全貌とその最期～』
半谷健司 平成 21 年（2009）8 月 1 日
- 『中日新聞』
- （昭和 45. 1. 13 記事）
（2010. 3. 1 記事）
（2011. 4. 7 記事）
（2011. 11. 21 記事）
- 『中部日本新聞』
- （昭和 33. 5. 24（夕刊）記事）
（昭和 35. 5. 25 記事）
- 『（副読本）『津田』〔小学校中・高学年用〕』
豊橋市立津田小学校「津田」編集委員会 代表 高橋規夫
豊橋市立津田小学校 創立 120 周年記念事業実行委員会 会長 片山 ●
平成 5 年 11 月 7 日（●は、人偏に左上が口、左下が王）
- 『津波てんでんこ 近代日本の津波史』
山下文男 小桜勲 2008 年 1 月 25 日初版 2011 年 6 月 20 日第 6 刷
- 『天正大地震誌』 飯田汲事 井関弘太郎 1987 年 3 月 31 日
- 『天地之間 珍事変事書留 万物用心記』 鈴木三十郎
- 『東海地方地震・津波災害誌（飯田汲事教授論文選集）』 飯田汲事 1985 年

『東日新聞』

(2010.3.1 記事) (2011.3.12 記事)

(2011.11.2 記事) (2011.12.14 記事)

『豊川市桜ヶ丘ミュージアム開館 15 周年記念特別展

三河に興りし牧野一族—戦国から幕末への奇跡—』

豊川市桜ヶ丘ミュージアム 平成 21 年 9 月 26 日

『豊川庄屋斎藤家文書』

『豊橋寺院誌』 豊橋寺院誌編集委員会 豊橋仏教会 昭和三十四年八月三十日

『豊橋市史 第一巻』 豊橋市史編集委員会 豊橋市 昭和四八年三月一日

『豊橋市史 第二巻』 豊橋市史編集委員会 豊橋市 昭和五〇年十一月一日

『豊橋青年会議所 HP』

(【I LOVE 豊橋】岩屋観音)

http://www.t-jc.jp/2010/index.php?option=com_content&task=view&id=134&Itemid=72

『豊橋の風景-歴史を語るものたち-』 豊橋市美術博物館 2006 年

『とよはしの歴史』 豊橋市 平成八年三月三十一日

『中内茂雄 作成資料』 中内茂雄

『名古屋大学災害対策室』

<http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/taisaku/mikawa/mikawa/saigaishi1.html>

『西浦町の昔と今』 牧原杉松 校正：鳥居義夫 平成 5 年 2 月 20 日

『西円寺史』 關目作司 白雲山西円寺 昭和五十六年十月十五日

『日本の歴史地震史料』拾遺 四ノ上 (自天武天皇六年 至安政元年)』 宇佐美龍夫

『野田史』 野田史編集委員会 野田区自治会 平成 14 年 3 月

『浜田村彦坂氏』

『東愛知新聞』

(2003.12.4 記事) (2010.3.1 記事)

(2011.3.12 記事) (2011.3.13 記事)

(2011.3.19 記事) (2011.4.16 記事)

『東観音寺展』 豊橋市美術博物館 二〇〇〇年九月二十九日

『東観音寺歴史資料目録』 愛知県教育委員会 昭和 61 年 3 月 31

『東三河大地のなりたち』 菅谷義之 鳳来寺山自然科学博物館 昭和 59 年 6 月 20 日

『東三河の歴史』 東三高校日本史研究会 昭和五八年三月一日

『拾石村誌』 小久江 広之 農業 昭和五十五年十一月

『ふたがわ 小学校中・高学年用』豊橋市立二川小学校「ふたがわ」編集委員会

豊橋市立二川小学校 初版昭和 39 年 3 月 1 日 第 3 版昭和 59 年 1 月 10 日

『船町庄屋「御巡見手引帳」』

『ふるさと津田』 とよはし 100 祭津田校区実行委員会「ふるさと津田」編集部会

津田校区 社会教育委員会 津田校区 市民館 平成 18 年 12 月 20 日

『ふるさと細谷』 豊橋市立細谷小学校 細谷校区 平成元年十二月二十二日

『宝飯郡一宮町誌』 一宮町誌編集委員会 宝飯郡一宮町 1976 年

- 『ほの国通信 15号』 東三河地方拠点都市地域整備推進協議会 平成 15 年 9 月
<http://www.east-mikawa.jp/honokuni/communication/th15/page01.html>
- 『前芝村誌』 前芝村誌編纂専門委員会 前芝村誌編纂委員会 昭和三十四年一月一日
- 『三河武士がゆく HP』
(戦国時代、豊橋市に津波の被害があったぞん)
<http://www.d9.dion.ne.jp/~hongo/01mikawanorekishitunami/01-sengoku-tunami.htm>
- 『三河国吉田城絵図』
- 『三河地震 市誌資料編より』 編者は教員、発行者は蒲郡市消防本部か
- 『三河に於ける牧野氏勢力の消長』 鈴木範一
- 『御厨神社』
- 『三谷町誌』 三谷町誌編纂事業実行委員会 三谷町誌事業実行委員会 平成 19 年 11 月 20 日
- 『御津町史 史料編 上編』 御津町町史編さん委員会 御津町 昭和 59 年 3 月 31 日
- 『御津町史 史料編 下編』 御津町町史編さん委員会 御津町 昭和 57 年 3 月 31 日
- 『御津町史 本文編』 みと町史編さん委員会 御津町 平成二年三月三十一日
- 『御津町史資料第十九集』 御津町史篇纂委員会
- 『みと歴史散歩』 みと町史編さん委員会 (愛知県) 御津町 平成十二年二月十一日
- 『湊町町史』 夏目友次 湊町町内会 平成四年四月吉日
- 『みんなで守る・伝える 堀切・日出海岸ものがたり ポタの話』
- 『明応 7 年 (1498) 地震・津波の新史料、地震学会講演予稿週 B5、P111 (1979)、
歴史資料から見た東海沖地震・津波、海洋科学 11、p 32-44 (1979)』 都司嘉宣
- 『明応地震・天正地震・宝永地震・安政地震の震害と震度分布』
飯田汲事 飯田汲事教授論文選集発行会 昭和 60 年 11 月 20 日
- 『明治 24 年 10 月 28 日震災記録』 愛知県警察部 明治 25 年 5 月
- 『明治 24 年 10 月 28 日愛知県震災録』
- 『よしだがた』 豊橋市立吉田方小学校 豊橋市立吉田方小学校 1989 年 (平成元年) 9 月 1 日
- 『吉田方歴史年表』 加藤正敏 豊橋市西部農業協同組合
- 『読売新聞』
(2011.3.12 記事)
- 『わすれじの記』 蒲郡市教育委員会視聴覚ライブラリー 昭和 52 年 9 月
<http://trpla.nrc.gamagori.aichi.jp/kyoiku/mikawajisin/index.html>

(敬称略・順不同)

**東三河津波歴史調査
研究業務報告書
(参考資料)**

発行日 平成 24 年 2 月
発行 東三河地域防災研究協議会
(事務局 豊橋市総務部 防災危機管理課)
〒440-8501 豊橋市今橋町 1 番地
T E L 0532-51-3116
F A X 0532-56-2122
E-mail : bousaikikikanri@city.toyohashi.lg.jp
調査機関 社団法人東三河地域研究センター